森浜遺跡発掘調査報告書

〈本 文 編〉

滋 賀 県 教 育 委 員 会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

森浜遺跡発掘調査報告書

〈本 文 編〉

滋 賀 県 教 育 委 員 会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

竹生島を眼前に望む新旭町の湖岸に立地する森浜遺跡は、湖岸から湖中にかけて広く土器が散布することから、その原因の解明に大きな期待がよせられていた遺跡の一つであります。

このたび水資源開発公団により、新川舟溜り工事、新川水路の改修が行われるにあたり、これまでから謎とされていた湖辺に水没している遺跡の形成を知るため、事前に発掘調査を実施することになりました。しかし、発掘地が湖岸で、調査を実施する深さが湖面以下になるという特殊な条件下にあるため、発掘調査にあたっては困難が予想されましたが、水資源開発公団より技術的な協力をうけ、無事調査を終了することができました。

調査の結果、全国でも珍しい古代琴３点をはじめ、数々の木製品や多量の土器が出土する古墳時代の遺跡であることが明らかになりました。また、そのため、調査中から多くの人々の注目を集め、全国的に著名な遺跡となりました。

この報告書によって、琵琶湖の湖辺に形成された遺跡のなりたちや、土器や木製品などから古墳時代の歴史を知るうえに活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただきました地元の方々、並びに関係機関に対して厚くお礼申しあげます。

昭和53年３月

滋賀県教育委員会
教育長　中山　正

例　　言

1．本書は、財団法人滋賀県文化財保護協会が、水資源開発公団より委託事業として担当実施した、高島郡新旭町針江、森地先所在・森浜遺跡の発掘調査事業の報告書である。

2．本調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。

3．調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者として、現地調査及び整理作業には以下の諸氏の協力を得た。

本田修平、折井千枝子、堀内宏司、坂井秀弥、金丸結城、奥野宗寛、酒井和子、山口順子、柏田三枝子。

なお、現地調査では、水資源開発公団、同湖西支所、新旭町教育委員会の協力を得た。ここに記して厚く感謝の意を表すものである。

4．本書の執筆は、第１章、第２章、第３章を兼康、第４章を本田、坂井、第５章、第６章を本田、兼康、第７章を兼康、堀内、第８章を兼康が行い、編集は、兼康、堀内が行った。

目　　次

第１章　はじめに …… 1
　１．森浜遺跡の位置 …… 1
　２．森浜遺跡研究史 …… 1
第２章　遺跡をとりまく環境 …… 6
　１．安曇川下流左岸の地形環境 …… 6
　２．土　壌 …… 6
　３．周辺の遺跡 …… 6
第３章　調査の目的と方法 …… 12
　１．はじめに …… 12
　２．第一次調査（新川舟溜り） …… 12
　３．第二次調査（新川水路改修） …… 16
第４章　調査日誌（抄） …… 18
　１．第一次調査（新川舟溜り） …… 18
　２．第二次調査（新川水路改修） …… 23
第５章　第一次調査（新川舟溜り）の結果 …… 26
　１．基本土層 …… 26
　２．遺　構 …… 29
第６章　第二次調査（新川水路改修）の結果 …… 48
　１．基本土層 …… 48
　２．遺物出土状況 …… 49
第７章　出土遺物 …… 53
　１．土　器 …… 53
　２．出土土器観察表 …… 56
　３．木製品 …… 112
　４．出土木製品観察表 …… 115
　５．土製品 …… 122
　６．石製品 …… 124
　７．種　子 …… 126
第８章　結　語 …… 127
　１．調査のまとめ …… 127
　２．土器の時期 …… 128
　３．遺跡の性格 …… 140

挿図目次

第１図　森浜遺跡出土土器（文献13より）…… 1
第２図　森浜遺跡位置図（昭和54年）…… 2
第３図　森浜遺跡付近旧地形（明治25年）…… 7
第４図　新旭町内遺跡分布図…… 8
第５図　森浜遺跡周辺湖中地形図（文献10より）…… 13
第６図　トレンチ配置図…… 14
第７図　第一次調査地区割り…… 16
第８図　第二次調査地区割り…… 17
第９図　第１層出土陶器実測図…… 26
第10図　第一次調査北壁土層図…… 28
第11図　第１遺構面遺構実測図…… 30-31
第12図　第２遺構面遺構実測図…… 34-35
第13図　第１遺構面・第２遺構面ピット検出状況合成図…… 37-38
第14図　第５遺構面木製品出土状況…… 39
第15図　第３遺構面実測図…… 40-41
第16図　第４遺構面実測図…… 42-43
第17図　第５遺構面実測図…… 44
第18図　第６遺構面田下駄出土状況…… 45
第19図　第５遺構面実測図…… 46-47
第20図　標準土層図…… 48
第21図　遺物出土状況実測図…… 51-52
第22図　樋門付近採集の土器…… 93
第23図　高島郡内で使用の田下駄…… 113
第24図　土　錘…… 122
第25図　土製品小形円板…… 122
第26図　管　玉…… 124
第27図　石製品…… 125
第28図　森浜遺跡出土土器編年試案（１）…… 133-134
第29図　森浜遺跡出土土器編年試案（２）…… 135-136
第30図　森浜遺跡出土土器編年試案（３）…… 137-138

表　目　次

第１表　森浜遺跡および湖岸沿い諸遺跡文献目録 …… 5
第２表　新旭町内遺跡地名表 …… 9
第３表　第一次調査出土土器 …… 56
第４表　第二次調査出土土器 …… 94
第５表　第一次調査出土木製品 …… 115
第６表　第二次調査出土木製品 …… 117
第７表　土錘観察表 …… 123

第1章　はじめに

1．森浜遺跡の位置

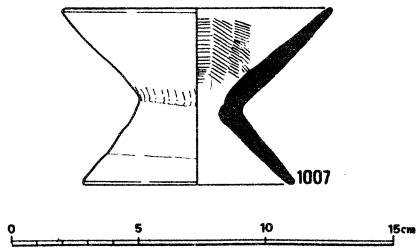
森浜遺跡は、琵琶湖の西北部――高島郡新旭町森および針江地先に所在し、国鉄湖西線新旭駅から北北東の方向に、直線距離にして約2.5kmの位置にあたる。この遺跡は、通称森浜から針江浜とよばれている湖岸の浜堤に立地し、その規模は昭和48年に実施された分布調査によれば、湖岸から湖中にかけて、東西約3.5km、南北約8.5kmにわたって遺物の散布が確認されている。①

今回発掘調査を実施した地点は、森浜と針江浜の境界にあたる新川と呼ばれる小河川の右岸で、地番は新旭町針江地先である。この地点は、分布調査で確認された遺跡の範囲の、南端に近い場所にあたる。また、この地先は、眼前に湖上の神奈備ともいうべき竹生島がくっきりと浮び、晴れた日には遠く対岸の伊吹山や湖北の山々をも望むことのできる景勝の地でもある。

森浜遺跡の北西約1.5kmには、湖に面して古代の木津郷、中世の木津庄の要地で湖港として繁栄した木津（こうず）の集落がある。木津付近は、平野部も狭まり、すぐ西に饗庭野の台地がせまってきている。この台地に沿って西近江路が北上しており、かつては木津から西に饗庭野を抜けて、追分を経由して若狭街道へ通じる道も利用されていた。しかし、水陸の要衝としての木津の繁栄も、中世末からしだいに今津に移り、江戸時代後期の竹生島への巡礼舟のにぎわいを最後に、現在はかつての面影もない。

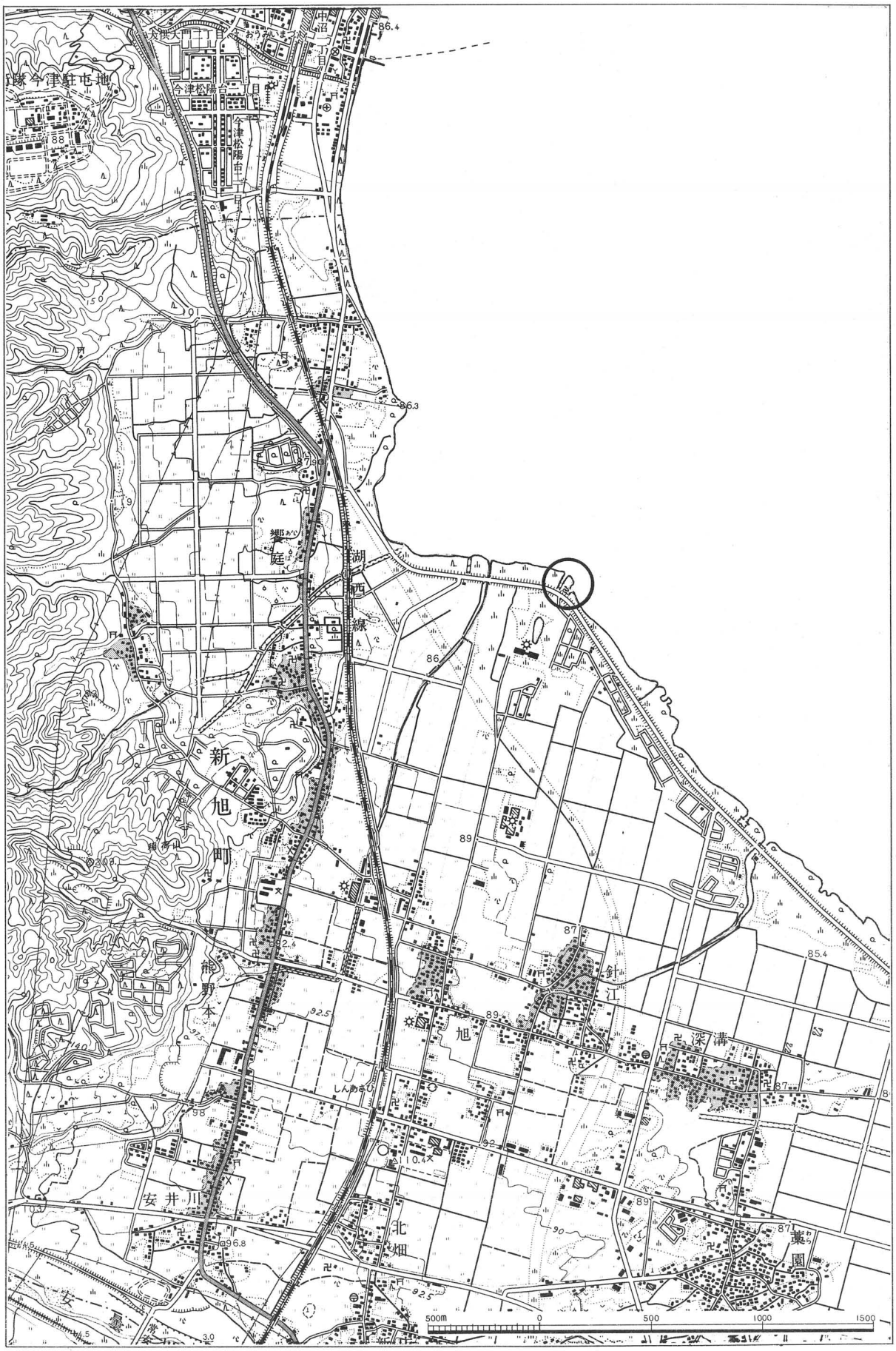
2．森浜遺跡研究史

森浜遺跡の発見　昭和32年に、新旭町森在住の桑原久次氏が田圃で作業中、土師器の器台形土器（第１図、新旭町教育委員会蔵）を１点発見され、新旭町教育委員会に届けられた。土器の採集地点は、比叡谷正顕（当時、町教育委員会教育長）、北川重義両氏によって直ちに確認がなされたが、「弥生式土器」の細かい破片と土錘の破片が採集されたにすぎなかった（文献２）。



第１図　森浜遺跡出土土器
（文献13より）

続いて昭和33年に、森浜遺跡の南方にあたる針江で、農道工事に関連して排水路を掘削したところ、弥生式土器と若干の木製品が出土した。この時の出土遺物は、比叡谷、北川、田中由太郎、川島綾子、饗庭博司の諸氏の努力によって町教育委員会に集められた。幸いにも針江遺跡の遺物出土状況は、三上貞二氏により報告がなされている。



第２図　森浜遺跡位置図

三上氏の報告によれば、遺物の「……表土下の砂質粘土層の下底（「まこも」と呼ばれる水藻を多く含む②、地表より約１ｍの深さを有する）に集約的に土器及び僅少の木器、及び其他が包含されていたものである。……」と記録されている。そして、出土した土器22点の観察から、畿内第Ⅴ様式に併行する時期をあてはめている（文献１）。

針江遺跡出土土器のうち、壺形土器と高杯形土器の２点は、『弥生式土器集成』に琵琶湖地方第Ⅴ様式の土器として紹介されている。佐原真氏はその解説の中で、高杯形土器について欠山式土器の搬入品であるとの見解を示している（文献３）。

こうした偶然の発見から、新旭町北部の湖岸沿いの森浜と針江に、大規模な遺跡の所在することが知られたのである。これまで、高島郡内の原始、古代の遺跡は、古墳や寺院跡などを除いてほとんど知られていなかった。そのため、こうした新遺跡発見の機運の中で、比叡谷正顕氏は発見のいきさつなどを『新旭町郷土叢書』の一冊として著され（文献２）、ふるさとの遺跡と遺物の啓蒙に努められた。

森浜遺跡の考古学的位置づけ　森浜、針江遺跡など湖岸沿いに立地する諸遺跡を、新旭町に分布する他の遺跡と比較し、考古学的な位置づけを積極的に試みたのは、『滋賀県文化財調査報告書第５冊　高島郡新旭町堀川遺跡調査報告』（文献12）であった。ただし、この報告書では、森浜遺跡は「弥生時代後期」の遺跡として理解されているが、その時期決定については特に根拠をあげていない。おそらく針江遺跡出土土器の年代観や立地などに影響されたためかもしれない。

さて吉田雅文氏は、「新旭町における弥生時代の動向」（文献12所収）の中で、森浜遺跡など湖岸沿いに立地する遺跡の出現を、弥生時代中期後半の熊野本、安井川両遺跡の分村として、台地状丘陵と湖岸平野北縁に新しい村が成立したと推定している。ただ、後者については、弥生時代後期から古墳時代にかけて河川の堆積が著しく、とりわけ森浜遺跡のような湖岸に立地する集落は、常に洪水で埋没する危険にさらされながら、水田を維持、耕作したものと結論づけている。

新旭町堀川遺跡の調査に関連して、周辺の遺跡を大きな視野でとらえようとした点では、吉田氏の論旨は高く評価できよう。しかし、遺跡分布よりみた集落の発達過程を考えるには、その当時、滋賀県下の弥生式土器や古式土師器の資料は少なく、まだ編年も十分に確立していなかった。そのため、いささか内容的に先行しすぎた感があるといえよう。

水没遺跡としての評価　昭和30年代の採集品を資料に遺跡の性格が評価されてきた森浜遺跡が、まったく新しい視野から論じられるようになったのは、琵琶湖総合開発事業の開始が一つのきっかけとなっている。琵琶湖総合開発事業の実施によって、これまでほとんど開発の影響をうけることのなかった、湖岸、湖中に所在する遺跡の保存がにわかに表面化したためである。

昭和48年に実施された湖岸堤管理用道路予定地の分布調査の結果、森浜遺跡では遺物の散布が湖岸から湖中にまで及んでいることが明らかにされ、始めて遺跡の広がりが確認された。なお、

この調査によって採集された土器のほとんどは、古墳時代の土師器であった。また、この分布調査で明らかになった興味深い事実は、湖中に遺物の散布が認められる浜堤状の浅瀬が、多少の高低はあるが、森浜から木津にむかって伸び、内湖を形成していることである。さらに、この浜堤状の浅瀬には、大木の根が原位置の状態であり、それが引上げられたことがあるともいわれている。

これらのことがらから、調査にあたった林博通氏は、「外ケ浜から木津にかけての湖岸線は、少なくとも平安時代頃には現在みられる等深線の３ｍ地点付近まで陸地」であったと考え、「遺物の発見された地点は当時の浜堤にあたり、そこに遺跡は形成されていた。」と結論づけている。そして、遺跡は局部的な地盤の沈下によって水没したのではないかと推定している（文献10）。

遺跡の水没時期について、森浜遺跡など湖岸線沿いの遺跡から採集された遺物の時期を検討した丸山竜平氏は、「……いずれの集落においてもほぼ、平安時代から鎌倉時代の交にかけて埋没、廃棄をせざるをえないような自然環境がせまりつつあったと考えざるを得ない。」（文献７）と、林氏よりも詳細な時期を提示している。

水没条里の問題　これまで見てきたような考古学の分野とは別に、歴史地理学からも森浜遺跡は重要な指摘がなされている。

福田徹氏によれば、応永29年（1422）の「注進木津庄引田帳」の記載内容を現地にあてはめて条里を復原すると、現在の田井、森、針江の地先にあたる湖中に耕地の存在することが明らかになった。この位置を湖沼図に合成すると、「注進木津庄引田帳」にしるされた17条３～４里の推定地は、森浜遺跡の湖中部分――浜堤状の浅瀬と合致する。同様に水没した耕地を古文書に求めれば、宝徳３年（1451）の「比叡之本庄二宮神田帳」や「饗庭文書」に文明12年（1480）で記載のある耕地の位置なども、現在は湖中になっている。

これら水没した耕地について福田氏は、中世の干拓地を考えており、湖中にあっても水深2.5ｍ以内の場所に認められるとのべている。そして、古文書などからその水没時期を、15世紀後半から16世紀にかけてではないかと推定している（文献５、11）。

ただし、この水没時期と、考古学からみた水没時期とは、大きな年代的なへだたりが認められる。あるいは、平安時代～鎌倉時代に沈水した場所が、干拓によって陸化し、再度水没したとも考えられる。

註

① 林　博通『琵琶湖湖岸・湖底遺跡分布調査概要』Ⅰ（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　昭和48年）

② 本報告書で「スクモ層」とよぶものと同じである。

第１表　森浜遺跡および湖岸沿い諸遺跡文献目録

文　　献	備　　考
1．三上　貞二「滋賀県新旭町針江弥生遺跡について」（『史想』第９号、紫郊史学会、昭和33年）	針江遺跡（針江北遺跡）
2．比叡谷正顕『ふるさとの遺跡と遺物』〔新旭町郷土叢書第１輯〕（新旭町教育委員会、昭和34年）	森浜遺跡、針江遺跡（針江北遺跡）
3．佐原　真「琵琶湖地方」（『弥生式土器集成』本編２．東京堂、昭和43年）	針江遺跡（針江北遺跡）
4．福岡澄男ほか『国道161号線・高島バイパス遺跡分布調査概要報告書』（滋賀県教育委員会、昭和46年）	針江北遺跡、針江中遺跡、針江南遺跡、深溝遺跡
5．服部弘・福田徹「歴史地図――検注帳による条里制と荘域の復原図の作り方――」（『図解地理実習』、大明堂、昭和47年）	P. 114～117
6．饗庭昌威編「先史時代篇」（『増補　高島郡誌 全』、昭和47年）	
7．丸山　竜平「びわ湖面の変動時期に関する一思考――湖辺・水底下埋没遺跡の検討――）（『近江』第３号、近江考古学研究会、昭和48年）	
8．古川与志継「にほの海の変貌・琵琶湖水位の変動をめぐって」（『近江』第３号、近江考古学研究会、昭和48年）	
9．編 集 部「琵琶湖水没遺跡一欄表、分布図」（『近江』第３号、近江考古学研究会、昭和48年）	
10．林　博通『琵琶湖湖岸・湖底遺跡分布調査概要』Ⅰ（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和48年）	森浜遺跡、針江浜遺跡、深溝遺跡
11．福田　徹「安曇川下流域における条里制の復元」（『人文地理』第26巻第３号、人文地理学会、昭和49年）	
12．吉田　雅文「高島郡の弥生時代」（『滋賀県文化財調査報告書第５冊　高島郡新旭町堀川遺跡調査報告』、滋賀県教育委員会、昭和50年）	
13．林博通・松浦俊和・宮成良佐・葛野泰樹『美園遺跡発掘調査報告』（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和50年）	森浜遺跡、針江遺跡（針江北遺跡）出土遺物の実例図、写真
14．小江　慶雄『琵琶湖水底の謎』（講談社、昭和50年）	森浜遺跡
15．兼康　保明「古代の琴――森浜遺跡出土などの遺品をめぐって――」（『月刊文化財』169号、第一法規出版、昭和52年）	森浜遺跡
16．兼康保明「よみがえる湖西の古代――水没した森浜遺跡を追って――」（『湖国と文化』第３号、滋賀県文化体育振興事業団、昭和53年）	森浜遺跡
17．水野　正好「埴輪に見る琴の三種の構造」（『滋賀文化財だより』No. 13、滋賀県文化財保護協会、昭和53年）	森浜遺跡

第２章　遺跡をとりまく環境

１．安曇川下流左岸の地形環境

琵琶湖西岸は、比良断層崖が急斜面で湖にせまるため、東岸のように大規模なデルタはほとんど展開されていない。しかし、その中にあって、高島平野のみが例外的な位置を占めている。①

高島平野は、主として北は安曇川、南は鴨川の沖積作用によって形成されたもので、高島郡新旭町、安曇川町、高島町の三町にまたがる湖西最大の沖積平野である。新旭町の主要な集落は、この安曇川下流域左岸の沖積平野に立地している。

さて、高島平野は地形的には、半径約5.5km、平均勾配５‰（パーミリ）の円弧状デルタファンのタイプに属している。②安曇川下流域左岸における扇状地と三角州面の境界は、新旭町の五十川（いかがわ）から、田井（たい）、針江、藁園（わらその）、太田（上流部）の各集落を結ぶ標高87.5ｍの等高線がほぼそれに該当しよう。扇状地面には、現安曇川の河道沿いに、旧安曇川の乱流の跡が残っており、地下30～50cm以下の砂礫層で、安曇川の氾濫を雄弁に物語っている。三角州面と湖水との境界には、湖岸線に沿って小規模な浜堤が形成されており、浜境の内側はラグーンおよびバックマーシュ地帯をなしている。この地帯は、湖に流れ込む大小河川や湖水の氾濫、冠水が頻繁におけることから、これに対処するため、深溝の湖岸には長さ約２kmにおよぶ大堤が築かれ、また、畝植や舟刈りなどの民俗もそういった場所での苦い体験から生み出されたものである。③しかし、こうした湖岸線の景観も、干拓、宅地造成、湖岸堤工事によって大きく変貌をとげている。

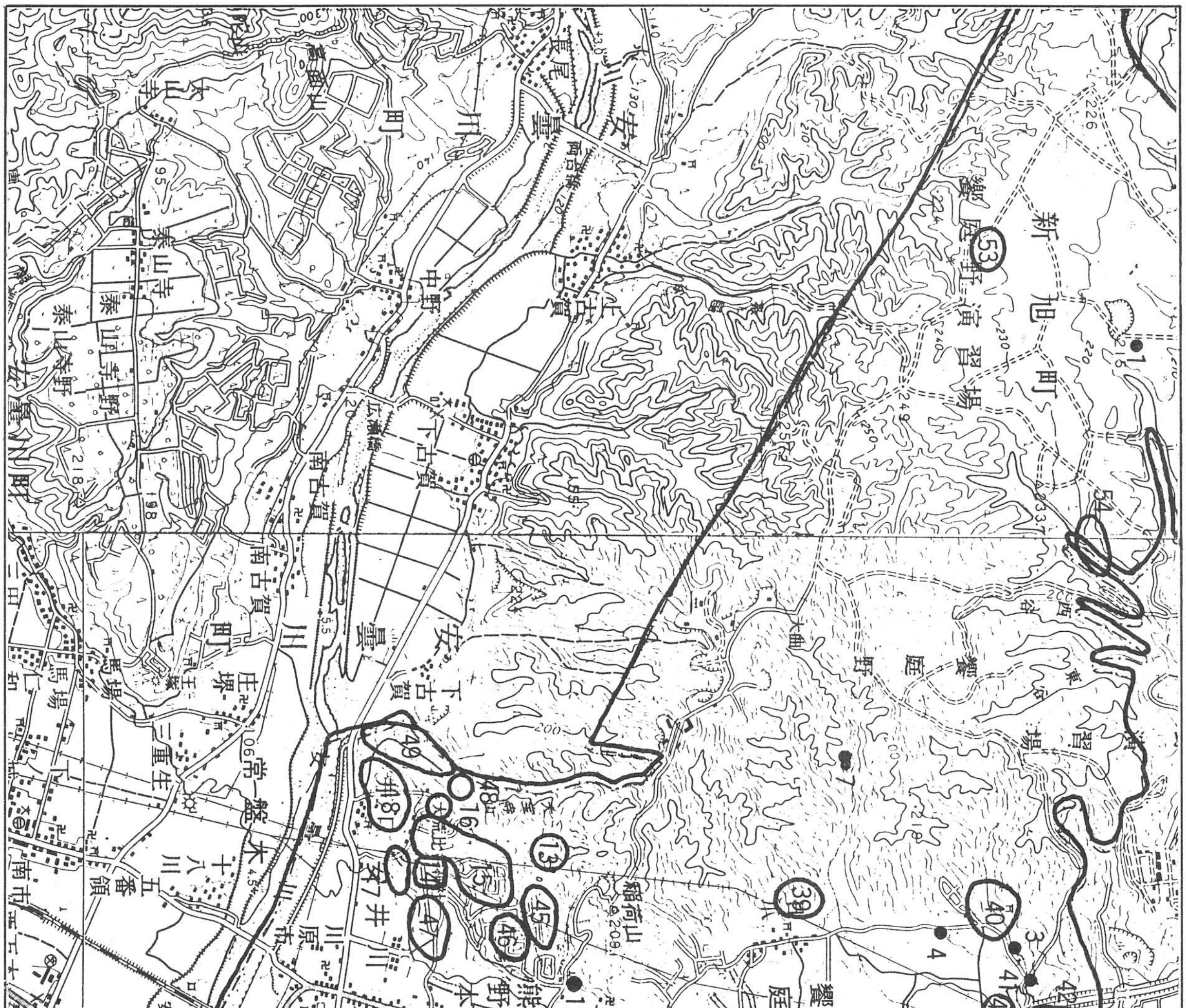
２．土　壌

川原市、新庄、藁園、太田などの集落が立地する扇状地面では、上流部から下流部にむかって、礫層土壌→砂質土壌→強グライ土壌へと変化して行く。この一帯は先にも見たように、地下30～55cm以下は安曇川の氾濫による砂礫層である。一方、これより内陸部の扇状地面は、地下水位も低く灰褐色土壌が卓越している。田井、森、針江、霜降、山形の集落が立地する三角州面では、グライ土壌、強グライ土壌で、地下水位が高く地下35～65cmも掘ると地下水が湧き出す。湖岸線沿いの地帯は、田井川下流域から深溝集落北部にかけてスクモとよばれる泥炭質土壌で、これより以南安曇川の河口に至るまでの間が強グライ土壌である。④

３．周辺の遺跡

新旭町の遺跡については、これまでから報告書などで詳述されており、⑤ここでは分布図を掲げ

第３図　森浜遺跡付近旧地形



第４図　新旭町内遺跡分布図

遺跡番号	遺跡名	所在地	種類	時代	立地	地目	備考
1	糖塚遺跡	二軒屋	古墳？		山頂	荒地	円墳？
2	建速神社遺跡	木津	古墳群	古墳	丘陵	社地	円墳５基
3	木津Ａ遺跡	饗庭木津	古墳	古墳	丘陵	山林	円墳１基、横穴式石室
4	大塚遺跡	饗庭木津	古墳	古墳	丘陵	山林	円墳１基、横穴式石室
5	女郎塚遺跡	饗庭	古墳？	古墳	丘陵	山林	円墳
6	猫塚遺跡	饗庭	古墳？	古墳	丘陵	山林	円墳
7	大曲遺跡	饗庭今川上流	散布地	弥生	川底	川	
8	岡遺跡	饗庭岡	集落跡	弥生・古墳	丘陵	山林	
9	堂の西遺跡	饗庭堂の西	集落跡	弥生	丘陵	山林	
10	宝山寺遺跡	饗庭宝山寺	集落跡	弥生	丘陵	山林	
11	五十川城遺跡	饗庭五十川	城跡	中世	丘陵	山林	伝承地
12	貞隆寺遺跡	熊野本辻沢	寺院跡		山腹	山林	伝承地
13	清水山城遺跡	安井川清水山	城跡	中世	山頂	山林	
14	大宝寺遺跡	安井川大宝寺	寺院跡	白鳳	山腹	山林	
15	清水山遺跡	安井川大宝寺	古墳・古墓 城跡	古墳・室町	山腹	山林	円墳１基、古墓、土墨
16	本堂谷遺跡	安井川大宝寺	寺院跡	中世	山腹	山林	堂坊跡残存、地名にも残る。
17	安井川遺跡	安井川	集落跡・古墳	弥生	山腹	山林	
18	井ノ口遺跡	安井川井ノ口	古墳群	古墳	山腹	山林	円墳６基以上
19	森浜遺跡	旭森浜	集落跡	弥生～古墳	湖岸・湖中	湖	
20	阿弥陀寺遺跡	旭堀川	寺院跡	中世～近世	平地	水田	
21	堀川遺跡	旭堀川	集落跡	弥生～平安	平地	校地	
22	針江浜遺跡	針江浜	集落跡	弥生	湖岸・湖中	湖	散布地
23	吉武城遺跡	針江川北	城跡	中世	平地	水田	伝承地
24	円若寺遺跡	針江川北	寺院跡		平地	水田	伝承地
25	川北遺跡	針江川北	集落跡	弥生	平地	水田	
26	針江北遺跡	針江川北	集落跡	弥生	平地	水田	
27	深溝遺跡	深溝	寺院跡		湖岸	湖	
28	智善院遺跡	藪園	寺院跡		平地	宅地	伝承地
29	下花貝遺跡	北畑下花貝	集落跡	弥生	平地	水田	
30	新庄城遺跡	新庄	城跡		平地	水田	八田氏居城、堀現存
31	大将軍塚遺跡	太田君宮	古墳	古墳	平地	水田	
32	仁和寺遺跡	太田	寺院跡		平地	宅地	伝承地
33	外ケ浜遺跡	外ケ浜	散布地		湖岸	湖	
34	源氏浜遺跡	源氏浜	散布地		湖岸	湖	
35	針江中遺跡	針江	集落跡	弥生	平地	水田	弥生式土器（後期）
36	針江南遺跡	針江	集落跡	弥生	平地	水田	弥生式土器（後期）
37	正伝寺南遺跡	深溝	集落跡	弥生	平地	水田	
38	深溝条里遺跡	深溝	集落跡・条里	弥生～平安	平地	水田	
39	日爪遺跡	日爪	古墳	古墳	山腹	山林	円墳７基、方墳２基、木棺直葬
40	波爾布神社遺跡	木津	古墳 寺院跡	古墳 不明	山腹 平地	山林 水田	古墳３基、建物跡推定地２カ所
41	木津製鉄遺跡	木津	製鉄跡	奈良	山腹	山林	
42	木津Ｂ遺跡	木津	古墳	古墳	山腹	山林	円墳10基、方墳１基
43	美園遺跡	饗庭美園	集落跡	古墳～平安	平地	水田・道路	竪穴式住居、掘立柱建物
44	光徳寺遺跡	木津石浦	寺院跡	室町	平地	水田	
45	熊野本遺跡	熊野本	古墳	古墳	山腹	山林・宅地	前方後方墳１基、方墳12基、円墳23基（内２基消滅）
46	熊野本遺跡	熊野本	集落	弥生	山腹	山林・宅地	弥生式土器
47	犬馬場遺跡	御屋敷	集落跡	縄文	台地	畑地	石器、縄文式土器
48	大荒比古神社裏山遺跡	安井川	古墳	古墳	山腹	山林	円墳５基
49	下平遺跡	井ノ口下平	古墳	古墳	丘陵・山腹	山林	円墳18基、方墳４基。石器剥片、縁釉陶片散布
50	木津公官所跡遺跡	木津美園	屋敷跡	近世	平地	水田	
51	深溝浜遺跡	深溝	散布地	弥生 奈良～平安	湖岸	湖	
52	観音堂遺跡	木津石浦	寺院跡		山麓	水田	
53	枯木台遺跡	饗庭野	集落跡	平安	丘陵	原野	須恵器
54	小俵山遺跡	饗庭熊野山	窯跡	奈良～平安	丘陵	原野	須恵器

第２表　新旭町内遺跡地名表

るに止め、森浜遺跡を中心とする平野部の遺跡分布を簡単に紹介しておこう。

安曇川左岸の新旭町の平野部では、その北半部に遺跡が集中する。湖岸線には、田井川以南の浜汀から湖中の浅瀬に、弥生時代後期～古墳時代中期を主とする遺物の散布が認められる⑥。遺跡は北から森浜遺跡、針江浜遺跡、深溝浜遺跡、外ケ浜遺跡が約3.8kmにわたって連続する。さらに、湖岸の遺跡群より約250～500mほど内陸に、針江を中心とする遺跡群が所在する。

この遺跡群は、田井川より南に、北から順に、川北（かわきた）遺跡、針江北遺跡、針江中遺跡に続き、針江大川を挟んでさらに針江南遺跡、正伝寺南遺跡などが所在する。各遺跡とも時代的に複合しているが、針江南遺跡で弥生時代中期前半（第Ⅱ様式）、正伝寺南遺跡で中期後半（第Ⅳ様式）の土器が出土しており、これが本遺跡群中の早い時期のものである。各遺跡の中心的な時期は、弥生時代後期～古墳時代前期にかけてで、湖岸線の遺跡形成とほぼ期を一にする。また、各遺跡とも上層に奈良～平安時代の遺構や遺物、わずかではあるが中世の土器などが認められる。針江南遺跡の東側に隣接する深溝条里遺跡でも、平安時代の土器や埋没畦畔などが発見されている。中世の遺跡としては、吉武城遺跡があり、また、時期や性格の不明な円若寺遺跡などがあげられる。

平野部の南半では、安曇川の氾濫原のためか遺跡の分布は激減する。湖岸線には安曇川町との境界付近に源氏浜遺跡の散布地が認められるのみで、他に藁園に智善院遺跡、太田の仁和寺遺跡などの寺院伝承地と中世の新庄城遺跡が知られている⑦。

以上見てきた遺跡よりもやや標高の高い90mライン上には、堀川を中心として、堀川遺跡や下花貝遺跡があり、弥生時代後期～平安時代の集落跡として知られている⑧。

註

① 地形環境については、福田徹氏の研究成果によった。記してその学恩に謝意を表したい。
福田　徹「安曇川下流域における条里制の復元」（『人文地理』26-3　人文地理学会　昭和49年）
福田　徹「中世後期における村落景観の復原」（『龍谷史壇』73・74　龍谷大学史学会　昭和53年）

② 水山高幸・池田碩・大橋健「琵琶湖周辺の地形」（『琵琶湖国定公園学術調査報告書』　滋賀県　昭和46年）

③ 饗庭昌威「水とのたたかい（藤本太郎兵衛のことども）」（『近江』3　近江考古学研究会　昭和48年）
大堤の築堤時期は不明であるが、元文2年（1739）の古地図には記入されているという。

④ 「今津・新旭・安曇川・高島地区」土壌図（滋賀県農業試験場　昭和39年）

⑤ 『高島郡新旭町堀川遺跡調査報告』（滋賀県文化財調査報告書第5冊　滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　昭和50年）
『美園遺跡発掘調査報告』（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　昭和50年）

⑥ 「琵琶湖水没遺跡一欄表、分布図」（『近江』3　近江考古学研究会　昭和48年）
林　博通『琵琶湖岸・湖底遺跡分布調査概要』Ⅰ（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　昭和48年）

⑦ 福岡澄男他『国道161号線・高島バイパス遺跡分布調査概要報告書』（滋賀県教育委員会　昭和46年）

⑧ 中村博司・山崎秀二・三田村治夫他「第二部」（『高島郡新旭町堀川遺跡調査報告』滋賀県文化財調査報告書第5冊　滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　昭和50年）
『新旭町堀川遺跡　第2次発掘調査略報』（新旭町教育委員会　昭和51年）

『新旭町堀川遺跡　第３次発掘調査略報』（新旭町教育委員会　昭和52年）
水口高司・折井千枝子『新旭町堀川遺跡　第４次発掘調査略報』（新旭町教育委員会　昭和53年）

第３章　調査の目的と方法

１．はじめに

昭和52年４月12日から８月６日にかけて実施した森浜遺跡の発掘調査は、水資源開発公団による湖岸堤の築堤工事に伴う新川舟溜り（416㎡）の建設と、新川水路改修工事（315㎡）部分の事前調査である。

なお、この２カ所の発掘調査を、本報告書では以下便宜上、「新川舟溜り」部分を「第一次調査」、「新川水路改修工事」部分を「第二次調査」と呼称する。

２．第一次調査（新川舟溜り）

調査の目的　森浜遺跡の範囲は、すでに分布調査によって明らかにされたように、湖岸から湖中にのびる浜汀上に遺物の散布が認められ、かなり広範にわたることが知られていた。しかし、具体的な遺物の包含状況や遺構の存在といった点になると、まったく不明であった。そのため、舟溜りの水深確保のために掘削が予定されている、地表下約3.5～4.0ｍまでが調査対象とされていたことは、湖岸の水没した遺跡の調査としては、どこまで包含層が続いているのかを、面的に追える絶好の機会でもあった。

これまで水没遺跡に対する検討が、主に地表面の観察によるものであっただけに、発掘調査によって土層の堆積状況の観察と、遺構が確認できるかどうかに関係者の期待がかけられていた。しかも湖岸の波打ち際で、湖水の逆流や湧水などを調査区域内からうまく排水しながら、はたして遺構、遺物の検出が可能かどうか、発掘調査の方法上の問題も重要な課題として問われたのであった。

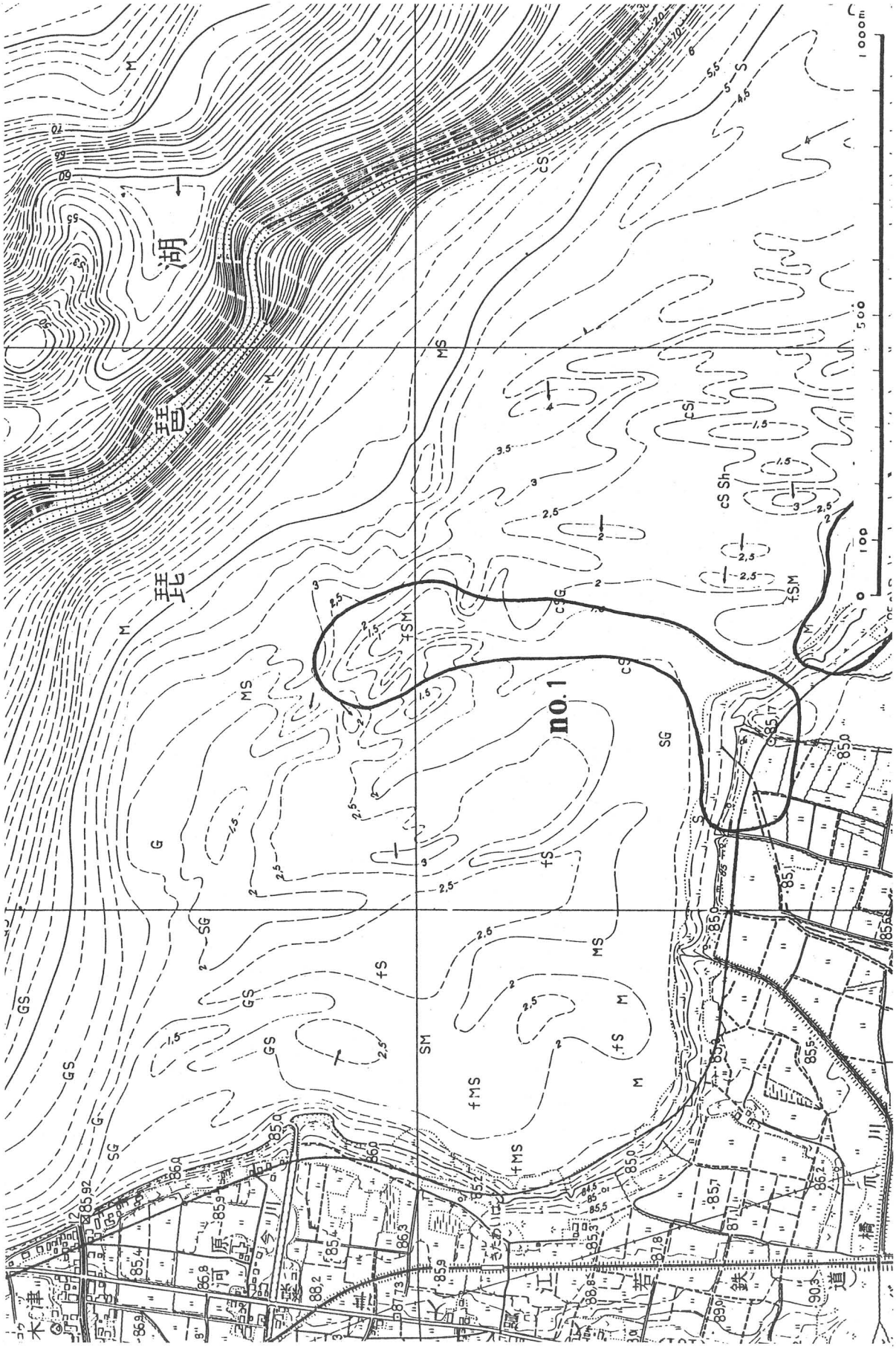
われわれは、そうした条件をふまえたうえで、地表下約４ｍまでの調査を計画し、

①　湖面の変動を、層位、出土遺物などから時期的にとらえることができるかどうか。

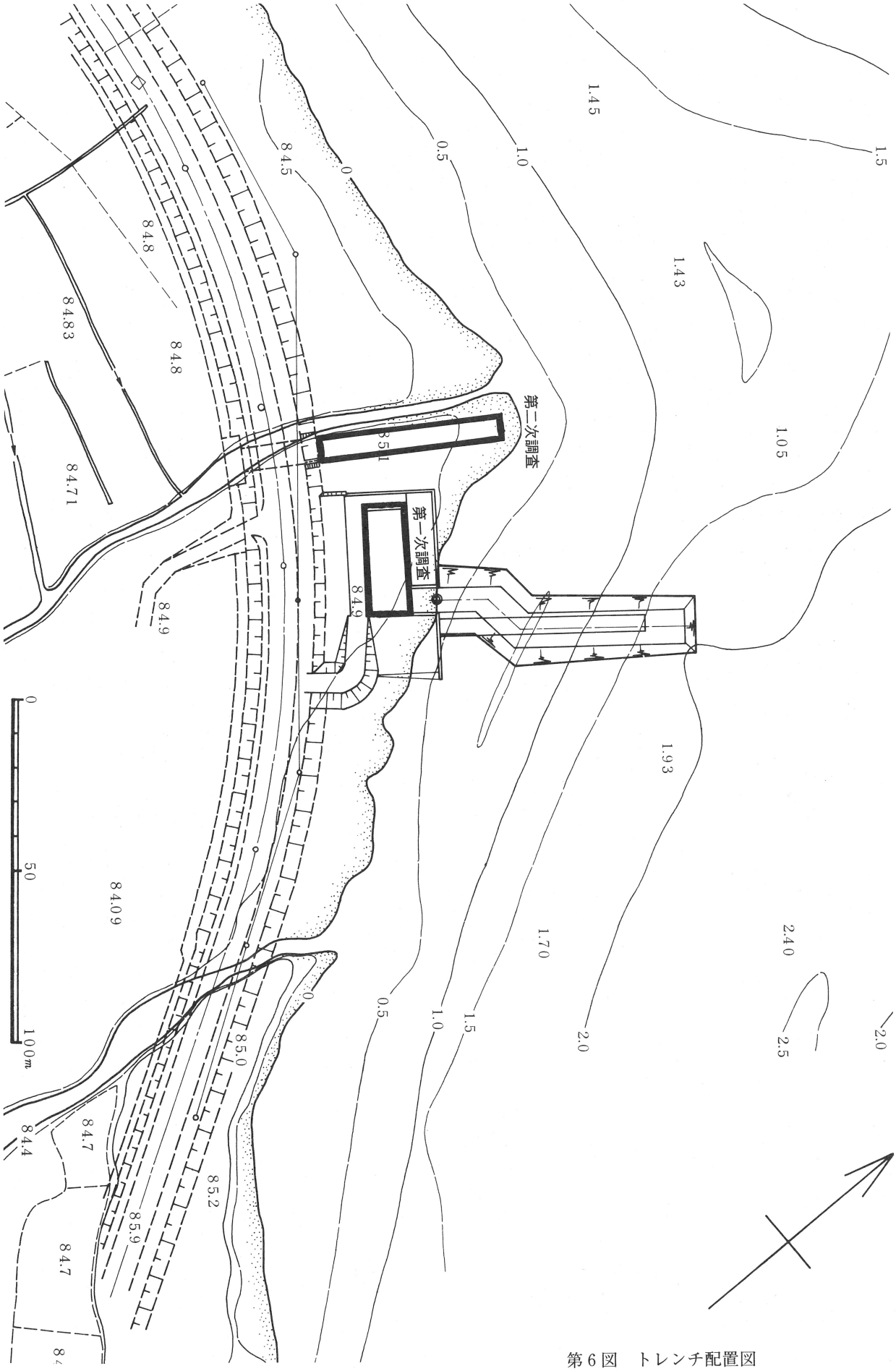
②　旧地形復原の資料を得ること。

に発掘調査の主眼を置いた。

調査の方法　発掘調査は、舟溜りの岸壁工事のために打込まれている鋼矢板（深さ８ｍ）を利用し、矢板の無い湖水側の航路部分も調査期間中は矢板で封鎖し、完全に湖水を遮断した中で行った。なお矢板内の調査区域の四周には、幅約１ｍの排水溝を掘って水を北西端の一カ所に集め、そこに６インチの電動水中ポンプを一台常時備えつけて排水した。調査期間中は、幸か不幸か近年にない渇水期であったため、矢板による地下水の遮断、水中ポンプによる昼夜休み無しの



第５図　森浜遺跡周辺湖中地形図（文献10より）


第一次調査
第一次調査
1.5
1.45
1.43
1.05
1.0
0.5
0
84.5
84.8
84.83
84.8
84.71
84.9
84.9
84.09
0
50
100m
1.93
1.70
2.40
2.5
2.0
2.0
1.5
1.0
0.5
0
85.0
85.2
85.9
84.7
84.4
84.7

第6図　トレンチ配置図

排水によって、陸上並みとはいかぬまでも、遺構、遺物の検出ができる程度の水を残した状態で調査が可能であった。

排土は当初、表土のみをバックホウによって行い、それより下層はベルトコンベアーを利用して土を矢板の外にある土捨て場に集積させる予定であった。しかし、地元より募集した現場の作業員が、常時予定どおりの人数が集らず、相対に高齢で調査が深くなるにつれてベルトコンベアーの使用が思うにまかせず、また地盤の状況も悪く危険を伴うため、やむをえず各層ともバックホウで土を除去せざるをえなかった。そして遺構面が近づくと人力で精査を行った。ただ、矢板内での作業であるため、写真撮影や実側を行うには、一層除去するごとにバックホウを調査区域外に出さなければならなかった。そのため、矢板の外にバックホウが出る登り道が必要となってきた。さらに、調査する層が深くなればなるほど、バックホウの登り道を確保するために、発掘対象面積を縮少せざるをえなかった。また、キャタピラが遺構面に与える影響を最小限にくいとめるため、キャタピラの下に厚い板や土嚢を敷きならべた。しかし、この方法も、湧水の多い層では効果は少なかった。もっとも、調査する層が深くなってくると、排土量も減り、バックホウの移動も少くなり、それなりに調査は進展した。この段階で矢板内に集められた排土を、スムーズに矢板外の土捨て場に移動させるため、矢板外にも１台バックホウを置いて使用した。

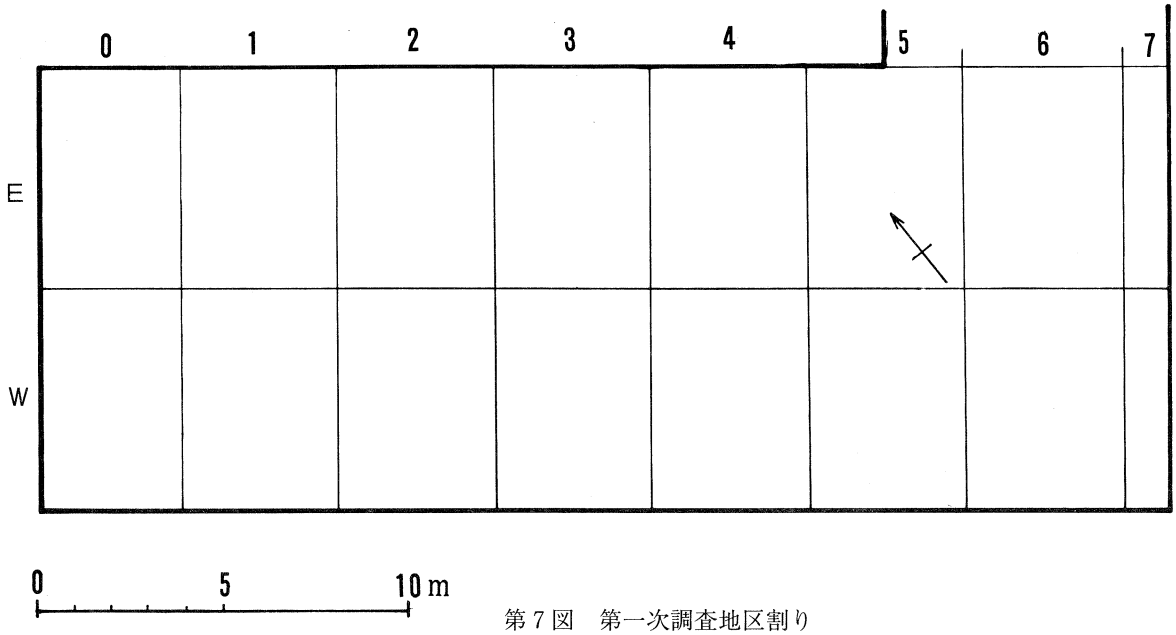
バックホウの移動も、調査が地表下３ｍをこえると、矢板内からバックホウが自力で出るには、登り道の傾斜があまりにも急になり、また湧水によってヘドロ化した土のためキャタピラが空転し、自らの重量のため泥の中に沈むおそれが生じた。そこで万一の場合は、各層の調査が終るとレッカーでつり上げて矢板外に出し、写真撮影、実測が終ると再びレッカーで矢板内に入れるという方法も考えて準備した。しかし、今回は幸いにもいくつかの好条件が重なり、かろうじて自力で矢板の外へ出ることができた。

第一次調査の方法から言えることは、

① 矢板で発掘範囲を囲み、内側の四周に排水層を掘り、一カ所に集水枡を設けて、四六時中強力な水中ポンプを使用すれば、排水および遺構の検出はある程度可能である。

② 四周を矢板で囲んだ場合、バックホウによって全域の排土がスムーズに行えるのは、湧水の少ない上層のみである。下層部の排土については、ベルトコンベアーの使用が適切であろう。ただし何らかの理由で、下層部の排土にバックホウを使用する場合は、通路用に一カ所矢板の無い部分を作り、登り道の斜面が確保できるようにするか、必要に応じてバックホウをレッカーでつり上げて矢板の外に出すことを考慮する必要がある。

③ 湧水等によって、「コス」と呼ばれる細い砂質粘土が水分を含むと、ヘドロとなり遺構の検出はほとんど不可能となる。特に、湧水は当地域での水圧が高く、水量も多い。そのため、一辺数メートルの狭い範囲内での調査で湧水にあたると、あたかも井戸のような状態になってしま



第７図　第一次調査地区割り

う。今回の調査のように、ある程度の広さをもった場所で、調査面より１～２ｍ深い排水溝を掘って水を切っていても、何カ所も湧水孔ができると、遺構の検出が不可能となり、遺物の採集にとどまってしまう。

調査区域の地区割り　調査区域の地区割りは、矢板に囲まれた舟溜りの長方形（30.4ｍ×12.0ｍ）を利用して行った。まず短辺12ｍを中央で二分して、東側（湖岸側）を“Ｅ”、西側（道路・水田側）を“W”とした。また、南北方向は矢板の幅（42㎝）を利用して、北から矢板を順に数え、１～９までを“０”、10～19までを“１”、20～29までを“２”……表示して行った。各地区の名称は、東西方向、南北方向の二種の記号を組み合わせ、“０Ｅ”“１W”というように地区名をつけ、“０Ｅ”“０W”から“７Ｅ”“７W”まで16地区に区切って遺物の取りあげを行った。

３．第二次調査（新川水路改修）

調査の目的　第一次調査によって遺物包含層の存在が確認されたことと、舟溜りの工事中に、舟溜りの北側でスクモ層中より琴（129）が出土したことなどから、遺跡がさらに北に広がることがわかった。また、琴の出土した遺物包含層は、第一次調査で確認した幾層もの遺物包含層とやや様相を異にするため、第二次調査でその状況を把握することにした。また、新川の樋門工事の際にも、多数の土器や木製品が出土していることから、第二次調査におおいに期待がもたれた。

第二次調査を行う新川改修工事部分は、舟溜りより約15ｍ程北側に位置する。ただ、改修工事は、舟溜りのように深い掘削を行わないため、調査も改修工事の高さによって制約をうけるものであった。

調査の方法　第二次調査では、川の改修を兼ねての発掘であることと、真夏の渇水期の調査であるために鋼矢板は使用しなかった。

排水は、第一次調査と同じように、調査区域内に側溝を掘って排水溝とし、電動水中ポンプを常備して終日排水を行った。

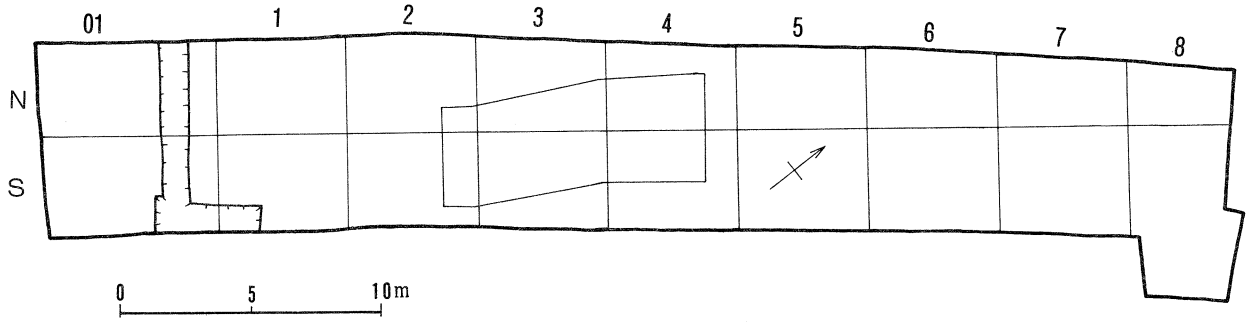
この調査方法は結果としては十分な排水が行えず、調査した深さまでは常に若干の冠水があり失敗であった。湖岸周辺部では、いかに渇水期であろうと、ポンプだけの排水処置では、十分に湧水を押えることができないことを痛感した。

排土は、バックホウにより表土の砂層から第２層の上半までを除去し、遺物の出土する第２層下面で止め、人力で調査を行った。

調査は、新川改修工事の予定の高さまで行い、さらに下層に、まだ遺物の出土も認められたが、川床に連接ブロックを敷き並べて、遺物包含層がえぐられて露出しないように工事側の配慮をうけた。

調査区域の地区割り　調査区域は、川幅と改修距離の関係で、幅約８ｍ、長さ約57ｍの範囲となった。この調査区域の地区割りは、幅８ｍを中央より二分し、下流に向って左をＮ、右をＳと記号をつけた。また、上流のトレンチ基点より５ｍごとに１、２、３……と地区番号をつけた。この両者の組合わせ――例えば１Ｎ、２Ｓなど――によって、遺物の取りあげを行った。

既に工事を終了している樋門から調査区域までは、現行の水路の関係から調査は最後に拡張部分として実施した。この地区名は、01Ｎ・Ｓ地区とした。



第８図　第二次調査地区割り

第四章　調査日誌（抄）

1．第一次調査（新川舟溜り）

4月12日（曇のち雨）

県教育委員会より発掘用器材を現場へ運ぶ。

水資源開発公団湖西支所（今津町）、新旭町教育委員会にあいさつ。

4月13日（曇のち晴）

バックホウを調査区域内に入れる準備として、矢板内と排土置き場の排水を行う。

バックホウで矢板内の西側に、排水用の側溝を掘り、排水ポンプを据える釜場を作る。

4月14日（晴）

作業を行うため、地表にある堆積物を除去。

4月15日（雨のち曇）

作業中止。

4月16日（曇のち雨）

バックホウで表土除去を始める。

4月18日（曇り）

1～4E・W地区の第1層をバックホウで除去し、第2層直上まで掘り下げる。

第2層直上を人力で清掃し、第2層の上面でそろえ、遺構検出を行う。（第1遺構面）

第2層は青灰色シルト層であるが、部分的に黒褐色土層が混る。黒褐色土が遺構になるかどうかは不明。

4月19日（晴。午後一時時雨れる）

5E・W区までの、第1層の残りを除去。

4E・W区までの第2層を清掃。

3E・W区でピットを確認。また、3・4区に幅50cm程の溝が3本検出され、溝中より古式土師器、土錘、管玉、種子などが出土する。

4月20日（晴）

調査地域内の第1層の除去が終了。

第2層の上面で遺構が確認され、これが第1遺構面となる。ピットの掘り込みを行う。昨日までに桃などの種子が、6～7個出土しているが、ピット内に顕著である。

SD1は溝の両端が切れ、溝の東側で幅50cm、長さ1m程の土坑を検出。土坑内より土師器が出土。SD2とSD3は、トレンチの西側で土の汚れが広がり合流する。

遺構の埋土は黒褐色土で、植物遺体を含む。

第2層は、南側に向って下っており、排水溝の断面での観察では、層中に土師器を包含している。

4月21日（曇のち晴）

遺構の掘り込みを終り、写真撮影を行う。

ピットの総数は12個で、出土遺物は土師器と種子である。SD2とSD3は、西側で土の汚れが広がり合流するが、両者の先後関係は不明である。

土層は、SD3の南側で褐灰色砂質土になり、遺物の出土は極めて少なくなる。地形は南側に向って下る。

4月22日（曇のち晴）

第1層の排土完了。

遺構を縮尺40分の1で平板実測を行い、その後、レベルを記入。

調査区北側の排水溝を掘り下げる。その途中で布留式土器の入った土坑を発見。（SK2-1）

西側壁面で20分の1の土層断面図を作成。

排水溝の掘り込み時の観察から、第2層はさらに

青灰色シルト層が上層と下層に分けられる。

4月23日（晴）

前日に引き続き、北側の排水溝を掘り下げる。

第2層上面を約10cm程全体に掘り下げ、前日に排水溝の壁面で検出した土坑（ＳＫ2-1）の面で揃え、この高さで再度遺構の有無を精査する。以後、この面を第2遺構面とよぶ。第1遺構面とＳＫ2-1の状態から判断して、布留式の生活面と考える。

4月25日（雨）

雨のため、四周の排水溝にたまった土をさらえて作業を中止する。

4月26日（曇）

第2層の包含層を削平し、第2遺構面の確認を引き続き行う。

湧水によって地盤が軟弱化し、作業が困難となる。また、バックホウの重量のため、一部で遺構面が圧迫されたり、キャタピラによって土と水が混りヘドロ状になったり影響をうけはじめる。

4月27日（晴のち曇。午後4時頃より雨）

第2層上部の排土を終了。

第2遺構面で、ピット、土坑、溝など遺構の検出を行う。

遺構検出の際に、完全に集められなかった浮き土の残りが水分を含んでヘドロ化し、調査の障害となりはじめる。

4月28日（雨）

雨のため作業中止。宿舎でこれまでの図面や記録類を整理する。

4月29日（晴）

第2層上部の排土を、バックホウを使って矢板の外へ搬出する作業を開始する。

第2遺構面の調査を継続。遺構の掘り込みを始める。0～1Ｅ・Ｗ地区まで進む。

4月30日（晴）

遺構面の窪みにたまった水を出して、第2遺構面の精査を行う。その結果、さらに多くのピットが検出される。午後よりピット内の掘り込みを行い、ほぼ完了する。

5月1日（晴）

第2遺構面を写真撮影の後、遺構を縮尺40分の1で平板実測。

5月2日（雨）

平板実測図にレベルを記入。

北側排水溝をさらに掘り込み、断面図を第3層（砂層）の上面まで補足する。

5月3日（晴）

検出した土坑を写真撮影し、メモをとりながら掘り出す。

5月4日（曇のち雨）

4～6Ｅ・Ｗ地区を精査。あいかわらず遺構面に水がたまる。4Ｅ・Ｗ地区を境にして、南と北で土質が若干変化する。

5月6日（曇のち晴）

第2遺構面を10～15cm掘り下げ、杭、ピットなどの見落しを探す。その結果、杭とピットが数カ所検出される。

1～2Ｅ・Ｗ地区まで、水を含むと軟弱になるシルトがあり、溝の埋土かと思われたが、壁面でも平面でも明確に輪郭がとらえれらずブロックのようである。

5月7日（曇のち晴）

西側の排水溝を掘り下げる。

第2層ｂを削平する。下部になると砂質化し、水の湧き出しが著しくなる。ここからも、掘り残しのピットが検出される。

第3層は、3Ｅ・Ｗ地区以南でやや下り気味にな

る。

5月8日（晴）

第2層cを縮尺40分の1で平板実測の後、第3層上面まで掘り下げる。0～3E・W地区までバックホウで排土。

この面より自然木（流木か）を検出する。第3層は調査区域内の平面で追跡すると、かなり凹凸が激しい。ただ、遺物の出土は、ほとんど認められなくなる。調査面での湧水が増す。

5月9日（晴）

自然木の出土状況を写真撮影。

第2層を完全に除去し、第3層でそろえる。2E・W地区で第2層が約10cm程落ち込んでいた。また同じ層中で、89番の矢板に切断されて、一個体分の土器が出土した。

5月10日（晴）

西側の排水溝を掘り下げる。矢板内の南側に集積されていた排土を、バックホウで矢板外に移す。

第3層の遺構検出を行う。この面は、凹凸が激しく波打っている。ここより杭が一本出土（K25）したが、あるいは上層での掘り残しかもしれない。それ以外の遺構は、検出されなかった。

5月11日（晴）

東側の排水溝を掘り下げる。

平板実測でこの面のコンターを測る。

5E・W地区以南の第3層を上面で整える。

写真撮影の後、自然木を取りあげる。第3層上面での作業終了。

5月12日（晴）

第3層除去開始。北側から順に、第4層を調査する。本日の状況では、まだ遺構かどうか不明であるが、調査区域の南半で南側に向って下って行く落ち込みらしいものが認められる。第3層を除去する際に、若干量の土器と木材、自然木（流木？）などが出土した。

5月13日（晴）

第3層の削平が終了し、第4層の上面を精査する。排水溝の掘り下げた部分で断面図を補足する。

5月14日（晴）

排土を調査区域の南側に移す。

湧水を処理するため、部分的に排水溝を増して掘る。

第4層の調査を継続する。東側は、バックホウのキャタピラで水分を含んだ土がこねられ、調査面に影響が出始める。

35mmで写真を撮る。

5月16日（晴）

調査区域内の、北、東、西の三カ所の角を、バックホウで第6層まで掘り下げる。

落ち込みの土層を、排水溝を利用して確認し、断面図を作成する。

5月17日（晴）

落ち込みの調査を継続する。遺構面よりの湧水が著しいため、本日より2インチの水中ポンプを併用する。

5月18日（晴）

落ち込みの写真撮影と平板実測を行い、第4層の調査を終える。

5月19日（晴）

第5層を調査。

第5層上面はかなり凹凸があり、その窪みより土器片が出土する。しかし、湧水のために調査時に第5層がみるみるうちにヘドロ化し、調査が人力によっても困難になってきた。そのため、精査を断念し、遺物に注意しながらバックホウで第6層まで除去する。

ヘドロを除去すると遺構面が安定したため、続いて第６層の遺構検出を行う。第６層は、１Ｅ・Ｗ地区から南側に落ちこみ、そこに溝が走る。

５月20日（晴）

昨日検出した溝を調査。

北側の排水溝を掘り下げる。

５月21日（晴のち曇）

溝の肩から木製品が出土。

排土の量が増加したため、矢板内に仮置きした土が、水を含むとヘドロ化して崩れてくる。そのため、崩れを防ぐために土嚢を積む。

５月22日（曇のち雨）

昨日掘りあげた第５層の排土を、調査区域の南側に集める。

西側排水溝の断面を利用して、土層の確認を行い、断面図を20分の１で作成する。

５月23日（晴）

溝の底まで掘り終える。溝内より弥生式土器（第Ⅴ様式）の破片が出土する。また、溝の南西端の肩に乗るようにして、建築用材とか思われる木材が出土。写真撮影および遺構の実測を行う。

溝の東側断面図を作成する。

５月24日（晴のち曇）

溝の西肩の砂層中より、石包丁形木製品が出土。実測継続。

５月25日（曇）

北側排水溝を深く掘り下げ、ヘドロ溜めにする。調査区域内に土嚢をならべ、バックホウの進入路を作る。

５月26日（曇のち雨）

南側の矢板近くに溜っているヘドロを取り除く。

南側の排水溝のまわりに杭を打ち込み、ヘドロが落ち込むのを防ぐために土嚢をならべる。

５月27日（晴）

湧水のため足場が軟弱になり、バックホウを調査区域内に入れるのもこれが最後になる。そのため、遺構がなければ小区画で一度に数層ずつ調査を進めながら収拾にむかう。

１Ｅ・Ｗ地区の第６層を除去し、続いて第７層を除去、植物遺体が多い第８層上面で止める。第６・７層中から、土器は一片も出土しなかった。

第７層から湧水が激しくなる。

５月28日（晴）

第６・７層を注意しながら３Ｅ・Ｗ地区まで除去する。遺構は無く、沼地の堆積を思わせるように植物遺体が多い。

第６層で木製品が１点、第７層では自然木と思われる木片が多数出土する。

第８層上面で地盤は固くなるが、この面でも水のしみ出しが著しい。

５月30日（雨のち曇）

雨のため中止。付近の工事現場で土器を採集する。

５月31日（晴）

前日の雨のために溜ったヘドロの水を排水するが思うにまかせず、最後の調査範囲の端に新たにヘドロ溜めを掘るが、ここより湧水が激しく新たに水中ポンプ１台を入れる。調査はヘドロと湧水で、最悪の状態となる。

第６・７層をヘドロと共に、機械的に５Ｅ・Ｗ地区まで除去し、やや小康状態をとりもどす。

東西両壁面を分層し、断面の写真を撮影する。

６月１日（晴のち曇）

第８層上面に溜ったヘドロを除去し、写真撮影を行う。

東側壁面の断面図を、排水溝を利用して、地山と考えられる第９層の白灰色粘土層まで実測する。北

側壁面を分層し、断面の写真撮影を行う。

6月2日（曇のち雨）

平板で調査範囲の実測を行い、昨日に引き続いて東側および北側壁面の断面実測を行う。

第8層から第9層までの調査は、第8層上面までの調査範囲内に小トレンチを入れて最終調査とする。

第1トレンチの第8層最下部から、輪𣪘を伴った田下駄が出土した。

6月3日（晴）

前日に引き続いて、第8層を掘り込むトレンチを3本設ける。植物が堆積した馬フンを思わせるこの層は、約60cm程の厚さがあるが遺物は出土しなかった。

田下駄およびトレンチの全景を写真撮影し、各トレンチの位置および田下駄の出土状況を実測する。

本日をもって調査を終了する。

2．第二次調査（新川水路改修）

6月27日（曇のち晴）

新川の改修工事に伴う調査範囲（10m×60m）のうち、工事用に盛られた土砂をバックホウで除去する。

調査区域内の第1層を、2N・S地区まで除去し、第2層の馬フン層と通称する植物堆積層の上面を検出する。この層中には、木片が多数含まれており、小破片ではあるが布留式土器が出土する。

今回は鋼矢板を使用していないためか、第一次調査にくらべて湧水が多い。

6月28日（曇のち雨）

昨日、第2層の上面まで除去した1・2N・S地区は、この面での湧水が激しいため、西壁と南壁に沿って排水溝を穿つ。

その際、第2層で布留式の甕や高杯などの破片、南壁排水溝の底（第3層上面）で庄内式併行期と思われる甕などが出土する。

6月29日（雨）

雨のため、朝、排水ポンプを見廻った後、室内で整理作業。

6月30日（曇のち雨）

第2層上面のヘドロを取り除き、後は室内作業。

7月1日（雨のち曇）

1N地区の第2層を掘り下げる。

トレンチ北壁寄りで、やや平坦な面を検出する。その面は舟底状で、じょじょに南側へと落ち込んでおり、あるいは旧河川ではないかと思われる。平坦な面で約30cm、トレンチ南壁で約60cmの厚さのスクモ層が認められる。傾斜面の肩から布留式の甕がまとまって出土する。また、木製品は、建築材らしい20cm×20cmの角材が平行に並んで出土した。

7月2日（曇のち晴）

昨日は1N・S地区を第3層上面まで検出したが、この層は傾斜しているようで、高い所と低い所で約60cmの差がある。

土器も、昨日と同様に、同じ場所近くから並んで出土する。調査は、1～3N・S地区におよぶ。

第3層は、灰褐色粘土質で層厚は30～40cm程で、庄内式から布留式にかけての土器を包含する。

7月4日（曇）

調査の現時点で、第3層は湖岸側に向って、多少ではあるが高まっているようである。

土器は、第3層直上及び第3層検出面北側の平坦な面から傾斜面の肩にかけて出土しており、1個体分の土器がつぶれた状態で検出されている。

木製品は、2・3S地区の舟底状をした底近くから、板状のものが出土している。

7月6日（曇）

地形は、第3層が4S地区付近でやや高くなり、それより湖側へはじょじょに低くなる。

4、5N・S地区の第2層（第3層直上付近）より、土器や木製品が多数出土する。形状のわかる木製品としては、火鑽臼や大形の盤などがある。

木製品や土器の出土状況は、4、5N・S地区では、半円形状に並んでいる。

7月7日（晴）

調査は、湖まであと2、3mの所まで達した。

5～8N・S地区にかけては、スクモ層がじょじょに厚く堆積し、その上部に砂層がかみこんでおり、この層からも湧水がある。

土器の出土は減少し、木製品の出土が目立つ。木製品は、流れ着いたかのように、ブロックごとにかたまって出土する。

地形は、北西から南東への傾斜がやや急になる。

7月8日（晴）

トレンチの掘り込み作業は、ほぼ終了した。

写真撮影のために、検出した遺物を出土状況のまま清掃を始める。

8S地区の拡張部より鍬が出土する。

2N地区第3層から、新たに二重口縁の壺が出土した。

7月9日（晴）

写真撮影のため、調査区域全体の清掃を行う。その際、第3層より壺、甕が出土する。

土器の写真を撮る。

7月11日（曇のち雨）

引き続き、トレンチ内の清掃を行い、その後全体の写真を撮る。

湧水などによって動いた木製品の取りあげを一部行う。

7月12日（曇のち晴）

昨日に引き続いて、全景および細部の写真撮影を行う。撮影の後、実測のためトレンチ内の割りつけをする。

7月13日（晴のち曇のち小雨）

トレンチの全体図を、縮尺40分の1で平板実測。平板実測の後、水糸を張って縮尺10分の1で、遺物の出土状況を実測する。

7月14日（晴）

昨日に引き続き、遺物の出土状況を実測する。

7月15日（晴時々雨）

遺物の出土状況の実測を続ける。

仮のベンチマークを水門に引き、1N地区より実測図にレベルを記入する。

7月16日（晴）

遺物の出土状況図終了。昨日に引き続き実測図にレベルを記入する。

第3層を確認するため、トレンチを設ける場所を検討する。

7月17日（雨のち晴）

木製品、土器にレベルを記入し終える。

3N・S地区の第2・3層の土器を取りあげる。

7月18日（晴時々小雨）

2N地区で庄内式土器の甕、火鑽臼を、4S地区で布留式土器の甕の下から出土した盤の写真を撮影し、その後取りあげる。

本日で検出した土器の取りあげは、ほぼ終了する。盤は出土状況図に記入する。

8N地区の第3層より出土した二重口縁の土器の下から、琴が出土する。第二次調査直前に出土した琴とは形態が異なる。

7月19日（晴）

木製品の取りあげを行う。

昨日琴の出土した8N地区で、もう1点琴が出土する。今日出土した琴は、昨日出土した琴とほぼ同形であるが、やや焼け焦げている。第3層から5N地区で大形の組物が出土しはじめる。

7月20日（晴）

木製品の取りあげと、組物の検出を行う。

組物は、長さ4m、幅3m程で、この上に土器や盤などが乗っていた可能性がある。組物の上から、一辺4cmの角材が出土した。この角材の端にはほぞ孔があり、この他にも4～5本、角材が出土した。

琴の出土状況の写真撮影および実測を行う。

7月21日（晴）

大形の木製品以外取りあげはほぼ終了し、組物の掘り出しにかかるが、組物は想像以上に大きく、最初に検出した組物の端に重なってもう1つ組物が出土した。

7月22日（晴）

トレンチ壁面の土層を実測する。

大形の組物は2点検出されたが、昨日検出された組物の横にも、もう1点組物が埋没している可能性があるため、壁面を明日より掘り広げる準備をする。

7月23日（晴）

西壁面の土層図、すべて完了する。

組物の掘り広げを行うが、まだ端まででない。

7月25日（晴）

組物の端が西壁両側でみつかる。この組物の端から、受口状口縁をもつ甕2個体と高杯が出土する。

7月26日（晴）

組物の輪郭をきれいに出して、写真撮影を行い、その後、土器の取りあげを行う。

琴にレベルを記入して取りあげる。

7月27日（晴）

水門側を拡張して、01地区の掘り下げを始める。

第2層下面で杭が並んで検出されたほか、盤、杵をはじめとする木製品と加工材が出土した。

組物を縮尺10分の1で実測を始める。

7月28日（晴）

昨日に引き続いて組物の実測を行う。

本日は人数も少なく、掘り下げは中断。

7月29日（晴）

組物の出土状況図の実測を続ける。

平行して、昨日中断した掘り下げを行う。

7月30日（晴）

組物の実測を行う。

8月1日（曇のち晴）

組物の出土状況の実測図が終了し、続いてレベルを記入する。

組物の上に乗っていた木製品の取りあげを始める。

01地区の掘り下げは、予定面積の約半分を第3層直上まで行う。それに伴って舟形木製品が出土し、合せて加工木が多数出土する。

8月2日（晴）

組物の上に乗っていた木製品や木片を総て取り除き、組物の全景を出す。明日、組物の最終写真を撮るための準備をする。

01地区の掘り下げは、昨日と同様第2層のスクモ層から第3層直上まで行う。出土遺物は、土器は布留式土器が主体で、木製品では火鑽臼が出土した。

排水溝を第3層の深さまで掘り下げる。布留式と思われる土器を包含する。

8月3日（晴）

組物の最終出土状況の写真を撮り、その後で組物の取り除しにかかる。

01地区では第2層の掘り下げを終り、写真撮影の後に割り付けを行い実測を行う。

8月4日（晴）

組物の取り上げを引き続き行う。

組物は、東側からA、B、Cと仮称し、一番上に乗っているBから順に取りあげる。

掘り下げを行った部分の実測も本日で終了する。

8月5日（晴）

組物の取りあげは、本日で終る。

組物Bの下を中心に、さらに別な組物が埋没しているようであるが、現状より下部では矢板無しで調査は不可能である。また、工事も下層については及ばず、保護策を講じてもらえるので、調査を終える。

実測図等、図面類の補足を行う。

8月6日（曇一時小雨後晴）

現場での補足作業終了。

調査用器材を荷作りしたり、木製品を仮保管している水槽の水替え、現場事務所の清掃を行う。

本日をもって調査を完全に終了する。

第５章　第一次調査（新川舟溜り）の結果

１．基本土層

今回の発掘調査の主要な問題点としては、現在の浜汀で土器の表面採集が行える森浜遺跡で、遺構面の確認もさることながら、遺物を包含している文化層が、琵琶湖の平均水面下どれくらいの深さまで続くのかということにあった。これは、琵琶湖と共に生き続けてきた人々が、湖岸をいかに利用して生活していたかという歴史を知ることでもある。

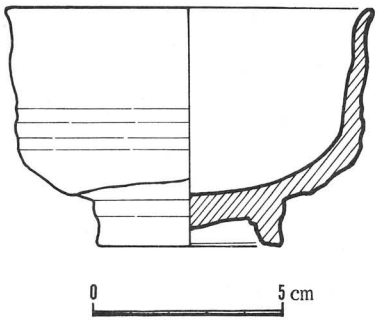
結果的に記せば、現在の地表面から3.6ｍの深さの第９層上面まで掘り下げて調査を行った。しかしこれより下層は、激しい湧水のために調査は不可能であり、無遺物層であるベースを完全に確認するまでにはいたらなかった。だが少くとも第８層までは、遺物の出土をみたのである。

今回の調査で確認できた基本土層は８層で、以下各層ごとにみてみよう。

〔第１層〕

調査地点の旧状は、琵琶湖に突出した浜辺で、表層は砂質の強い暗灰色砂質土層である。この土層は、70～80㎝の厚さで堆積しており、土質や色調の違いから上層と下層に分けられる。

上層には、ビール瓶やジュースの罐などを含む現代の層であった。



第９図　第１層出土陶器実測図

下層には、現代の遺物は含まれず、鉄釉のかかった陶器の茶碗が出土していることから、あるいは近世の層とも考えられる。

〔第２層直上〕

第２層は、青灰色シルト層であるが、この層の直上に灰褐色の砂層が認められる。調査区域内では、この第２層直上の厚さ約10～20㎝の砂層からしか須恵器の出土をみなかった。また、この砂層から掘り込まれた溝からは、土師器の把手が出土している。遺物からみて、古墳時代の須恵器に伴うものであろうか。

〔第２層〕

青灰色シルト層の第２層は、厚さ約40～70㎝で、やや砂質の強い上層と、淡褐色粘質土を含む下層に分けられる。土器は須恵器を含まず、庄内式、布留式土器で占める。

全体的にみて、第２層直上から第２層にかけてが一番土器の出土量が多かった。しかし、第２層直上と第２層上面より出土する布留式土器や庄内式土器には接合するものが多くみられる。このことは、第２層直上の砂層中にスクモ層（藻か？）が入り込んでいたことから推測し、第２層

直上の砂層が第２層上面を削り出しながら形成された状態――すなわちある時期に汀線であったことを示していよう。

〔第３層〕

第３層は暗青灰色砂層で、層の厚さは約10～40㎝である。第３層も、土質の違いから上層と下層に分けることが可能である。

上層は、粘質と砂質層が互層に入っており、下層は上層にくらべてやや粗い砂層である。

第３層の上面は平担でなく、かなり波打っており、その上面では流木と思われる自然木が検出された。しかし、この層からの土器の出土量は著しく減少する。

〔第４層〕

第４層は暗灰褐色粘質土層で、層の厚さは約10～20㎝である。この層からも、第３層と同様に流木と思われる自然木が出土しているが、他に加工された角材のようなものも出土している。土器は、極少量出土しただけで第２層より深くなるにつれて、ますます出土量は減少している。

この層より湧水が目立って多くなり、土に水が混ってこねられるとヘドロと化し、調査においてその処理に苦慮するようになる。土器は、約10片ほど出土しただけである。

〔第５層〕

第５層は青灰色砂質土層で、層の厚さは約10～20㎝内外である。この層の上面では、かなりの凹凸が見られ、凹凸中の皿状の落ち込みから、同一個体の破片が５、６片出土した。

第３層以下、下層に行くに従って湧水の量が増え、特に砂質層では多くなる傾向を示している。

〔第６層〕

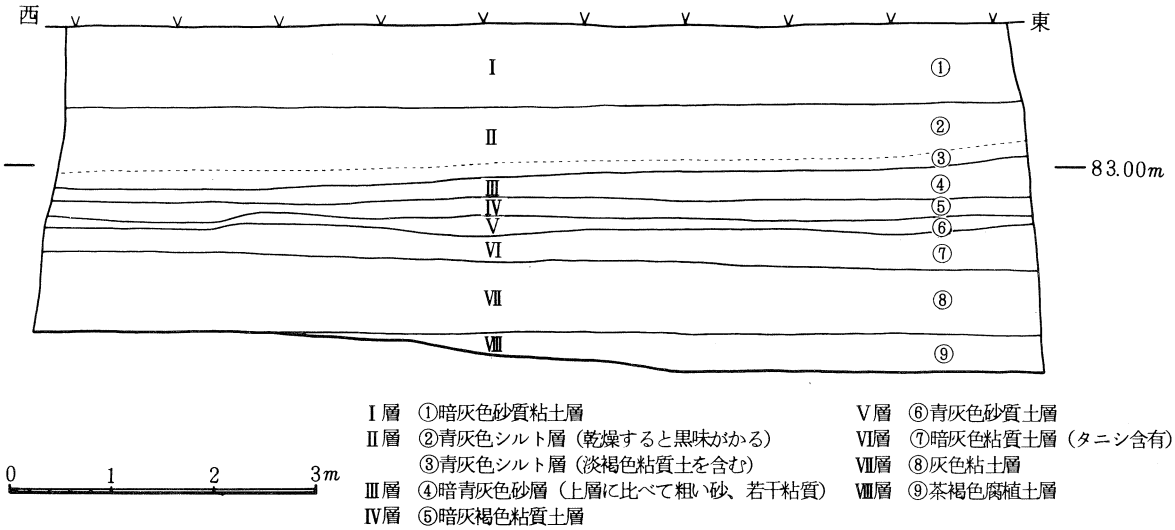
第６層は層の厚さ約30㎝ほどで、暗灰色粘質土の上層と濃灰色粘土の下層とに分けられる。この上下二層の分離の目安は、層中の巻貝（タニシと思われる）の粘土化した土粒の有無による。上層では、暗灰色粘質土層中に黄褐色をした粘土粒が認められる。

この層中では、建築材と思われる加工木や石包丁形木製品などの木製品が出土しているが、土器はほとんど出土しない。わずかに出土した土器は、弥生式土器の第Ⅴ様式末頃の時期の与えられるものであった。

〔第７層〕

第７層は層の厚さ約70～90㎝ほどで、土質は基本的には粘土層であるが、この層でも上下２層に分層できる。

上層は植物遺体の層中に含む暗茶褐色粘土層で、下層は灰色粘土層である。ただ、調査区北側で実測した土層断面図に示すように、下層が北東方向に落ち込み、上層がその上に乗る様に堆積しており、一時期、自然流路が形成されていた可能性がある。この層中から、土器はまったく出土しなかった。



第10図　第一次調査北壁土層図

〔第８層〕

第８層は、主に植物遺体の堆積によって形成された「マグソ」とか「バフン」層と通称されている茶褐色腐蝕土層で、層の厚さは約10～70cmと場所によって違いを示している。

この層の堆積は、第１層から第７層までの状況とは逆に、内陸部に向って厚く堆積している。層中には自然木を多数含むが、加工を加えた棒材や板材も混っている。第８層を除去した第９層上面は内陸に向って落ち込んでおり、落ち込みの肩部より第９層上面よりやや浮いた状態――第８層の下部より輪樏を伴った田下駄が使用時の状況で出土した。ただ、第８層も第７層と同様土器の出土は無かったが、第６層の出土土器と田下駄の形式からみて、弥生時代後期後半を遡るものではないであろう。

〔第９層以下〕

第９層は、〔第８層〕でも記したように上面が内陸に向って落ち込むが、発掘面積が限られた関係上、落ち込みの性格は不明である。

第９層からの調査は、湧水が激しく調査は不可能であったが、一部分排水のために水溜めを掘り下げた場所での観察を追加しておきたい。

第９層は白灰色粘土層で、厚さは約10cmほどで、調査区域北側の土層断面ではその下に砂礫層が入るが、No. １～３トレンチでは第９層は青灰色シルト層で、層の厚さは約30cmほどであった。また続く第10層は、細砂を含む灰色粘土層が約20cm、第11層は砂礫層が30cm以上にわたって堆積していることが確認された。

2．遺　構

（１）　第１遺構面

第１遺構面は、基本土層でもみたように、第２層直上の藻の入った砂層を切り込んだかたちで、溝（ＳＤ３）、土坑（ＳＫ１）、ピット（Ｐ17）が発見された。その他、杭が計11本検出されたが、杭の打ち込まれた面が第１遺構面と同一であるかは確証がない。

第１遺構面は、南東方向の琵琶湖側に向ってダラダラと下って行く。

（溝）

ＳＤ１　　幅約30cm内外、深さ約５cm、長さ約6.2mを測り、断面の形状は浅いＵ字形を示す。琵琶湖側に向って緩い傾斜をもつが、その西端で浅くなりながら消えて行く。また、溝の東端は、ＳＫ１によって切られており、遺構形成の先後関係が確認された。布留式新段階の土器が出土。

ＳＤ２・３　　ＳＤ２とＳＤ３は、西端の合流部の土層断面の観察では、先後の切り合いは認められず、ＳＤ２・３共に黒褐色腐蝕土が埋土で共通することなどから、同一の溝が二本に枝分れしたものと考えられる。土器は庄内式土器と布留式土器が混在して出土する。

ＳＤ２・３は、その合流部で幅約2.3m、深さ約７cmを測り、断面の形状は浅い皿形を呈する。枝分れしたＳＤ２は、幅約40cm、深さ約６cm内外で、断面の形状はＵ字形をなす。ＳＤ３は、幅約１mを測るが先細りし、今回確認した先端部では幅約５cmであった。深さは約８cmで、断面の形状はＳＤ２と同様Ｕ字形である。この２本の溝は、調査範囲内では平行して走り、琵琶湖に向っって緩やかに傾斜している。溝内からは、土器、木片、種子などが出土している。土器の年代からみて、布留式新段階に埋没したものであろう。

（土坑）

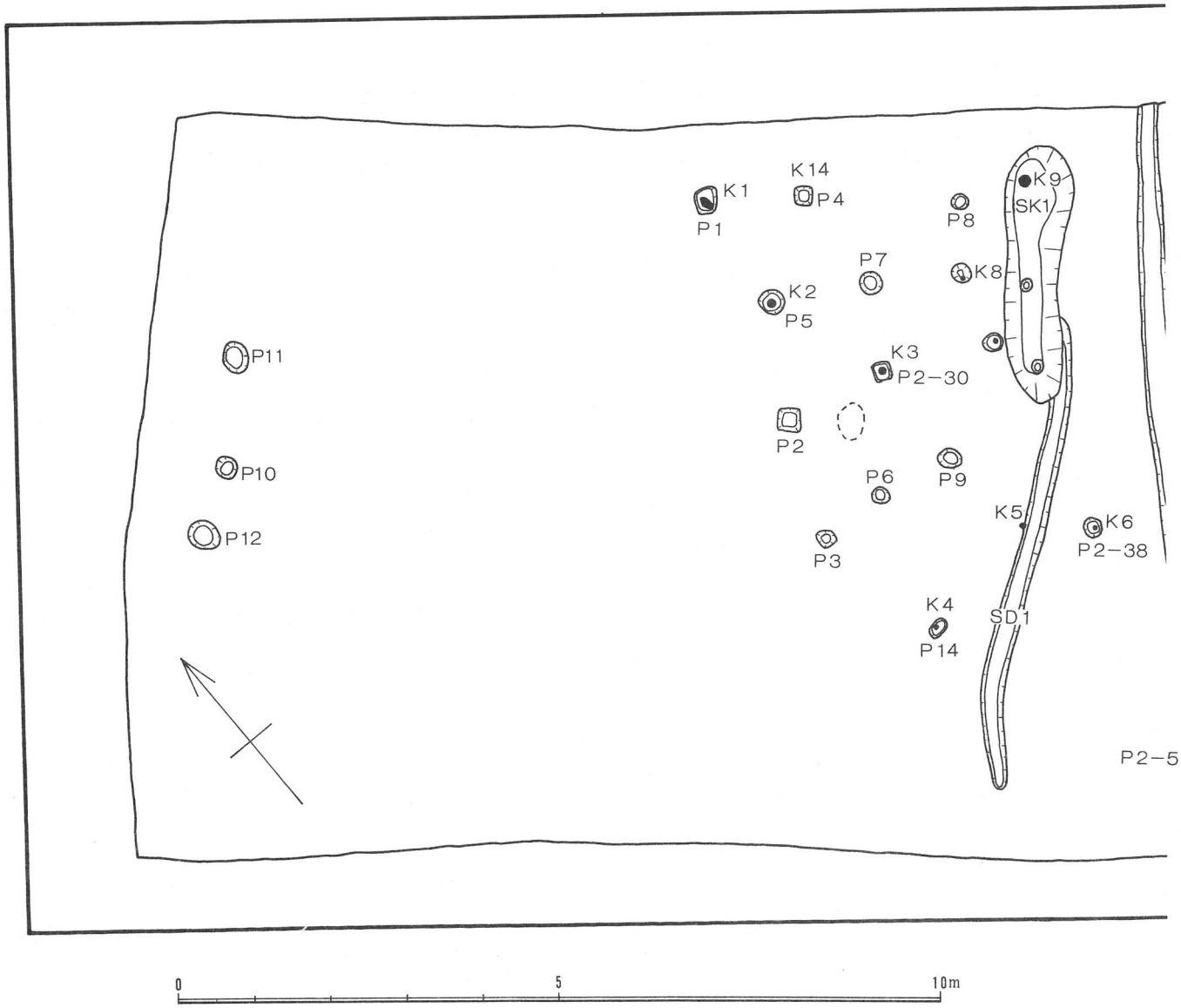
ＳＫ１　　やや“く”の字形をなす長楕円形の平面形をした土坑で、幅約94cm、長さ約320cm、深さ約28cmを測り、断面の形状はＬ字形を呈する。土坑東端の北側に、杭（Ｋ９）がある。土坑内より、庄内式土器と布留式土器が混在して出土した。

土坑の性格は不明である。

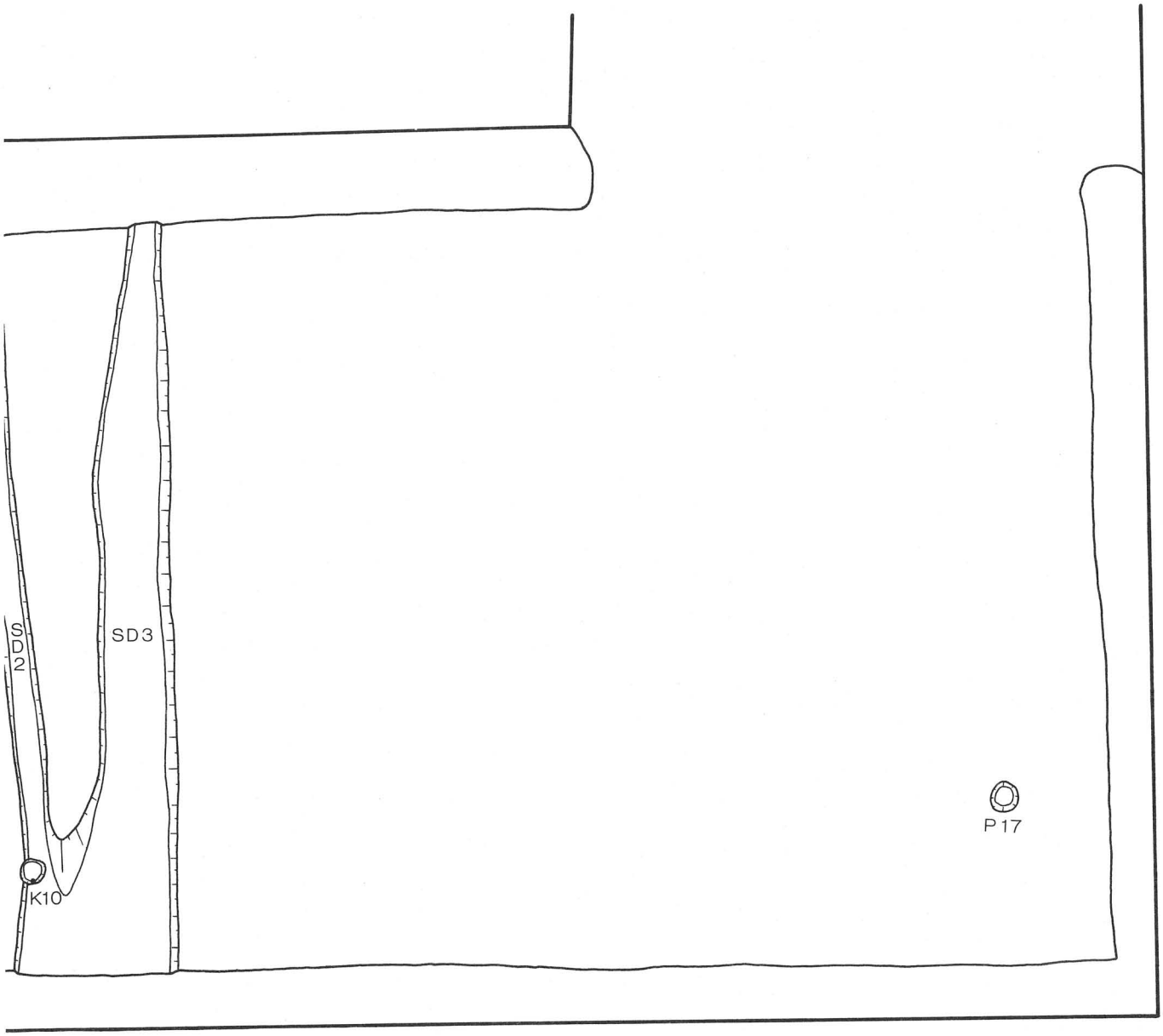
（ピット）

第１遺構面で検出したピットは合計17を数えるが、その形態は円形、楕円形、方形、長方形とまちまちであり、共通した並び方も認められず、このピット群の性格は不明である。ピット内より遺物の出土したものは、Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ６、Ｐ７、Ｐ８、Ｐ９、Ｐ10、Ｐ12の計11を数え、出土遺物は土師器の甕の胴部の破片が多かった。時期的に見ると、胴部外面に粗い叩きを施す甕から、布留式の甕まであり、その他に桃の種子などが出土している。最も深いピットはＰ６で、25.5cmを測る。

この他に、杭を有するピットが３つあった。



第11図　第１遺構面遺構実測図


SD2
SD3
K10
P17

（杭）

杭群もピット群と同様、相互の関連性は不明である。

杭の形状で一番多いのは丸木杭で、Ｋ１、Ｋ２、Ｋ３、Ｋ４、Ｋ５、Ｋ６、Ｋ９、Ｋ11の計８本を数える。

Ｋ１は直径10cmを測り、第１遺構面より約20cm埋っていた。

Ｋ２は直径10cmを測り、先端を斜めに切っており、第１遺構面より12cm埋っていた。

Ｋ３は直径15cmの半割りの丸太材で、第１遺構面より44cm埋っていた。

Ｋ４は直径５cmを測り、先端を削り、第１遺構面より24cm埋っていた。

Ｋ５は直径７cmの丸太材、第１遺構面より16cm埋っていた。

Ｋ６は直径５cmの丸太材で、先端を削り、第１遺構面より35cm埋っていた。

Ｋ９は直径10cmの樹皮をかぶったままの丸太材で、第１遺構面より55cm埋っていた。

Ｋ11は、Ｋ４、Ｋ６と同一の形状であり、この３本はおそらく同一時期に打ち込まれたものと思われる。Ｋ11は、検出状況からみて、さらに上層より打ち込まれたものと考えられ、したがってこの３本の杭は新しい時期のものであろう。

この杭群の性格としては、この遺構面が汀線で、後に水没していると考えていることなどから、浜辺で小舟を係留する杭、あるいは魴の一部などの推測もなされるが確証はなく、用途不明として保留しておきたい。なお、同様の杭群は、第２遺構面からも検出されており、時期的にも第１遺構面と大差無いものと思われることから、杭群の性格については合せて検討されたい。

（２） 第２遺構面

第２層の上面が第２遺構面で、この面も第１遺構面と同じく南東方向にだらだらと下る。検出した遺構は、溝１条、土坑８個所、ピット54個所、杭９本であるが、この内杭は、先にも述べたように第１遺構面の杭群と同一のものと考えるべきであろう。

（溝）

ＳＤ２－１　幅85cm、深さ35.5cm、長さ約４ｍ弱を測り、断面の形状はＶ字形を示す。溝内からは、布留式土器が少量出土したほか、溝の底から火鑽臼や木片が出土している。

（土坑）

ＳＫ２－１　北側排水溝をバックホウで掘削中に壁面で確認されたもので、この時点で楕円形をした平面の約半分が認められた。平面の長径は約160cm、深さ28.6cmを測り、底部の平らな擂鉢状をなし、布留式土器新段階の土器がまとまりをもって出土した。

ＳＫ２－２　長軸164cm、短軸52cmの瓢箪形をした土坑の中に、長径64cmのピットが入るような形で検出されたが、互いの先後関係は不明である。深さは土坑が24.2cm、ピットが33.5cmで、埋土は黒色の有機質土である。土坑内より、布留式土器、土錘、種子などが出土したが、土器には型式幅がある。

ＳＫ２－３　直径約170cmのやや変形した円形で、深さ10.9cmを測る。埋土は暗青灰色シルトで、土器片が１点だけ出土した。

ＳＫ２－４　ＳＫ２－１同様、北側排水溝掘削中に確認された。幅54cm、深さ17.6cmを測り、隅丸長方形をする。埋土は黒灰色土で、布留式土器が７、８点出土した。

ＳＫ２－５　長軸96cm、短軸74cmの不整形な惰円形で、深さ7.5cmを測る皿状の窪みで、埋土は暗青灰色シルトである。唯一、遺物の出土しなかった土坑である。

ＳＫ２－６　西側の排水溝で切断され、全体の形状は不明であるが、一辺約110cm、深さ6.4cmの浅いＬ字形の落ち込みを示す。遺物は土器が出土した。

ＳＫ２－７　東側の排水溝で切断されているが、現状では直径58cmの円形土坑と推定され、深さ11.9cmを測り擂鉢状をなす。庄内式古段階の壺、高杯、器台の破片が一括出土した。

ＳＫ２－８　ＳＫ２－７と同様、東側の排水溝で切断され、現状は半円形であるが、直径68cmの円形土坑と推定され、深さ24.2cmを測り擂鉢状をなす。出土遺物は庄内式土器新段階のもので、壺の破片が少なくとも２個体以上あり、他に甕も共伴する。

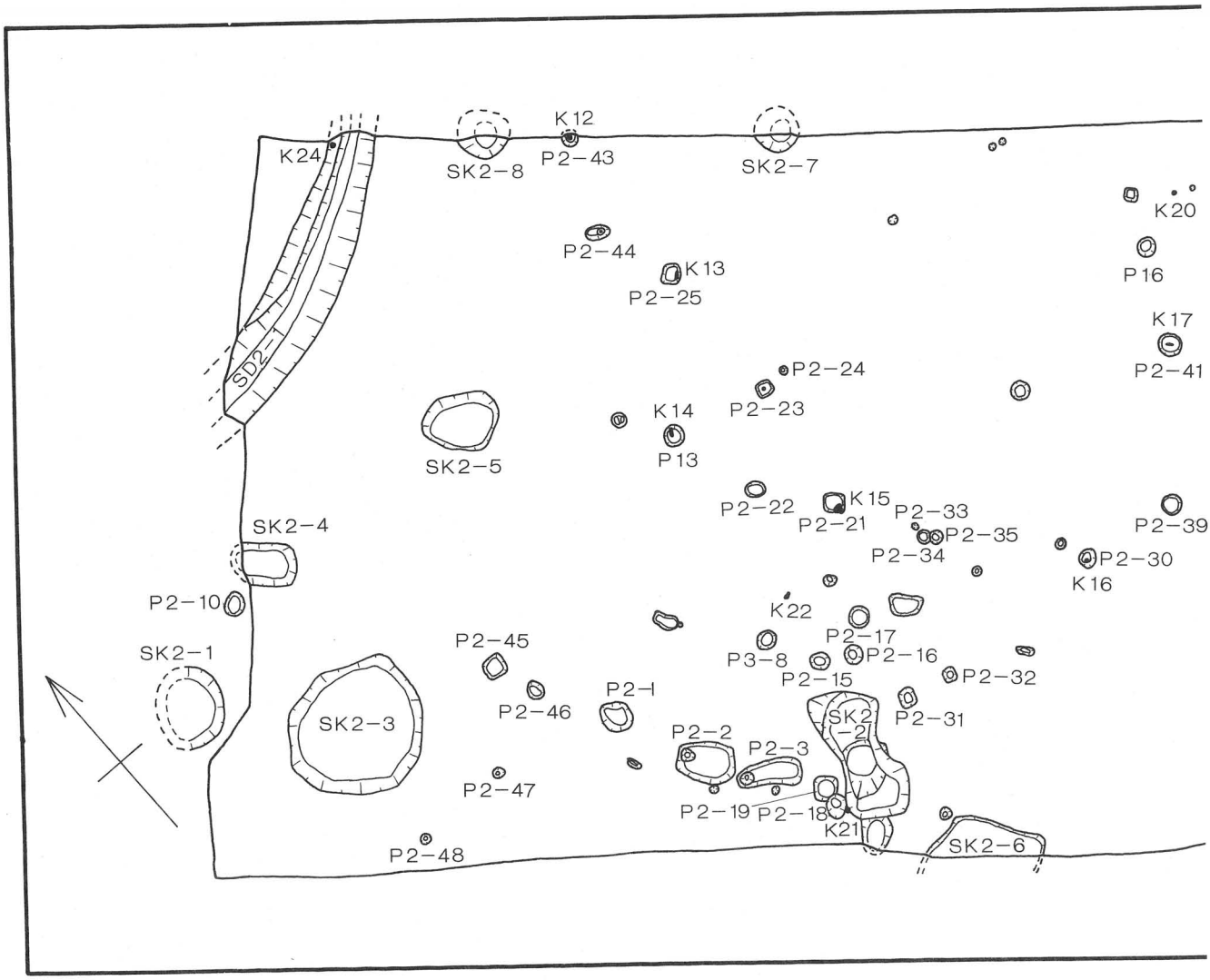
（ピット）

ピットは、第１遺構面で確認されたものをも含めて総数54を数えるが、第２遺構面で出土したものは合計49である。この第２遺構面のピット群は、第１遺構面のピット群と同様に、法測性をもった並びは認めがたく、ピット相互の関連性は不明である。ただ、ピット内に杭を有するものは計15を数える。この内、第１遺構面で杭だけ認められ、第２遺構面で新たにピットが確認されたものは、Ｋ３（Ｐ２－30)、Ｋ５（Ｐ２－36)、Ｋ６（Ｐ２－40)、Ｋ８（Ｐ２－42)、Ｋ10（Ｐ２－52）の計５を数える。これと、新たに第２遺構面で出土したＫ12（Ｐ２－43)、Ｋ13（Ｐ２－25)、Ｋ15（Ｐ２－36)、Ｋ16（Ｐ２－38)、Ｋ17（Ｐ２－41）の計５を加え総計11の杭は、ピットの検出されたこの第２遺構面から掘り込んで打ち込まれた可能性が考えられる。なお、ピット内より出土した土器はいずれも小破片であるが、Ｐ２－１、Ｐ２－２、Ｐ２－３、Ｐ２－５、Ｐ２－６、Ｐ２－７、Ｐ２－10、Ｐ２－11、Ｐ２－13、Ｐ２－14、Ｐ２－15、Ｐ２－20、Ｐ２－21、Ｐ２－22、Ｐ２－24、Ｐ２－25、Ｐ２－26、Ｐ２－27、Ｐ２－28、Ｐ２－30、Ｐ２－31、Ｐ２－35、Ｐ２－37、Ｐ２－38、Ｐ２－39の計25を数える。

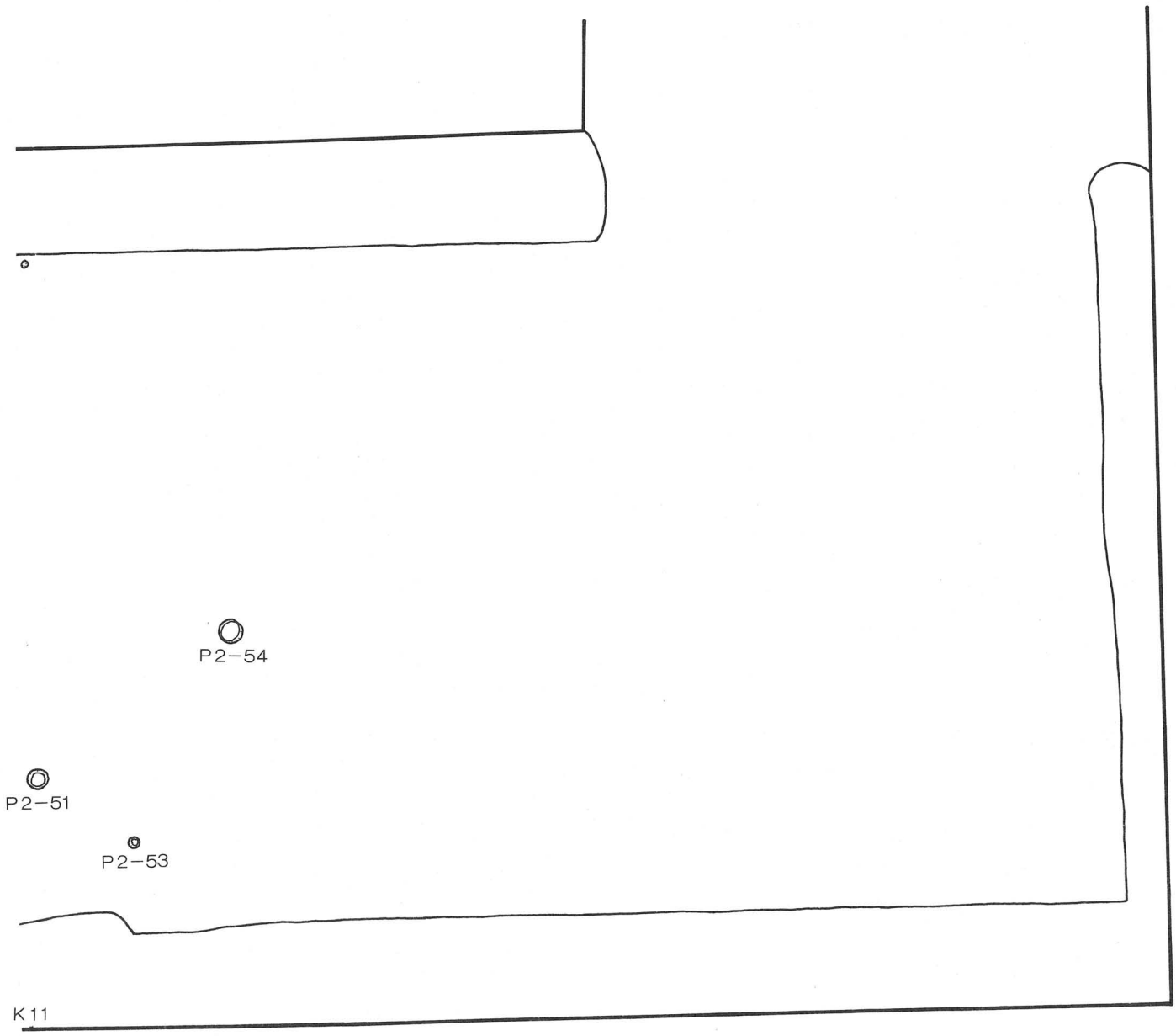
（杭）

第２遺構面で確認された杭は８本あり、第１遺構面で確認された杭をも加えると総数20本にのぼる。このうち（ピット）の項で述べた杭11本は、第２遺構面から打ち込まれた可能性が考えられるが、新たに出土した杭の形状は次のとおりである。

Ｋ12は直径12cmの丸太材で、下部に幅２cmほどの溝が彫られている。第２遺構面よりやや斜めに58cmまで埋っていた。



第12図　第２遺構面遺構実測図


P2−54
P2−51
P2−53
K11

Ｋ13は幅11cm、厚さ３cmの板材で、先端をやや斜めに切り、第２遺構面より30cmまで埋っていた。

Ｋ14は幅９cmの板材で、第２遺構面より15cmまで埋っていた。

Ｋ15は幅13cmの板材で、斜めに傾いた状態で第２遺構面より13cmまで埋っていた。

Ｋ16は直径７cmの丸太で、第２遺構面より17cmまで埋っていた。

Ｋ17は一辺５cmの角材で、先端を尖らせており、第２遺構面より18cmまで埋っていた。

Ｋ18は直径５cmの丸太で、先端を削り、第２遺構面より10cmまで埋っていた。

Ｋ19は、杭の先端のみが５cm残っていたのみである。

Ｋ20もＫ19と同様であった。

このうち、Ｋ17、Ｋ18、Ｋ19、Ｋ20の４本は、第１遺構面のＫ４、Ｋ６、Ｋ11と同一のものであり、この７本の杭はすでに述べたように新しいものと考えてよいだろう。

（３） 第２遺構面下半

第２遺構面下半は、第２層を約20cmほど削り込んだ際に遺構が検出されたために名付けた（第２遺構面で未検出のものが、掘り下げた際に明確に検出された可能性が強いが、検出状況を優先してこの名称を与えた)。

遺構は、ピット４個所と杭４本であるが、このうち杭については、その残りが杭の先端部しかないところから、第１、第２遺構面の杭群と同一のもので、しかも残りの悪いものがようやくこの面で検出されたものと考えられる。なお、杭にピットは伴っていない。

ピットも第２遺構面での見落しの可能性もあるが計４が検出されたが、ピット相互に規則性はない。Ｐ３－５からは、埋土中から土器片が出土した。

（４） 第３遺構面

第３遺構面は、標高82.90ｍ前後の第３層上面で検出された遺構面で、流木と思われる自然木が多く出土した。流木はほぼ並んで出土することから、この遺構面が形成されていた時期、汀線もしくは湖辺の水面直下のような状況ではなかったかと推定している。

第３遺構面からの土器の出土は、調査区域のほぼ中央で検出した土坑中からである。

（土坑）

ＳＫ３－１　長さ約160cm、幅72cm、深さ18.8cmのやや“く”の字形に折れ曲った長楕円形をした皿状の窪みで、土坑というより落ち込みと考えた方が妥当である。なお埋土中から、庄内式～布留式各時期の土器が出土した。

（杭）

Ｋ25が検出されたが、これは上層の杭群と同一のもののうち、杭上半の残りの悪かったものの残りであろう。

第13図　第１遺構面・第２遺構面ピット検出状況合成図

（５） 第４遺構面

第４遺構面は、標高82.70ｍを中心とした高さで検出された遺構面で、確実な遺構としては、調査区域の西側の端で幅42cm、深さ12.4cmを測り、断面がＬ字形をした溝（ＳＤ４－２）がある。この溝（ＳＤ４－２）の両端は鋼矢板と水溜めで切断されており、検出した長さは現状で3.78ｍで、埋土は砂であった。

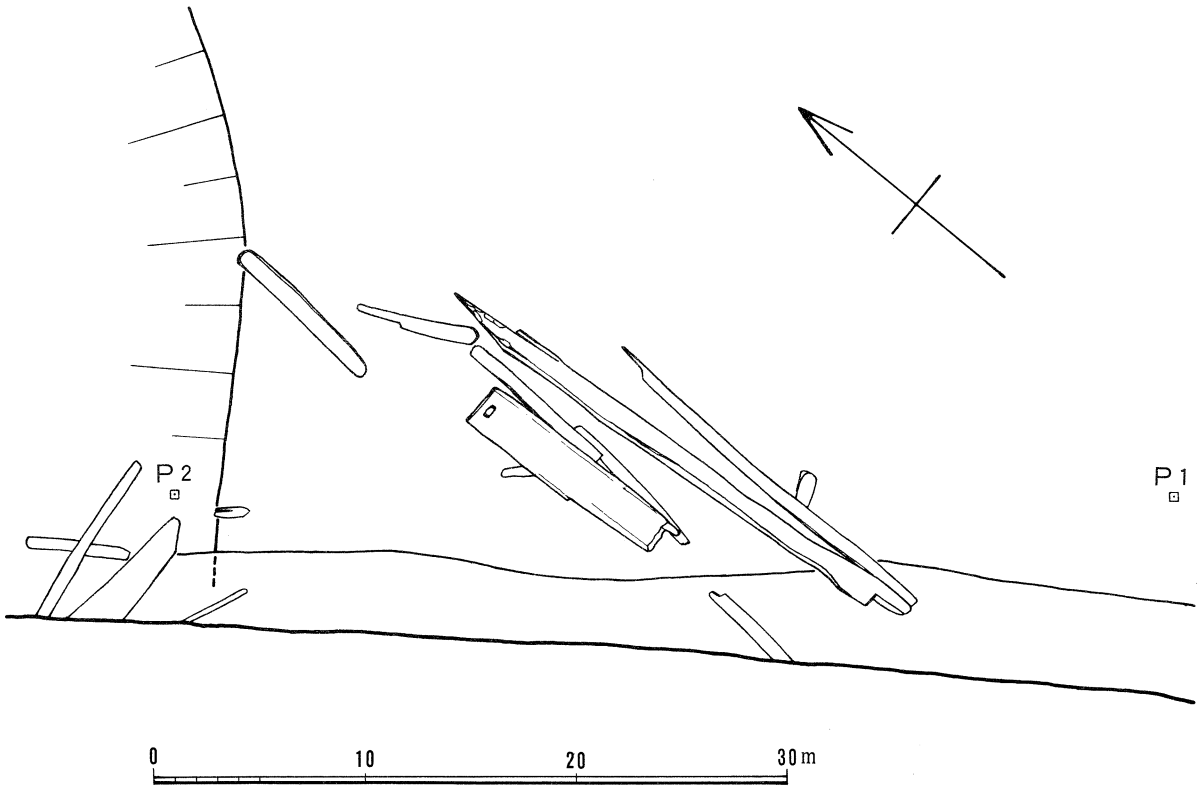
その他、溝（ＳＤ４－１）があるが溝というより落ち込みで、自然流路のようなものか、あるいは旧地表面の窪地であろう。なお溝中からは10数片の古式土師器が出土している。また、第４遺構面より、角材状の加工木が３本出土した。

（６） 第５遺構面

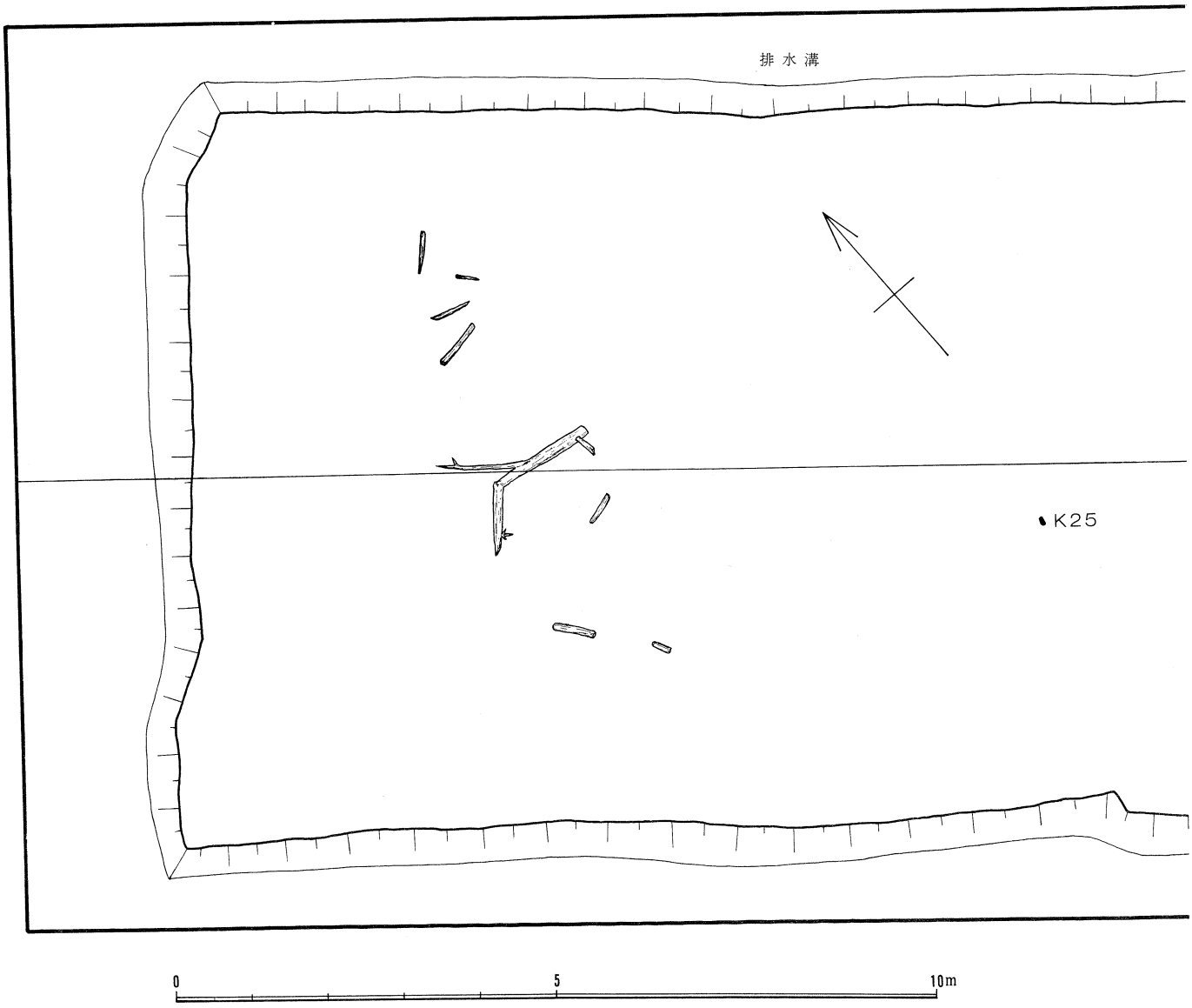
第５層上面では遺構は見出せず、第５遺構面は第６層の上面で検出された。第６層は、標高82.40ｍ前後から現われ、第６層の暗灰色粘質土層を掘り込んだ溝（ＳＤ６－１）が検出された。

溝（ＳＤ６－１）は、幅は最も狭い部分で1.36ｍを測り、一部は溝の肩が崩れたように広がる。深さは29.4cmで断面の形状は舟底形を示す。溝の肩には、かっての流れを示す砂層がブロック状に堆積し、その下より、桜の樹皮で綴じられた隅丸方形をした木製品や、石包丁形木製品などが出土した。また、溝の底から弥生時代後期後半の鉢が出土している。

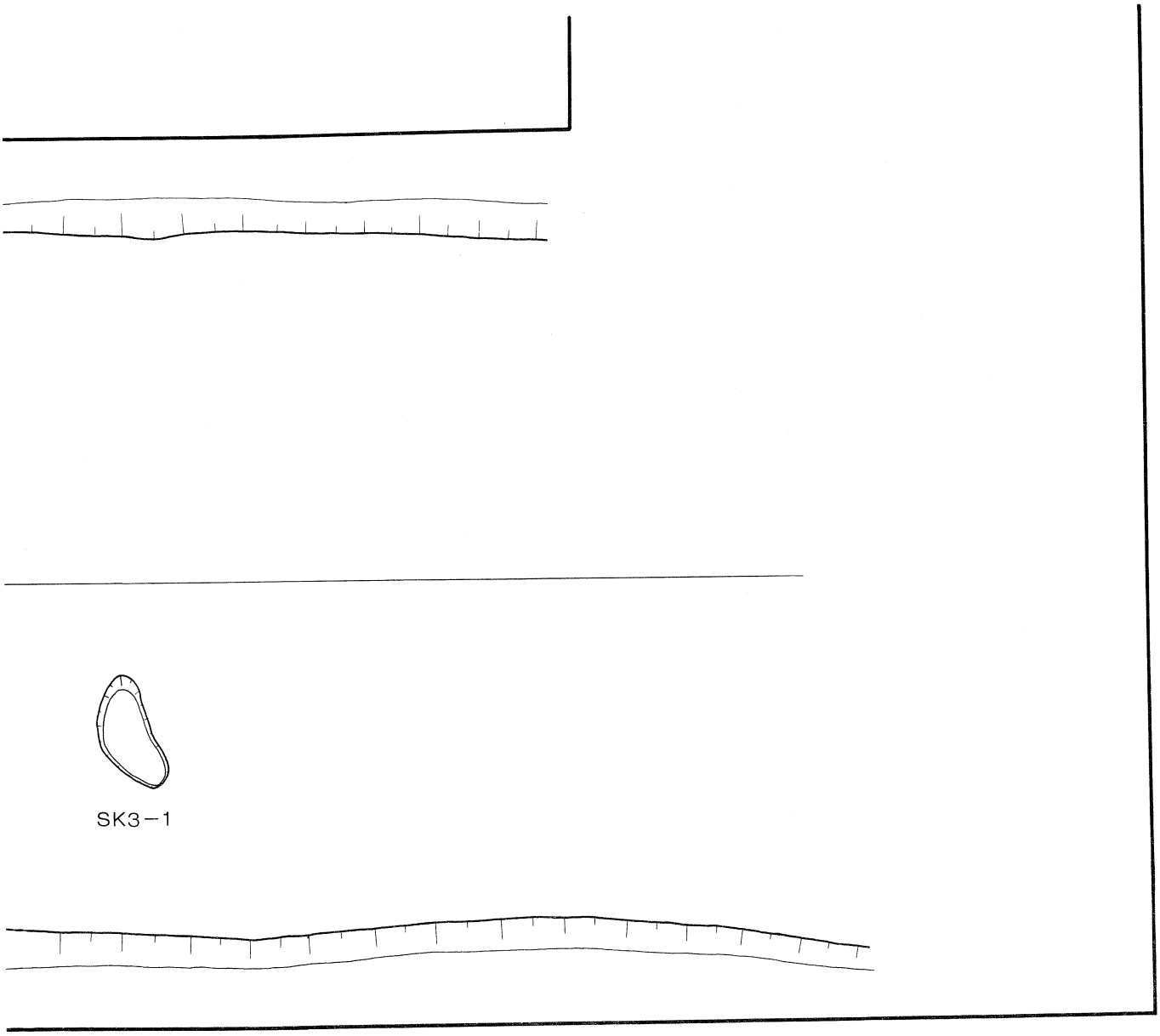
なお、溝より約２ｍ離れた地点で、建築材かと思われる木製品の一括出土を見ている。その出土状況は、木製品がほぼ平行に並んだ状態であった。

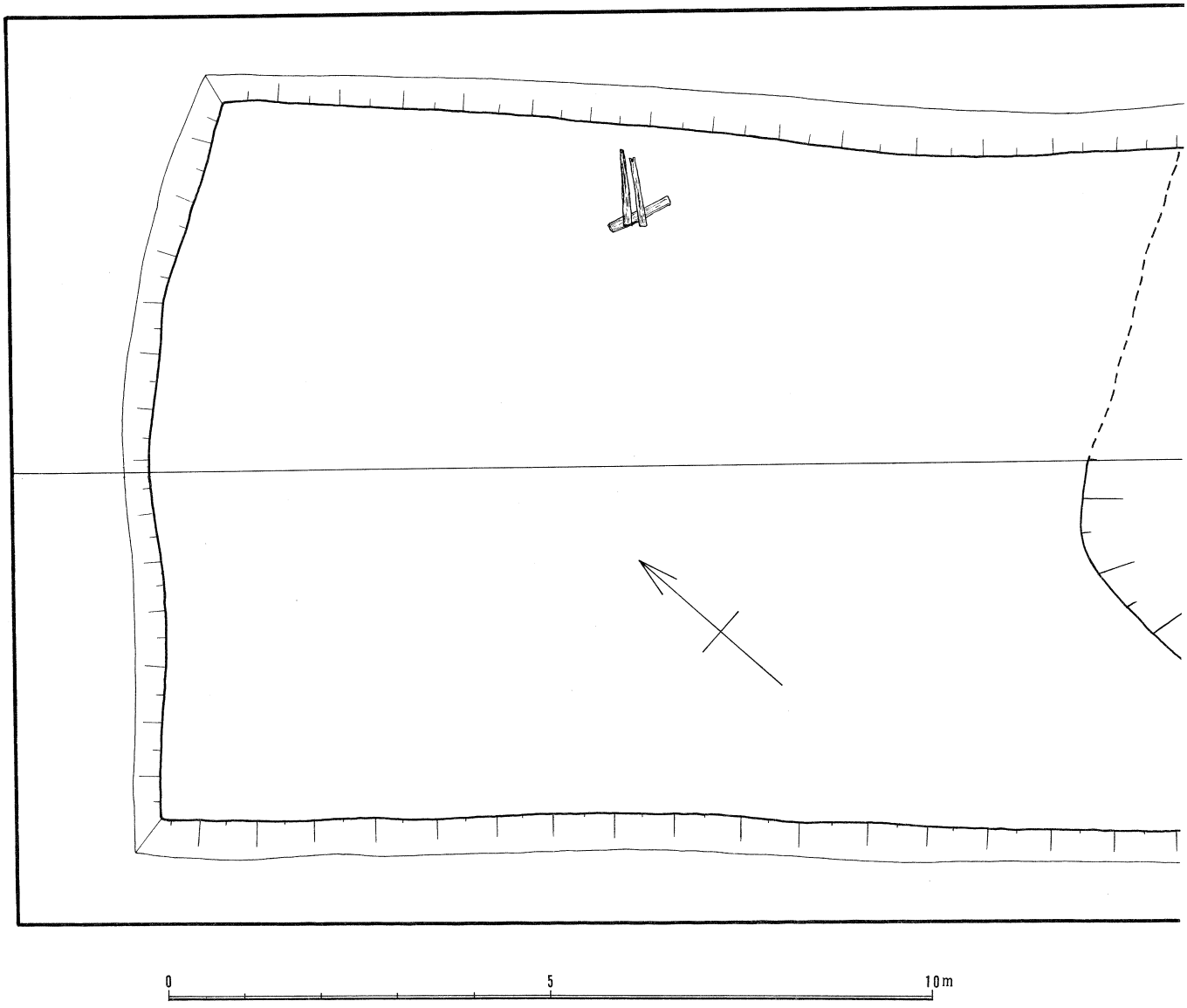


第14図　第５遺構面木製品出土状況

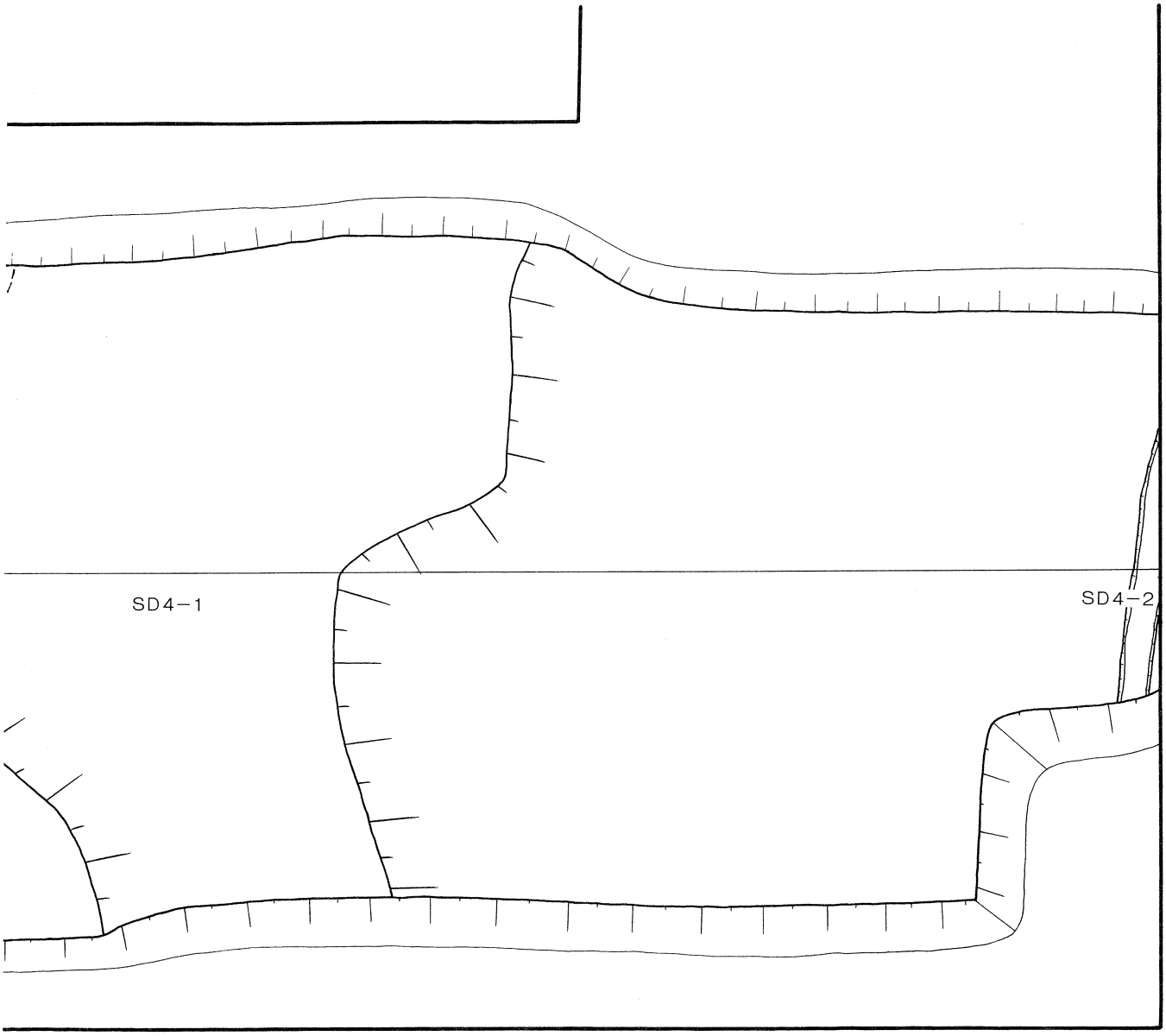


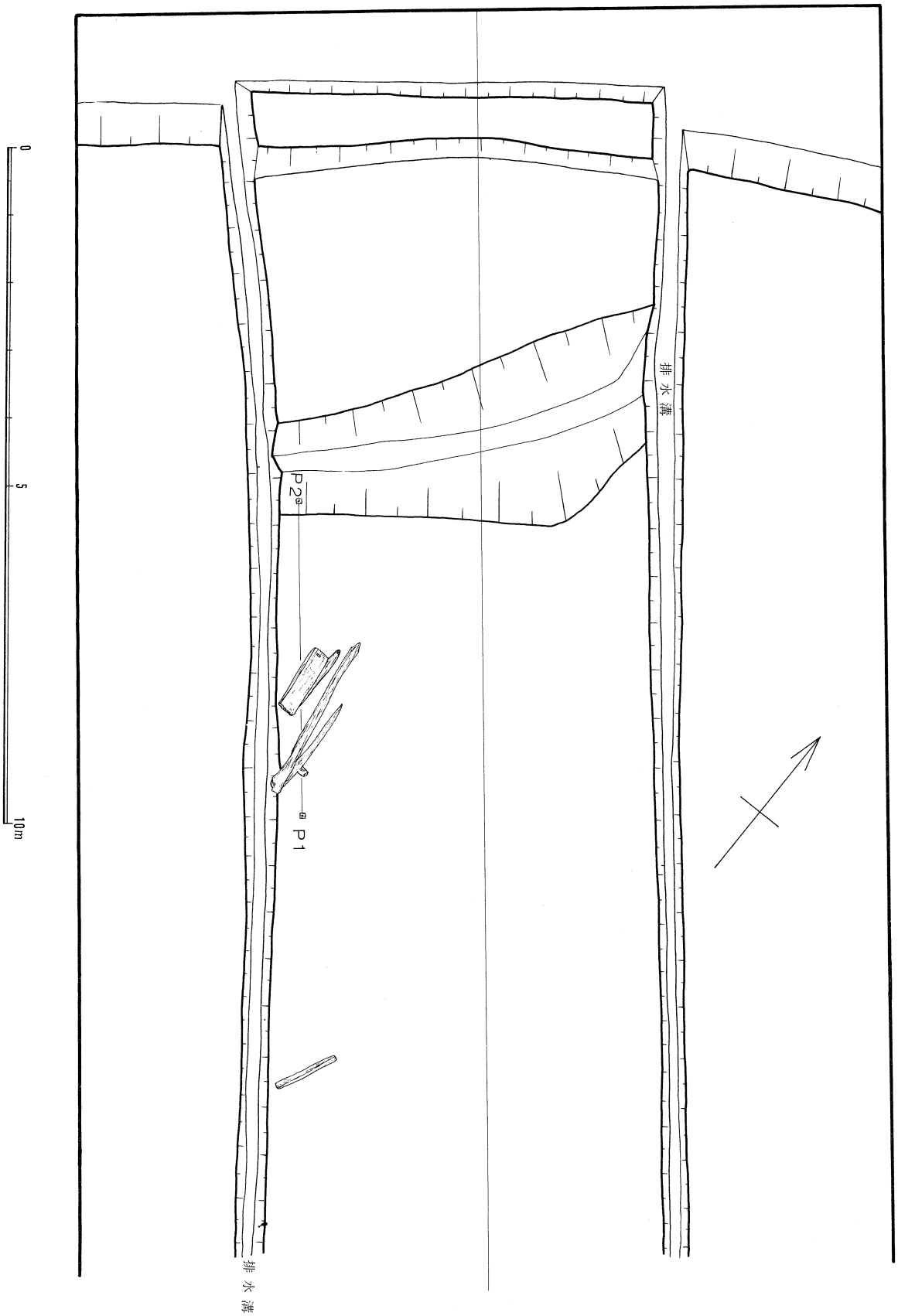
第15図　第３遺構面実測図


SK3－1

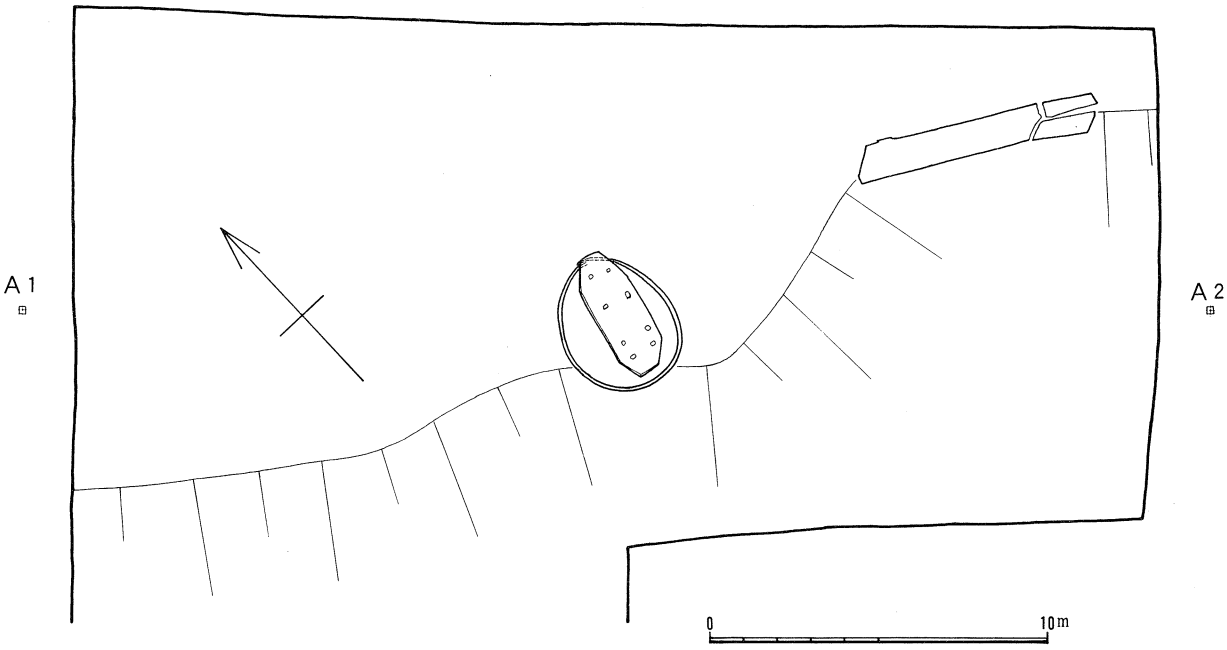


第16図　第４遺構面実測図


SD4−1
SD4−2



第17図　第５遺構面実測図



第18図　第６遺構面田下駄出土状況

（７）　第６遺構面

第７層上面では、基本土層でみたように第７層を掘り込んだ落ち込みを平面的に確認することはできなかった。

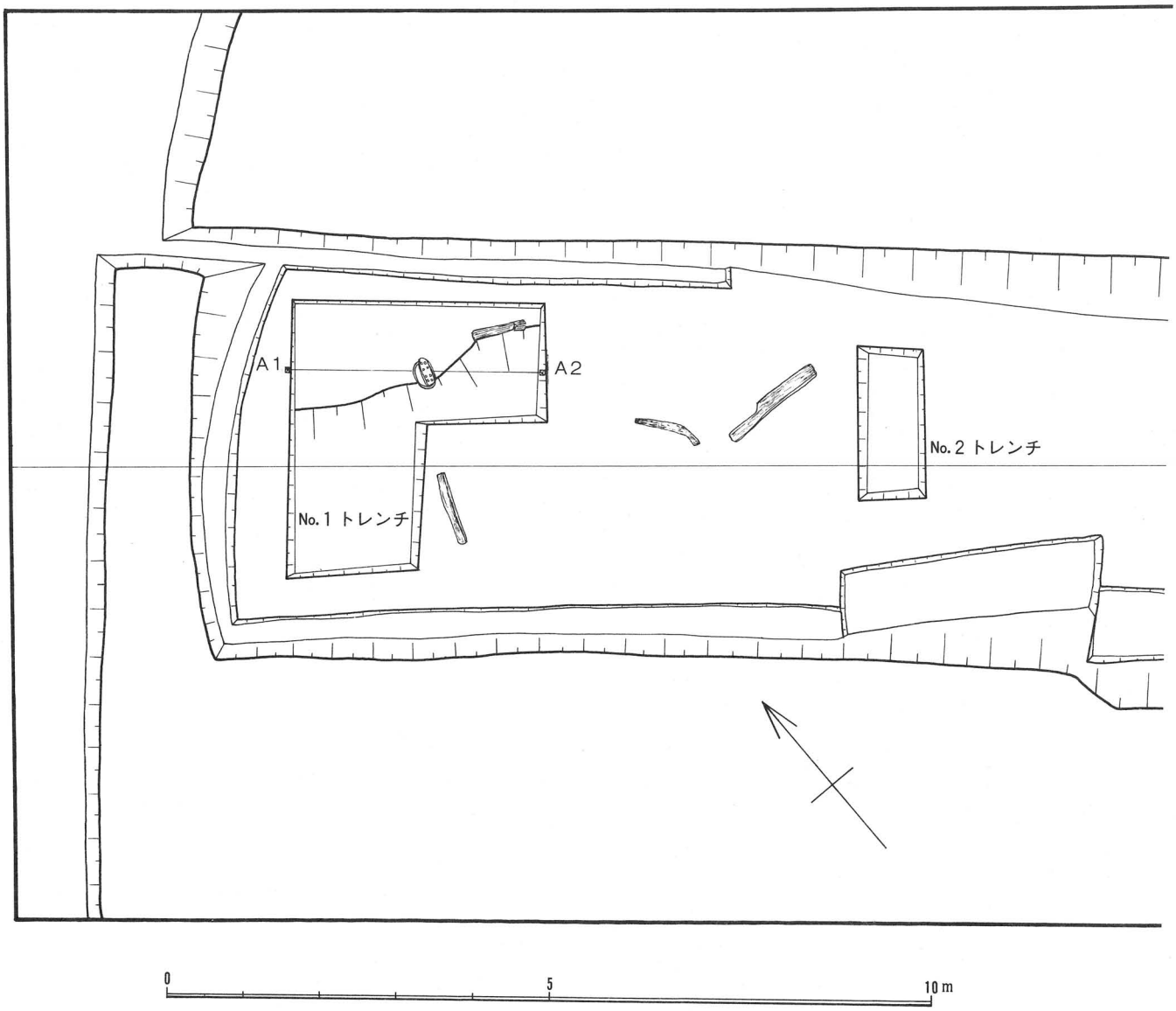
第８層は植物遺体の堆積層であり、この中に木製品が認められる以外、遺構は確認できなかった。

第６遺構面は、この第８層の下の第９層で確認された。この第９層上面は、現在の琵琶湖の平均水位下３ｍ地点になるためか湧水が激しく、部分的なトレンチ調査しか行えなかった。しかし、調査の結果は、第８層までが琵琶湖に向って緩い傾斜を示すのに対し、それとは反対の方向に落ち込んで行く。この落ち込みの肩の部分は標高81.34㎝、トレンチ端の最深部で81.01ｍを示す。この落ち込みの肩に乗って、輪樏をつけた田下駄が、第８層に食いこむような形で出土した（第18図）。この落ち込みは自然地形と考えられる。

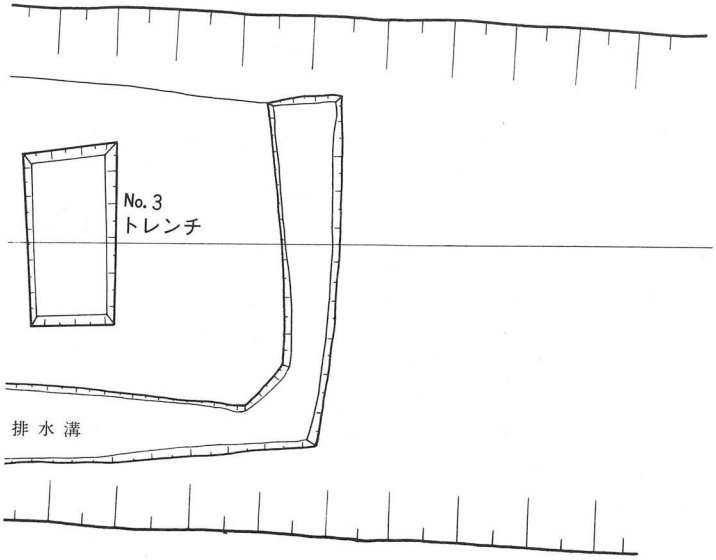
第６遺構面の時期については、出土土器が無いため確定しがたいが、田下駄の形式、第５遺構面の溝（ＳＤ６－１）より出土した弥生土器などからみて、弥生時代後期後半を遡るものではないと推定している。

（８）　小　結

以上、各遺構面についてみてきたが、各遺構面で検出された遺構は、人間活動の痕跡を示すものであるが、人間の生活そのものを示す遺構ではない。言いかえるなら、集落跡そのものではなく、集落跡周辺の生活面を確認したに留まった。



第19図　第６遺構面実測図


No. 3
トレンチ
排 水 溝

第６章　第二次調査（新川水路改修）の結果

１．基本土層

第二次調査地点の基本土層は、第一次調査の基本土層とは異なり、表土より無遺物層と考えられる砂礫層までが３層に分層できる。第４層の砂礫層は湧水が激しく、ボーリングの結果では１ｍ以上におよび、遺物は包含しないようである。

〔第１層〕

現在の汀線をなす灰褐色砂層も表層とし、第２層のスクモ層上面までを第１層とした。

この第１層を細分すれば、表層の下に褐灰色砂質土が入り、樋門から約10ｍほど湖岸側からは、この間に青灰色粘質土が入る。これらをまとめて第１層としてとらえたのは、分層した各層に遺構が見出せなかったことと、遺物についても層位的にはっきりと分離できるものではなかったからである。つまり、各層の違いは堆積状況や地点によって差異が生じたもので、基本的には同一のものと考えられる。

なお、第１層中より出土した主な遺物は、曲物、板材、漆器椀など木製品で、土器はほとんど出土していない。おそらく中世以降、近・現代に至る堆積であろう。

〔第２層〕

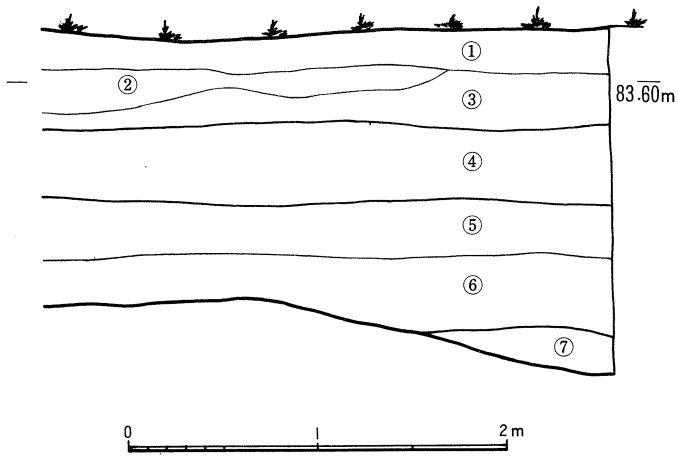
第２層は黒褐色のスクモ層で、調査区域の南側に向って緩やかに傾斜している。

遺物の出土は、第２層の上部ではほとんどなかったが、８Ｎ地区でＴＫ23型式の須恵器の坏蓋が出土している。また、第２層下部から第３層直上にかけては遺物の出土量も増え、布留式新段階の土器が出土したが須恵器は共伴していない。

〔第３層〕

第３層は、調査区域の中央部付近で舟底状に落ち込み、それより北壁面に向って非常に緩やかに上り、その接点で肩を作っている。

第３層は、基本的には褐灰色粘土層であるが、第２層直上ではスクモが混り、第３層下部では暗褐灰色粘土層となる。また、舟底状の落ち込みの肩より北壁側では、や



第１層 ①灰褐色砂層
②青灰色粘質土層
③暗青灰色砂質土層
第２層 ④暗褐色スクモ層
第３層 ⑤褐色粘土層（若干スクモ混り）
⑥暗褐灰色粘土層
第４層 ⑦砂礫層

第20図　標準土層図

や礫混りとなる。

出土遺物は、土器、木製品とも多様でしかも量的に最もまとまりをもつ。土器は、庄内式から布留式にかけてのもので、この両者を層位的に分離することはできなかった。

以上、第二次調査の基本土層について記したが、この地点の土層の特徴としては、第一次調査の地点の上層部ではみられなかったスクモ層が検出されたことである。第一次、第二次調査の両地点の層位の関係を出土土器からみれば、共に第３層に対応するのではないだろうか。

最後に、第二次調査では鋼矢板による締切りを行わなかったため、第４層の砂礫層を通る地下水の量が非常に多く、湧水のため第３層の調査が完全に行えなかったことを記しておく。今後、湖岸での発掘では、鋼矢板の使用によって始めて、遺構や遺物の出土状況をとらえることができることを反省の材料とすべきであろう。

２．遺物出土状況

明確な遺構は無く、01地区に数本と、それより湖岸にむかっては、わずか１～２本打ち込まれた杭が検出されただけである。

遺物の出土状況については比較的まとまりがあり、木製品など木質のものは、01～４地区にかけて集中するが、東に行くにつれて出土状況にまとまりがなくなってくる。ただ、東側でも８Ｓ地区の拡張部では、まとまって出土している。

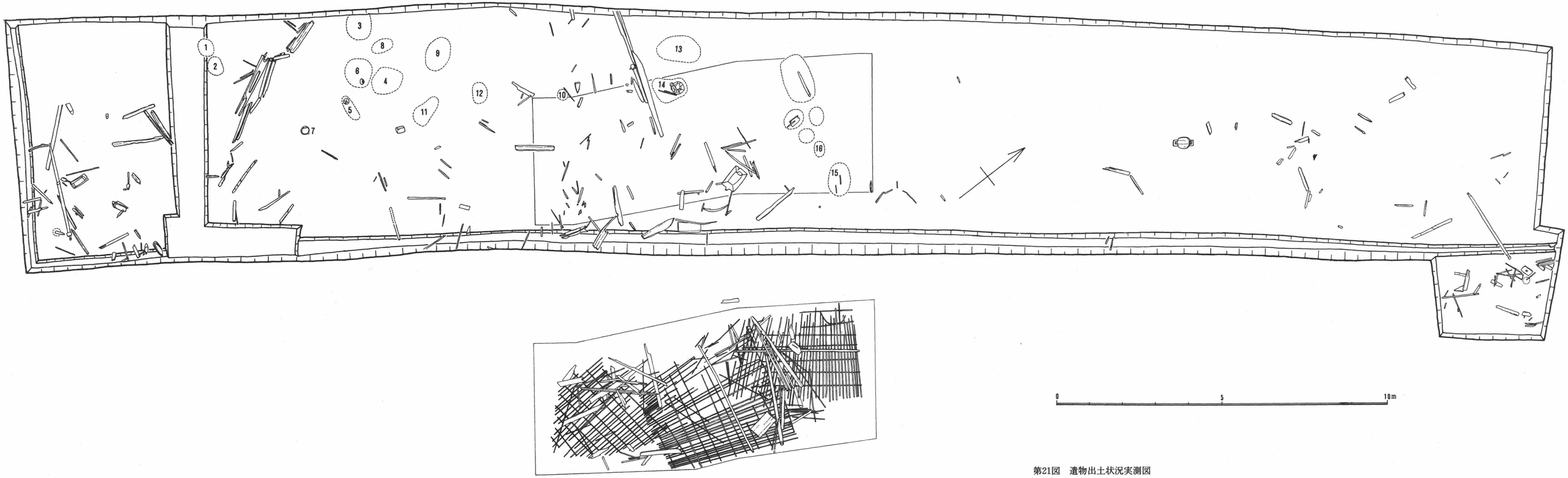
木製品等の出土状況の特色として、１Ｎ地区でみられる出土状況に代表されるように、北から南にむかって――高い方から低い方に向って、流れるような状況がみられる。この状況から判断すれば、湖辺に浮遊していた木製品が埋没した状態ではなく、おそらく微高地上から人為的に廃棄されたか、微高地上で朽ち果てたものが、自然に低い方向に向って流されたかであろう。注目すべきものとして、４Ｎ～３Ｓ地区にかけて大形の組物が３点重なりあって出土した。組物は、復原した状況はあたかも藤棚のような形をしている。組物は、中心に直径７㎝程、長さ3.7ｍの太い棒を１本用い、直径数㎝程の細長い棒を格子に組んでいる。各棒の先端は加工されており、縄等は遺存していないが、元来は緊縛されていたものであったのだろう。

木製品がまとまりをもった出土状況を示しているにもかかわらず、大形の組物を除いては、組合せによって形作られていた木製品の使用時の姿を推定できるような状態をとどめているものはまったく認められず、棒や板の加工から本来は組合せによって作られた木製品の部材であることが推定できるのみである。同じことは、形態のよくわかる鍬や鋤などの農具でも同様で、身と柄が分離して出土しており、しかもその各々が一本化するものではない。琴についても同一地点で２点出土しているが、共に破損した琴板であり、共鳴箱についてもそれらしいものは出土していない。琴板も破損したうえ同一個体でない点などより考えると、廃棄後かなり時間が経って、破

損、分解して現在の出土状況になったことが推察できる。

木製品は湖岸に近く地下水の影響で比較的よく遺存しているのに対し、部材と部材を縛っていた縄や紐のようなものは、木材にくらべて腐植が早いのか、まったくといって良いほど認められなかった（唯一例外として、第一時調査で出土した田下駄には、出土時にかろうじてそれらしいものが孔の一部に認められた—ＰＬ．16下）。

土器も木製品と同様にまとまりをもって出土しており、特に１Ｎ、２Ｎ、４Ｎ４Ｓ地区では器形を復原できる土器が多い。各土器群ごとにみると、大きく時期的に近いものが多く、１Ｎ地区では布留式、１Ｎから２Ｎ地区にかけて庄内式、４Ｎ、４Ｓ地区では布留式でも新しい段階のものを中心としている。これら土器群も木製品と同様に、廃棄された時の状況を示しているのであろう。良好な一括資料というべきではないが、本遺跡での土師器編年を考える際の参考資料となろう。



第21図　遺物出土状況実測図

第7章　出土遺物

1．土　器

遺物包含層中より出土した土器については、近世の遺物を含む第１層出土のものを除き、形態の復原可能なものはほとんどを実測し図示した。その内、口径の残度が1/10以下のものについては、観察表に小破片として注記している。ただし、第一次調査の第３層以下の出土土器については、１例を除き体部の破片のみで図化できなかった。

第一次・第二次調査で出土した土器の大半は、庄内式と布留式の土器である。第一次調査では層位的に土器をとりあげ、さらに層では区分できないが、出土状況で区分できる場合には、第２層直上、上面というように高さで機械的に層を分けて意図して土器をとりあげた。しかし、各層には、庄内式、布留式の各型式の土器が混在するため、層位的に編年を細分するまでに至らなかった。このことは第二次調査の土器群でも同様なことが言え、まず型式的な分離を行ったうえで、比較的時期的にまとまりがあるのかどうか改めて検討しなければならなかった。そのためここでは、出土状況を考慮に入れつつ、畿内での編年を軸に、森浜遺跡に限って庄内式を古・新、布留式を古・新と各々二段階に仮称して区分し、型式的に大別を試みた（第８章　２．土器の時期）。

庄内式、布留式の大別よりみた、各層、各遺構の状況は次のとおりである。

まず第一次調査では、第２層直上の土器と第２層上面の土器とを比較すると、第２層直上では布留式新段階の土器が多く認められるのに対して、第２層上面では新段階の土器はきわめて少なく、むしろ古段階の土器と庄内式土器で占められる。おそらく、第２層上面の新段階の土器は、生活面の窪みなどに上層の土器が落ち込んだりして取り残しが混入した可能性が強く、第２層直上と上面の間に時期的な一線がひける。

第一次調査の遺構より出土した土器のうち比較的まとまりのあるものについてみると、ＳＫ2-1は、若干庄内式の土器片が混入するが、布留式新段階の土器 ── 主に甕で占められる、本遺跡では良好な一括資料である。それに対してＳＫ2-2は、ＳＫ2-1より布留式としては古相の土器が混るが、一括資料として良好なものではない。

ＳＫ2-7、ＳＫ2-8は、土器の個体数は少ないが、庄内式の一括資料として注目されよう。ＳＫ2-7は、伊勢湾系のパレススタイルの壺、高杯、器台からなり、庄内式古段階のものである。ＳＫ2-8は、口縁部を欠失するが体部が球形となる装飾の残る壺に、在地色が濃い、くの字状口縁をもつ甕が伴う。甕の口縁部には、畿内中心部の甕の影響が認められる。庄内式新段階のものと考えている。

次に第二次調査における土器群についてみてみよう。ただ、土器群とはいっても、１個体の土器が小さな破片になって広く散らばっているものもあり、個体数の少ないものもある。

土器群のうち、比較的型式的にまとまりのあるものは、１と２で、これと15、16も同型式の土器だけからなり、これらを布留式新段階としてとらえた。土器の個体数の多い４と６は、庄内式と布留式の混在するものであるが、両者の布留式には共通するものが多く、しかも１、２、15、16の土器より古い要素をもつことから、これらを布留式古段階としてとらえた。４、６の庄内式については、６に型式的にやや古いものも認められるが、その大半は庄内式新段階のものとしてとらえた。

以下、各土器群の土器について、庄内式と布留式に大別して提示しておく。

1　（布留式）810

2　（布留式）687、812

3　（布留式）729、730、686

4　（庄内式）716、758、762、769

　　（布留式）691、738、739、755、756、759

5　（庄内式）645

6　（庄内式）732、735、736、741、742、743、744、745、746、747、748、751、752、757、762、763、767

　　（布留式）733、737、749、753、765

7　（庄内式）652

8　（　？　）672

9　（庄内式）807

9　（庄内式）807

　　（布留式）805

10　（庄内式）806

　　（布留式）689

11　（庄内式）802、803

　　（布留式）692

12　（庄内式）804

　　（布留式）801

13　（庄内式）797、798、799、800

　　（布留式）773、794

14　（庄内式）791

（布留式）777、792、793、795

15　（布留式）649

16　（布留式）779、780、781、783、785、787、788、789、790

庄内式、布留式土器以外の土器については、第２層直上で古墳時代後期初頭、奈良時代、鎌倉時代の土器が少量混在するほか、第一次調査では第６層より１点弥生式土器が出土している。

鎌倉時代　土師器の皿で大小があるが、器高が低く扁平で、このタイプの皿としては最後の13世紀前半～中葉頃のものであろう。

奈良時代　高台付の坏身で、新しくとも平安時代前期を降るものではない。

古墳時代後期　須恵器は、田辺編年Ⅰ期後半のＴＫ23型式のもので、土師器は鉢（606、坏か）や鍋の把手（８）などが同じ時期のものであろう。

弥生式土器　第一次調査のＳＤ6-1より鉢の破片が出土している。受口状口縁の口縁部は直立気味で、端部は外方へ開いておらず、本遺跡の同種の甕や鉢の中では古い形態をしている。また、口縁部外面、肩部に刺突烈点文、胴部に波状文を施文するなど装飾性の高いことも、本遺跡例としては古い様相である。こうしたことから、第Ⅴ様式の範疇でとらえられるもので、その中でも後半のものであろう。

2．出土土器観察表

第３表　第一次調査出土土器

（第２層直上）

器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器小皿	1	口径　7.3 器高　1.3	口縁部はやや外傾する。底部は中央部が凹んでいる。	口縁部外面から底部内面にかけて横ナデ。底部は不調整。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　¼
	2	口径　7.9 器高　1.5	口縁部は外傾している。底部はほぼ平らである。	口縁部外面から底部内面にかけて横ナデ。底部は不調整。	色調　黄褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　⅛
	3	口径　8.8	口縁部は大きく開き、端部近くで内弯気味になる。	口縁部内外面横なで。	色調　白褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　⅛
須恵器坏身	4	口径　16.1	口縁部は大きく開く。	口縁部内外面ロクロナデ。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片
	5	口径　15.3			
	6	口径　10.2	高台は低く、底部の外周にめぐらす。	貼付高台、底部は不調整。	色調　灰色 胎土　精良 焼成　硬 残存　⅙
須恵器壺	7	口径　11.1	口縁部はほぼ直線的に開き、端部近くでわずかに内弯する。下半に２条の沈線をめぐらし、その間に波状文を施す。	口縁部内外面ロクロナデ。	色調　白灰色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片
土師器把手	8		器壁に対してほぼ水平に突出する。	8は手づくねである。9は部分的に刷毛が残る。	色調　8　淡褐色 9　赤褐色 胎土　1㎜位の砂粒を少し含む。 焼成　やや軟
	9				
土師器壺	10	口径　8.7	口縁部は大きく外反し、口縁端部は外傾面をなす。	口縁部外面横ナデ。口縁部内面篦磨き。頸部外面刷手。	色調　淡茶褐色 胎土　1㎜位の砂粒を含む。 焼成　硬 残存　⅙
	11	口径　14.0			
	12	口径　14.0	口縁部は大きく外反する。	12は口縁端部外面横ナデで、他の内外面は篦磨き。13は口縁部内外面刷毛後横ナデ。14は内外面横ナデ。	色調　14　淡白褐色 他は淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　12⅛、13¼ 14⅙
	13	口径　11.6			
	14	口径　12.8			
	15		口縁部はやや内弯ぎみに立ち上る。	内外面摩滅のため手法は不明。	色調　淡褐色 胎土　15　精良 16　砂粒を含む 焼成　硬 残存　15⅙、16⅛
	16	口径　12.0			
	17	口径　15.0	口縁部は大きく外反して、口縁端部を上下に拡張させ面を作っている。	拡張面に11条の擬凹線文を施こし、４条の棒状浮文を貼付ける。口縁部内面篦磨き。	色調　淡茶褐色 胎土　精良 焼成　硬

土師器					残存　1/6
壺	18	口径　6.0	口縁部は内弯して立ち上る。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面篦磨き。	色調　淡茶褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　1/6
	19	口径　10.2	口縁部は内弯して立ち上る。	口縁端部外面に19は4条、20は6条の平行沈線を施す。口縁端部横ナデ、口縁部内外面篦磨き。	色調　淡茶褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　やや硬 残存　19 1/8、20 1/6 内外面に丹が塗られている。
	20	口径　10.2			
	21		体部は肩が張っていると思われる。	頸部に一条の貼付突帯をめぐらせ、21には刻み目を施こす。21は体部内面に下半に刷毛。23は摩滅のため手法は不明。	色調　21、淡褐色 22、淡茶褐色 23、淡明褐色 胎土　21、腐り礫等を含む 22、細砂粒を含む 23、長石片等を含む 焼成　21、やや硬 22、硬　23、やや軟 残存　21 1/6、22 1/4、23 1/8
	22				
	23				
	24		体部は肩の張った扁平な球体である。	肩部に櫛描文（5条の平行線、4～5条の波状文、5条の平行線）を施す。体部外面篦磨き	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　1/6 全面に丹が塗られている。
	25	口径　10.2	大きく外反する口頸部から、口縁部をさらに立ち上がらせている。口縁端部は外方へ突出する。	内外面共に横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　25小破片 26は外面に煤付着。
	26	口径　11.2			
	27		頸部は短く外傾する。	手法は不明。	色調　淡茶褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　1/4
	28		口縁部は大きく曲折して外反し、口頸部界外面は下方に突出する。	28と37は摩滅のため手法は不明。35は口縁部外面刷毛後横ナデ。他の内外面は摩滅のため不明。36は口縁部外面横ナデ。口縁部内面は篦磨き。	色調　28、35、淡褐色、36、37、淡白褐色 胎土　28、35、36、砂粒を含む、37、砂粒を多く含む 焼成　28、35、36　硬、37、やや軟 残存　28 1/6　35 1/8　36、37小破片
	35				
	36				
	37				
	29	口径　14.0	大きく開く頸部から曲折して大きく外反する口縁部。	摩滅のため手法は不明。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　軟 残存　小破片
	30	口径　15.8	口縁部は大きく外反し、口縁端部を上方につまみ上げる。	内外面共に横ナデ。	色調　淡黄褐色 胎土　精良 焼成　やや軟 残存　1/8
	31	口径　15.3	口頸部は大きく開き、口縁端部をさらに外方へつまみ出す。	口縁端部横ナデで、他の内外面は篦磨き。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬

土師器					残存　小破片
壺	32	口径　19.4	内傾ぎみに短く直立する頸部より、曲折して立ち上る口縁部をもつ。口縁端部はわずかに内外に肥厚させる。	体部内面は篦削り。他の内外面は横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　やや硬 残存　小破片
	33	口径　16.5	わずかに外傾ぎみにほぼ直立する頸部から、ほぼ水平に近く外反する口縁部をもち、端部をさらに立ち上がらせている。	摩滅のため手法は不明。	色調　淡明褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　1/6
	34	口径　28.1	口縁部はわずかに内傾して直立する。口縁端部は外方にわずかに突出し、上面はわずかに凹む。口縁部外面下端が突出し、タガ状になる。	摩滅のため詳細は不明であるが、内外面共に横ナデと思われる。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	38	底径　3.6	体部は外上方にのびる。	38は外面刷毛後篦磨き。内面は刷毛後ナデ。39は外面篦磨き。内面は刷毛。	色調　淡黄褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　1/6
	39	底径　6.6			
土師器	40	口径　12.0	口縁部はくの字状に外反し、口縁端部は面をなす。	40は口縁部内外面横ナデ。41は口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。体部外面は共に叩き。体部内面は共に刷毛後ナデ。	色調　40、白灰色 41、淡灰色 胎土　砂粒を含む 焼成　やや軟 残存　1/5
甕	41	口径　14.9			
	42		口縁部はくの字状に外反する。体部は丸味をおびている。	口縁部内外面は共に横ナデ。体部外面は共に叩き。体部内面は共にナデ。	色調　42、淡褐色 43、淡黄褐色 胎土　42、1～2㎜位の石英、長石片等を含む 43、砂粒を含む 焼成　42、軟 43、やや軟 残存　1/5
	43				
	44	口径　14.4	口縁部はくの字状に外反し、頸部内面に稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ。体部内面篦削り。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　1/8 体部外面に煤付着。
	45	口径　13.2	口縁部は外反し、頸部はしまらない。	口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。	色調　淡灰色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片 口縁部外面に煤付着。
	46	口径　14.1	口縁部はくの字状に外反し、口縁端部を上方につまみ上げる。	46は口縁部外面叩き後横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。47と49と50は口縁部外面横ナデ。口縁部内面は刷毛後横ナデ。48は口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛横ナデ。体部内面篦削り。51は口縁部内外面横ナデ。	色調　46、褐色 47、淡灰褐色 48、淡灰黄色 49、暗茶褐色 50、褐灰色 51、淡褐灰色 胎土　46、47、微粒の黒雲母片等を含む 48、49、微粒の金雲母片を含む 50、砂粒を含む
	47	口径　15.3			
	48	口径　16.0			
	49	口径　17.6			
	50	口径　17.5			
	51	口径　14.7			

土師器 甕					51、微粒の石英片等を含む 焼成　46、50　やや軟、47、48、49、硬 51、やや硬 残存　46、47、49～51、小破片、48 1/6 50と51は口縁部外面口煤付着。
	52	口径　15.0	口縁部は大きく開き、口縁端部に至って外反ぎみとなる。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面刷毛後横ナデ。体部内外面刷毛。	色調　灰褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/3
	53 55	口径　6.4	口縁部はゆるやかに外反し、体部は楕円形である。	53は口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。55は体部外面ナデ。	色調　灰褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　53、硬 55、やや硬 残存　53 1/4　55 1/6
	54	口径　7.4	口縁部は短く外反し、丸味をおびた体部をもつ。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。	色調　淡茶褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 胎土　1/8 外面に煤付着
	56		やや扁平な丸味をおびた体部から外反する口縁部をもつ。頸部内面に稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ。体部外面ナデ。体部内面篦削り。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　1/6 外面に煤付着
	57	口径　12.8	口縁部は外反する。	口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。頸部外面刷毛。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	58	口径　12.1	口縁部は大きく外反し、口縁端部は丸味をおびた面をなす。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面ナデ。	色調　淡灰褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	59	口径　14.7	口縁部は外傾して開く。	口縁端部横ナデ。口縁部刷毛後横ナデ。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　やや硬 残存　1/6
	60	口径　15.0	あまり肩の張らない体部から外反する口縁部をもち、口縁端部は面をなす。	口縁部内外面横ナデ。体部外面はナデ。体部内面は刷毛。	色調　淡灰褐色 胎土　微粒の雲母片等を含む。 焼成　硬 残存　小破片
	61 62 63	口径　15.5 口径　17.0 口径　18.7	肩の張らない体部から外反する口縁部をもつ。	61は口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面ナデと思われる。62、63は口縁部内外面共に横ナデ。	色調　61、淡灰褐色 62、淡褐灰色 63、淡黄灰色 胎土　砂粒を含む 焼成　61、硬 62、63、軟 残存　61小破片、62、63 1/8 61は口縁部外面に煤付着

土師器 甕	64	口径　15.2	口縁部は外反し、口縁端部は小さな面をなす。口縁部中程でわずかに肥厚する。	口縁部内外面及び体部内外面横ナデ。頸部外面刷毛後横ナデ。	色調　灰黄色 胎土　砂粒を含む 焼成　やや硬 残存　1/6
	65	口径　18.9	口縁部は外反し、頸部内面に稜をもつ。	摩滅のため手法は不明。	色調　淡黄灰色 胎土　砂粒を含む 焼成　やや軟 残存　1/6
	66	口径　17.9	口縁部は外反し、口縁端部は小さな面をなす。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面ナデ。	色調　淡灰黄色 胎土　砂粒を含む 焼成　やや軟 残存　1/6
	67	口径　15.9	口縁部は大きく開き、口縁端部に至って外反ぎみになり、外傾面をもつ。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調　淡灰褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/6
	68	口径　11.9	口縁部はわずかに内弯ぎみに開く。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面ナデ。	色調　淡灰黄色 胎土　砂粒を含む 焼成　やや硬 残存　小破片
	69	口径　15.1	口縁部は内弯ぎみに短く立ち上り、中程がわずかに肥厚する。	69は口縁部外面刷毛後横ナデ。口縁部内面及び体部内外面刷毛。70は口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。74は内外面横ナデ。75は口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。	色調　69、淡灰黄色 70、灰褐色 74、淡灰褐色 75、淡褐灰色 胎土　砂粒を含む 焼成　69、軟、70、やや硬 他は硬 残存　691/6、741/8、 他は小破片 74は頸部外面まで煤が付着
	70	口径　15.7			
	74	口径　16.5			
	75	口径　16.7			
	71	口径　15.8	口縁部は大きく開く。	口縁部内外面及び体部内面横ナデ。体部外面刷毛後横ナデ。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　やや軟 残存　小破片 外面頸部より口縁部にかけて煤付着
	72	口径　11.2	口縁部は大きく開き、口縁端部は丸くおさまる。	口縁部内外面横ナデ。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　軟 残存　1/6
	73	口径　15.2	口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさまる。	摩滅のため手法は不明。	色調　暗褐灰色 胎土　精良 焼成　軟 残存　小破片
	76	口径　16.8	口縁部は概ね内弯して立ち上り、口縁端部を内側に肥厚させる。	概ね口縁部内外面横ナデであるが、875 は口縁部内外面刷毛後横ナデ。803は口縁部内面刷毛後横ナデである。 体部については概ね外面刷毛、内面篦削りと思われる。914と915は摩滅のため手法は不明。	色調　76、77、78、85、 淡灰褐色 79、灰黒色 83、86、淡灰黄色 84、88、灰褐色 87、灰黄色 89、明褐灰色 90、褐灰色 91、淡褐灰色
	77	口径　16.2			
	78	口径　16.7			
	79	口径　17.0			
	83	口径　14.9			
	84	口径　15.3			
	85	口径　15.8			
	86	口径　15.5			
	87	口径　12.7			

土師器 甕	88	口径 14.1			92、淡灰黄色 胎土 85、微粒の黒雲母片等を含む 90、砂粒を含む 他は精良 焼成 76、やや硬 77、78、90、やや軟 79、84、85、86、87 硬 他は軟 残存 76～78、85、88、90小破片、79⅙、86¼、他は⅛ 76、77、78、85は口縁部に煤付着
	89	口径 13.4			
	90	口径 15.3			
	91	口径 13.9			
	92	口径 14.2			
	80	口径 17.2	口縁部はあまり大きく開かず、口縁端部を内側に肥厚させる。	80は口縁部内外面横ナデ。81は口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。	色調 80、暗灰褐色 81、明褐灰色 胎土 精良 焼成 80、やや軟 81、硬 残存 80小破片、81⅛
	81	口径 15.2			
	82	口径 16.9	口縁部は大きく開き、口縁端部を内側に肥厚させる。	口縁部外面横ナデ。口縁部内面及び頸部外面刷毛後横ナデ。体部内面篦削り。	色調 淡灰黄色 胎土 精良 焼成 やや軟 残存 ¼
	93		曲折する口頸部から、口縁部をさらに外反させている。	肩部に櫛描平行線を施す。口縁部内外面及び体部内外面横ナデ。	色調 淡褐色 胎土 砂粒を含む 焼成 硬 残存 小破片 外面に煤付着
	94	口径 12.0	曲折する口頸部から、口縁部を短く、ほぼ直立させている。外端部をわずかに突出させる。	94は外端面に3条の櫛描平行線を施し、その上に棒状に刻み目をつける。94、95共に内外面横ナデ。	色調 淡褐色 胎土 砂粒を多く含む 焼成 硬 残存 94、95小破片
	95	口径 13.4			
	96	口径 14.2	曲折する口頸部から、口縁部を短くほぼ直立させて口縁端部をやや外方につまみ出している。	96は1条の97は3条の櫛描平行線を外端面に施す。内外面共に横ナデ。	色調 淡褐色 胎土 96、砂粒を含む 97、砂粒を多く含む 焼成 硬 残存 小破片
	97	口径 15.8			
	98	口径 10.6	曲折する口頸部から、口縁部を短く外反ぎみに立ち上らせたもの。	110は口縁部内面刷毛後横ナデ。口頸部外面及び体部内面は刷毛。115は頸部内外面刷毛。この2点以外は総て内外面横ナデ。	色調 106、淡明褐色 107、灰褐色 111、暗灰褐色 他は淡褐色 胎土 100、101、102、103、107、115、砂粒を含む 106、110、精良 他は砂粒を多く含む 焼成 硬 残存 115⅛ 他は小破片 100、102、103、108、114は外面に煤が付着
	99	口径 12.1			
	100	口径 13.0			
	101	口径 13.4			
	102	口径 13.4			
	103	口径 14.0			
	104	口径 14.0			
	105	口径 14.0			
	106	口径 15.4			
	107	口径 17.0			
	108	口径 12.0			
	109	口径 12.2			
	110	口径 12.2			
	111	口径 13.2			
	112	口径 14.0			
	113	口径 15.0			

土師器 甕	114	口径 15.0			
	115	口径 16.0			
	116	口径 14.4	曲折する口頸部から、口縁部を短く外反ぎみに立ち上らせ、口縁端部上面がやや凹む。	116は摩滅のため手法は不明。117は口縁部内外面横ナデ。体部外面粗い刷毛。体部内面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　116、やや硬 117、硬 残存　115小破片、117¼ 117は外面に煤が付着
	117	口径 16.2			
	118	口径 12.6	曲折する口頸部から口縁部は直立ぎみに短く立ち上る。	121は頸部外面に櫛描平行線を施す。119は口縁部内外面横ナデ。体部内外面刷毛。119以外は総て内外面横ナデ。	色調　119、淡白褐色　他は淡褐色 胎土　121、砂粒を多く含む　他は砂粒を含む 焼成　硬 残存　118小破片、122⅛、他は¼ 外面に煤が付着
	119	口径 13.8			
	121	口径 15.8			
	122	口径 16.6			
	120	口径 13.8	曲折する口頸部から、口縁部は短く外傾ぎみに立ち上る。	内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　⅛
	123	口径 14.6	曲折する口頸部から、口縁部はやや外反して立ち上る。	内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着。
	124	口径 15.0	曲折する口頸部から、口縁部はやや外傾ぎみに立ち上り、口縁端部を外側に肥厚させる。	内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片
	125	口径 15.4	口縁部は内弯ぎみに立ち上り、上方においてやや外反する。	内外面横ナデ。	色調　淡明褐色 胎土　微粒の石英片等を含む 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着。
	126	口径 12.6	口縁部はわずかに屈曲して外反する。	口縁部内外面刷毛後横ナデ。体部外面は篦ナデか。	色調　淡灰褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片
	127	口径 12.1	口縁部はわずかに内弯ぎみに立ち立る。	内外面横ナデ。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片
	128	口径 15.8	口縁部は内弯してほぼ上方にのびる。口縁端部上面がやや凹む。	口縁部内外面横ナデ。頸部部内外面刷毛。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	129	口径 14.6	短く曲折する頸部から、口縁部は大きく外反して立ち上る。	口縁部外面に、129は8条の、130は10条の、131は17条の、132は9条の、133は9条の、134は8条の、136は4条の、137は5条の、138は9条の、139は8条の擬凹	色調　130、明褐色 132、淡黄褐色 133、淡褐黄色 134、淡褐灰色 135、137、139、淡褐色　138、淡灰
	130	口径 13.2			
	131	口径 14.0			
	132	口径 13.3			
	133	口径 13.7			
	134	口径 12.2			

土師器 甕	135			線を施す。概ね口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削り。	黄色　他は淡明褐色 胎土　129、133、134、138、精良　132、砂粒を多く含む　他は砂粒を含む 焼成　131、136、137、やや硬　133、134、軟、138、やや軟　他は硬 残存　130、135 1/8、131 1/4、133 1/6　他は小破片 129、130、131、132、135、138は外面に煤が付着、この内で135は内面にも煤が付着。
	136	口径　15.6			
	137	口径　16.4			
	138	口径　16.7			
	139	口径　10.8			
	140	口径　13.9	肩の張った体部から短く曲折する口頸部をもち、口縁部をさらに屈曲させ、口縁端部を外上方へ尖りぎみに突出させている。	口縁部内外面横ナデ。頸部内面刷毛。体部外面粗い条痕状の刷毛。体部内面は140がナデ。141が刷毛後ナデ。	色調　140、暗灰褐色 141、灰褐色 胎土　微粒の雲母片等を含む 焼成　硬 残存　1/6 141は口縁部外面に煤が付着。
	141	口径　15.0			
	142	口径　14.4	口縁部は大きく外反し、その上方において短く屈曲させている。	143は口縁部外面に刻み目を施す。142の口縁部内面刷毛後横ナデ以外は総て横ナデ。	色調　142、明褐色 143、淡褐色 胎土　142、腐り礫等を含む　143、砂粒を多く含む 焼成　142、やや軟 143、硬 残存　小破片 142は外面に煤が付着。
	143	口径　15.6			
	144	口径　18.0	短く外傾する頸部から、口縁部はさらに屈曲して立ち上る。	口縁端部及び口縁部内面横ナデ。口縁部外面篦磨き。体部外面刷毛。	色調　淡茶褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	145	口径　14.0	口縁部は屈曲し、口縁端部は内傾面を作る。	内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着。
	146	口径　19.6	外へ開く頸部から、口縁部はほぼ直立して立ち上る。口縁端部上面がやや凹む。	口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。	色調　暗褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　1/4 内面に煤が付着。
土師器 底部	147	底径　4.2	凹み底の底部である。	体部外面叩き、内面は151と160の刷毛以外はナデ。	色調　147、淡赤褐色、149、淡褐色、151、160、灰褐色　152、暗灰褐色 胎土　砂粒を含む
	149	底径　5.0			
	151	底径　5.6			
	152	底径　4.5			
	160	底径　4.6			

土師器 底部					焼成　硬 残存　147 ⅕、149 ¼、152 ⅘
	148	底径　5.0	平底の底部である。	体部外面叩き、内面は155と156の刷毛以外はナデ。	色調　155、淡褐色、156、淡黄灰色、他は灰褐色 胎土　148、153、砂粒を含む、156、長石片等を含む、他は精良 焼成　148、154、硬、155、156、やや硬、他はやや軟 残存　148、155、底部完存、150、156、⅓、他は¼
	150	底径　5.0			
	153	底径　4.6			
	154	底径　4.2			
	155	底径　4.0			
	156	底径　5.5			
	157	底径　2.5	平底の底部である。	157は外面刷毛。内面篦削り。158は外面ナデ。内面刷毛。	色調　157、淡白褐色、158、黄褐色 胎土　157、精良 158、砂粒を含む 焼成　硬 残存　157底部完存 158 ¼
	158	底径　3.0			
	159	底径　4.0	平底の底部である。	体部外面刷毛。体部内面は164のナデ以外は刷毛。	色調　161、164、淡褐色、163、暗褐色、166、灰褐色、他は淡灰褐色 胎土　161、163、168、砂粒を含む、他は砂粒を多く含む 焼成　161、やや軟　他はやや硬 残存　161、164 ⅓、168、底部ほぼ完存、他は¼ 161は外面に煤が付着
	161	底径　5.8			
	162	底径　6.4			
	163	底径　7.6			
	164	底径　2.8			
	166	底径　4.4			
	168	底径　5.3			
	165	底径　2.8	凹み底の底部である。	体部外面刷毛。体部内面摩滅のため手法は不明。	色調　淡赤褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　やや軟 残存　¼
	167	底径　4.6	平底の底部である。	摩滅のため手法は不明。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　やや軟 残存　⅓
	169	底径　5.9	平底の底部である。	177と188は体部内外面ナデ。他の体部内外面については摩滅のため手法は不明。	色調　169、175、淡黄褐色、173、淡灰褐色、179、黒色、186、明茶褐色、187、灰褐色、188、淡茶褐色、他は淡褐色 胎土　175、186、187、188、精良、他は砂粒を含む 焼成　187、188、やや軟、
	172	底径　5.5			
	173	底径　4.4			
	174	底径　4.6			
	175	底径　7.3			
	176	底径　4.4			
	177	底径　5.8			
	179	底径　4.8			
	186	底径　5.8			
	187	底径　4.6			

土師器 底部	188	底径 5.3			他は硬 残存 173、188½、177、179⅓、187¼
	170	底径 4.8	わずかに底部が凹み底となる。	内外面共刷毛。	色調 茶褐色 胎土 砂粒を含む 焼成 硬 残存 ¼
	171	底径 3.7	底部は小さく平底である。	内外面篦削り。	色調 褐色 胎土 精良 焼成 硬 内面に煤が付着。
	178	底径 6.0	わずかに丸底ぎみの平底である。	外面篦削り後ナデ。内面不調整。	色調 淡灰褐色 胎土 精良 焼成 硬 残存 ¼
	180	底径 3.6	平底の底部である。	磨滅のため手法は不明。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 残存 ¼
	181	底径 3.7	上げ底の底部である。	内面底部刷毛。他の内外面はナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 精良 焼成 硬
	182	底径 3.5	凹み底の底部である。	182は体部外面刷毛。体部内面ナデ。183は体部内外面摩滅のため手法は不明。185は体部外面ナデ。	色調 182、淡黄褐色、他は灰褐色 胎土 182、石英片等を含む、他は砂粒を含む 焼成 182、やや硬 183、軟、185、硬 残存 182、底部完存、183¼、185⅙ 182は外面に煤が付着。
	183	底径 5.2			
	185	底径 5.2			
	184	底径 6.0	底部中央が凹む。	外面叩き後ナデ。	色調 灰褐色 胎土 精良 焼成 硬
	189	底径 5.8	底部中央が凹む平底である。	外面ナデ。内面刷毛。	色調 灰褐色 胎土 砂粒を多く含む 焼成 硬 残存 ¼
	190	底径 5.0	底部中央部がやや凹む。	外面ナデ。内面刷毛。	色調 黒褐色 胎土 砂粒を含む 焼成 硬
	191	底径 5.4	平底の底部である。	191は外面ナデ。内面刷毛。192は外面篦磨き。内面刷毛。	色調 191、淡褐色 192、灰褐色 胎土 191、白色の微砂粒を含む 192、砂粒を含む 焼成 硬 残存 192¼
	192	底径 5.2			
	193	底径 4.3	底部が凹む。	外面ナデ。内面刷毛。	色調 淡褐色 胎土 精良 焼成 硬
	194	底径 4.5	突出した底部が環状に凹む。	外面ナデ。内面刷毛。	色調 淡褐色 胎土 精良

土師器 底部					焼成　硬
	195	底径　4.5	突出した平底である。	摩滅のため手法は不明。	色調　淡赤褐色 胎土　精良 焼成　硬
	196	底径　3.6	突出ぎみの底部の中央部が凹む。	手づくねである。	色調　黒灰色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　底部完存
土師器 脚台	197	脚径　5.8	短く開く脚台である。	手づくねである。脚部外面刷毛。	色調　淡茶褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　½ 外面に煤付着
	198 199 200 201 202 203 205	脚径　8.4 脚径　6.7 脚径　8.6 脚径　7.4 脚径　7.3 脚径　7.2	台付甕の脚台部であり、裾広がりに開く脚台である。	198は内外面横ナデ。199は摩滅のため手法は不明。200は脚部外面ナデ。脚部内面刷毛。201と202は外面刷毛。内面ナデ。203は外面及び内面下半刷毛。205は外面刷毛。内面刷毛後篦削り。	色調　198、200、淡褐色、199、明褐色、201、淡赤褐色、205、淡黄褐色、他は淡白褐色 胎土　199、202、砂粒を含む。201、205、精良　他は砂粒を多く含む 焼成　201、205、やや軟　他は硬 残存　198小破片、200 ⅓、205 ¼、他は⅙ 205は外面に煤が付着
	204		脚台は大きく開く。	体部外面及び脚台部内外面刷毛。体部内面ナデ。	色調　淡黄褐色 胎土　精良 残存　硬
土師器 甑	206 210 211 212	底径　4.0 底径　4.2 底径　3.8 口径　16.4 器高　9.3 底径　3.5	212は小さな平底の底部から、外上方へのびる口縁部をもち、口縁端部は小さな面をなす。その他の底部も平底である。	206は摩滅のため詳細は不明であるが、内面篦削り。210は摩滅のため手法は不明。211は摩滅のため詳細は不明であるが内面刷毛。212は口縁端部から体部内面横ナデ。体部外面刷毛後ナデ。底部内面部分的に篦削り。	色調　206、淡赤褐色、210、淡褐色、211、淡茶褐色、212、淡白黄色 胎土　206、砂粒を多く含む、212、砂粒を多く含む、他は精良 焼成　211、やや軟　他は硬 残存　206、212 ⅓
	207	底径　2.0	尖りぎみの小さな底部である。	外面刷毛。内面ナデ。	色調　灰褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　やや軟 残存　¼
	208	底径　2.4	やや丸底ぎみの底部である。	内外面共に刷毛後ナデ。	色調　灰褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　¼
	209	底径　3.6	中央がやや凹んだ底部である。	外面刷毛。内面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　¼
土師器	213	口径　4.4	丸底の小形の直口鉢である。	手づくねである。	色調　黒灰色

鉢		器高　3.4			胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　底部完存
	214	口径　8.8	口縁部は外上方へ開く。	口縁端部横ナデ。体部内外面共刷毛で、外面は部分的にナデ。	色調　淡灰褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	215	口径　10.1	口縁部はやや内弯ぎみに立ち上る。	口縁端部横ナデ。体部内外面篦磨き。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　⅙
	216	口径　12.0	わずかに口縁端部付近で内弯ぎみになる口縁部である。	口縁端部横ナデ。体部内外面篦磨き。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　⅙
	217 218	口径　13.0 口径　14.0	口縁部はほぼ直線的に外上方にのびる。	口縁端部横ナデ。217は体部外面刷毛。体部内面篦磨き。218は体部内外面刷毛。	色調　217、淡黄褐色 218、淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	219	口径　10.3 器高　4.3 底径　8.3	口縁部はわずかに内弯ぎみに立ち上り、底部はわずかに凹む。	内外面共ナデ。	色調　淡白黄色 胎土　小石を含む 焼成　やや硬 残存　ほぼ完形
	220	口縁　18.2	口縁部は短く外反する。	頸部内面に刺突列点文を施す。内外面共摩滅のため手法は不明。	色調　淡明褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　やや軟 残部　小破片
	221	口径　8.0	口縁部は短く外反し、体部はやや内弯する。	口縁部外面及び体部内外面篦磨き。口縁部内面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　⅙
	222	口径　8.6	口縁部が短く外反する浅い鉢である。	内外面共摩滅のため手法は不明。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　やや硬 残存　小破片
土師器壺	223 224		体部はやや肩が張る。	223は摩滅のため手法は不明。224は口縁部内外面横ナデ。体部外面ナデ。体部内面下半は篦削り。	色調　223、茶褐色 224、淡白褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　223、硬 224、やや硬 残存　223¼、224小破片
	225 229		浅い体部から大きく立ち上る口縁部をもつ。	225は口縁部内外面及び体部内外面共に篦磨き。229は摩滅のため手法は不明。	色調　225、淡褐色 229、茶褐色 胎土　225、精良 229、砂粒を多く含む 焼成　225、硬 229、やや軟 残存　225⅙、229小破片
	226 227 228		扁平な体部から外反する口縁部をもつ。	226、228は摩滅のため手法は不明。227は口縁部内外面及び体部外面篦磨き。体部内面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　226、腐り礫等を含む　227、砂粒を含む、228、精良

					焼成　226、軟　227、硬 228、やや硬 残存　227 1/6、他は1/4
	230		体部は扁平である。	内外面共摩滅のため手法は不明。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　1/6
土師器 高杯	231		口縁部は浅い皿状の底部から大きく内弯ぎみに立ち上る。裾部が大きく開く脚部である。	脚部には上段に3方、下段に4方の円孔を穿つ。杯部内外面及び脚部外面篦磨き。底部内面摩滅のため手法は不明。脚部内面刷毛後ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　杯部1/3、脚部1/4
	232		口縁部は内弯ぎみの底部から大きく外反する。中空の脚脚部である。	口縁部外面上半及び杯部内面横ナデ。杯口縁部と杯底部との接合部外面刷毛。杯底部外面ナデ。脚柱部外面刷毛後ナデ。脚柱部内面篦削りでしぼり痕を消す。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　杯部1/4、 脚柱部完存
	233		口縁部は小さな杯底部から内弯して立ち上る。	口縁部内外面篦磨き。杯部底部外面刷毛後ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　1/4
	234 235		口縁部は浅い杯底部から大きく外反する。	234は摩滅のため詳細は不明であるが、口縁部内面は篦磨き。235は摩滅のため手法は不明。	色調　234、淡白褐色、 235、淡灰褐色 胎土　234、砂粒を含む 235、砂粒を多く含む 焼成　234、硬 235、やや軟 残存　234 1/4、235 1/6
	236	口径　14.0	口縁部は直線的に大きく開く。	摩滅のため手法は不明。	色調　灰褐色 胎土　精良 焼成　やや軟 残存　小破片
	237	口径　15.5	口縁部は大きく外反する。	内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/3
	238		口縁部は浅い杯底部からやや内弯ぎみに立ち上る。	内外面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　腐り礫等を含む 焼成　硬 残存　1/3
	239	口径　18.0	口縁部はやや内弯ぎみに大きく開く。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面篦磨き。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　1/8
	240 241	口径　19.8 口径　27.6	口縁部は大きく外反し、口縁端部は外傾面をなす。	240は内外面横ナデ。241は摩滅のため詳細は不明であるが、口縁部内面刷毛。	色調　淡黄褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　240、硬 241、やや軟 残存　240 1/6、241小破片
	242	口径　27.7	口縁部は内弯して大きく開く。	摩滅のため手法は不明。	色調　淡黄灰色 胎土　小石を含む 焼成　やや硬

土師器 高杯					残存　¼
	243 245 247 249 251		浅い皿状の杯底部であり、	243、251は内外面ナデ。245は内外面刷毛後ナデ。247は内外面横ナデ。249は摩滅のため詳細は不明であるが、内面刷毛。	色調　淡褐色 胎土　245、砂粒を含む、247、精良、他は砂粒を多く含む 焼成　247、やや硬 他は硬
	244 246 248 250 253		やや内弯ぎみの浅い杯底部であり、外面に稜をもつ。250の脚柱部は柱状である。	杯部内外面ナデ。250は脚柱部外面は篦磨き。	色調　246、253、淡褐色 248、明褐色、他は淡白褐色 胎土　246、精良　250、腐り礫等を含む、他は砂粒を多く含む 焼成　250、やや硬 他は硬
	252 255 257 263		やや内弯ぎみの浅い杯底部である。263の脚柱部は中空で、中程でややふくらむ。	252は内外面篦磨き。255は内外面ナデ。257は摩滅のため詳細は不明であるが内面刷毛。263は杯部外面から脚柱部外面は篦磨き。杯部内面は摩滅のため不明。脚柱部内面篦削り。	色調　257、淡黄褐色、263、明褐色、他は淡褐色 胎土　255、精良　他は砂粒を多く含む 焼成　252、255、硬、他はやや軟
	254		浅い皿状の杯底部である。	外面刷毛。内面ナデ。	色調　褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬
	256		浅い皿状の杯底部であり、外面に明瞭な稜をもつ。	内外面共ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　⅓
	258 260 262		浅い皿状の杯底部であり、外面に稜をもつ。	258は内面刷毛後ナデ。外面ナデ。260は摩滅のため手法は不明。262は内外面ナデ。	色調　262、淡白褐色、他は淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬
	259 261		やや内弯する浅い杯底部から大きく外反する口縁部をもつ。外面に稜をもつ。	259は摩滅のため手法は不明。261は外面ナデ。内面刷毛後ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　259、やや軟 261、硬
	264		中空のやや短い脚柱部から大きく開く裾部をもつ。	裾部3方に円孔を穿つ。外面篦磨き。脚柱部内面篦削り。裾部内面ナデ。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬
	265 266		裾広がりに開く脚部は、中程まで中実である。	3方に円孔を穿つ。外面篦磨き。内面刷毛。	色調　265、淡褐色 266、淡赤褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬
	267 268		やや丸味をおびた杯底部から大きく開く脚部である。	杯部内外面及び脚部外面篦磨き。脚部内面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬
	269 271		脚部は大きく開く。	269は円孔の数は不明である。271は3方に円孔を穿つ。共に外面は篦磨き。269は脚部内面上半ナデ。下方刷毛。	色調　269、明褐色 271、灰褐色 胎土　269、砂粒を含む 271、精良 焼成　硬 269は内外面に煤が付着

土師器 高杯	270		脚部は大きく外反して開く。	脚部上方及び中程に共に5方の円孔を穿つが、上方の円孔は貫通していない。外面篦磨き。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬
	272		中空の脚柱部である。あるいは器台かもしれない。	3方に円孔を穿つ。外面篦磨き。内面上半は指圧、下方は刷毛。	色調　白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬
	273 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284		中空の脚柱部から大きく開く裾部をもつ。	概ね脚柱部外面篦磨き。内面篦削り。273は脚柱部外面上方刷毛。	色調　275、276、277、灰褐色、278、黄褐色、279、281、淡茶褐色、283、淡黄褐色、他は淡褐色 胎土　275、283、精良 279、微細な金雲母片等を含む。他は砂粒を多く含む。 焼成　277、282、やや軟 他は硬
	274		中程まで中実の脚柱部から大きく開く裾部をもつ。	3方に円孔を穿つ。外面刷毛後ナデ。内面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬
	285 286		八の字状に開く中空の脚柱部から大きく開く裾部をもつ。	外面ナデ。内面篦削り。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬
	287 289	裾径　13.4	外反している中空の脚柱部より、大きく開く裾部であり、289の裾端部は面となる。	287は3方に円孔を穿つ。外面篦磨き。内面ナデ。289は外面及び裾部内面ナデ。脚柱部内面篦削り。	色調　287、白褐色 289、淡褐色 胎土　287、砂粒を多く含む 289、精良 焼成　287、硬 289、やや硬
	288	裾径　11.5	八の字状に開く中空の脚柱部から大きく開く裾部で、裾端部は面をなす。	外面ナデ。杯部内面及び裾部内面刷毛。脚柱部内面篦削り。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬
	290	裾径　10.8	脚柱部から裾部にかけてなだらかに開く脚部である。	2個1対の円孔を2方に穿つ。脚部外面篦磨きで、裾部のみ後でナデる。脚柱部内面は篦削り。裾部内面は刷毛後ナデ。	色調　赤褐色 胎土　精良 焼成　やや硬
	291	裾径　7.4	中空の脚柱部から短く開く裾部。	外面刷毛で脚柱部のみ後でナデる。内面篦削り。	色調　淡褐色 胎土　腐り礫等を含む 焼成　硬
	292 300	裾径　9.7 裾径　11.8	内弯ぎみに大きく開く裾部である。	292は内外面横ナデ。300は外面刷毛後横ナデ。外面口縁端部及び内面横ナデ。	色調　292、淡褐色 300、白褐色 胎土　292、砂粒を含む 300、砂粒を多く含む 焼成　硬
	293 298	裾径　9.5 裾径　12.7	大きく外反ぎみに開く脚裾部である。裾端部は面をなす。	298は円孔を穿つが数は不明。298は外面篦磨き。内面横ナデ。298は内外面横ナデ。	色調　293、淡褐色 298、白褐色 胎土　293、砂粒を多く含む、298、精良 焼成　硬

土師器 高杯	294	裾径　18.8	中空の短か目の脚柱部から大きく内弯して開く裾部をもつ。	裾部中程に円孔を穿つが数は不明。外面刷毛後篦磨き。脚柱部内面ナデ。裾部内面刷毛。	色調　白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　やや硬 残存　⅙
	295	裾径　13.0	裾部はやや内弯ぎみに大きく開く。裾部内面に稜をもつ。	295は外面篦磨き。内面刷毛後ナデ。裾端部横ナデ。296は内外面横ナデ。	色調　295、淡褐色 296、淡黄褐色 胎土　295、砂粒を含む、296、砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　295小破片、296¼
	296	裾径　13.0			
	297	裾径　14.0	裾部は大きく開く。	297は摩滅のため詳細は不明であるが内面刷毛。299は外面横ナデ。内面刷毛後横ナデ。301は摩滅のため手法は不明。	色調　299、淡白褐色、他は淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　297、やや軟　299、硬　301、やや硬 残存　297小破片、299¼、301⅙
	299	裾径　11.8			
	301	裾径　12.3			
土師器 器台	302	口径　16.2	受部は大きく開く。	口縁端部内外面横ナデ。口縁部内外面篦磨き。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　⅙
	303	口径　13.4	受部はやや外反ぎみに開き、口縁端部はわずかに上方へつまみ出し面をもつ。	摩滅のため手法は不明。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬
	304		浅い受部から大きく開く脚部をもつ。	外面篦磨き。内面は摩滅のため手法は不明。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片
	305		浅い皿状の受部から大きく開く脚部をもつ。	摩滅のため手法は不明。	色調　赤褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　やや硬
	306		中空の脚柱部が八の字状に直線的に開く。	306の円孔の数は不明。308は3方に円孔を穿つ。306は摩滅のため手法は不明。308は外面篦磨き。内面は摩滅のため手法は不明。	色調　淡褐色 胎土　306、砂粒を多く含む　308、砂粒を含む 焼成　硬
	308				
	307		中空の脚柱部が八の字状に直線的に開く。	313は脚部上方に3方の円孔を穿つ。307は摩滅のため手法は不明。313は外面篦磨き。内面篦削り。	色調　307、淡赤褐色 313、淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　307、やや軟 313、硬
	313				
	309		上下に大きく開く。	摩滅のため手法は不明。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬
	310		中空の脚柱部が外反して大きく開く。	314の円孔の数は不明であるが、他は3方に円孔を穿つ。概ね外面は篦磨きであるが、314のみ一部に刷毛。内面は310が刷毛、312がナデ。他は篦削り。	色調　311、明赤褐色 314、灰褐色、他は淡褐色 胎土　311、砂粒を含む、他は砂粒を多く含む 焼成　311、やや硬 314、やや軟 他は硬
	311				
	312				
	314				

					311は内外面丹塗りと思われる。

（第２層上面）

土師器 壺	３１５	口径　２１.２	口縁部は外反ぎみに大きく開き、口縁端部は垂下する。	口縁端部外面に４条の櫛描平行線を施し、その後刺突列点文を施す。口縁端部横ナデ。口縁部外面ナデ。口縁部内面ナデ。口縁部内面刷毛後篦磨き。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　⅓
	３１６	口径　１９.２	外傾する頸部から大きく外反する口縁部で、口縁端部は上下に大きく拡張する。	口縁端部上下に刻み目を施す。口縁端部から口縁部外面横ナデ。口縁部内面篦磨き。頸部内面刷毛。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片
	３１７	口径　１０.０	口縁部は内弯ぎみに立ち上る。	内外面篦磨き。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片
	３１８		体部はやや肩の張った球体である。	頸部に１条の貼付凸帯をめぐらせる。外面篦磨き。内面は上方に粘土しぼり痕が残るがナデ。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　⅙
土師器 甕	３１９	口径　１３.６	口縁部は大きく外反し、口縁端部をわずかにつまみ上げる。	口縁部内外面横ナデ。体部外面叩き。体部内面ナデ。	色調　褐灰色 胎土　微細な黒雲母片を含む 焼成　硬 残存　⅕ 外面に煤付着
	３２０	口径　１４.３	口縁部は外傾し、口縁端部をさらに外反させている。	口縁端部及び口縁部内面横ナデ。口縁部外面叩き後横ナデ。体部外面叩き。体部内面刷毛。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　⅙ 外面に煤付着
	３２１	口径　１１.６	口縁部はくの字状に外反し、口縁端部を上方につまみ上げる。	口縁部外面は叩き後横ナデ。口縁部内面は321が横ナデ。322が刷毛後横ナデ。体部外面叩き。体部内面篦削り。	色調　321、淡褐色 322、赤褐色 胎土　321、微粒の金雲母片等を含む 322、微粒の腐り礫等を含む 焼成　硬 残存　⅙ 外面に煤付着
	３２２	口径　１５.３			
	３２３	口径　１３.５	口縁部は大きく外反し、口縁端部は丸味をおびた面をなす。	口縁端部及び外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。	色調　白黄色 胎土　石英片等を含む 焼成　やや軟 残存　⅕ 外面に煤付着
	３２４	口径　１３.９	口縁部は外反し、口縁端部はわずかに面をなす。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面刷毛後横ナデ。体部内面ナデ。	色調　灰黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片
	３２５	口径　１３.４	口縁部は外反し、口縁端部	口縁部内外面横ナデ。体部	色調　淡白褐色

土師器 甕			はわずかに面をなす。あまり肩の張らない体部である。	内外面刷毛。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　¼
	326	口径　13.7	口縁部は外反する。体部はあまり肩が張らない。	口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。体部内外面刷毛。	色調　淡灰黄色 胎土　雲母片等を含む 焼成　硬 残存　⅙ 口縁部に煤付着
	327	口径　14.2	口縁部はわずかに中程で内弯ぎみに開く。	口縁部外面刷毛後上方を横ナデ。口縁部内面横ナデ。	色調　淡灰褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤付着
	328	口径　14.2	口縁部は直線的に大きく開く。	口縁端部横ナデ。口縁部外面刷毛。口縁部内面刷毛後横ナデ。	色調　淡褐灰色 胎土　雲母片等を含む 焼成　硬 残存　¼
	329	口径　11.6	口縁部はわずかに内弯ぎみに開き、口縁端部はわずかに肥厚する。	口縁部内外面横ナデ。体部外面篦削り。	色調　暗灰色 胎土　精良 焼成　軟 残存　小破片
	330 331	口径　14.2 口径　16.1	口縁部はわずかに内弯ぎみに立ち上り、口縁端部は内面に肥厚する。	330は内外面横ナデ。331は口縁部外面横ナデ。口縁部内面は刷毛後横ナデ。体部内面は篦削り。	色調　330、淡褐灰色、 337、淡灰色 胎土　精良 焼成　硬 残存　⅛ 331は外面に煤付着
	332	口径　20.6	口縁部は外反し、口縁端部をわずかにつまみ上げる。	口縁部内外面横ナデ。体部外面叩き後刷毛。体部内面ナデ。	色調　灰黄色 胎土　雲母片等を含む 焼成　硬 残存　小破片 口縁部外面まで煤付着
	333	口径　19.6	口縁部は短く外反し、口縁端部は面をなす。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面刷毛後横ナデ。	色調　褐灰色 胎土　精良 焼成　やや軟 残存　⅛
	334	口径　15.9	口縁部は外傾して立ち上り、口縁端部はやや外面肥厚する。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面刷毛後横ナデ。体部外面刷毛後ナデ。体部内面ナデ。	色調　淡灰褐色 胎土　金雲母片等を含む 焼成　硬 残存　⅓ 口縁部まで煤付着
	335	口径　15.2	口縁部は大きく開く。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面刷毛後横ナデ。体部内面刷毛。	色調　淡褐灰色 胎土　精良 焼成　やや軟 残存　⅓
	336	口径　18.6	口縁部は短く外反する。口縁端部は尖りぎみである。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面刷毛後横ナデ。	色調　明褐色 胎土　金雲母片等を含む 焼成　やや軟 残存　小破片
	337	口径　15.3	口縁部は大きく外反し、口縁部中程でわずかに肥厚する。体部は丸味をおびている。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛後ナデ。体部内面刷毛。	色調　明褐灰色 胎土　金雲母片等を含む 焼成　硬

土師器 甕					残存　¼ 口縁部まで煤付着
	338	口径　13.8	口縁部は短く外傾し、口縁端部はわずかに面をなす。体部はあまり肩が張らない。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面刷毛後横ナデ。体部外面刷毛。体部内面ナデ。	色調　淡灰褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片
	339	口径　17.3	曲折する頸部から、短く外反する口縁であり、口縁端部は外傾する。	口縁部下方に刻み目を施す。内縁部内外面横ナデ。頸部内外面刷毛。	色調　黒褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　⅙
	340	口径　18.4	短く曲折する頸部から、短く外反する口縁部であり、口縁端部は内傾してやや凹む。	口縁部内外面及び頸部外面横ナデ。頸部内面刷毛。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着
	341	口径　15.2	曲折する頸部から、さらに外反する口縁部であり、口縁端部は外方に突出する。	口縁部内外面及び体部外面横ナデ。体部内面刷毛。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　⅛ 外面に煤が付着
	342	口径　18.2	曲折する頸部から、短くほぼ直立する口縁部をもつ。	内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　⅙
	343 346	口径　15.8 口径　15.0	曲折する頸部から、外反ぎみに立ち上らせた口縁部であり、口縁端部は突出する。	346は肩部に4～5条の櫛描平行線と刺突列点文を施す。口縁部内外面横ナデ。体部内外面刷毛。343は口縁部内外面横ナデ。	色調　343、淡明褐色 346、淡黄褐色 胎土　343、砂粒を多く含む、346、砂粒を含む 焼成　硬 残存　343小破片、346¼ 346は外面に煤が付着
	344 350 374	口径　15.4 口径　13.0 口径　17.0	曲折する頸部から、さらに、短く外傾させた口縁部である。	口縁部内外面横ナデ。374は体部内面刷毛。	色調　350、淡褐色、他は明褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　344、350小破片 374 ⅙ 外面に煤が付着
	345	口径　16.4	曲折する頸部から、短く外傾ぎみにのびる口縁部であり、口縁端部は外方に突出する。	肩部に篦描きの斜線文、4条の櫛描平行線文、波状文を施す。口縁部内外面横ナデ。体部外面は刷毛後文様を施す。体部内面は篦削り。	色調　淡黄褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　⅙ 外面に煤が付着
	347	口径　11.8	曲折する頸部から、ほぼ直立する口縁部であり、口縁端部はわずかに突出する。	内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着
	348	口径　14.5	短く曲折する頸部から、さらに短く外傾ぎみに口縁部を立ち上らせたものである。	頸部に3条の櫛描平行線文を施す。内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着

土師器 甕	349	口径　14.8	曲折する頸部から、短く外傾する口縁部をもち、口縁端部をさらにつまみ上げる。	口縁部に3条の浅い沈線を施す。内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着
	351	口径　14.8	曲折する頸部から、短くやや外傾ぎみに立ち上らせた口縁部である。	内外面横ナデ。	色調　351、暗灰褐色、他は淡褐色 胎土　351、砂粒を含む、352、精良 353、砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　351、352、353小破片 351、352は外面に煤が付着
	352	口径　14.6			
	353	口径　12.2			
	354	口径　15.0	曲折する頸部から、短くわずかに外傾ぎみに立ち上る口縁部である。	内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着
	355	口径　13.2	曲折する頸部から、短く外傾する口縁部である。	内外面横ナデ。	色調　淡白褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片
	356	口径　13.7	曲折する頸部から、さらに短く外傾ぎみに立ち上る口縁部であり、口縁端部は外傾ぎみにやや凹む。	口縁部内外面横ナデ。357は体部外面刷毛。体部内面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　356 1/8、357小破片 外面に煤が付着
	357	口径　15.1			
	358	口径　15.2	曲折する頸部から、短くやや外反ぎみに立ち上らせた口縁部である。	内外面横ナデ	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着
	359	口径　14.4	口縁部は内弯ぎみに上方へ短くのびる。口縁端部はわずかに外側に肥厚し丸味をもつ。	内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	360	口径　14.0	曲折する頸部から、短くほぼ直立ぎみに立ち上る口縁部である。	内外面横ナデ。	色調　暗灰褐色 胎土　石英、長石片等を含む 焼成　硬 残存　小破片
	361	口径　13.6	曲折する頸部から、短くほぼ直立ぎみに立ち上る口縁部である。	内外面横ナデ。	色調　暗灰褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着
	362	口径　13.4	曲折する頸部から、さらに短くほぼ直立させた口縁部である。	内外面横ナデ	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片

土師器					外面に煤が付着
甕	363	口径　14.6	曲折してのびる頸部から、短くほぼ直立する口縁部である。口縁端部は面をなす。	口縁部内外面横ナデ。体部外面ナデ。体部内面刷毛。	色調　暗褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片 内外面に煤が付着
	364	口径　14.4	口縁部は外反して開き、口縁端部近くでほぼ直立ぎみに立ち上っており、外端部はわずかに突出する。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面刷毛後ナデ。	色調　明褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　1/8 外面に煤が付着
	365	口径　14.9	外反する頸部から、口縁部はわずかに外傾して短く立ち上る。口縁端部は面をなす。	内外面刷毛後横ナデ。	色調　淡黄灰色 胎土　精良 焼成　やや硬 残存　1/6 外面に煤が付着
	366 375	口径　15.0 口径　14.6	曲折する頸部から、短くほぼ直立する口縁部であり、口縁端部は面をなし、中央がわずかに凹む。	内外面横ナデ。	色調　366、淡茶褐色、375、淡白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　366、375小破片 外面に煤が付着
	367	口径　8.8	曲折する頸部から、短くほぼ直立する口縁部である。	肩部に篦描き斜線文を施す。口縁部内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　1/6
	368 369	口径　10.0 口径　11.2	曲折する頸部から、短く外反する口縁部である。口縁端部はわずかに突出する。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面は368が刷毛後ナデ、369が刷毛。	色調　368、淡灰褐色、369、淡黄褐色 胎土　368、砂粒を含む 369、砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　368 1/4、369小破片 369は外面に煤が付着
	370	口径　12.4	曲折する頸部から、短く外傾する口縁部である。体部ははあまり肩が張らない。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面刷毛後ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着
	371	口径　16.0	外傾する頸部から、口縁部をさらに短く直立させたものである。口縁端部は面をなし、中央がわずかに凹む。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。	色調　淡茶褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　1/6 外面に煤が付着
	372	口径　16.7	口縁部は内弯ぎみに立ち上り、口縁端部は外傾面をなす。頸部内面に稜をもつ。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面刷毛。体部内面刷毛後ナデ。	色調　淡褐灰色 胎土　精良 焼成　やや軟 残存　口縁部ほぼ完存
	373	口径　14.2	曲折する頸部よりさらに外反させた口縁部である。	内外面横ナデ。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬
	376	口径　16.6	口縁部は内弯して大きく開く。	内外面横ナデ。	色調　明褐色 胎土　砂粒を含む

土師器 甕					焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着
	377	口径　15.9	口縁部は内弯して大きく開き、口縁端部近くで短くほぼ直立させる。	内外面横ナデ。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着
	378	口径　15.0	口縁部は内弯して開き、口縁端部は面をなす。	口縁部内外面刷毛後横ナデ。頸部外面刷毛。	色調　淡褐灰色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片 頸部に煤付着
	379	口径　13.7	口縁部は内弯して開き、口縁端部は尖りぎみである。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面及び頸部外面刷毛後横ナデ。頸部内面刷毛。	色調　淡赤灰色 胎土　金雲母片等を含む 焼成　やや硬 残存　小破片 外面に煤が付着
	380	口径　13.5	口縁部は内弯ぎみに開く。	外面横ナデ。内面刷毛後横ナデ。	色調　淡灰褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　1/8
	381	口径　12.4	口縁部は内弯して大きく開き、頸部内面に稜をもつ。	口縁部内外面刷毛後横ナデ。	色調　明褐灰色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片
	382	口径　11.9	口縁部は短く開く。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	色調　灰黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/6 外面に煤付着
	383	口径　14.2	口縁部はくの字状に外反し、口縁端部をさらに短く外傾させて立ち上がらせたもの。口縁端部は面をなし外端部はわずかに突出する。	内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　1/8 外面に煤が付着
	384	口径　17.0			
	385	口径　15.5	口縁部は中程で屈曲する。	内外面横ナデ。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	386	口径　18.0	曲折する頸部から、短くほぼ直立する口縁部であり、頸部内面に稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ。体部内面篦削り。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	387	口径　16.8	ゆるく曲折する頸部から、外傾する口縁部である。口縁端部は平らになり、内面にわずかに肥厚する。	口縁部外面に5条の擬凹線を施す。口縁部内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤付着
	388	口径　16.0	短く曲折する頸部から、ほぼ直立する口縁部である。	口縁部外面に5条の擬凹線を施す。口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面ナデ。	色調　黒褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片

土師器					外面に煤付着
甕	389	口径 18.2	曲折する頸部から、さらに外反させた口縁部である。	口縁部外面に389は9条の、390、391は11条の擬凹線を施す。口縁部内外面及び頸部外面横ナデ。頸部内面及び体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調 389、淡褐色、390、淡褐灰色、391、淡赤褐色 胎土 391、腐り礫等を含む、他は精良 焼成 389、硬、390、軟 391、やや軟 残存 389小破片、390、391 ¼ 389、391は外面に煤が付着
	390	口径 15.1			
	391	口径 17.2			
	392	口径 13.3	曲折する頸部から、さらに内傾して立ち上がる口縁部である。	口縁部内外面横ナデ。頸部内外面刷毛後横ナデ。	色調 淡褐色 胎土 精良 焼成 硬 残存 小破片
	393	口径 15.0	大きく開く頸部から、さらに短く外傾させた口縁部である。	口縁部外面に篦描き刻み目を施す。内外面横ナデ。	色調 淡褐色 胎土 砂粒を多く含む 焼成 硬 残存 小破片 外面に煤が付着
	394	口径 14.4	大きく外反する頸部から、さらに外傾ぎみに立ち上る口縁部であり、口縁端部は内面肥厚する。	口縁部外面に篦描き刻み目を施す。口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調 淡灰黄色 胎土 精良 焼成 硬 残存 小破片
	395	口径 17.8	大きく曲折する頸部から、さらに短く外傾させた口縁部である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 軟 残存 小破片
	396	口径 17.2	くの字状に外反する頸部から、さらにやや外反ぎみに立ち上る口縁部である。口縁端部は外面に突出する。	口縁部内外面横ナデ。	色調 黒褐色 胎土 精良 焼成 硬 残存 ⅙ 外面に煤が付着
土師器	397	底径 4.9	平底の底部である。	397は体部外面ナデ。体部内面刷毛後ナデ。399は体部外面叩き後ナデ。体部内面刷毛。401は体部外面ナデ。体部外面刷毛。404は体部内外面刷毛後ナデ。	色調 397、乳白色 399、黄白色 401、淡褐色、404、茶褐色 胎土 399、401、長石片等を含む、他は精良 焼成 397、399、やや硬 他はやや軟 残存 397 ⅕、404 ⅓、他は¼
底部	399	底径 4.2			
	401	底径 3.8			
	404	底径 5.2			
	398	底径 3.8	中央部が凹む底部である。	398は体部外面刷毛。体部内面ナデ。他は体部外面ナデ。体部内面刷毛。	色調 398、淡茶黄色、400、淡茶褐色、他は白灰色 胎土 398、石英片等を含む、他は精良 焼成 398、やや硬、他は軟 残存 398 ⅓、400 ¼、他は⅕ 398は内面に炭化物が付着
	400	底径 5.2			
	402	底径 4.2			
	405	底径 5.4			

土師器 底部	403	底径 4.0	突出ぎみの小さな平底である。	体部内外面ナデ。	色調 赤褐色 胎土 小石を含む 焼成 やや硬 残存 底部完存
	406	底径 4.6	平底の底部である。	体部外面ナデ。内面は不明。	色調 淡茶褐色 胎土 砂粒を含む 焼成 やや軟 残存 ¼ 内面に炭化物が付着
	407	底径 4.3	中央が凹む底部である。	体部外面刷毛後ナデ。体部内面刷毛。	色調 茶褐色 胎土 砂粒を多く含む 焼成 やや硬 残存 ⅓
	410	底径 5.0	平底の底部である。	410は体部外面篦磨き。体部内面ナデ。411は体部外面篦磨き。体部内面刷毛。	色調 410、淡茶褐色、411、乳白色 胎土 精良 焼成 やや軟 残存 410¼、411⅓
	411	底径 4.4			
土師器 甑	408	口径 16.0 器高 9.1	わずかに認められる底部から、外上方へのびる口縁部である。	口縁端部は横ナデ。体部外面ナデ。体部内面刷毛。体部内外面に粘土紐の継ぎ目を明瞭に残す。	色調 淡白褐色 胎土 砂粒を多く含む 焼成 硬 残存 ¼
	409	底径 3.8	わずかに突出ぎみの平底の底部である。	体部外面刷毛後ナデ。体部内面摩滅のため詳細は不明であるが一部に刷毛が残る。底部穿孔は内外から行う。	色調 淡黄白色 胎土 小石を含む 焼成 やや硬 残存 ½
土師器 脚台	412	脚径 7.2	わずかに内弯ぎみに開く脚台である。口縁端部はわずかに内面に突出する。	内外面横ナデ。	色調 灰褐色 胎土 精良 焼成 やや軟 残存 ⅙
	413	脚径 8.1	大きくほぼ直線的に開く脚台である。	413は口縁端部横ナデ。脚部外面篦磨き。脚部内面ナデ。414は内外面刷毛後ナデ。	色調 413、淡白褐色 414、淡褐色 胎土 413、精良 414、砂粒を含む 焼成 硬 残存 413⅛、414¼
	414	脚径 10.8			
土師器 高杯	415		浅い皿状の杯底部から、大きく外反して立ち上る口縁部である。	概ね内外面共篦磨き。415は摩滅のため手法は不明。416は杯口縁部と杯底部との接合部ナデ。	色調 415、淡褐色 416、明褐色、他は淡白褐色 胎土 415、精良、416、砂粒を含む、417、砂粒を多く含む 418、腐り礫等を含む 焼成 硬 残存 416⅛、418⅙、他は¼
	416				
	417				
	418				
	419	口径 28.0	口縁部は直線的に大きく開き、口縁端部はわずかにつまみ出されて面をなす。	口縁端部外面横ナデ。口縁端部内面及び口縁部内外面篦磨き。	色調 暗灰褐色 胎土 砂粒を含む 焼成 硬 残存 小破片
	421		中空の裾広がりに開く脚部である。	3方の円孔を上下2段に穿つ。脚部外面篦磨き。脚部内	色調 白褐色 胎土 腐り礫等を含む

土師器 高杯				面刷毛で上方にしぼり痕が出る。	焼成　硬
	422	裾径　14.2	大きく開く脚部であり、裾端部近くでわずかに内弯ぎみになる。裾端部は小さくつまみ出す。	裾端部横ナデ。脚部外面篦磨き。脚部内面刷毛。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬
	423	口径　15.6	口縁部は内弯して開き、口縁端部はやや外側に突出する。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面篦磨き。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片
	424	口径　19.0	口縁部は大きく開き、口縁端部近くでやや内弯する。	口縁部内外面篦磨き。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	425	裾径　15.5	裾部は大きく開く。裾端部は面をなす。	裾部内外面横ナデ。裾部内面上方刷毛。	色調　白褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　¼
	426	裾径　15.3	裾部はやや外反ぎみに大きく開き、裾端部をわずかにつまみ出す。	裾端部上端に刻み目を施す。4方に円孔を穿つ。裾端部横ナデ。裾部外面篦磨き。裾部内面刷毛後横ナデ。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　¼
	434		中空の脚柱部から大きく開く杯部である。	3方に円孔を穿つ。杯部内外面及び脚柱部外面篦磨き。脚柱部内面篦削り。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　⅓
土師器 器台	427	口径　10.2	受部は内弯ぎみに立ち上り、口縁端部は外傾面となる。中空の太い脚柱部である。	脚柱残存部下端に円孔を穿つが数は不明である。口縁端部横ナデ。受部内外面及び脚柱部外面篦磨き。脚柱部内面篦削り。	色調　淡茶褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	428	口径　15.4	受部は浅い皿状であり、内弯ぎみに立ち上る。中空の脚柱部が大きく開く。	脚柱部上方3方に円孔を穿つ。口縁部内外面及び脚柱部外面篦磨き。脚柱部内面篦削り。	色調　淡茶褐色 胎土　腐り礫を含む 焼成　硬 残存　½
	429	口径　12.4	受部は大きく外反して開き、口縁端部はやや上下に拡張する。	口縁端部外面に4条の櫛描平行線を施す。口縁部内面横ナデ。口縁部外面篦磨き。	色調　白褐色 胎土　腐り礫等を含む 焼成　硬 残存　⅙
	430 431		受部は内弯ぎみに大きく開く。中空の脚柱部である。	共に脚柱部上方に円孔を穿つが数は不明。受部内外面及び脚柱部外面篦磨き。脚柱部内面は430が刷毛後ナデ。431が篦削り。	色調　430、淡褐色 431、淡茶褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬
	432	口径　17.4	受部は大きく開き、口縁端部は下方に拡張しやや凹む。	口縁端部は横ナデ。口縁部内外面篦磨き。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	433	口径　16.8	受部は浅い皿状であり、口縁端部は面をなす。	内外面篦磨き	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片
土師器	420		丸底の底部である。	外面篦磨き。内面ナデ。	色調　明褐色

壺					胎土　精良 焼成　やや硬 残存　底部完存
土師器 鉢	435	口径　11.2	浅い皿状の鉢になると思われる。	内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片
	436	口径　15.8	口縁部は大きく開く。	口縁端部横ナデ。外面刷毛後篦磨き。内面刷毛後ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　1/6
	437	口径　16.4 器高　13.2	口縁部はわずかに内弯ぎみに開く。体部は扁平であり、ほぼ丸底である。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面及び体部内面刷毛後篦磨きであるが、体部内面部分的に強いナデ。体部外面篦磨き。	色調　淡赤黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/2 外面に煤が付着
	438	口径　16.0	丸い体部から屈曲して大きく外反する口縁部である。	口縁部内外面及び体部内面篦磨き。体部外面刷毛後篦磨き。	色調　淡黄白色 胎土　腐り礫等を含む 焼成　硬 残存　1/4
	439	口径　9.8	口縁部は内弯して立ち上る。	内外面刷毛。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　1/8
	440	口径　8.6 器高　5.6 底径　3.0	体部及び口縁部は内弯ぎみに立ち上る。中央が凹む底部である。	312は口縁端部及び外面上方横ナデ。内面刷毛。311は口縁端部横ナデ。外面ナデ。内面刷毛。	色調　440、淡褐色 441、明褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　440 1/4、441 1/3
	441	口径　10.6 器高　6.0 底径　3.6			
	442	口径　11.8 復元高　9.6	扁平な体部から曲折する頸部をもち、口縁部をさらに外反させたものである。丸底の部である。	口縁部に5条の櫛描き平行線文を施す。口縁部内外面横ナデ。体部外面上半刷毛。体部外面下半及び体部内面ナデ。	色調　淡灰褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　1/4
	443	口径　15.3	口縁部は内弯して立ち上る。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面刷毛後頸部内外面にのみナデ。	色調　淡灰褐色 胎土　精良 焼成　やや硬 残存　小破片 体部に煤が付着
	444	口径　20.0	短く曲折する頸部から、大きく外反する口縁部である。体部は肩が張らない。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面ナデ。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着
	445	口径　17.6 器高　11.4	扁平な体部から屈曲する頸部をもち、さらにやや外反ぎみに開く口縁部である。やや丸味をおびた底部である。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面は刷毛後ナデ。	色調　淡白褐色 胎土　微粒の金雲母片等を含む 焼成　やや硬 残存　2/3 外面底部以外に煤が付着
	447	口径　19.6	浅い皿状の体部から、曲折して外傾する口縁部である。	口縁部内外面及び頸部外面横ナデ。頸部内面及び体部内外面篦磨き。	色調　赤褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬

					残存　⅛
土師器 鉢	448	口径　10.3 器高　11.6	体部から口縁部にかけてゆるやかに内弯しながら立ち上る。	内外面ナデ。	色調　淡赤褐色 胎土　小石を含む 焼成　やや硬 残存　⅔
土師器 高杯	446	口径　17.6	口縁部は大きく直線的に立ち上り、口縁部外面下端に明瞭な稜をもつ。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面篦磨。	色調　淡茶褐色 胎土　腐り礫等を含む 焼成　硬 残存　⅙

（第２層）

土師器 壺	449		やや下ぶくれの丸い体部である。	残存部では上から３条の櫛描平行線文、刺突列点文６条の櫛描平行線文、刺突列点文、７条の櫛描平行線文、刺突列点文を施す。体部外面刷毛後施文。体部外面下方篦磨き。体部内面刷毛。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　¼
土師器 甕	450	口径　14.6	口縁部はくの字状になり、体部は肩が張らない。	口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛。頸部外面及び体部外面刷毛後ナデ。体部内面篦削り。	色調　赤褐色 胎土　小石を含む 焼成　やや硬 残存　⅙ 外面に煤が付着
	451	口径　14.1	口縁部は内弯して開き、口縁端部はやや外面肥厚する。	口縁部内外面刷毛後横ナデ。	色調　淡黄灰色 胎土　精良 焼成　軟 残存　¼
	452	口径　15.0	口縁部はくの字状に外反する。	口縁部内外面及び体部内面刷毛後横ナデ。体部外面刷毛。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　軟 残存　⅙ 外面に煤が付着
	453	口径　16.0	曲折する頸部から、やや外反ぎみに立ち上る口縁部である。	体部外面に篦描きの斜線文と２条の沈線を施す。口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛後施文。体部内面刷毛後ナデ。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　½ 外面に煤が付着
	454	口径　12.6	曲折する頸部から、短くほぼ直立する口縁部である。体部はあまり肩が張らない。	口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。体部内外面刷毛。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　¼ 外面に煤が付着
	455	口径　17.2	口縁部は内弯して立ち上り、口縁端部近くでやや短く直立する。	口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後ナデ。体部外面刷毛。体部内面ナデ。	色調　赤褐色 胎土　石英片等を含む 焼成　硬 残存　⅓ 外面に煤が付着
土師器 器台	456	口径　10.2	受部は浅い皿状である。	口縁部内外面篦磨き。	色調　灰褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　⅓
土師器	457		浅い皿状の坏底部で、外面	内外面ナデ。	

高杯			に明瞭な稜をもつ。	内外面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　石英片等を含む 焼成　硬 内外面に部分的に煤が付着
	458	裾径　10.3	裾部は大きく外反して開く。	裾端部及び内面下方横ナデ。外面篦磨き。内面上方篦削り。	色調　淡赤褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　1/6
土師器底部	459	底径　2.5	平底の底部である。	外面刷毛。内面不明。	色調　灰黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/4 内面に炭化物が付着
土師器脚台	460	脚径　8.0	短く裾広がりの脚台である。	外面ナデ。内面刷毛。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　1/6

（土坑１）

土師器壺	461	口径　10.4	口縁部は内弯ぎみに立上る。	口縁端部は横ナデ。口縁部内外面篦磨き。	色調　淡白褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/6
土師器甕	462	口径　14.7	口縁部はくの字状に立ち上り、口縁端部を上方につまみ出す。	462は外面叩き。内面刷毛後横ナデ。463は外面刷毛後叩き。内面横ナデ。	色調　暗白褐色 胎土　精良 焼成　462、硬 463、やや軟 残存　462、463小破片 463は外面に煤が付着
	463	口径　15.2			
	464	口径　14.3	口縁部は外反して開き、口縁端部は面をなす。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面刷毛後横ナデ。頸部外面は465の刷毛以外は横ナデ。	色調　464、暗白黄色、 465、淡灰褐色 470、明褐灰色 胎土　464、精良、他は砂粒を含む 焼成　硬 残存　464 1/4、465、470小破片 470は外面に煤が付着
	465	口径　15.6			
	470	口径　17.0			
	466	口径　15.9	口縁部はやや外反ぎみに開く。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面刷毛後横ナデ。頸部外面刷毛。	色調　淡黄白色 胎土　精良 焼成　やや硬 残存　小破片
	467	口径　16.1	口縁部はくの字状に外反し、口縁部中程にて外側に肥厚する。	口縁部内外面横ナデ。	色調　明褐灰色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　1/4
	468	口径　17.3	口縁部はやや外反ぎみに立ち上る。	内外面横ナデ。	色調　明褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/6
	469	口径　16.0	口縁部はやや内弯ぎみに立ち上る。	口縁部内外面横ナデ。頸部外面刷毛後横ナデ。	色調　灰褐色 胎土　砂粒を含む

土師器 甕					焼成　硬 残存　1/8
	471	口径　17.0	口縁部はやや外反して開き、口縁端部を内側に肥厚させる。	内外面刷毛後横ナデ。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片
土師器 壺	472	口径　22.5	曲折した頸部から、さらに大きく外反した口縁部である。口縁部中程外面に稜をもつ。	内外面篦磨き。	色調　淡灰褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/4
土師器 甕	473 476	口径　11.4 口径　13.3	曲折する口頸部から、口縁部を短く外反ぎみに立ち上らせたもの。	473は体部外面上方に1条の沈線を施す。口縁部内外面横ナデ。頸部内面及び体部外面刷毛。476は口縁部内外面横ナデ。体部外面櫛状工具による粗い文様。体部内面ナデ。	色調　473、淡灰黄色、 476、淡褐灰色 胎土　473、精良 476、砂粒を含む 焼成　硬 残存　473小破片、476 1/5 473は外面に煤が付着
	474	口径　12.5	曲折する口頸部から、口縁部をやや外傾ぎみに立ち上らせ、口縁端部を外方へつまみ出している。	内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬
	475 480 481	口径　14.0 口径　15.2 口径　17.0	曲折する口頸部から、口縁部を外傾ぎみに立ち上らせたもの。	475は口縁部外面に1条の篦描き沈線を施す。3点とも内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬
	477	口径　13.4	曲折する口頸部から、ほぼ直立する口縁部であり、口縁端部は外側に突出する。	口縁部外面屈曲部に刻み目を施す。口縁部内外面横ナデ。体部外面櫛状工具による粗い文様。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/4
	478 482	口径　14.4 口径　13.4	肩の張った体部から、短く曲折する口頸部をもち、口縁部をさらに屈曲させて、口縁端部を外側に突出させている。	口縁部内外面横ナデ。体部内面ナデ。体部外面は478がナデ。482が粗い刷毛。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片 478は外面に煤が付着
	479	口径　14.8	曲折する口頸部から、口縁部を短く外傾させたもので、口縁端部を強く外傾させる。	口縁部内外面横ナデ。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/6
	483	口径　15.2	曲折する口頸部から、口縁部を直立させたものである。	口縁部内外面横ナデ。頸部外面刷毛。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬
	484	口径　16.6	曲折する口頸から、さらにく外反させた口縁部であり、口縁端部は外傾面となる。	内外面横ナデ。	色調　淡白褐色 胎土　精良 焼成　やや軟 残存　小破片
	485 486	口径　14.6 口径　15.4	短く曲折する頸部から、口縁部は大きく外反して立ち上る。	口縁部外面に485は3条の486は3条が2組の擬凹線を施す。口縁部内外面及び頸部外面横ナデ。頸部内面刷毛。体部内面篦削り。	色調　485、淡褐灰色、 486、暗灰褐色 胎土　精良 焼成　485、やや軟 486、硬 残存　485小破片、486 1/8 486は外面に煤が付着
	487	口径　15.6	短く曲折する頸部から、口縁部はやや外反ぎみに立ち上	口縁部内外面刷毛後横ナデ。頸部外面横ナデ。頸部内面ナ	色調　淡赤灰色 胎土　精良

			る。	上げ。	焼成　硬 残存　1/6
土師器 底部	488	底径　3.3	凹み底の底部である。非常に薄手の作りである。	体部外面刷毛を斜格子状にする。体部内面ナデ上げ。	色調　淡黄灰色 胎土　精良 焼成　硬 残存　底部完存
	489	底径　5.3	平底の底部である。	体部外面ナデ。体部内面刷毛後ナデ。	色調　淡灰黄色 胎土　砂粒を含む 焼成　底部完存 外面に煤付着
	490	底径　5.1	中央部が凹む底部である。	490は外面ナデ。内面刷毛。491と492は内面刷毛。	色調　490、暗灰褐色、 491、暗灰黄色、 492、淡灰黄色 胎土　492、精良 他は砂粒を含む 焼成　硬 残存　490 1/2、492 1/4 490は内面に炭化物が付着
	491	底径　3.8			
	492	底径　4.2			
	493	底径　2.8	平底の底部である。	体部外面刷毛。体部内面不明。	色調　淡灰褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/4 外面に煤、内面に炭化物が付着
土師器 甑	494	底径　3.3	平底の底部である。	体部外面刷毛。体部内面刷毛後ナデ。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　やや硬 残存　1/4
土師器 鉢	495	口径　9.8	丸い体部から短く外反する口縁部である。	口縁端部から口縁部外面は横ナデ。口縁部内面篦磨き。体部内外面ナデ。	色調　淡白褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　1/3
土師器 壺	496		丸い体部である。	体部外面篦磨き。体部内面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/3
土師器 高杯	497	口径　16.0	口縁部は内弯ぎみに立ち上り、口縁端部近くでやや外反する。	内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　1/5
土師器 脚台	498	脚径　9.2	ほぼ直線的に大きく開く脚台である。	内外面横ナデ。	色調　淡褐灰色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　1/6

（ピット11）

土師器 高杯	499	裾径　11.4	大きく開く脚裾部である。	内外面横ナデ。	色調　明褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　1/6 内面にヘラ記号。内面に煤が付着

（溝１）

土師器 鉢	５００	口径　１２.０	扁平な体部から、ゆるく外反する口縁部である。	口縁部内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片

（溝２）

土師器 高杯	５０１	口径　１７.４	口縁部は大きく開く。	口縁端部外面に１条の沈線を施す。口縁端部及び口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　⅙
	５０２ ５０３		浅い皿状の杯底部である。	502は外面刷毛。内面ナデ。503は外面刷毛後ナデ。内面刷毛。	色調　502、淡明褐色 503、淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬
	５０４		中空の脚柱部。	外面磨滅のため手法は不明。内面篦削り。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬
	５０５		大きく開く脚部。	３方の円孔を２段に穿つ。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　½

（溝３）

土師器 甕	５０６	口径　１７.６	口縁部は大きく外反する。	口縁端部及び口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。	色調　淡茶褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	５０７	口径　１９.２	口縁部は大きく外反し、口縁端部は面をなす。	口縁部内外面横ナデ。	色調　淡茶褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　⅙
	５０８	口径　１５.２	口縁部は外反し、口縁端部に１条の沈線を施す。	口縁端部及び口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。	色調　暗灰褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	５０９	口径　１４.４	口縁部は大きく外反し、口縁端部は内側に肥厚する。頸部内面に明瞭な稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ。体部外面ナデ。体部内面篦削り。	色調　淡茶褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　⅛ 外面に煤が付着
	５１０ ５１２	口径　１６.２	丸味をおびた体部から、やや内弯ぎみに開く口縁部であり、口縁端部はわずかに内側に肥厚する。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛後ナデ。体部内面篦削り。	色調　淡褐色 胎土　510、砂粒を含む 512、砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　⅛ 510は外面に煤が付着
	５１１	口径　１５.２	口縁部は大きく外反し、口	口縁部内外面横ナデ。	色調　淡褐色

			縁端部は内側に肥厚する。		胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片
	513	口径　12.4	曲折する頸部から、さらに短く直立させた口縁部である。口縁端部上面はやや凹む。	口縁部内外面横ナデ。	色調　淡黄褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片
	514	口径　12.8	曲折する頸部から、さらに外反させた口縁部である。	口縁部内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　514、515小破片
	515	口径　12.4			
土師器 底部	516	底径　3.6	突出ぎみの平底。	516は体部外面叩き。体部内面ナデ上げ。518は体部内外面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　516、砂粒を多く含む、518、砂粒を含む 焼成　硬 残存　516、底部完存 518 ¼
	518	底径　3.9			
	517		やや丸くなっている平底	体部外面ナデ。体部内面刷毛。	色調　暗灰褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　½ 体部内面に炭化物付着
	519	底径　4.7	平底の底部である。	体部内外面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　⅓
土師器 高杯	520	口径　18.2	浅い皿状の杯底部から、大きく外反する口縁部である。	520は口縁部内外面横ナデ。521は磨滅のため手法は不明。	色調　520、赤褐色 521、淡褐色 胎土　520、腐り礫等を含む、521、砂粒を多く含む 焼成　520、やや軟 521、硬 残存　520 ⅓、521小破片
	521	口径　15.8			
	522	口径　14.8	口縁部は内弯ぎみに開く。	口縁部内外面横ナデ。	色調　淡茶褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　やや硬 残存　¼
	523	口径　15.4	口縁部は直線的に開く。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面篦磨き。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　⅓
	525		漏斗状に開く脚部から、浅い皿状の杯底部をもつ。	外面篦磨き。脚部内面篦削り。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬
	526	裾径　14.8	裾部は大きく開く。	磨滅のため手法は不明。	色調　乳白色 胎土　精良 焼成　軟 残存　¼
	527	裾径　13.6	裾部は大きく開き、裾端部は外面に面をなす。	裾端部外面に1条の沈線を施す。裾部内外面横ナデ。裾部内面上方篦削り。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬

					残存　⅙
土師器 器台	524		上下に大きくくの字状に開く。	3方に円孔を穿つ。外面篦磨き。脚柱部内面篦削り。	色調　淡白褐色 胎土　精良 焼成　硬
土師器 鉢	528	口径　10.6 器高　5.7	体部はゆるやかに内弯しながら開き、口縁部はやや外反している。	口縁部内外面及び体部外面ナデ。体部内面上方篦削り。底部外面刷毛後ナデ。体部内面下方及び底部内面は押圧後ナデ。	色調　赤褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　やや硬 残存　⅓
	531	口径　11.2	口縁部は内弯して立ち上る。	口縁部内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　⅙
土師器 甑	529	底径　3.8	中央部がやや凹む平底。	体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　底部完存
土師器 壺	530		やや扁平な体部から外反する口縁部である。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	色調　暗灰褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　¼

（土坑２－１）

土師器 甕	532	口径　17.0	概ね口縁部は内弯して立ち上り、口縁端部は内側に肥厚する。体部は球形である。	概ね口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調　533、536、赤褐色 538、淡黄白色、539、茶褐色、542、545、550、淡赤褐色、543、544、淡茶褐色、546、白褐色、551、淡黄褐色 他は淡灰褐色 胎土　533、534、551、砂粒を多く含む、538、545、546、砂粒を含む、他は精良 焼成　533、やや軟、538、539、やや硬、他は硬 残存　533⅘、534、538、551⅓、537、540、543⅛、541、543、544、545、547、小破片、536、539½ 533、534、538、539、540、541、543、544は外面に煤が付着
	533	口径　15.6			
	534	口径　19.2			
	536	口径　15.6			
	537	口径　16.6			
	538	口径　15.0			
	539	口径　16.9			
	540	口径　14.2			
	541	口径　13.2			
	542	口径　15.6			
	543	口径　15.6			
	544	口径　15.0			
	545	口径　15.1			
	546	口径　15.1			
	547	口径　16.0			
	549	口径　16.5			
	550	口径　17.0			
	551	口径　15.2			
	535	口径　15.0	口縁部は直線的に開き、口縁端部は上方につまみ出す。	口縁部内外面横ナデ。	色調　灰褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片
	548	口径　15.2	口縁部は内弯して立ち上り、	口縁部内外面横ナデ。体部	色調　淡灰褐色

			口縁端部近くでほぼ短く直立する。口縁端部は内側に肥厚する。	外面刷毛後横ナデ。体部内面篦削り。	胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　1/6 体部外面に煤が付着
土師器 底部	552	底径　4.8	中央がやや凹む底部である。	552は体部内外面ナデ。553は体部外面刷毛後ナデ上げ。体部内面刷毛。	色調　552、黒褐色、553、淡灰褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　552小破片、553 1/5
	553	底径　4.0			
土師器 脚台	554	脚径　7.0	やや内弯ぎみに開く脚台である。	外面口縁端部は横ナデ。口縁部内外面は刷毛。	色調　淡赤褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　1/6
土師器 高杯	555	口径　9.0	口縁部は内弯して立ち上り、口縁端部はやや内側に肥厚する。	口縁部内外面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　やや軟 残存　1/8 外面に煤が付着
土師器 器台	556		脚部は大きく開く。	3方に円孔を穿つ。外面篦磨き。内面ナデ。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/3
	557	裾径　12.2	裾部は大きく開く。	内外面横ナデ。	色調　灰褐色 胎土　精良 焼成　やや軟 残存　1/8

（土坑2－2）

土師器 甕	558	口径　11.0	口縁部は外反ぎみに立ち上る。体部はあまり肩が張らない。	口縁部内外面及び胴部外面横ナデ。胴部内面ナデ上げ。	色調　淡赤褐色 胎土　少量の腐り礫等を含む 焼成　やや硬 残存　1/5
	559	口径　12.3	口縁部は外反して開く。	口縁部外面刷毛後横ナデ。口縁部内面横ナデ。	色調　赤褐色 胎土　精良 焼成　やや軟 残存　1/3
	560	口径　11.8	口縁部は内弯ぎみに立ち上り、口縁端部は内面肥厚する。	口縁部内外面横ナデ。	色調　560、566、淡灰褐色、561、565、淡茶褐色、563、白黄色、564、暗茶褐色、567、571、褐色、568、淡黄灰色、570、白茶褐色 胎土　561、563、565、568、570、砂粒を含む。他は精良 焼成　560、軟、563、565、570、やや硬、564、568、やや軟、他は硬
	561	口径　14.4			
	563	口径　13.7			
	564	口径　14.2			
	565	口径　14.5			
	566	口径　14.6			
	567	口径　14.6			
	568	口径　15.4			
	570	口径　15.9			
	571	口径　16.2			

土師器 甕					残存　560、571 1/8、 561 1/5、他は小破片 560、563、564、568、 570、571は外面に煤が 付着
	562	口径　12.9	口縁部はほぼ直線的に外に開き、口縁端部は外傾し内側にやや肥厚する。	口縁部内外面横ナデ。	色調　黒褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	569	口径　14.9	口縁部はくの字状にやや外反し、口縁端部を上方につまみ上げる。	口縁部内外面横ナデ。体部内面篦削り。	色調　淡茶褐色 胎土　長石片等を含む 焼成　やや硬 残存　1/5
	572	口径　11.2	曲折する口頸部から、口縁部は短く直立し、口縁端部が外側に突出し上面がやや凹む。	口縁部内外面横ナデ。	色調　淡灰色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着
	573	口径　14.0	曲折する口頸部から、口縁部は短く外反し、口縁端部は外側に突出する。	口縁部内外面横ナデ。	色調　淡灰色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　小破片
	574		口縁部は内弯ぎみに立ち上る。体部は肩が張らない。	口縁部外面上方及び口縁部内面横ナデ。口縁部外面下方刷毛。	色調　淡黄灰色 胎土　金雲母片等を含む 焼成　やや硬 残存　1/5
	575	口径　16.6	口縁部は内弯ぎみに立ち上り、上方において屈曲して真直に立ち上る。	口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。	色調　茶褐色 胎土　腐り礫等を含む 焼成　硬 残存　1/5 外面に煤が付着
土師器 脚台	576	脚径　6.3	やや外反ぎみに開く脚台部である。	内外面刷毛。	色調　白灰色 胎土　砂粒を含む 焼成　やや硬 残存　1/5
	577	脚径　8.1	やや内弯ぎみに開く脚台部である。	外面刷毛。内面ナデ。	色調　白灰色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　1/5
土師器 底部	578	底径　3.1	平底の底部である。	内外面ナデ。	色調　白黄色 胎土　578、砂粒を含む、 579、金雲母片等を含む 焼成　やや軟 残存　578、底部完存、 579 1/2
	579	底径　4.2			
土師器 高杯	580	裾径　17.8	裾部は大きく開く。	外面篦削り。内面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片

（土坑２－７）

土師器 壺	５８１	口径　１６.２	胴の張った体部から、短く直立する頸部をもつ。口縁部は大きく外反し、端部を垂下させる。上端はわずかにつまみ上げる。底部は平底と思われる。	口縁垂下部外面に９条の平行線を、上端部に列点文を、体部上面に平行線と列点を施す。口縁端部横ナデ。口頸部外面刷毛。口頸部内面篦磨き。体部外面刷毛後篦磨き。体部外面上方の文様は刷毛後施文。体部内面ナデ。底部内外面刷毛。	色調　灰褐色 胎土　精良 焼成　軟 残存　口縁部⅙
	５８２		浅い杯底部から大きく外反する口縁部をもつ。	内外面篦磨き。	色調　赤褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　⅓ 内外面丹塗り
土師器 器台	５８３	裾径　１３.４	裾部は外反ぎみに大きく開く。裾端部は外側に面をもち、やや中央部が凹む。	外面篦磨き。内面篦削り。裾端部は横ナデ。583は３方に円孔を穿つ。	色調　赤褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　583 ½、584 ⅙ 583は内外面、584は外面に丹塗り。
	５８４	裾径　１２.２			
	５８５	裾径　１３.４	裾部は直線的に大きく開く。	３方に円孔を穿つ。外面及び坏部内面篦磨き。裾部内面刷毛で上方のみその後篦削りを行う。	色調　赤褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　脚部完存

（土坑２－８）

土師器 壺	５８６		体部は球体である。	外面頸部及び肩部に貼付突帯を施し、その上を頸部のみ刻み目、肩部には竹管文を施し、その突帯間に櫛描直線文を、突帯下方にも櫛描直線文、及び刻み目を施す。下方の刻み目は刷毛後に施される。内面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬
	５８７		体部は球体である。	体部上方に５条の櫛描平行線及び刺突列点文を施す。体部外面は部分的に刷毛後篦磨き。体部内面ナデにて粘土紐の接合部を消している。	色調　淡赤褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　½
土師器 甕	５８８	口径　１４.８	口縁部はほぼ直線的に立ち上る。体部は球形に近いものと思われる。	口縁部内外面及び体部内外面刷毛後ナデ。	色調　淡茶褐色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　やや硬 残存　¼ 外面に煤が付着
土師器 底部	５８９	底径　５.４	平底の底部である。	体部外面篦磨き。体部内面刷毛。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　⅓

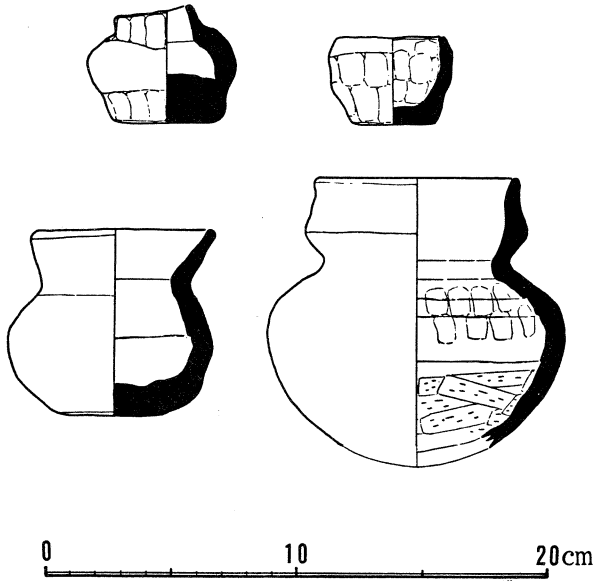
（土坑３－１）

土師器	５９０	口径　１６.０	口縁部は外反して開き、口	口縁部外面横ナデ。口縁部	色調　暗灰黄色

甕	591	口径　16.6	縁端部は面をなす。	内面刷毛後横ナデ。	胎土　精良 焼成　硬 残存　590 1/6、591 小破片 590 は外面に煤が付着
	592	口径　15.8	口縁部はほぼ直線的に立ち上り、口縁端部は内側に肥厚する。	内外面横ナデ。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着
	593	口径　16.6	口縁部はやや内弯ぎみに立ち上り、口縁端部はやや内側に肥厚する。	内外面横ナデ。	色調　暗灰色 胎土　精良 焼成　やや軟 残存　小破片
	594	口径　11.2	曲折する口頸部から、さらにやや短く立ち上る口縁部であり、口縁端部は外傾してやや垂下する。	口縁部内外面横ナデ。体部外面は櫛状工具による刷毛。体部外面ナデ	色調　淡褐黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片
	595	口径　14.2	曲折する口頸部から、さらにやや外反する口縁部であり、口縁端部は外側に突出する。	口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。体部内外面ナデ。	色調　淡灰黄色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片 外面に煤が付着
	596	口径　13.0	口縁部はくの字状に外反し、口縁端部は面をなす。	口縁部外面刷毛後横ナデ。口縁部内面横ナデ。体部内外面刷毛。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 外面に煤が付着
	597	口径　17.0	口縁部はくの字状に外反し、内面にやや稜をもつ。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面刷毛。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 外面に煤が付着
	598	口径　12.5	曲折する頸部から、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内外面横ナデ。頸部外面に2条以上の櫛描平行線を施す。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 外面に煤が付着
	599	口径　14.0	口縁部はくの字状に外反する。	口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 外面に煤が付着
土師器 底部	600	底径　4.2	凹み底の底部である。	体部外面叩き後ナデ。体部内面刷毛。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 外面に煤が付着
土師器 高杯	601		口縁部は直線的に開く。	内外面刷毛後篦磨き。	色調　淡褐灰色 胎土　砂粒を含む 焼成　硬 残存　小破片
	602	裾径　14.2	裾部はやや外反ぎみに大きく開く。	内面は横ナデ。外面は602が篦磨き。603は刷毛後横ナデ。	色調　淡褐灰色 胎土　精良 焼成　硬 残存　602、603小破片
	603	裾径　11.7			

（溝６－１）

弥生式土器 鉢	６０４	口径　１４.８	短く曲折する頸部から、ほぼ直立する口縁部である。体部は扁平である。	口縁部及び肩部に刺突列点文を施す。貼付突帯文の上部に波状文を施す。口縁部内外面横ナデ。頸部内面粗い刷毛。体部外面刷毛後文様を施す。体部内面強いナデ。	色調　黒色 胎土　砂粒を多く含む 焼成　硬 残存　¼ 外面に煤が付着



第22図　樋門付近採集の土器

第4表　第二次調査出土土器

器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質土器小皿	605	口径　12.6 器高　1.6	中央がやや凹む底部から外反する口縁部である。	口縁部内外面横ナデ。底部外面不調整。	色調　明黄褐色 胎土　精良 焼成　軟 残存　¼ 層位　第2層
土師器鉢	606	口径　8.8	丸い体部から短くほぼ直立する口縁部である。	口縁部内外面強い条痕。体部外面横ナデ。体部内面ナデ。	色調　暗褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　¼ 層位　第2層
須恵器坏蓋	607	口径　13.2	天井部と口縁部との境には明瞭な稜がある。口縁部はやや内弯し、口縁端部はやや外側につまみ出す。	口縁部内外面及び天井部内面ロクロナデ。天井部外面篦削り。	色調　青灰色 胎土　精良 焼成　硬 残存　⅓ 層位　第2層
土師器壺	608	口径　11.0	口縁部は内弯ぎみに外傾する。	口縁端部外面に4条の櫛描平行線を施す。口縁部外面刷毛後篦磨き。口縁部内面篦磨き。頸部外面刷毛。	色調　褐黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　¼ 層位　第2層
	609	口径　13.0	口縁部は内弯ぎみに上方へ立ち上る。	口縁端部内面に2条の沈線を施す。口縁端部から口縁部内面刷毛後横ナデ。口縁部外面篦磨き。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　小破片 層位　第2層
	610	口径　10.6 器高　13.0	口縁部は短く外反する。体部は丸味をおび、わずかに突出ぎみの小さな底部である。	摩滅のため詳細は不明であるが、体部外面下方刷毛後篦磨き。体部内面刷毛。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　やや軟 残存　⅓ 層位　第2層
	611	口径　7.0	口縁部は曲折して外反する。曲折部外面に凸帯がめぐる。	口縁部内外面刷毛後横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　やや軟 残存　口縁部完存 層位　第2層
	612	口径　9.8 器高　13.2	口縁部は大きく開き、体部は丸味をおび、丸底の底部である。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　完形 層位　第2層
土師器甕	613	口径　15.8 器高　24.4	口縁部はくの字状に大きく外反し、やや長めの体部であり丸底である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調　黒色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　やや硬 残存　½ 層位　第2層
	614	口径　13.8	概ね口縁部は内弯ぎみに立ち上り、口縁端部は内側に肥厚する。丸い体部で丸底である。616のみ口縁部がやや外	概ね口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削り。625は体部外面ナデ。	色調　614　暗褐色 617、621、622、624黒色、619淡灰黄色、他は淡褐色
	615	口径　15.0			
	616	口径　16.0			
	617	口径　12.0			

	618 619 621 622 623 624 625	口径 15.0 口径 14.9 口径 17.0 口径 17.4 口径 15.0 口径 19.4 口径 17.2	反している。		胎土 614、619精良 617、622砂粒を含む。他は砂粒を多く含む。 焼成 618、619やや軟 621やや硬、他は硬 残存 615、625 1/4、616 1/10、617、621 1/8 619、622 1/3、624小破片、他は1/6 層位 第2層 615、616、618、625は外面に煤が付着
	620	口径 18.8	口縁部は外反し、口縁端部を内側にわずかに肥厚させたもの。	口縁部内外面及び肩部外面横ナデ。体部外面刷毛後ナデ。体部内面篦削り。	色調 白褐色 胎土 砂粒を多く含む。 焼成 硬 残存 1/6 層位 第3層 内面に炭化物付着
	626	口径 15.4	大きく曲折する頸部から、短くほぼ直立する口縁部である。口縁端部は外側に突出する。	口縁部内外面横ナデ。	色調 淡白黄色 胎土 精良 焼成 硬 残存 1/3 層位 第2層
土師器 底部	627 629	底径 5.0 底径 5.3	中央がやや凹む底部である。	627は体部内外面刷毛。 629は体部外面篦磨き。体部内面刷毛。	色調 627、淡灰褐色 629、淡褐色 胎土 砂粒を多く含む。 焼成 627、軟 629、硬 残存 627、底部完存 629 1/2 層位 第2層
	628 630	底径 6.0 底径 5.5	平底の底部である。	外面ナデ。内面刷毛。	色調 628、淡明褐色 630、淡灰褐色 胎土 628、砂粒を多く含む。630、砂粒を含む。 焼成 628、やや硬 630、硬 残存 628、底部完存 630 1/3 層位 第2層 628は外面に煤が付着
土師器 鉢	631	口径 5.4 器高 4.3 底径 4.5	わずかに凹む底部から内弯ぎみに立ち上る口縁部である。	口縁部外面及び口縁端部ナデ。口縁部内面篦削り。手づくねである。	色調 暗灰褐色 胎土 砂粒を多く含む。 焼成 硬 残存 完形 層位 第2層
	632		やや肩の張った扁平な体部である。	頸部内面刷毛。体部内外面ナデ。	色調 暗褐色 胎土 砂粒を多く含む。 焼成 硬 残存 1/3 層位 第2層
	633		浅い皿状の体部から、口縁	体部外面ナデ。体部内面篦	色調 淡褐色

			部を水平に近く曲折させ口縁端部をさらに外反させたもの。	磨き。	胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片 層位　第２層
土師器 高杯	６３４		丸い椀形の杯部である。	内外面篦磨き。外面は粗く縦方向に磨き後横方向に丁寧に磨き直す。	色調　赤褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 層位　第２層
	６３５		浅い皿状の杯底部から、大きく外反する口縁部であり、口縁部と杯底部との境に明瞭な稜をもつ。	杯部内外面篦磨き。	色調　茶褐色 胎土　精良 焼成　硬 層位　第２層
	６３６		浅い杯底部から、外上方へのびる口縁部であり、口縁部と杯底部との境に明瞭な稜をもつ。脚部は外反して大きく開く。	脚部中程に４方の円孔を穿つ。杯部内外面及び脚部外面篦磨き。脚部内面篦削り。	色調　暗褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　やや軟 層位　第２層
	６３７		丸い椀形の杯部に、やや外反ぎみに開く脚部である。	杯部外面ナデ。杯部内面及び杯底部から脚部外面篦磨き。脚部内面篦削り。円孔の数は不明。	色調　淡黄茶色 胎土　砂粒を含む。 焼成　軟 層位　第２層
	６３９	裾径　１１.３	中空の脚柱部から、大きく外反する裾部である。	脚柱部外面篦磨き。脚柱部内面篦削り。裾部外面横ナデ。裾部内面刷毛。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　やや硬 残存　脚柱部完存 層位　第２層
	６４０	口径　１７.２	口縁部は外反ぎみに大きく開く。	内外面摩滅のため手法は不明。	色調　淡明褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　軟 残存　小破片 層位　第２層
	６４１	口径　１７.０	浅い杯底部から、ゆるく曲折して外反する口縁部である。	口縁端部及び口縁部外面上方横ナデ。口縁部外面下方刷毛。口縁部内面刷毛後横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　3/4 層位　第２層
	６４２	口径　１７.６	口縁部は大きく外反する。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面刷毛後横ナデ。	色調　黒色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/4 層位　第２層
	６４３		口縁部は大きく開く。	口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。	色調　灰黄色 胎土　砂粒を含む。 焼成　やや硬 残存　1/10 層位　第２層
	６４４	裾径　１１.３	脚部は大きく開く。	円孔の数は不明。脚部外面刷毛後篦磨き。脚部内面刷毛、裾端部横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　硬 残存　1/6 層位　第２層
	６４５	裾径　１５.７	脚部は大きく開き、裾端部をわずかにつまみ出す。	脚部上方４方に円孔を穿つ。脚部外面篦磨き。脚部内面刷	色調　淡褐灰色 胎土　砂粒を含む。

				毛後篦削り。裾端部横ナデ。	焼成　硬 層位　第２層
	６４６	裾径　１６.５	裾部は大きく開く。	内外面横ナデ。	色調　褐黄色 胎土　精良 焼成　やや軟 残存　⅙ 層位　第２層
	６４７ ６４８		中空の脚柱部から、大きく開く裾部である。	647は脚柱部外面篦磨き。脚柱部内面篦削り。648は脚柱部内面ナデ。脚柱部内面篦削り。裾部外面刷毛後横ナデ。裾部内面横ナデ。	色調　647、淡茶褐色 648、淡褐色 胎土　647、精良 648、砂粒を多く含む。 焼成　647、硬 648、やや硬 残存　脚柱部完存 層位　第２層
土師器 器台	６３８		皿状の受部と中空の裾広がりの脚部である。	脚部やや上方３方に円孔を穿つ。脚部外面及び中央の穿孔部篦磨き。脚部内面刷毛。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　硬 残存　脚部完存 層位　第２層
土師器 壷	６４９	口径　１９.８	外傾ぎみにほぼ直立する頸部から、大きく外反する口縁部である。口縁部下端は突出する。	口縁端部及び口縁部外面横ナデ。口縁部内面及び頸部外面篦磨き。口頸部内面刷毛後ナデ。	色調　赤褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　硬 残存　¼ 層位　第３層
	６５０	口径　１８.４	口縁部は大きく外反し、口縁端部は下方に垂下している。	口縁端部横ナデ。口縁端面及び口縁部内面篦磨き。口縁部外面刷毛、頸部外面篦磨き。	色調　灰褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　½ 層位　第３層
	６５１	口径　１３.０ 器高　２４.８ 底径　５.２	丸味をおびた長目の体部から、大きく外反する口縁部である。中央が凹む底部である。	口縁端部及び頸部外面横ナデ。口縁部外面下半及び体部外面及び底部内面刷毛。口縁部内面刷毛後横ナデ。体部内面及び底部外面ナデ。	色調　淡明褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　やや硬 残存　口縁部¼ 体部完存 層位　第３層
	６５２	口径　１２.０ 器高　２９.５ 底径　５.１	丸味をおびた長目の体部から外反する口縁部である。突出した平底の底部である。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面篦磨き。体部外面刷毛後篦磨き。体部内面刷毛。	色調　淡茶褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　やや硬 残存　ほぼ完存 層位　第３層 外面に煤が付着。
	６５３	口径　１５.０ 底径　５.６	丸い体部から短く外反する口縁部である。平底の底部である。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面及び体部外面篦磨き。肩部内面及び体部内面下方刷毛。体部内面上方ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　やや軟 残存　½ 層位　第３層 体部外面下半に煤が付着。
	６５４	口径　１５.６	あまり肩の張らないやや長目の体部から、外反する口縁部である。頸部内面に稜をもち、平底の底部である。	口縁端部及び口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。体部外面刷毛後ナデ。体部内面篦削り。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　¼

土師器					層位　第３層
壺	６５５		丸味をおびた体部から、外反する口縁部である。中央がやや突出した底部である。	体部外面及び底部外面篦磨き。体部内面摩滅のため手法は不明。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　やや軟 残存　½ 層位　第３層
	６５６	口径　１１.４ 器高　１５.７	扁平な球形の体部から、内弮ぎみに外上方へ開く口縁部である。丸底の底部である。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面及び体部外面篦磨き。体部内面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　口縁部⅕ 体部完存 層位　第３層
	６５７	口径　１０.３ 器高　１５.０	球形に近い体部から、内弮ぎみに外上方へ開く口縁部である。丸底の底部である。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面及び体部外面篦磨き。体部内面上方篦削り。体部中程より下方ナデで、部分的に刷毛。	色調　明茶褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　完形 層位　第３層
	６５８		扁平な体部に平底ぎみの底部である。	体部外面刷毛後篦磨き。体部内面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　やや硬 残存　底部完存 体部⅓ 層位　第３層 外面に煤が付着。
	６５９	口径　１０.０ 器高　２８.５ 底径　３.８	やや長目の胴部から、口縁部は短く外反する。平底の底部である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面及び体部内面下方刷毛。体部外面下方及び体部内面中位篦削り。	色調　灰褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　硬 残存　ほぼ完形 層位　第３層 外面に煤が付着。
	６６０	口径　２２.０	口縁部は大きく外反し、口縁端部は上下にわずかに肥厚する。	口縁端面に３条の擬凹線を施した後、刻目をつける。頸部外面には一条の貼付突帯を施す。口縁端部は横ナデ。口縁部内外面及び頸部内外面及び体部内外面篦磨き。	色調　淡明褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　やや硬 残存　⅙ 層位　第３層
	６６１	口径　１６.４ 器高　３２.１ 底径　６.７	あまり肩の張らない丸い体部から、大きく外反する口縁部である。口縁端部は面をなす。平底の底部である。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面刷毛。体部外面刷毛後篦磨き。底部外面及び体部内面刷毛。	色調　暗褐色 胎土　精良 焼成　やや軟 残存　完形 層位　第３層 外面に煤が付着。
	６６２	口径　１４.０	丸い体部から短く外反する口縁部である。	口縁部外面上半及び口縁部内面刷毛。口縁部外面下半及び体部内外面刷毛で、外面中程に部分的に篦磨きが残る。	色調　淡明褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　硬 残存　体部上半完存 体部下半⅙ 層位　第３層 外面に煤が付着。
	６６３		肩の張った体部から大きく外反する口縁部である。	口縁部外面及び体部外面刷毛後篦磨き。口縁部内面刷毛後横ナデ。体部内面上半刷毛。体部内面下半刷毛後篦削り。	色調　淡明褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　¼

					層位　第３層
	６６４	口径　１２.２ 器高　１７.５	丸い体部から内弯ぎみに外上方へ大きく開く口縁部である。丸底の底部である。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面及び体部外面篦磨き。体部内面刷毛。	色調　淡明褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　硬 残存　口縁部⅕、体部完存 層位　第３層
	６６５		丸味をおびた体部から、外傾する口縁部である。底部はわずかに平底の痕跡が残る。	口縁部内外面及び体部外面上半は摩滅のため手法は不明。体部外面下半篦磨き。体部内面刷毛。	色調　淡褐色 胎土　長石片等を含む。 焼成　硬 残存　体部完存 層位　第３層
土師器 鉢	６６６	口径　１５.４ 器高　７.０ 底径　４.５	平底の底部から外上方へのびる体部であり、口縁端部はやや凹む。	口縁端部横ナデ。体部内外面刷毛。	色調　暗灰色 胎土　微粒の石英片等を含む。 焼成　硬 残存　ほぼ完形 層位　第３層 分割成形による逆円錐台部分を鉢に転用。
	６６７		浅い皿状の体部から、曲折する口頸部である。	体部内外面篦磨き。	色調　淡黄褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片
土師器 壷	６６８		扁平な体部に丸底をもつ。	体部外面刷毛後篦磨き。体部内面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　やや硬 残存　½ 層位　第３層
	６６９		扁平な体部から内弯ぎみに外上方へのびる口縁部である。	口縁部内外面及び頸部外面横ナデ。肩部内面篦削り。体部外面刷毛。体部内面は摩滅のため手法は不明。	色調　淡黄褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　軟 残存　¼ 層位　第３層
土師器 底部	６７０ ６７１	底径　４.７ 底径　３.１	中央がわずかに凹む平底である。	670は外面ナデ上げ。内面刷毛。671は外面篦削り。内面篦磨き。	色調　670、黒灰色 671、淡茶褐色 胎土　670、精良 671、砂粒を含む。 焼成　硬 残存　670¼、671、底部ほぼ完存 層位　第３層
	６７４	底径　４.４	わずかに中央が凹みぎみの平底である。	外面叩き。内面クモノ巣状の刷毛。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　底部完存 層位　第３層
土師器 鉢	６７２	口径　１６.０	口縁部は内弯して立ち上り、口縁端部は外側に大きく肥厚する。	口縁端部横ナデ。口縁部外面ナデ。口縁部内面刷毛。	色調　淡茶褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　⅙ 層位　第３層
土師器 甕	６７７	口径　１７.８ 底径　４.７	肩の張らないやや下ぶくれの体部から、口縁部は短く外	口縁部外面上方及び口縁部内面横ナデ。口縁部外面下方	色調　白黄色 胎土　砂粒を含む。

土師器甕			反する。凹み底の底部である。	刷毛。体部外面叩き後刷毛。体部内面ナデ。体部内外面に粘土の接合痕が明瞭に残る。	焼成　軟 残存　体部½、底部完存 層位　第３層
	６７３	口径　１３.０ 器高　１３.１ 底径　　３.１	口縁部はくの字状に短く外反し、口縁端部はわずかに面となる。扁平な体部に中央が凹む底部である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面叩き。体部内面刷毛。体部内外面に粘土接合痕を明瞭に残す。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　硬 残存　体部½ 層位　第３層 底部内面に炭化物付着
	６７５	口径　１３.９	口縁部はわずかに内弯ぎみに立ち上る。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面刷毛後横ナデ。	色調　白黄色 胎土　雲母片等を含む。 焼成　軟 残存　¼ 層位　第３層
	６７６	口径　１４.４	口縁部は大きく外反し、口縁端部は面をなす。あまり肩の張らない体部である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛後ナデ。体部内面ナデ。	色調　淡灰褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　やや軟 残存　⅓ 層位　第３層
	６７８	口径　１５.３ 器高　２３.８	口縁部はくの字状に外反し、口縁端部はやや外側に肥厚する。丸味をおびた体部に丸底の底部である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面叩き後刷毛。体部内面篦削り。	色調　褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　硬 残存　完形 層位　第３層 底部内面に炭化物付着
	６７９	口径　１３.８ 器高　２３.８	丸味をおびたやや長目の体部から、外反する口縁部であり、尖りぎみの底部である。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面及び肩部外面刷毛後横ナデ。体部内外面刷毛。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　硬 残存　ほぼ完形 層位　第３層 外面に煤が付着
	６８０	口径　１３.６ 器高　２４.４	口縁部はわずかに外反し、体部は丸味をおび丸底の底部である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面ナデ。体部内面篦削り。	色調　黒色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　硬 残存　体部完存 層位　第３層
	６８１	口径　１４.０ 器高　２３.８	やや長目の体部から、短く外反する口縁部である。頸部内面に稜をもつ。突出ぎみの丸底の底部である。	口縁部内外面及び頸部下方外面横ナデ。体部外面叩き後刷毛。体部内面ナデ。体部内面に粘土接合痕を残す。	色調　茶褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　ほぼ完形 層位　第３層 外面に煤が付着
	６８２	口径　１４.６ 器高　２０.５	口縁部はくの字状に外反し、口縁端部を上方につまみ上げる。頸部内面に明瞭な稜をもつ。丸い体部に丸底の底部である。	口縁部内外面及び肩部内外面横ナデ。体部外面及び体部内面上方刷毛。体部内面下方篦削り。	色調　淡褐灰色 胎土　精良 焼成　硬 残存　完形 層位　第３層 体部外面に煤が付着
	６８３	口径　１２.０	口縁部は内弯ぎみに立ち上り、口縁端部は内側に肥厚する。体部はほぼ球形である。	概ね口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調　683、淡茶褐色 686、淡灰褐色 688、暗黄灰色、他は茶褐色 胎土　683、砂粒を多く含
	６８６	口径　１３.９			
	６８８	口径　１４.４			
	６８９	口径　１７.６			
	６９０	口径　１５.０			

土師器 甕					む。 689、砂粒を含む。 他は精良 焼成　688、やや軟 他は硬 残存　688 1/4、他は1/2 層位　第3層 683、689、690は外面に煤が付着
	684 687	口径　13.7 器高　17.2 口径　14.6	口縁部は内弯ぎみに立ち上り、口縁端部は内側に肥厚する。体部は球形で丸底の底部である。	口縁部内外面及び肩部外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調　684、淡褐色 687、淡灰黄色 胎土　684、砂粒を多く含む。687、精良 焼成　684、硬 687、やや軟 残存　684、ほぼ完形 687 1/4 層位　第3層 外面に煤が付着
	685	口径　14.8	口縁部は内弯ぎみに立ち上り、口縁端部はほぼ垂直ぎみになり内外にわずかに肥厚し、体部は球形に近い。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調　暗灰褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　1/2 層位　第3層
	691	口径　21.0	口縁部は内弯ぎみに立ち上り、口縁端部はやや尖りぎみになる。あまり肩の張らない体部である。	口頸部内外面横ナデ。体部外面ナデ。体部内面篦削り。	色調　暗灰褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　やや硬 残存　1/6 層位　第3層
	692 693		丸い体部から外反する口縁部である。丸底の底部である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調　692、淡褐色 693、淡明褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　692、硬 693、やや硬 残存　体部ほぼ完存 層位　第3層 外面に煤が付着 692は内面に炭化物が付着
	694	口径　14.3	曲折する頸部から、さらに短くやや外傾する口縁部であり、口縁外端部が突出する。体部はあまり肩が張らない。	口縁部内外面横ナデ。	色調　淡白灰色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/10 層位　第3層
	695 697 698	口径　15.4 口径　13.7 口径　14.1	曲折する頸部から、さらに短くほぼ直立させた口縁部である。口縁外端部が突出する。	口縁部内外面横ナデ。体部外面ナデ。体部内面刷毛後ナデ。	色調　697、灰褐色。他は淡灰黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　695 1/5、697 1/10、698 1/6 層位　第3層 外面に煤が付着
	696	口径　13.6 器高　21.6	曲折する頸部から、さらに短くほぼ直立する口縁部であ	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面は696が	色調　淡褐色 胎土　精良

		底径　3.4	り、口縁端部は696が内外面に突出し、699がわずかに凹む。やや長目の丸味をおびた体部であり、中央が凹む小さな底部である。	ナデあげで下半に条痕状のナデが残り、699はナデあげ。	焼成　硬 残存　696、完形 699、口縁部¾、 体部⅓ 層位　第3層 696は外面に煤が付着
	699	口径　15.4 器高　20.3 底径　3.2			
	700	口径　21.6	口縁部は内弯ぎみにわずかに外傾する。	口縁端部及び口縁部内面上方横ナデ。口縁部外面刷毛後横ナデ。口縁部内面下方及び体部内外面刷毛。	色調　淡赤褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　⅓ 層位　第3層
土師器 高杯	701	口径　11.6 器高　12.2 裾径　16.2	小さな杯底部から、内弯ぎみにのびる杯口縁部であり、杯部外面に明瞭な稜をもつ。脚部は外反して大きく開く。	脚部中程に3方の円孔を穿つ。杯部内外面及び脚部外面篦磨き。脚部内面下方刷毛。脚部内面上方ナデ。	色調　淡灰褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 層位　第3層
土師器 壷	702	口径　15.2	口縁部は大きく外反する。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面横ナデ。	色調　赤褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/10 層位　第3層
土師器 高杯	703	口径　18.0	内弯ぎみの杯底部から、大きく外反させた口縁部であり、口縁端部を上方へわずかにつまみ上げる。杯底部と口縁部との境に突出部を貼り付ける。	口縁端部横ナデ。杯部内外面篦磨き。	色調　淡赤灰色 胎土　精良 焼成　やや軟 残存　⅓ 層位　第3層
	704	口径　11.0	直口鉢型の杯部である。	杯口縁端部横ナデ。杯部内外面篦磨き。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　½ 層位　第3層 丹塗り
	705	口径　17.4	口縁部は内弯ぎみに開く。	内外面篦磨き。	色調　705、淡灰褐色 710、赤褐色 胎土　705、砂粒を含む。 710、精良 焼成　硬 残存　705 ¼、710 ⅛ 層位　第3層
	710				
	706	口径　18.6 器高　16.1 裾径　11.8	直口碗形の杯部で、口縁端部はやや外反ぎみになる。中空の脚柱部から、内弯ぎみに開く裾部である。	裾部中程の3方に円孔を穿つ。杯口縁部及び裾端部横ナデ。杯部内外面篦磨き。脚部外面刷毛後篦磨き。脚部内面刷毛。	色調　淡明褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　口縁¼、脚部完存 層位　第3層
	707	裾径　17.4	中空の脚柱部から、内弯ぎみに開く裾部である。	脚部外面篦磨き。脚柱部内面篦削り。裾部内面刷毛。裾端部横ナデ。脚柱部と裾部境の3方に円孔を穿つ。	色調　明褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　脚部完存 層位　第3層 内面に煤が付着
	708	裾径　18.0	裾部は内弯ぎみに大きく開く。	裾部の3方に円孔を穿つ。裾部外面刷毛後篦磨きか。裾部内面刷毛。裾端部横ナデ。	色調　淡茶褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　⅓

土師器					層位　第３層
高杯	７０９		口縁部は外反ぎみに開く。	内外面篦磨き。	色調　黄褐色 胎土　精良 焼成　やや硬 残存　¼ 層位　第３層
	７１１	口径　１９.８ 器高　１５.３ 裾径　１４.０	小さな杯底部から、大きく開く杯口縁部である。脚部は外反して大きく開く。	脚部中程に３方の円孔を穿つ。杯口縁端部内面横ナデ。杯部内外面及び脚部外面上方篦磨き。脚部外面下方刷毛後篦磨き。脚部内面横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　杯部完存、脚部⅔ 層位　第３層
	７１２	口径　２１.６ 器高　１４.６ 裾径　１３.８	浅い杯底部から、外反して立ち上がる杯口縁部である。杯部外面には明瞭な稜がある。中空の脚柱部から大きく開く内弯ぎみの裾部である。	712は裾部中程に４方の円孔を穿つ。杯口縁端部及び杯口縁部上方横ナデ。他の杯部内外面及び裾部外面篦磨き。脚柱部外面刷毛後篦磨き。脚柱部内面篦削りにより粘土しぼり痕を消す。裾部内面横ナデ。713は杯口縁端部及び裾部内面横ナデ。杯部内外面及び裾部外面篦磨き。脚柱部外面篦削り後篦磨き。脚柱部内面篦削りにより粘土しぼり痕を消す。	色調　712、明褐色 713、暗褐色 胎土　精良 焼成　712、軟、713、硬 残存　712、口縁部¼ 脚部⅛。713、完形 層位　第３層
	７１３	口径　１５.０ 器高　１３.７ 裾径　１１.３			
	７１４	裾径　１４.０	裾部は外反して大きく開く。	外面篦磨き。内面刷毛。裾端部横ナデ。６方に円孔を穿つ。	色調　淡赤褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　軟 残存　½ 層位　第３層
	７１５	裾径　１３.７	裾部は大きく開く。	裾端部横ナデ。裾部外面篦磨き。裾部内面刷毛後ナデ。	色調　淡灰褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　やや硬 残存　⅙ 層位　第３層
	７１６	裾径　１４.２	脚部は大きく開く。	裾端部横ナデ。脚部外面篦磨き。裾部内面篦削り。円孔を穿つが、孔数は不明。	色調　淡赤褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　軟 残存　⅓ 層位　第３層
	７１７	裾径　１５.０	裾部は外反して開く。	６方に円孔を穿つ。外面は摩滅のため手法は不明。内面上方刷毛後ナデ。内面下方篦削り後ナデ。裾端部横ナデ。	色調　淡赤褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　軟 残存　¼ 層位　第３層
	７１８		中空の脚柱部である。	外面篦磨き。内面篦削り。	色調　淡黄褐色 胎土　精良 焼成　硬 層位　第３層
	７１９		脚部は大きく開く。	外面篦磨き。内面上方篦削り。内面下方刷毛。３方に円孔を穿つ。	色調　暗灰褐色 胎土　精良 焼成　硬 層位　第３層
土師器	７２０		短い中空の脚柱部から、内	外面及び内面下方篦磨き。	色調　褐灰色

器台			弯して大きく開く裾部である。	内面上方篦削り。	胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 層位　第3層
	721		脚部は大きく開く。	円孔の数は不明。受部内外面及び脚部外面篦磨き。篦部内面上方篦削り。脚部内面下方ナデ。	色調　白黄色 胎土　腐り礫等を含む。 焼成　硬 層位　第3層
	722		浅い皿状の受部である。	内外面篦磨き。	色調　淡灰褐色 胎土　精良 焼成　やや硬 残存　1/6 層位　第3層
土師器 高杯	723	口径　10.4	浅い皿状の杯部である。	口縁端部横ナデ。杯部内外面篦磨き。	色調　暗灰色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　1/3 層位　第3層
土師器 器台	724	裾径　13.2	脚部は外反して大きく開く。	4方に円孔を穿つ。外面篦磨き。内面ナデで中程に刷毛が残る。裾端部横ナデ。	色調　白褐色 胎土　腐り礫等を含む。 焼成　硬 残存　1/3
	725	口径　8.0 器高　8.8 裾径　11.5	受部は内弯ぎみに立ち上り、脚部は外反して大きく開く。	脚部中程に3方の円孔を穿つ。口縁端部及び裾端部横ナデ。受部内外面及び脚部外面篦磨き。脚部内面上方篦削り。脚部内面下方刷毛。	色調　淡黄褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　完形 層位　第3層
	726	裾径　12.1	脚部は外反して大きく開く。	脚部中程の3方に円孔を穿つ。外面篦磨き。内面上方篦削り。内面下方刷毛後横ナデ。裾端部横ナデ。	色調　黄褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/3 層位　第3層
	727	口径　9.2 器高　7.9 裾径　12.8	浅い皿状の受部から、口縁部はほぼ真直に立ち上る。脚部は大きく裾広がりである。	脚部のほぼ中央の3方に円孔を穿つ。口縁端部及び裾端部横ナデ。受部内外面篦磨き。脚部外面篦削り後篦磨き。脚部内面上方篦削り。脚部内面中程篦磨き。	色調　赤褐色 胎土　精良 焼成　硬 層位　第2層
	728		浅い皿状の受部に、小型丸底壷の乗った形態を示す。	立ち上り部外面及び内面篦磨き。受部外面刷毛。	色調　淡赤褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　1/8 層位　第3層
土師器 壷	729	口径　26.8	大きく外反する口頸部から、口縁部をさらに外反させる。口縁端部は面をなし口頸部界の外面に稜をもつ。丸味をおびた体部をもち、最大腹径はほぼ中位に位置する。	729は口縁部内外面横ナデ。頸部内外面及び体部外面、体部内面下方刷毛。体部内面上方ナデ。	色調　729、淡褐色 731、白灰色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　硬 残存　729、ほぼ完存 731、口縁部完存 層位　第2層
	731	口径　17.0			
	730	底径　3.8	体部はだ円形に近く、最大腹径はほぼ中程に位置する。底部は平底である。	体部外面上方及び頸部内面横ナデ。体部外面下方及び体部内面刷毛。	色調　黄褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　体部完存

					層位　第２層
	７３２	口径　２５.２ 底径　　５.４	外傾してのびる頸部からほぼ水平に近く曲折する口縁部であり、口縁端部をさらに大きく外反させる。口縁端部は面をなし、口頸部界外面を下方に突出させる。丸い体部に中央が凹む底部である。	口縁端面に竹管文を施した円形浮文を、口頸部界外面に竹管文を施した円形浮文と刻み目を施す。頸部に刻み目を施した貼付突帯を施す。肩部外面には櫛描平行線文、波状文、刺突列点文を施す。口縁端部横ナデ。口縁端面及び底部内面刷毛。口頸部内外面及び体部外面篦磨き。体部内面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　¼ 層位　第３層
	７３４	口径　１０.８	丸い体部から、短くほぼ直立する口縁部である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面ナデ上げ。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　口縁部1/10 体部ほぼ完存 層位　第３層 外面に煤が付着
土師器 鉢	７３５	口径　１２.８ 器高　　６.９ 底径　　３.６	中央がわずかに凹む平底の底部から、外上方にのびる体部をもち、口縁部は内弯ぎみにさらに立ち上る。	口縁端部及び口縁部外面横ナデ。口縁部内面及び頸部内面篦磨き。体部内外面は摩滅のため手法は不明。	色調　黄褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　底部完存、口縁部½ 層位　第３層
	７３６	口径　１２.０ 器高　１２.７ 底径　　６.５	中央がやや凹む底部から内弯ぎみに上方へのびる体部であり、口縁端部は擬口縁状である。	口縁端部横ナデ。体部外面上方刷毛後横ナデ。体部外面下方及び体部内面刷毛。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　硬 残存　¾ 層位　第３層
	７３３ ７３７ ７３８ ７３９	口径　１４.７ 口径　１３.４ 口径　１６.６ 底径　　６.６	丸味をおびた長目の体部から外反する口縁部であり、突出した平底の底部である。	概ね口縁端部横ナデ。口縁部内外面及び体部外面篦磨き。体部内面刷毛。739は体部内面ナデ。	色調　733、淡赤褐色 737、赤褐色 738、淡灰褐色 739、暗赤褐色 胎土　738、精良。739、砂粒を多く含む。他は砂粒を含む。 焼成　737、軟　他はやや軟 残存　733 ½、737 ¼、738 ⅓、739、底部完存 層位　第３層 733は外面に煤が付着
土師器 甕	７４０ ７４１ ７４３	口径　１４.２ 口径　１４.６ 口径　１４.９	口縁部はくの字状に外反し、口縁端部はわずかにつまみ上げる。	口縁部内外面横ナデ、743は体部内面篦削り。	色調　740、黒褐色 741、褐色 743、淡黄灰色 胎土　精良 焼成　硬 残存　740 1/9、741小破片、743 ⅓ 層位　第３層 741、743は外面に煤が付着

土師器 甕	742	口径　15.0	口縁部は内弯ぎみに立ち上り、口縁端部をわずかに上下に肥厚させる。	内外面横ナデ。	色調　淡黄褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　⅛ 層位　第3層
	744 745	口径　16.2 口径　18.0	口縁部はくの字状に外反し、口縁端部を上方につまみ上げる。頸部内面に明瞭な稜をもつ。	744は口縁端部及び口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。体部外面叩き後刷毛。体部内面上方刷毛後ナデ。体部内面下方篦削り。745は口縁端部及び口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。体部外面上方叩き。体部外面下方刷毛、体部内面篦削り。	色調　744、淡茶褐色 745、暗褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　744 ⅔、745　口縁部完存、体部½ 層位　第3層 体部外面に煤が付着
	746 751	口径　12.5 口径　16.6	口縁部は外反する。	746は口縁部内外面横ナデ。体部内外面刷毛。751は口縁端部横ナデ。口縁部内外面及び体部内面刷毛後横ナデ。体部外面刷毛。	色調　746、淡赤灰色 751、淡褐灰色 胎土　砂粒を含む。 焼成　746、軟 751、やや軟 残存　746 ⅙、751 ¼ 層位　第3層
	747 749 753 757	 口径　15.8 口径　15.0 口径　19.6	外反する口縁部の中程がわずかに肥厚する。あまり肩の張らない丸味をおびた体部である。	747は口縁部内外面及び体部内外面刷毛。肩部内面ナデ。749は口縁端部横ナデ。口縁部外面刷毛後横ナデ。口縁部内面及び体部内外面刷毛。体部内面下方ナデ。753は口縁端部横ナデ。口縁部外面下方及び口縁部内面及び体部外面刷毛。体部内面刷毛後ナデ。757は口縁部外面横ナデ。口縁部内面及び体部外面刷毛。体部内面刷毛後ナデ。	色調　747、淡灰褐色 749、黄褐色 753、褐灰色、 757、白黄色 胎土　747、砂粒を多く含む。753、精良。他は砂粒を含む。 焼成　747、やや硬 749、硬。753、やや軟。757、軟 残存　747 ⅙、749 口縁部完存、体部⅓、753 ⅓、757 ½ 層位　第3層 747、749、757は外面に煤が付着
	748	口径　17.7	口縁部は外反する。	口縁端部横ナデ。口縁部外面刷毛後横ナデ。口縁部内面及び体部外面刷毛。体部内面刷毛後ナデ。	色調　暗赤黄色 胎土　砂粒を含む。 焼成　軟 残存　⅙ 層位　第3層
	750	口径　14.9 器高　20.8	やや肩の張った体部から、くの字状に外反する口縁部である。丸底の底部である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面叩き後刷毛。体部内面刷毛。	色調　褐黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　⅔ 層位　第3層 外面に煤が付着
	752	口径　13.9	口縁部は外反し、丸味をおびた体部である。	口縁端部横ナデ。口縁部外面刷毛後横ナデ。口縁部内面及び体部外面刷毛。体部内面刷毛後ナデ。	色調　赤褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　軟 残存　口縁部¾、体部¼ 層位　第3層

土師器甕					外面に煤が付着
	754	口径　15.6	肩の張らない球体に近い体部から外反する口縁部である。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面及び肩部内面刷毛後横ナデ。肩部外面刷毛、体部外面篦削り。体部内面ナデ。	色調　淡明褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　軟 残存　口縁部完存、体部¼ 層位　第3層 外面に煤が付着
	755	口径　16.0	あまり肩の張らないやや長目の体部から、外反する口縁部である。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面及び肩部内面刷毛。体部外面篦削り。体部内面ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　やや軟 残存　⅓ 層位　第3層 外面に煤が付着
	756 758	口径　14.2 口径　13.9	丸味をおびたやや長目の体部から、外反する口縁部であり、尖りぎみの底部である。	758は口縁端部横ナデ。口縁部内外面及び肩部外面刷毛。体部外面篦削り。体部外面刷毛後ナデ。759は口縁端部及び口縁部外面上方横ナデ。口頸部内外面刷毛。体部外面篦削り。体部内面ナデ。	色調　756、淡灰褐色 　　758、淡褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　756、硬 　　758、やや軟 残存　756 ⅓、758 ½ 層位　第3層 外面に煤が付着
	759	口径　12.8 器高　20.5	口縁部は外傾し、口縁端部はやや内傾ぎみである。丸味をおびた長目の体部にやや突出ぎみの丸底の底部である。	口縁部外面刷毛。口縁部内面及び底部内面刷毛。体部外面上半ナデ。体部外面下半及び体部内面上方篦削り。	色調　黄灰褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　½ 層位　第3層 外面に煤が付着
	760	口径　11.2	曲折する頸部から、さらに短くやや外傾する口縁部であり、口縁外端部が突出する。体部はあまり肩が張らない。	口縁部内外面横ナデ。体部内外面ナデ。	色調　淡黄褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　¼ 層位　第3層 外面に煤が付着
	761	口径　12.3	短く曲折する頸部から、口縁部をさらに外反するもので、口縁端部を尖りぎみにする。	口縁部外面に6条の擬凹線を施す。口縁部内外面及び頸部外面横ナデ。頸部内面刷毛。体部内面篦削り。	色調　白灰色 胎土　砂粒を含む。 焼成　軟 残存　⅙ 層位　第3層
土師器甑	762	口径　16.4 器高　8.6 底径　4.1	ほぼ平底の底部から、体部はやや内弯ぎみに外上方へ開く。	底部穿孔は762が内側から外側へ、763が外側から内側へ行う。口縁端部横ナデ。体部内外面刷毛で部分的にナデによって消す。	色調　762、淡褐色 　　763、淡茶褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　硬 残存　762、口縁部¼、底部完存、763完形 層位　第3層
	763	口径　16.6 器高　10.7 底径　4.8			
土師器高杯	764		杯口縁部は内弯して立ち上る。杯底部との境に明瞭な稜をもつ。	内外面篦磨き。	色調　褐黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　⅙ 層位　第3層
	765	口径　11.2 器高　11.5 裾径　15.6	杯口縁部は内弯ぎみに立ち上り、杯部外面に不明瞭な稜をもつ。中空の短い脚部は下	脚部中程の3方に円孔を穿つ。杯口縁端部及び脚端部横ナデ。杯内外面及び脚部外面	色調　淡明褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　やや硬

土師器 高杯			方にて大きく内弯ぎみに広がる。	篦磨き。脚部内面刷毛。	残存　杯部¼、脚部⅛ 層位　第3層
	766	口径　13.8 器高　14.4 裾径　19.1	小さな杯底部から、内弯ぎみにのびる杯口縁部であり、杯部外面に明瞭な稜をもつ。脚部は外反して大きく開く。	脚部上下2段に3方の円孔を穿つ。口縁端部及び脚端部横ナデ。杯部内外面及び脚部外面篦磨き。脚部内面下方刷毛。脚部内面上方篦削りによって粘土のしぼり痕を消す。	色調　暗褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　杯部½、脚部⅛ 層位　第3層
	767	口径　21.2	口縁部は内弯ぎみに開く。	内外面篦磨き。	色調　淡灰黄色 胎土　精良 焼成　硬 残存　767 ⅛ 層位　第3層
	768	口径　18.7	口縁部は外反ぎみに開く。	内外面篦磨き？	色調　淡赤褐色 胎土　精良 焼成　やや硬 残存　⅙ 層位　第3層
	769	口径　20.4 器高　15.4 裾径　15.0	杯口縁部は大きく外反する。杯部外面に不明瞭な稜をもつ。中程まで中実の脚柱部から、裾ひろがりに開く。裾部は内弯ぎみである。	脚柱部と裾部境の3方に円孔を穿つ。杯口縁端部横ナデ。杯部内外面刷毛後篦磨き。脚柱部外面篦磨き。脚部内面刷毛。	色調　淡明褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　軟 残存　杯部¼、脚部完存 層位　第3層
土師器 器台	770	口径　14.0	大きく開く受部は口縁端部近くでほぼ水平に近くなり、上下に拡張させる。	端面には櫛描波状文を施し、上から棒状浮文を貼り付ける。口縁端部及び受部外面横ナデ。受部内面篦磨き。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　小破片 層位　第3層
土師器 高杯	771		短い脚柱部から、大きく開く裾部である。	3方に円孔を穿つ。外面篦磨き。内面上方篦削り。内面下方ナデ。	色調　赤褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　⅓
	772		脚部は外反して大きく開く。	脚部中程の3方に円孔を穿つ。外面篦磨き。内面上方篦削り。内面下方は摩滅のため不明。	色調　白黄色 胎土　微粒の雲母片等を含む。 焼成　硬 層位　第3層
土師器 器台	773		浅い皿状の受部に大きく開く脚部である。	3方に円孔を穿つ。受部内外面及び脚部外面篦磨き。脚部内面上方篦削り。脚部内面下方刷毛。	色調　淡赤褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　軟 層位　第3層
	774		浅い皿状の坏底部から大きく開く杯口縁部である。	内外面篦磨き。	色調　黄褐色 胎土　精良 焼成　やや硬 層位　第3層
	775	口径　11.8	浅い皿状の坏部である。	口縁端部横ナデ。杯部内外面篦磨き。	色調　淡褐黄色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 層位　第3層
	776	裾径　11.1	脚部は内弯ぎみに開く。	円孔の数は不明。受部内外面及び脚部外面篦磨き。脚部内面ナデ。裾端部横ナデ。	色調　黒褐色 胎土　精良 焼成　やや硬 残存　⅕

					層位　第３層
土師器 甕	７７７	口径　２３.８ 器高　３７.３	短く曲折する頸部から、内弯ぎみの口縁部をさらに上方へ立ち上らせる。口縁端部は内傾面をなす。口頸部界外面は突出する。やや肩の張った長目の体部に丸底をもつ。	口縁部内外面及び肩部外面及び頸部内面横ナデ。体部外面及び体部内面下半刷毛。体部内面上半篦削り。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　完形 層位　第３層
	７７８	口径　１４.６ 器高　２６.９	曲折する頸部から、口縁部をさらに外反させたものである。口頸部界には稜をもつ。丸い体部に丸底の底部である。	口頸部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　やや硬 残存　口縁部¾、体部¼ 層位　第３層
土師器 壷	７７９	口径　　９.０ 器高　１３.４	口縁部は大きく外反し、体部はやや肩が張り、丸底の底部である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　ほぼ完形 層位　第２層
	７８０	口径　　９.６ 器高　１２.８	口縁部は大きく開き、体部は丸味をおびており、丸底の底部である。	口縁部内外面横ナデ。780は体部内面ナデ。体部外面篦削り。781は体部外面ナデ。体部内面刷毛。	色調　780、淡茶褐色 781、淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　780、完形 層位　第２層 781は外面に煤が付着
	７８１				
土師器 甕	７８２	口径　１４.８	口縁部はくの字状に大きく外反し、やや長目の体部であり丸底である。	782は口縁部外面横ナデ。口縁部内面刷毛後横ナデ。体部外面刷毛、体部内面篦削り。783は口縁部内外面横ナデ。体部外面ナデ。体部内面篦削り。	色調　782、黒褐色 783、淡黄白色 胎土　砂粒を含む。 焼成　782、硬 783、やや軟 残存　782 ⅙ 層位　第２層
	７８３	口径　１４.２ 器高　２３.０			
	７８４	口径　１５.８	口縁部は内弯ぎみに立ち上り、口縁端部は内側に肥厚する。丸い体部である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　⅙ 層位　第２層
土師器 高杯	７８５	口径　１５.８	浅い皿状の杯底部から、大きく外反する口縁部である。口縁部と杯底部との境に明瞭な稜をもつ。中空の脚柱部から、大きく開く裾部をもつ。	785は口縁端部横ナデ。口縁部内外面刷毛後横ナデ。786、787は口縁部内外面横ナデ。杯底部外面篦磨き。杯底部内面ナデ。788、789は口縁端部から口縁部外面及び裾部内外面横ナデ。口縁部外面下方篦削り。口縁部内面刷毛後横ナデ。脚柱部外面篦磨き。脚柱部内面篦削り。790は口縁端部横ナデ。杯部内外面刷毛後横ナデ。脚柱部外面摩滅のため詳細は不明であるが恐らく篦磨き。脚柱部内面篦削り。	色調　785、淡黄灰色 786、787、暗褐色 789、淡茶褐色、他は淡褐色 胎土　786、788、790砂粒を多く含む。 789、砂粒を含む。他は精良 焼成　785、790軟、786やや軟、他は硬 残存　785、790 ½ 786、787杯部完存 788、789完形 層位　第２層
	７８６	口径　１７.０			
	７８７	口径　１６.８			
	７８８	口径　１５.４ 器高　１２.８ 裾径　１１.０			
	７８９	口径　１４.２ 器高　１２.１ 裾径　　７.９			
	７９０	口径　１５.４ 器高　１２.３ 裾径　１０.０			
土師器 壷	７９１	底径　　６.２	丸味をおびた体部から、外傾する頸部である。中央がや	頸部外面刷毛後横ナデ。頸部内面横ナデ。体部外面刷毛	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む。

土師器 壺			や凹む底部である。	後篦磨き。体部内面ナデ。	焼成　やや軟 残存　体部完存 層位　第３層
	７９３		やや扁平な体部から、内弯ぎみに大きく外上方へ延びる口縁部である。やや尖りぎみの丸底の底部である。	口縁部外面及び体部外面篦磨き。口縁部内面部分的に篦磨き。底部外面篦先による磨きが暗文状になる。体部内面ナデ。底部内面刷毛後ナデ。	色調　淡褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　体部完存 層位　第３層
	７９４		丸い体部から外反ぎみに立ち上る口縁部である。	肩部に４条の櫛描平行線文及び波状文を施す。口縁部外面上方は刷毛後横ナデ。口縁部外面下方及び体部外面篦磨き。体部内面刷毛。口縁部内面は摩滅のため手法は不明。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　⅓
土師器 甕	７９２	口径　１６.３	口縁部は外反し、口縁端部は内側に肥厚する。	口縁端部横ナデ。口縁部内外面刷毛後横ナデ。	色調　暗灰褐色 胎土　精良 焼成　硬 残存　⅙ 層位　第３層
	７９５	口径　１４.６	口縁部は内弯ぎみに立ち上り、口縁端部は内側に肥厚する。体部はほぼ球形であり丸底の底部である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調　795、淡灰黄色 805、淡褐色 胎土　795、精良　805、砂粒を多く含む。 焼成　硬 残存　795、底部以外完存 805、口縁ほぼ完存 層位　第３層
	８０５	口径　１６.４ 器高　２５.７			
土師器 高杯	７９６	口径　８.８ 器高　１０.０ 裾径　１２.５	浅い皿状のやや内弯ぎみの外上方へのびる杯部である。裾広がりの脚部は中程まで中実である。	脚部のほぼ中程の３方に円孔を穿つ。杯口縁端部及び裾端部横ナデ。杯部内外面及び脚部外面篦磨き。脚部内面刷毛。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　坏部¼、脚部完存 層位　第３層
	７９７	口径　１９.０ 器高　１２.２ 裾径　１４.３	小さな杯底部から、大きく開く杯口縁部である。脚部は外反して大きく開く。	脚部中程に797は４方の、798は３方の円孔を穿つ。797は杯口縁端部及び裾端部横ナデ。杯部内外面刷毛後篦磨き。脚部外面篦磨き。脚部内面上方篦削り。脚部内面下方刷毛後ナデ。798は口縁端部横ナデ。口縁部外面篦磨き。口縁部内面刷毛後篦磨き。脚部内外面摩滅のため手法は不明。	色調　797、淡明褐色 798、淡褐色 胎土　797、砂粒を多く含む。798、砂粒を含む。 焼成　やや軟 残存　797、杯部¼、脚部⅙、798、坏部¼、脚部¾ 層位　第３層
	７９８	口径　２１.２ 裾径　１３.５			
土師器 器台	７９９		脚部は大きく開く。	受部内外面及び脚部外面篦磨き。脚部内面上方篦削り。脚部内面下方刷毛後ナデ。	色調　淡赤褐色 胎土　精良 焼成　軟 層位　第３層
	８００		受部は内弯ぎみに立ち上る。脚部は外反して大きく開く。	脚部に４方の円孔を穿つ。外面篦磨き。内面は摩滅のため手法は不明。	色調　淡赤褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　軟 層位　第３層
土師器 甕	８０１	口径　２２.８ 器高　２７.０	短く曲折する頸部から、さらに外反させる口縁部である。	口頸部内外面横ナデ。体部外面叩き後刷毛。体部内面篦	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む。

土師器 甕			口縁端部は大きく外反し、突出ぎみになる。口頸部界には稜をもつ。球形に近い体部に丸底の底部である。	削り。	焼成　やや軟 残存　口縁部⅓、体部½ 層位　第３層 外面に煤が付着
	８０２	口径　２３.３ 底径　　６.６	口縁部は内弯ぎみに外傾し、中央が凹む底部である。	口縁端部及び口縁部内面下方横ナデ。口縁部外面は刷毛後横ナデ。口縁部内面上方及び体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調　暗褐黄色 胎土　砂粒を含む。 焼成　やや軟 残存　口縁部⅓、底部完存 層位　第３層 外面に煤が付着
土師器 鉢	８０３	底径　　３.７	平底の底部から内弯してのびる体部をもつ。	体部外面ナデ後篦磨き。体部内面篦削り。	色調　淡灰黄色 胎土　砂粒を含む。 焼成　やや軟 残存　⅔ 層位　第３層
土師器 底部	８０４	底径　　５.０	中央がわずかに凹む底部である。	外面刷毛後ナデ。内面ナデ。	色調　灰褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　底部ほぼ完存 層位　第３層
土師器 高杯	８０６	口径　１１.４	直口鉢型の杯部である。短い脚柱部から大きく開く裾部である。	口縁端部横ナデ。杯部内外面篦磨き。脚柱部外面篦磨き。裾部内外面刷毛。脚柱部と裾部界の４方に円孔を穿つ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　坏部完存 層位　第３層
	８０７	裾径　１１.２	小さな杯底部から、大きく開く杯口縁部である。杯部外面に明瞭な稜をもつ。	脚部中程に円孔を穿つが数は不明。杯部外面及び脚部外面篦磨き。杯部内面篦磨きと思われる。脚部内面篦削り。裾端部横ナデ。	色調　淡褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　硬 残存　杯部¼、脚部½ 層位　第３層
土師器 甕	８０８	口径　１０.１ 器高　１３.８	口縁部はくの字状に大きく外反し、やや長目の体部であり丸底である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調　808、淡褐色 809、暗灰褐色 胎土　808、砂粒を多く含む。809、砂粒を含む。 焼成　808、硬 809、やや軟 残存　808 ¼、809 ¾ 層位　第２層 809は外面に煤が付着
	８０９	口径　１５.２ 器高　２７.７			
	８１０	口径　１４.４ 器高　２４.９	口縁部は内弯ぎみに立ち上り、口縁端部は内側に肥厚する。丸い体部で丸底である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削り。	色調　黒色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　硬 残存　½ 層位　第２層
	８１１	口径　１７.６ 器高　２８.３	口縁部はわずかに内弯ぎみに立ち上り、口縁端部は面をなす。体部は長い球形であり、丸底である。	口縁部内外面横ナデ。体部外面刷毛。体部内面篦削りで粘土の継ぎ目が明瞭に残る。	色調　茶褐色 胎土　砂粒を多く含む。 焼成　やや軟 残存　⅗ 層位　第２層
	８１２		体部は球形で丸底である。	頸部内外面及び体部外面上方横ナデ。体部外面下方は刷毛。体部内面篦削り。	色調　暗褐色 胎土　砂粒を含む。 焼成　硬 残存　体部ほぼ完存 層位　第２層

3．木製品

第一次調査の木製品のうち、層位との関係から、第２層直上出土のものについては布留式新段階またはそれ以降のもの。第２層については布留式古段階のものとしてとらえられる。しかし、第２層直上、第２層中の木製品はほとんど杭か矢板状のもので、検出面が必ずしも打ち込んだ面とは言えず、時期については、層位はあくまで参考にすぎない。

第６層の溝付近より出土した木製品は比較的まとまりもよく、石包丁形木製品や樹皮でとじられた底板、板材、大形の杭などがあり、出土土器からみて弥生時代後期のものであろう。中でも注意をひいたのは石包丁形木製品で、本例とやや形状は異なるが同様に２孔を穿った木製品が、奈良県宇陀郡榛原町榛原高塚遺跡から出土している。榛原高塚遺跡例も第Ⅴ様式のものといわれている。[①] 石包丁形木製品はこれまで出土例のなかったものだけに、今後その用途について検討が期待されよう。

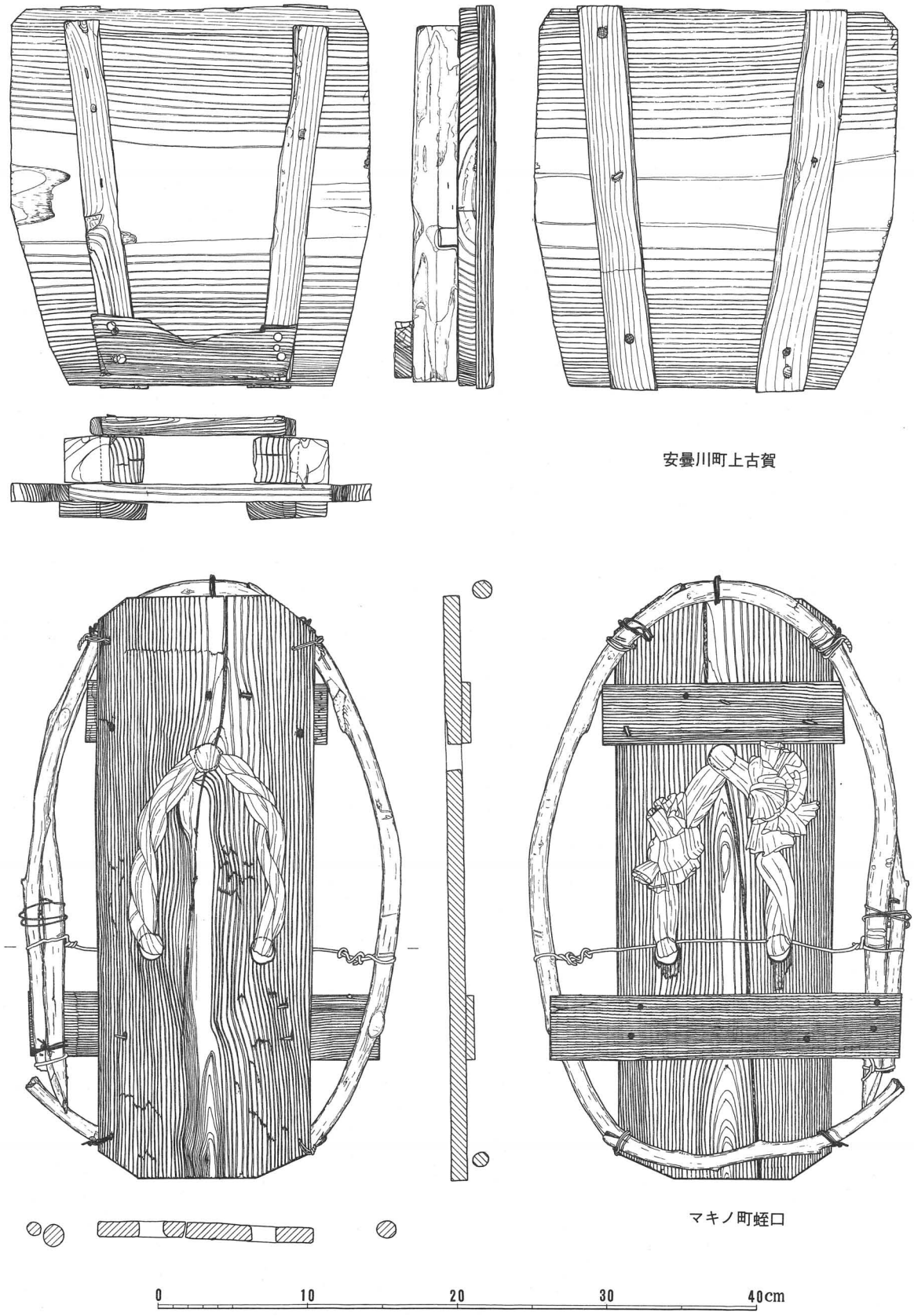
第８層出土の田下駄も、例を見ないものである。これまで広義の田下駄は、ナンバとよばれる足板の前後左右に４孔を穿ち、これに紐を通して固定する横長のものと、下駄型をした３孔に鼻緒をつけた縦長のタゲタ、あるいはそれ以上に縦長の足板に輪樏や枠をつけたオオアシの三者が知られている。しかし本例は、横長のナンバの足板にオオアシの輪樏を取り付けた両者の折衷型ともいうべき特異なもので、これまで出土例や民具でもほとんど例をみない。[②] 類例としては、鳥取県船渡遺跡出土の足板が同種のものと思われる。[③] 時期は古墳時代中期である。本例のような輪樏付きナンバとでも呼称すべき田下駄は、弥生・古墳時代のみに使用されたか、あるいはある限られた地域にのみその分布がみられたのかもしれない。ちなみに、現在高島郡内で使用されている田下駄の代表例は、第23図に示す二者である。

第二次調査出土の木製品は、伴出土器よりみて庄内式よりは古くなく、布留式新段階より新しくはならないが、個々の木製品の時期の特定は難しい。第二次調査ではさまざまな木製品が出土しているが、中でも注目を集めたのは３点の琴と１点の琴柱で、古墳時代の弦楽器を知るうえで、一遺跡よりまとまって出土した貴重な資料となった。

森浜遺跡出土の琴は、その形態からまず大きく２つに分類できる。

第１は129の琴である。この琴は、第一次調査終了後、舟溜りの建設工事の準備中に、北側でスクモ層の一部が掘削され、その際に出土したものである。他の２点の琴の出土地点とは、距離にしてわずか20ｍほど離れているにすぎない。形態は、端部に５本の突起をもち（内１本欠失）、裏面に瘤状の突出部を削り出す。これら各部は、１本の材より削って作りだされたもので、他の部材と組み合せを行った跡は全く認められなかった。本例と同様な琴は、これまでに千葉県菅生遺跡から完形品が１例出土しており、大体の姿が明らかである。この両者を比較してみると、全

長、幅など森浜遺跡出土例の方が、菅生遺跡出土例よりもひとまわりほど大きいように考えられる。しかし、端部に作られた５本の突起や、裏面にみられる瘤状の突出部やくびれ部分など、形



第23図　高島郡内で使用の田下駄

態の細部にはきわめて類似点が多い。菅生遺跡出土例については、調査者の大場磐雄氏や岸辺成雄氏によって「やまとごと」とみなされており[④]、本例も形態の類似などから考えて、同様な機能を持った遺物であると判断されるのである。なお時期的には、菅生遺跡出土例が古墳時代後期（６～７世紀）のものとされていることから、この森浜遺跡出土例によって、この種の形態の琴の出現が、古墳時代中期にまで遡ることが確認された。

第２は127、128の琴である。この琴については、かって琴板のみの完成品と考えていたが[⑤]、その後検討の結果、側面に穿たれた細長い孔と裏面の縁を、共鳴箱を取り付けるための機能と考えた。ただ、同じ共鳴箱を持つ琴にも、127のような長さ50cm程のものと、128のように長さが50cm以上になるものとがある。128は、おそらく守山市服部遺跡第17号方形周溝墓の周溝内より出土した琴のような本格的なものと推定される[⑥]。128には129にみられたくびれの切り込みがみられ、形態的にも127とは差違のあることがわかる。

以上３点の琴と滋賀県下で近年出土した琴[⑦]を比較して、共通することは、それぞれ相似た外形と端部に突起を持つ点が、まず第一にあげられる。また細部では、各々の突起が順にわずかずつではあるが長さを変えていることが指摘できる。絃をかける突起 ── 龍角の長さの違いが、あるいは音階に変化をひきおこさせるのであろうか。

琴柱は、整形はやや稚拙であるが完成された品である。琴柱の出土地点と、127、128の各琴の出土した地点とのへだたりは、10ｍ程にすぎない。なお、滋賀県下で琴柱の出土例は、守山市服部遺跡出土の琴に伴出して４点、大津市湖西線関係遺跡Ｖ区で古墳時代後期と平安時代末～中世のものが各１点出土している[⑧]。

註

① 石野博信「大和の弥生時代」（『橿原考古学研究所紀要　考古学論攷』第２冊　奈良県立橿原考古学研究所　昭和48年）

② 本田修平「森浜遺跡出土の田下駄について」（『民俗文化』168　滋賀民俗学会　昭和52年）

③ 亀井熙人「埋れていた木製品」（『郷土と科学』15-1　鳥取県立博物館　昭和44年）

④ 大場磐雄「菅生発見の「やまとごと」」上・下（『どるめん』１、２　萩書房　昭和48年）

⑤ 兼康保明「古代の琴 ── 森浜遺跡出土などの遺品をめぐって ──」（『月刊文化財』169　第一法規出版　昭和52年）

⑥ 『波登里』第７号　昭和51年（正式報告はまだされていない。註⑤参照）

⑦ 県下で出土した琴および琴状木製品は次のとおりである。

大津市湖西線関係遺跡ＶＤ区（古墳時代後期または飛鳥時代）　註⑧に同じ（ＣＷ88）

守山市服部遺跡（古墳時代後期）　註⑥に同じ

守山市赤野井遺跡（古墳時代中期）　山崎秀二「守山市赤野井遺跡」（『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅴ　滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　昭和53年）

⑧ 田辺昭三他『湖西線関係遺跡調査報告書』（湖西線関係遺跡発掘調査団　昭和48年）

4．出土木製品観察表

第５表　第一次調査出土木製品

番号	種類	観察	法量（cm）			備考
			現存長	現存幅	現存厚	
1	不明	現存する一端をやや弯曲ぎみに削っている。先端から20cm位の所に両端から、深さ3.0cm、幅3.5～6.5cmの台形状の切り込みを入れる。両側面には手斧痕が認められる。	60.0	15.8	6.9	第２層
2	杭	丸木の一端を削り尖らせている。	41.3	5.5	4.9	2W 第２層上面
3	杭？	丸太を¼に割り、幅約3.5cm位で全体に面取りをしている。	68.4	13.0	13.2	2E 第２層上面
4	杭？	丸木の一端を削ってやや尖らせている。	16.9	8.4	8.4	第２層下層
5	不明	板材の一端を削り薄くして篦先の様にしている。板材に対してほぼ直角に長さ3.0cm、幅1.9cm位の孔をほぼ中央部にあけている。	26.2	6.4	2.4	第１層
6	杭	板材の一端を削り尖らせている。	33.6	9.4	7.9	13W 第２層上面
7	杭	板材の一端を削り尖らせている。	13.5	5.5	4.3	第２層下層
8	不明	板材の四面に手斧痕が残る。一端をやや尖らせぎみにしている。	32.0	9.5	6.4	第２層下層
9	不明	板状で片側の端に３段の切り込みを入れる。	25.4	3.7	1.6	第６層
10	不明	中程から片側が楕円状に加工されている。反対側には長さ1.2cm、幅2.6cm以上の孔があけられ、木のくさびが残存している。	38.7	6.3 3.4	1.9	第６層下層
11	杭？	板材の一端を３方向から削り尖らせている。	17.7	1.8	1.6	第６層
12	矢板	木目にそって弯曲している板材の一端を２方向から削り尖らせている。	50.1	9.3	2.5	第６層上面
13	有孔板	板材で両端は残存している。中央部に長さ3.0cm、幅2.0cmの孔をあける。	40.9	9.6	2.0	第７層
14	有孔板	板材で欠損部側に長さ1.4cm、幅2.4cmのやや台形状の孔をあける。	23.9	5.8	1.9	第７層
15	棒材	板材の一端を３方向から削り尖らせている。	26.9	2.0	1.3	4W SD3
16	不明	板材の端部近くに長さ1.4cm、幅1.2cmの楕円状の円孔を、また端部より11cm位の所に長さ、幅とも不明であるが長方形の孔をあけている。	17.1	3.4	0.9	4W SD3
17	板材	板材の一端を両方から切り落とし、ほぞ状にしている。	17.9	9.4 6.6	1.9	SD6－1
18	板材	板材で両端共に楕円状に切り落とされているが、一方のカーブの方が強い。	17.9	3.8	1.6	第７層
19	杭	自然木の先端部を斜めに削り尖らせている。	46.7	4.9	4.1	SD6－1
20	杭	丸木の一端を４方向から削り尖らせている。K４。	34.0	5.4	5.4	第１遺構面
21	杭	角材の一端の片面だけを削る。K７。	38.3	5.2	4.0	第１遺構面
22	割木材	断面が三角形状になる角材で一端及び３面に削り痕が残る。K３。	63.0	15.0	10.0	第１遺構面
23	丸木材	丸材の一端を２方向より削っている。K２。	37.2	10.8	10.8	第１遺構面
24	杭	丸木の一端を４方向より削り尖らせている。K６。	55.0	6.2	6.4	第１遺構面
25	杭	丸木の一端を４方向より削り尖らせている。	53.9	7.8	6.9	
26	杭	角材の一端を２方向より削り尖らせている。K10。	18.0	7.0	5.5	第１遺構面
27	杭？	丸材の端部近くにU字型の溝状の切り込みを入れる。K12。	62.0	16.0	12.5	第２遺構面
28	矢板	板材の一端を４方向より削り尖らせている。	48.9	12.2	7.4	排水溝内

29	杭	丸木の全体に面取りを行い、一端を4方向から削り尖らす。K18。	19.8	5.0	5.0	第2遺構面
30	杭	板材の一端を4方向から削り尖らせている。K17。	33.0	5.5	3.0	第2遺構面
31	杭	角材の一端を4方向から削り尖らせている。	25.2	3.9	7.0	西排水溝内
32	割木材	木目にそって弯曲している断面台形状の板材の一端を切り落としている。K13。	38.7	12.0	6.2	第2遺構面
33	杭	角材の一端を4方向より削り尖らせている。	40.5	8.9	7.8	2W 排水溝際
34	丸木材	丸木の一端を3方向より削る。K25。	23.7	8.4	8.8	第3遺構面
35	櫂	楕円形に近い柄部にはわずかに削り痕が残る。水かき部は先端に近づくにつれて厚みが薄くなる。	67.25	11.0 3.7	2.25 2.8	表採
36	板　材	板材で片面にのみ削り痕が残る。1カ所に焼痕が残る。	141.8	19.3	3.8	第6層
37	板　材	板材の端部近くに長さ2.5㎝、幅2.5㎝の孔をあける。	108.6	21.4	2.6	第6層
38	杭	角材の一端は片側を切り落としほぞを作り出している。もう一端は4方向から削り尖らせている。	261.8	12.8 9.6	2.9	第6層
39	火鑽臼	臼部は3カ所認められ、総て火鑽杵によって使用されており、黒く炭化している。臼部の直径は約1.0㎝である。	17.8	2.0	1.2	SD2－1
40	火鑽臼	臼部は両側に23カ所認められ、全て火鑽杵によって使用されており、黒く炭化している。臼部の直径は約1.0㎝である。板材全体に焼痕が残る。	25.3	2.9	1.5	SD2－1
41	石包丁形木製品	石包丁形をしており、片面に幅1.1㎝のV字形の溝が加工してあり、直径0.6㎝位の円孔が2カ所溝内にあけられている。	16.1	4.4	1.5 0.1	SD6－1 肩部
42	底　板	2枚分しか現存していない。0.3㎝位のとじ穴が片側4カ所に残り、樹皮のとじ皮が残存する。合わせ目のほぼ中央に長さ1.1㎝、幅1.5㎝の孔があけられている。	24.9	11.3	0.4	SD6－1
43	不　明	円柱状の材の両端を削っている。中央部に0.5㎝位の円孔をあける。	7.6	3.5	2.5	
44	田下駄	板材の両端の両側面を斜めに切り落としている。大きさがややまちまちな孔が8カ所あけられている。中央の4カ所が足をくくるためのものであり、両端の4カ所は輪部をくくりつけるためのものである。輪部の丸材は直径1.1㎝×1.5㎝位である。	39.5	14.6	1.8	第8層

第６表　第二次調査出土木製品

番号	種類	観察	法量（cm） 現存長	現存幅	現存厚	備考
45	杭	丸木の一端を４方向から削っている。一端には焼痕が残る。	88.6	6.0	6.0	第２層
46	棒材	板材状の一端の片側を切り落としてほぞ状にしている。もう一端は火を受けて炭化している。	136.5	6.5	3.8 2.0	第２層
47	棒材	断面三角形の角材の現存の両端近くの２カ所に、ゆるやかな弧を描いた切り込み部が入る。	119.9	6.5 3.7	6.0	第２層
48	棒材？	丸材の一端を４方向から削り有頭状に加工する。またその下方の一面を削り出している。他端は火を受けて炭化している。	44.5	1.8	1.6	6S 第２層
49	不明	角材の一端はえぐりを入れて段をつけている。端部には長さ2.8cm、幅1.6cm位のほぞ穴があけられ、木のくさびが残存する。他端は１方向より削られ尖りぎみである。	122.9	5.5	4.1 3.1	第３層
50	有頭棒	細長い棒状の一端を切り込み有頭状の先端部形作る。棒状の断面形は円形に近い多角形をなす。	96.4	2.0	2.0	01 第２層
51	不明	板材の一端が削られて太くなっている。その部分に長さ2.8cm、幅1.7cmのほぞ穴があけられており、ほぞが現存している。	81.5	6.5	4.2	5S 第２層
52	杭	丸木の一端を４方向から削り尖らせている。	86.3	5.0	5.0	
53	杭	板材の一端を２方向から削り尖らせている。	118.9	5.8	2.8	
54	杭	丸木の一端を４方向から削り尖らせている。	90.6	6.3	6.6	
55	矢板	板材の一端を４方向から削り尖らせている。	87.3	9.9	5.5	第２層
56	不明	板材の両端は残存している。一端は斜めに切り落とされている。	83.4	7.2	2.3	
57	有孔板材	板材の２カ所に楕円形の円孔をあけているが破損が激しいので詳細は不明である。	97.5	8.3	2.7	第３層
58	櫂	柄部は水かき部近くでは楕円形であり、端部に近づくにつれて円形に近くなる。水かき部は肩部の張りもそれほどなく楕円形である。基部の厚みは先端に近づくにつれて薄くなり、使用のためか、先端部に磨滅がみとめられる。	112.7	4.0 14.8	3.0 2.3	
59	杭	丸木の一端を４方向から削り尖らせている。	17.6	3.8	3.5	3S 第２層
60	杭	自然木の先端を１方向から削り尖らせている。	14.0	2.0	2.0	第２層
61	杭	丸木の一端を４方向から削り尖らせている。また他端は火を受けて炭化している。	27.9	4.1	4.2	3S 第３層
62	丸木材	丸木の一端を４方向から削りやや尖らせている。また他端は火を受けた為に欠損している。	21.6	9.0	9.5	
63	杭？	角材の両端は残存している。一端は削り丸くしている。もう一端は４方向から削り尖らせている。	54.8	3.5	2.4	2S
64	不明	細長い板材の両端はほぼ残存している。一端は両側よりV字形の切り込みを入れ槍先状に尖らせている。もう一端は一側面を切り落として細くし先端部は削り丸くしている。	60.5	2.6	1.2	
65	櫂？	柄部はほぼ厚みが一様であり、水かき部の肩部はなだらかにカーブを描く。	63.5	2.8 10.6	1.8	01
66	竪杵	搗部と握部との境には明瞭な区別がなくなだらかに細くなっている。握部が2.8cmと極端に細くもう一方に搗部がつくとは考えがたい。先端部には加工痕は残るが、使用痕は認められない。	62.2	9.0	2.8	01 第２層
67	不明	角材で両端は残存している。1.4cm四方の孔をあけている。先端部は４方向から削り尖らせ、焼痕が残る。	23.2	3.5	3.0	8S拡張 第３層直上

68	不　明	板材の4カ所に大きさがまちまちのほぞ穴をあけ、そのうち3カ所は他の材をさしこんだままの状態である。	28.1	5.8	2.8	
69	不　明	ナタ状に柄の部分と身の部分とに加工されており、身の部分の先端を斜めに切り落とし、刃の部分はやや薄くなっている。	17.6	2.4 6.3	1.9 1.3	1N 第2層
70	不　明	角材の一端を1方向より削り薄くしている。あるいは握手状になるのかもしれない。	20.7	4.1	3.8 1.8	01N 第1層
71	矢板？	板材の一端を2方向より削り尖らせている。	85.8	4.4	2.0	01
72	剣状木製品	板材で残存している両端部を2方向から削り尖りぎみにしている。断面は片側が厚く、もう片側が薄い三角形である。	51.3	3.4	1.2 0.4	第2層
73	不　明	棒状の材を削り多角形状の丸材にしていると思われる。先端部と基部との境に明瞭な段を作り太さを変えている。	35.2	2.1	1.3	
74	不　明	棒状の一端を半面だけ切り落としほぞ状にしている。	58.4	3.0	3.0	01N 第3層
75	不　明	断面は扁平な多角形の楕円状である。側面に近い所に長さ1.3㎝、幅1.1㎝の孔をあける。	41.7	4.9	1.8	01S 第2層
76	棒　材	角材で残存している両端部の一端を斜めに切り落としている。またこの切断部と相対する位置にV字形の切り込みを入れる。	44.4	2.2	2.4	
77	不　明	丸材の一端近くにU字形の溝を切り込む。	21.3	2.0	2.0	3S 第3層
78	不　明	丸材の両端部近くに浅いU字状の切り込みを入れている。	26.4	2.9	2.6	1N 第2層
79	ヘ　ラ	柄部と先端部とに別れ、先端部に近づくにつれて薄くなっている。	37.7	2.8 2.1	1.0 1.4	第3層
80	有頭棒	棒状材の一端を2方向から削り有頭状にしている。	28.1	1.9	1.8	
81	有頭棒	棒状材の一端を4方向から削り有頭状にしている。有頭状の端部からもう一端にいくほど細くなっている。	42.1	3.8	2.5	2S 第2層
82	不　明	断面は刃状に片側が薄くなる三角形である。その薄い方の側面2カ所にV字形の小さな切り込みを入れる。	40.3	1.6	2.8	3S 第2層
83	不　明	丸材の一端を舟底形にし、その側面と反対側に2個1対のU字形の切り込みを2カ所に入れる。	37.6	2.6	2.6	7S 第2層
84	不　明	板材で一側面に台形状の切り込みを入れる。	28.2	4.5	1.9	第3層
85	チキリ？	丸材の一端を3方向から削り有頭状にしている。また一平面に大きなえぐりを入れている。	26.3	4.5	3.5 1.9	表採
86	チキリ	板材で残存する両端部を2方向から切り込みを入れてほぞ状に作っている。	57.4	4.2	1.5	表採
87	チキリ	板材の一端を2方向から切り込みを入れてほぞ状に作っている。	48.3	2.8	0.9	4S 第2層
88	有頭棒	丸材の恐らく両端部を4方向から削り有頭状にしている。	44.5	1.8	1.6	6S 第2層
89	有頭棒	角材の一端を4方向から削り有頭状にしている。	38.4	1.9	1.2	
90	不　明	扁平な板材の一端を2方向から切り込みを入れてほぞ状に作っている。	25.2	3.0	1.3	表採
91	紡錘車	断面台形状をしている。円孔は1.1㎝～0.8㎝とややばらつきがみられ、水平面に対してもやや斜めに入っている様である。	6.4	1.3		表採
92	底　板	外縁より約1.2㎝内側に恐らく側板をはめこむ時のものであろうと思われる浅い溝をめぐらしている。底は平らである。	27.2	17.4	1.6	3S 第3層
93	不　明	扁平な板材の一端に切り込みを入れ突起部を作る。	14.9	3.4	1.8	表採
94	不　明	板材の一端を3方向から削り有頭状にしている。	21.4	2.4	1.0	第3層

95	不　明	丸木の木目にそってくりぬいた円筒形で、断面は台形状に細くなっている。内外面共に丁寧に削られ、口縁部と思われる所には黒漆が内外面に塗られていたと思われる。	10.3		1.0	
96	アカトリ	柄部と身部とからなり、身部の先端は徐々に薄くなっている。柄部はほぼ断面円形である。	28.0	11.5	1.0	8S 第3層
97	不　明	平面形は変形の台形状であり、上方にほぞをつける。	11.1	5.2	1.5	1N 第2層
98	不　明	揆形にひらき断面楔形である。	5.0	3.5	1.2	第3層
99	不　明	台形状の板材で、両側端には浅い段がつけられ、この部分に円孔があけられている。恐らく組み合わせて使うものであろう。	6.3	19.2	0.9	
100	火鑽臼	臼部は2カ所認められ、うち1カ所は切り込みだけで未使用である。1カ所は火鑽杵によって使用されており、黒く炭化している。臼部の直径は約1.0㎝である。	20.6	3.0	2.2	表採
101	火鑽臼	臼部は5カ所認められ、総て火鑽杵によって使用され、黒く炭化している。臼部の直径は約1.0㎝である。臼のある面全体に焼痕が残る。	22.7	2.6	1.9	6S 第2層
102	火鑽臼	臼部は4カ所認められ、うち1カ所は2つの臼部が共存している。総て火鑽杵によって使用され、黒く炭化している。臼部の直径は約1.5㎝である。	27.9	3.4	1.9	01
103	火鑽臼	臼部は5カ所認められ、直交する位置にある。うち1カ所は切り込みだけで未使用である。他は総て火鑽杵によって使用されており、黒く炭化している。臼部の直径は約1.5㎝である。	31.8	2.0	2.0	3S 第2層
104	火鑽臼	臼部は4カ所認められ、総て火鑽杵によって使用され、黒く炭化している。臼部の直径は約1.0㎝である。臼部以外にも部分的に焼痕が残る。	49.0	3.0	2.1	3S 第2層
105	火鑽臼	臼部は16カ所認められ、総て火鑽杵によって使用され、黒く炭化している。臼部の直径は1.0㎝前後とばらつきがみられ、同じ火鑽杵を使用していないと思われる。	47.0	2.5	1.2	5S 第3層
106	火鑽杵	細長い棒状の加工木で、一端は丸く火鑽杵に使用されたため焦げている。	38.2	1.0	1.0	5S 第3層
107	火鑽杵	細長い棒状の加工木で、両端共に丸く削っているが一方のみ火鑽杵に使用されたためか焦げている。	29.5	1.2	1.2	表採
108	火鑽臼 （チキリ？を転用）	火鑽臼に転用している。臼部は3カ所認められ、うち1カ所は切り込みだけで未使用である。他の2カ所は火鑽杵によって使用され、黒く炭化している。臼部の直径は約1.1㎝である。	22.5	3.4	2.1	表採
109	火鑽臼	臼部は2カ所認められ、うち1カ所はあまり使用されていないと思われる。臼部の直径は約1.1㎝である。	25.0	2.4	1.7	表採
110	火鑽臼	臼部が2カ所、他に側面に切り込みの位置を示すと思われるきざみ目が1カ所ある。2カ所の臼部は火鑽杵によって使用され、黒く炭化している。臼部の直径は約1.1㎝である。	19.4	2.8	2.1	表採
111	有孔板	薄く大きな板材であり、短辺のほぼ中央一端よりに長さ4.3㎝、幅2.4㎝の楕円形の穴があけられている。また長辺の一端よりに1.2㎝から0.7㎝位までの円孔が11カ所あけられている。側辺に近い方の穴は中央にむかって、中央よりの穴は側辺にむかってあけられている。	70.4	33.7	2.7	3S 第3層
112	有孔板	薄い板材に長さ1.5㎝、幅2.0㎝位のほぼ四角の穴があけられている。	36.7	12.1	1.7	第2層
113	不　明	板材の一端は炭化して欠損している。一端から7㎝位の所に幅1㎝位のほぞ穴があけられている。	28.4	7.5	2.8	第2層

114	不　明	比較的短い板材で両側面は斜めに切断されており、断面は平行四辺形に近い形である。表面には刃物によってつけられたと思われる傷が無数にある。	18.8	13.1	3.4	01
115	不　明	比較的短い板材で両側面は斜めに切断されており、断面は平行四辺形に近い形である。	15.0	16.2	1.3	01 第1層
116	組み合わせ部材	断面がやや丸味を持った角材で両端は残存しており、一端は斜めに切り落とされている。長辺上に台形状の切り込みを入れ組み合わせ部材として使ったものと思われる。	39.9	3.9	6.8	第3層
117	桶？	直径約90㎝の円周の⅙の大きさで、片側に2カ所長さ4.0㎝、幅1.5㎝のほぞ穴をあけ、うち1カ所には樹皮とくさびが残存している。また一端の一部がほぞ状に切り込まれている。内面の両端は共に厚くなっているが、特に一方には3.5㎝×2.5㎝のくり込みを入れ、また1.0㎝×0.3㎝の刻みがあけられ、中に木片が残存している。外面の端にも切り込みが入る。	71.8	41.7	5.2	4S 第3層
118	盤	おそらく平面形が長方形になるものと思われ、両辺の器壁が斜めに立ち上がるものである。底部は平らである。	39.7	20.5	2.1	01S 第2層
119	盤	おそらく平面形が長方形になるものと思われ、両辺の器壁が斜めに立ち上がるものである。全体的に焼痕が残る。	39.1	15.1	2.4	表採
120	盤	平面形が長方形になるもので、両辺の器壁が斜めに立ち上がるものである。底部は平らである。	52.0	23.0	1.5	01S 第2層
121	脚付盤	平面形が長方形になるもので、両辺の器壁が斜めに立ち上がるものである。底部は平らであり、おそらく4カ所に断面台形の脚台がついている。	52.1	17.4	1.5	
122	脚付盤	平面形が楕円形の浅い小形盤で、底部のおそらく2カ所に細長い低い脚台がつくと思われる。	29.6	13.0	2.5	第2層
123	舟　形 （参考）	精巧に出来た舟形で、舳と艫を明瞭に作り出している。舳先部付近に小円孔をあけている。舳には斜めに切り込みを入れている。（弥生時代後期？）	42.4	10.8	1.2	針江遺跡 町教委蔵
124	舟　形	舳と艫との明瞭な区別のない舟形で、底部を平らにしている。	48.0	15.4	2.0	01S 第2層
125	把手付盤	平面形が長方形になるもので、両辺の器壁が斜めに立ち上がるものである。短辺の中程に柄を取り付ける。	75.1	44.3	3.0	2S 第2層
126	不　明	分厚い角材の中央部に円座を削り出し、円座の左右は斜め方向に大きく切り込まれたほぞ穴をあける。	60.5	32.5	15.0 8.0	5S 第3層
127	琴	木目の方向に沿って二つに割れたものと思われる。先端部には竜角が3本残っており、側面のものが一番大きい。裏側の側面には、幅約1.5㎝の縁が端部より23㎝にわたって残っており高さは1.7㎝である。またこの部分に長さ2.2㎝、幅0.4㎝程の細長い孔が5カ所あけられており、この内には、木のくさびが残存しているものもある。	52.3	10.1	1.8	7N 第3層
128	琴	木目の方向に沿って二つに割れたものと思われる。断面をみると表面は平坦であるが、裏面は中央部がゆるやかな弧を描いている。先端部には竜角が3本残っており、側面のものが一番大きい。側端近くに長さ2.4㎝、幅0.4㎝程の細長い孔を3カ所にあけている。また板の割れ口の中央部に半月形の切り込みを入れている。	52.8	15.0	1.9	7N 第3層
129	琴	先端部には竜角が4本残っており、中央部のものほど大きい。裏面を大きく削って突出させている。	54.9	10.2	4.1 1.5	表採
130	琴　柱	家型をした琴柱であり、頂部中央にV字形の切り込みを入れて溝を作っている。	4.45	1.6	2.35	3S 第2層
131	着柄鋤の柄	着柄先端部分が紐でしぼった時にぬけない様に突起をつくり出している。この部分に紐でくくったと思われる痕跡	80.5	4.2	5.2	3S 第2層

		が残る。				
１３２	鍬	中央部に径3.5㎝の着柄孔があり、裏面に着柄隆起がある。両側辺はゆるやかにカーブを描きながら挨形に開く。先端部には長さ0.8㎝、幅2.0㎝位のほぞ穴が2カ所あけられ、その穴の所に浅い溝が片面にほられている。また表面には幅0.7㎝の縁がほり出されている。	8.9	２4.0	1.4	排水溝
１３３	鍬	ほぼ中央に厚さ約1.0㎝程の突起を作り、長さ2.6㎝、幅3.0㎝位の方形の穴が斜めにあけられている。両側端がやや薄く作られている。	２9.7	１6.5	2.2	８Ｓ拡張 第３層直上
１３４	えぶり	先端が熊手状になった本体部と、一木より削り出して挿入部を二股にした柄部とからなり、二股部分の一端は本体部に挿入された状態で折れている。柄部の二股部は断面長方形であり、他端は面取りを行った断面略楕円形である。				４Ｓ 破損分解修理中 （未実測）

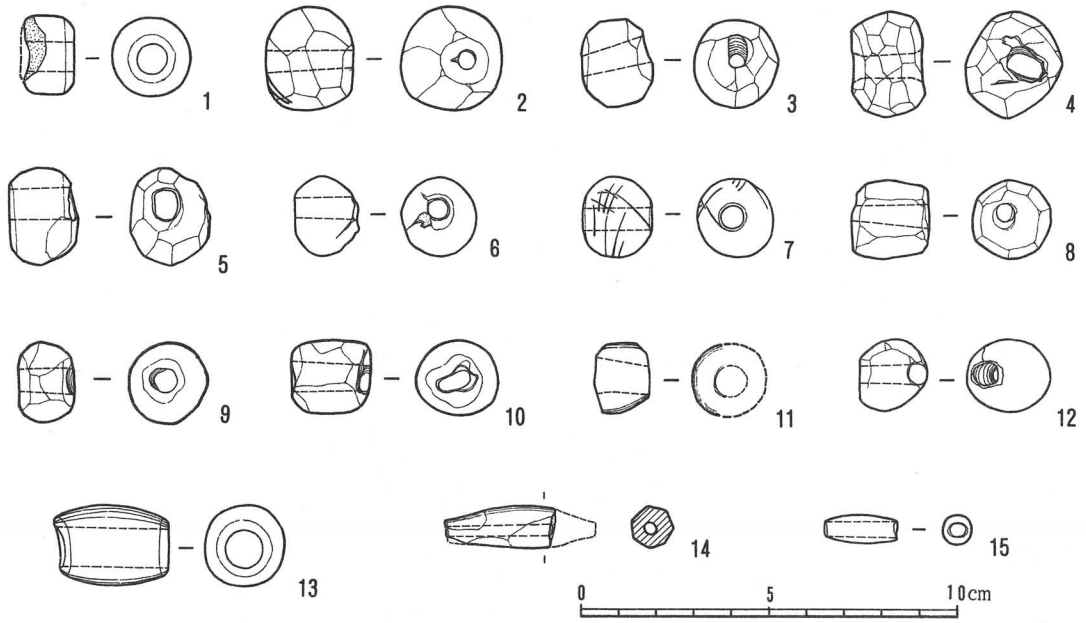
5．土 製 品

土錘　すべて土師質で、第一次調査で11点、第二次調査で１点した。

第一次調査で出土した土錘は、概ね形状・孔の径が類似するが、細かく分類すれば、扁平なもの(１)、球状(２)、やや円筒形のもの(８)など形態に差違が認められる。出土状況よりみれば、同一種の球状土錘とみるかぎり、古墳時代中期の時期と考えてよいだろう。(７)も表面採集品であるが、形状よりみて同様のものであろう。

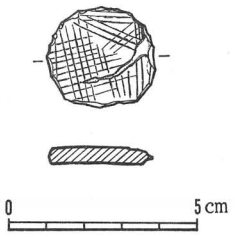
第二次調査では、小形の管状土錘(15)が出土している。古墳時代中期であろう。

表面採集で２種類の管状土錘が出土している。両者は形態だけでなく、孔の径に著しい相違があり、(13)が孔の径10㎜に対し、(14)が３㎜と極端に小さく、おそらく土錘を使用する対象物が異るのであろう。共に時期不詳。



第24図　土　　錘

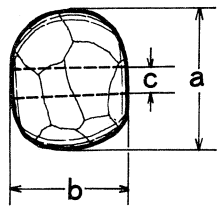
小形円板　土師器の甕の器壁の破片を打ち欠いて、円形に加工したものである。直径2.8㎝、厚さ約５㎜を測り、弥生時代の土器片加工の紡錘車とくらべるとはるかに小さく、むしろ中世の小形円板に類似する。第二次調査、４Ｓ地区で組物の下より出土しており、古墳時代中期より新しくなることはない。



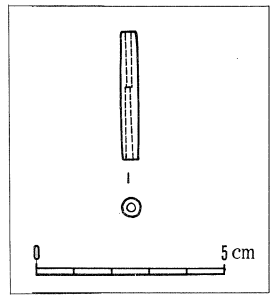
第25図　土製品小形円板

番　号	a（cm）	b（cm）	c（cm）	重量（g）	出土地点	色　調	胎　土	備　考
1	2.1	—	0.8	7.0	4W第2層直上	淡灰褐色	微砂粒含む	一部欠損
2	2.8	2.3	0.4～0.6	14.9	1E第2層直上	淡褐色	精　良	黒斑あり
3	2.4	1.9	0.5～0.7	9.2	4W第2層直上	黒灰色	細砂粒含む	
4	2.8	2.0	0.6～0.9	14.2	4W第2層直上	淡灰褐色	精　良	焼成時のひび割れ
5	2.6	1.8	0.6～0.9	9.8	OE第2層直上	淡褐色	細砂粒含む	黒斑あり
6	2.2	1.7	0.6	6.0	4W第2層直上	淡褐色	精良・砂粒を若干含む	
7	2.1	1.8	0.6	5.5	新川北方	灰褐色	砂粒を若干含む	
8	2.1	—	0.4～0.6	10.6	SK1	淡灰黒色	細砂粒を含む	一部欠損
9	2.1	1.5	0.7	6.0	SD2	灰黒色	砂粒を含む	黒斑あり摩滅
10	2.0	2.1	0.7～0.8	9.1	SD2－1	淡灰褐色	精　良	
11	2.9	1.5	—	（2.2）	SK2－2	淡灰褐色	砂粒を含む	残½
12	1.9	1.8	0.5	5.9	SD3	灰褐色	精良・微砂粒を含む	
13	2.1	3.1	1.0	13.0	側溝工事	淡黄褐色	砂粒を含む	
14	1.1	—	0.3	（2.5）		暗褐色	精　良	残½強
15	0.8	2.0	0.4	0.9	1N第2層	暗赤褐色	精　良	

第7表　土錘観察表



6．石 製 品



第26図　管　玉

管玉（第26図）　直径５㎜、長さ34㎜を測り、両側から穿孔する。緑泥片岩製と思われる。第一次調査、ＯＷ地区第２層直上より出土。

砥　石　第一次調査で２点、第二次調査で１点土器しているほか、１点表面採集品がある。

（１）は扁平で縦長な形をした、携帯用の砥石の断片で、頁岩製の仕上砥である。第一次調査、３Ｅ地区第２層直上より出土。

（２）も扁平で三角形をした小形の砥石で、一部側面に原石の地肌が残る。（１）と同じく頁岩製で、仕上砥であろう。第一次調査、第１遺構面ＳＤ２より出土。

（３）は断片で形状はわからない。石材は、きめ細かな砂岩製で、荒砥であろう。第二次調査、２Ｎ地区第３層上面より出土。

（４）は砂岩製で、砥がれて側面は大きく湾曲している。表面採集。

用途不明石製品（５）　粘板岩を三角形に成形し、背の部分を面取りした錘状の石製品である。三角形の頂点よりやや下に彫り込んで、引っ掛りを作る。第一次調査、ＯＷ地区第２層直上より出土。

投弾？（６）　硬砂岩の卵形をした礫で、形状が投弾に似る。網などに入れて、石錘に用いた可能性も考えられる。表面採集品である。

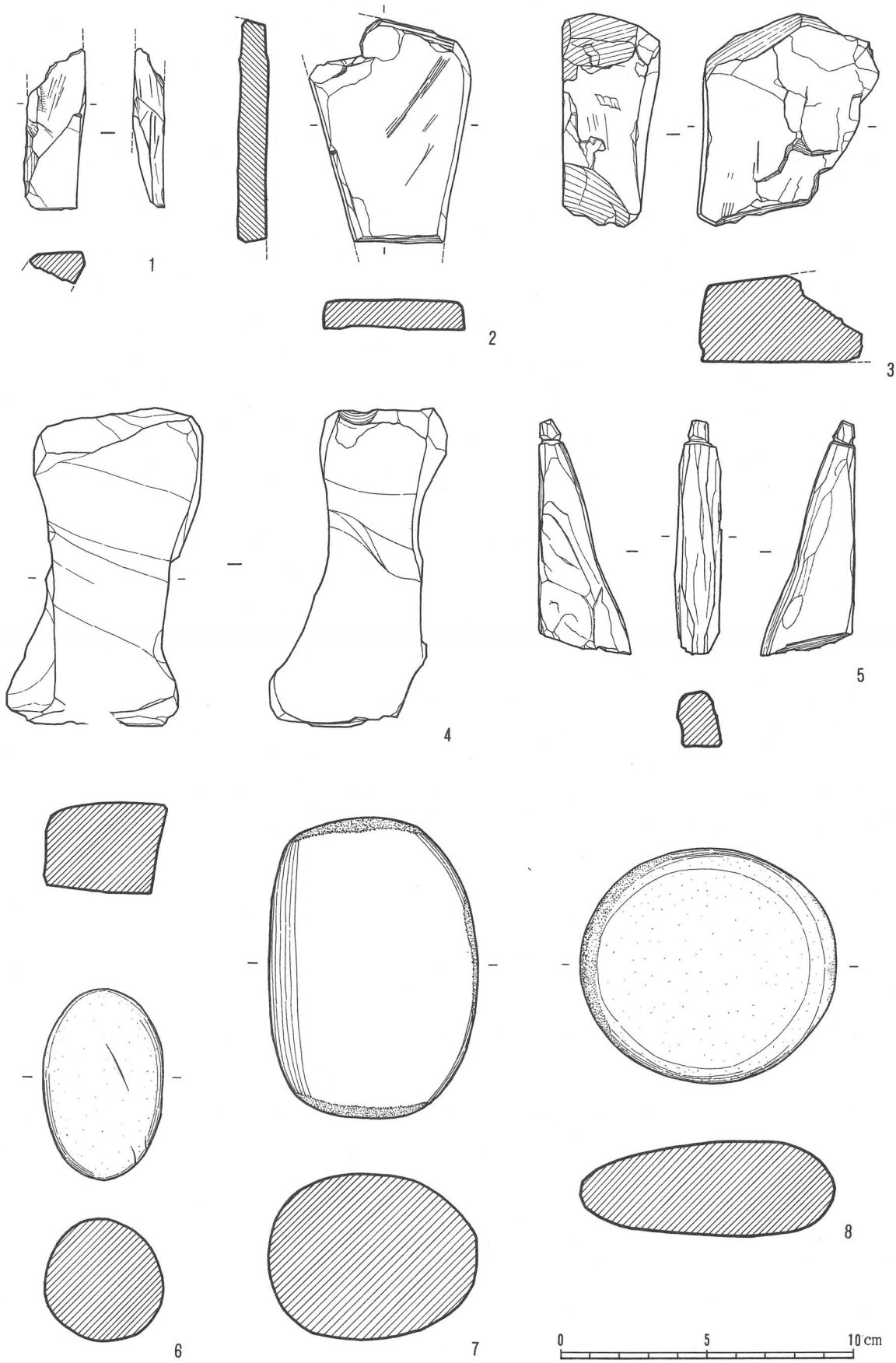
敲石（７）　硅岩の河原石を磨いたもので、両端に使用による敲打痕が著しく残る。敲打痕の状態は、石の表面が荒れていないことから、打ちつぶして擂ったような用途が考えられ、遺物の時期から石杵の可能性もある。第一次調査で、南側の排水溝中より出土したが、おそらく、第２層直上か第２層に伴うものであろう。

磨石？（８）　扁平で円形をした硬砂岩で、扁平な面に研磨が認められる。第一次調査、２Ｗ地区第２層直上より出土。

各石製品の時期は、表面採集品を除けば、出土層位、共伴遺物からみて、古墳時代前期から中期のものであろう。ただ、（１）の砥石については、比較的よく形が整っていること、層中に歴史時代の遺物も若干混在することから、新しい時期の可能性もある。

石材は、管玉を除けば、すべて地元で産出するものである。管玉に用いられた緑泥片岩は県内では産出せず、おそらく日本海側から運ばれたものである。

また、第一次調査で、石英の空洞部が割れ方によって穴になる穴あきの礫が出土している。おそらく自然礫が層中に混ったものと思われるが、民俗例では願かけや耳の病気の際に穴あき石を奉納することから、自然礫とはいえ注意をひいた。



第27図　石 製 品

7．種　　子

種子の大部分は桃である。

桃の果核で注意をひいたのは、第二次調査において、半月状のえぐりのあるものがまとまってみられたことである。その出土状況についてみると、桃の果核は調査区域全体から出土するものの、半月状のえぐりのある果核は組物付近に限って出土している。また、排水溝に設置した水中ポンプに吸い寄せられた出土地点不明のものも、採集の日付けや湧水の条件などから考えると、組物付近から流された公算が強い。これ以外の地点で出土したものは、ほとんど通常の破損のない果核であった。

桃の果核の寸法は、半月状のえぐりの無いものについては、核長25.0～26.0㎜ほどの本遺跡出土例の中では大形のものが見られる。それに対して、えぐりを持つものには核長22.0～23.0㎜ほどのやや小形のものが多い。

半月状のえぐりのある部分については、すべて核の縫合線の部分に限られており、片側が一番多く、続いて両側、まれに三方えぐりのあるものもみられる。その各々の出土数は、片側42例、両側10例、三方１例の合計53例である。また、えぐりの深さは、ほとんどが核を穿孔して内部にまでおよんでいる。こうした特長は、他遺跡出土例ともよく合致し、全国的に共通性を持っている。

半月状のえぐりのある桃の果核は、古墳時代以降中・近世まで類例①があるが、その原因は人為的なもの②とする見方とネズミの食痕③とする二説がある。本遺跡の場合、ネズミの歯痕らしきものが観察できるものもあり、「ネズミの食痕」説をとりたい。

註

① 〔弥生時代～古墳時代〕安国寺遺跡（大分県）、纏向遺跡（奈良県）、笠嶋遺跡（和歌山県）
〔奈良時代〕山田水呑遺跡（千葉県）
〔中・近世〕元興寺極楽坊、西大寺骨堂、室生寺弥勒堂（奈良県）
（各報告書による）

② 人為説のうち注意すべきは、果核の中の種子を採取する方法として認められるかどうかである。

③ 鑑定によって明らかにされたものは、山田水呑遺跡例で、内果皮に残った食痕よりアカネズミのものとされている。

第8章　結　　語

1．調査のまとめ

（1）　第一次調査

遺構は主に第１・第２遺構面で、杭列やピットなど時期のあまり明確でないものと、布留式、庄内式土器を出土する土坑や溝などがあった。

土層は、地表から無遺物層まで深さ３～3.5m程あり、９層に分かれる。このうち、遺物が多量に出土するのは、地表下約1.5m付近の第２層直上と第２層までで、それより下層は約３～3.5mまで土器や木製品など人工的な遺物はほとんど含まれず自然木が多かった。

出土した土器よりみれば、第２層直上が布留式新段階、第２層上面が布留式古段階に分けられる。また、ごく少量であるが、第５遺構面で検出された溝からは弥生時代後期（第Ⅴ様式）の土器が出土した。

土層の観察から注目されたことは、砂層や粘土層に挟まれて何層にも薄いスクモ層が観察された。このスクモ層は、琵琶湖周辺に広くみられ、湖辺に繁殖した藻や葦などの植物が腐植し、堆積して形成された層だといわれている。こうしたことから、調査地付近は、弥生時代後期から古墳時代にかけて、たえず冠水と陸化をくりかえしていた場所であることが推測できる。

（2）　第二次調査

遺構として明確なものは杭が検出されただけであるが、第一次調査の上層部の遺物包含層に対応する厚いスクモ層が検出され、多くの古墳時代の木製品が出土した。木製品の年代は決め難いが、出土する土器は庄内式古段階のものが最も古く、布留式新段階のものが最も新しいものであった。

スクモ層は、大きく上・下２層に分けられるが、出土する土器をみるかぎり時期差は認められなかった。遺物の出土状況は、第一次調査の遺物包含層中の出土状況とは異なり、土器、木製品ともに、調査地内の各所でまとまりをもって出土した。また自然木の出土がほとんどなく、総て何らかの加工のあるものがほとんどであった。

遺物の出土状況や集中度、第一次調査の結果より考えて、遺跡の中心部――生活跡は発掘地点よりもう少し北の微高地上と思われる。第二次調査でのまとまりのある遺物の出土状況は、微高地上から廃棄された状況であろう。

2．土器の時期

森浜遺跡出土の多量の土器は、編年作業の基準となる遺構の一括資料、層位による前後関係などがほとんどとらえられなかった。また湖西においても、庄内式、布留式の編年を行うのに十分な資料はなく、ここでは便宜上畿内の編年資料を軸に、型式的に編年を試みた。編年表に使用した土器は、比較的残りの良いものを中心に行ったため、器種によっては全構成を提示できなかったものも生じた。しかし、全体においては、各時期別の器種の組み合わせの概要は把握できるものと思う。一方、器種によってはさらに細かく変遷の追えるものもあるが、ここでは出土状況が混在した状態であったことから、あえて大別にとどめた。

庄内式古段階

各器種とも琵琶湖地方の第Ⅴ様式後半の要素を色濃く残すが、畿内・河内地方の「庄内甕」の影響をうけた甕が現われる。

壺A　第Ⅴ様式の口縁端部の垂下する壺を継承したもの。

壺B　壺Aと同じ、広口壺。壺A、Bとも文様は無く、外面にヘラ磨きをする。

壺C　広口の大形壺。庄内式になって新たに出現する壺か。

壺D　第Ⅴ様式以来、壺が無文化する中で残る装飾壺。伊勢湾地方の影響によるものであろう。

壺E　第Ⅴ様式後半に出現する二重口縁壺の継承されたものであるが、全体に器壁も厚く地方作りである。

壺F　やや長い球体の体部に、外反する口縁がつく。底部は平底。外面に刷毛目を施す地域色の強い壺である。

壺G　直口壺。第Ⅴ様式後半から続く精製された小形壺で、体部は下半がすぼみ小さな平底となる。

甕A　体部外面に第Ⅴ様式の甕にみられる太い叩き目を残し、内面は刷毛整形。底部内面には、クモの巣状の刷毛目を残す。40、41は、胴部下半を欠失するため、あるいは下半部の叩き目を刷毛で消している可能性があり、そうすればやや新しく考えねばなるまい。

甕C　畿内より搬入したいわゆる「庄内甕①」で、体部外面上半に細かい叩き目を残すが、下半は刷毛目で叩き目を消している。内面は頸部以下ヘラ削りし、器壁を薄くしている。745は、暗褐色の色調、胎土に金雲母片を含んでいるが、生駒山麓の土器の胎土に含まれる角閃石が無く、産地の比定については保留しておく。また、左上りの叩き目をつけたものもある（321、322）。

甕D　「庄内甕」の影響をうけたと思われる在地型のくの字状口縁をもつ甕である。底部が尖り底となり、プロポーションに「庄内甕」の影響がみられるが、口縁部については旧態のまま

である。内外面共に刷毛目を施す。

甕E　甕D同様、「庄内甕」の影響をうけた在地型のくの字状口縁をもつ甕である。内面頸部以下をヘラ削りをする。

甕K　近江を代表する受け口状口縁の甕で、口縁部外面に刺突列点、刻み、沈線、浮文など装飾するものが多い。また口縁の受け部が厚く、口縁も直立気味であるほか、頸部内面に横刷毛を残すものもある。体部外面もまだ平行線や波状文などを残している。形態も体部上位に最大径がくる。第Ⅴ様式以来のプロポーションをとどめている。底部は小さな平底である。

鉢　体部が大きく直線的に外方へ開く鉢は、第Ⅴ様式から特に大きな変化はない。他に、440、441の小形鉢もこの時期か。

甑　鉢と同様、第Ⅴ様式の器形から大きな変化はないが、底部より直線的に外方へ開くものから、しだいに丸味をもつようになる。

高杯A　杯部が外方に開く深い高杯で、杯底部外面に稜をもつ。脚部は、裾部が外方へ開くもの（A_1）と、内弯気味のもの（A_2）とがあり、A_2については伊勢湾地方の欠山式の影響が考えられる。

高杯B　高杯Aを模したと思われ、杯底部外面に稜がなく、杯自体も内弯気味に丸味をもつ地域色の強い高杯である。

器台A　第Ⅴ様式からの筒状の柱状部をもつ器台である。

器台B　器台Aと同じ、口縁部外面を装飾したもの。

庄内式新段階

古段階にみられた第Ⅴ様式色が払拭され、畿内の庄内式の影響が強くなり、これまでみられなかった新しい器形が加わってくる。

壺C　畿内の壺に近いが、平底の底部などに地方色を残している。

壺D　外面の肩部付近に装飾を残す壺である。体部は球形化すると思われるが、口縁部を欠くため、全体像は不明で、古段階の壺に続くものかどうか判らない。装飾壺として壺Dとした。

壺E　新たに大形の二重口縁壺が加わる。口縁部は、内面の立ち上り部の稜が明確になる。大形壺は、口縁部に竹管を押した円形浮文を貼り付け、肩部に上下の半円を連続させた独特な波状文を描くなど特長的である。体部は球状をなすが、突出した底部をもつ。

壺F　壺F_1は、古段階同様外面に刷毛目を施した壺で、口縁部は体部に比して小さくなる。壺F_2は、F_1より体部の均整の壺で、底部は突出する。器体外面の刷毛目を消す。

壺H　口縁部が大きく開く精製された壺で、わずかに底部が残る。

壺I　小形丸底壺の影響をうけて作られた在地産の土器で、まだ小形丸底壺は出土していない。

甕B　体部外面に太い叩き目を残す大形甕であるが、体部中位よりやや下方に最大形をもつ特異なプロポーションとなる。底部も丸味をもった平底となる。

甕C　「庄内甕」であるが、体部はかなり球形化する。体部外面は刷毛目、内面も上位を刷毛目とナデによって消し、下半をヘラ削りするなど新しい要素をもつようになる。底部は丸底。

甕D_1　口縁部、体部の形状は、古段階のものを踏襲しているが、底部が丸底化し、最大径が古段階のものにくらべやや下位にくる。体部外面上半に太い叩き目を施し、下半は刷毛目。

甕D_2　外面は甕D_1と同じ、叩き目と刷毛目よりなるが、体部内面はヘラ削りを行い器壁を薄くしている。体部は球状で丸底となる。甕Dの亜種か。

甕E　体部はまだ丸味をもたない。

甕F　体部に叩き目を施さない、くの字状口縁の甕で、体部外面、口縁部内面に刷毛目を施す。口縁部外面あるいは端部の形状などに、「庄内甕」の影響が認められる。

甕G　甕Fに似た刷毛目を施すが、体部外面の大半をヘラ削りする特異な甕で、これまで県下で例も無く、必ずしも近江の一地域の甕とは言い難く、搬入品の可能性もある。

甕H　甕Eと同じような「庄内甕」の影響を受けた甕で、体部内面のヘラ削り、甕Fのような口縁部への影響が認められるが、総じて形態的には地域色の強い甕である。

甕K　口縁部の無文化、口縁端部の外方への引き出しに特徴が見出せる。この時期の早いものでは、体部外面に装飾の残ることもあるが、しだいに刷毛目のみとなり、体部も丸味をもってくる。

甕L　第Ⅴ様式より認められる、口縁部を飾らず、受け口は常に直立する特徴をもっている。受け口状口縁甕の湖西北部にみられる地域色であろう。

甕M　伊勢湾地方のS字状口縁甕で、元屋敷期の古い段階のものであろう。

甕N　北陸地方の月影式の甕に先行するものから、月影式を含むが、139、391は体部内面の削りが頸部よりやや下位より始まることから、庄内式新段階の新しいところから布留式古段階の早いところにかけての、過渡的な時期に対応するものであろうか。

鉢　受け口状口縁鉢は、第Ⅴ様式より続くもの（604）であるが、この段階では、刺突列点文や平行線文、波状文などによる装飾も無く簡素化しており、口縁端部も外方へ開きはじめている。わずかに平底の底部が残る。

高杯A　古段階のものより杯部が深くなる。

高杯B　外形的には、A_2に似てくるが、杯部の作りに大きな相違がみられる。

高杯C　畿内系の高杯で、脚部が細くしぼられ、裾部のみ開く形をとる。杯部にくらべて脚部が小さくみえる。

高杯D　高杯A_1の小形化したもの。

高杯E　半球状の内弯した杯部に、短い脚柱が付き、脚部の裾が大きく広がる高杯である。

高杯G　小形器台と同じ外形の、杯部の小さな高杯である。

器台C　器台A、Bに代って小形器台が増えはじめる。

布留式古段階

小形丸底壺、鉢、小形器台の小形精製土器3種がセットとして整う、小若江北式およびそれより古い一群を古段階として大きくとらえた。広口壺が減少し、甑、器台がみられなくなり、逆に小形壺が増えてくる。

壺C　口縁部の広がりが、庄内式のものと異なる。

壺E　口縁部内面の立ち上りの稜が甘くなり、退化現像がみられるようになる。大形壺も体部外面に刷毛目を施し、粗製化が著しい。

壺H　口縁部が長く、体部のやや扁平なものから、しだいに口縁部が短くなり、体部が球形化して行くのがとらえられるが、土器のつくりはていねいである。

壺I　精製の小形丸底壺で、新しいものには、体部のヘラ磨きが刷毛目に代っているものもある。

甕C②　短く外反する口縁部の端部が内面に肥厚し、器壁を薄く削った、体部が丸底の布留式の甕である。中にC_2のように、口縁端部を外方に引き出し、内面に肥厚部を作るものもあるが、甕C全体からみると少量である。甕（685）は口縁端部を強いナデによって形成するほか、体部外面の刷毛目が粗いなど布留式の甕としては異例である。

甕D_1　器形、口縁部の作りとも、庄内式新段階のものを踏襲するが、しだいに胴部最大径が下位に移って丸底化が進み、内面と甕C同様にヘラ削りする。

甕D_2　甕D_1にくらべて、口縁部は外反せず短く、体部外面の刷毛目も縦方向と異なり、器体も丸味をもっている。

甕E　口縁部の形態、体部内面のヘラ削りなどに甕Cの影響が顕著となる。337は、庄内式新段階の口縁、頸部をとどめるが、口縁部外面のふくらみ、端部などに甕C_2の影響がみられる。ただ、体部内面は削っておらず、甕Eとは別なものかもしれない。

甕G　口縁部外面にややふくらみをもち、甕Cの影響をうかがえる（756）が、全体としては庄内式新段階の器形を踏襲する。器体はかなり丸味をもつ。759の口縁部は、庄内式新段階の甕Fの変化したものであるが、甕Fは下半部が不明なため、はたして体部外面下半をヘラ削りするのか、Fの口縁をもつ甕Gなのか判らない。

甕H　ゆるやかに開いた口縁部と球状の体部、体部内面は底部より上方に順にヘラ削りを行う。同じ内面のヘラ削りでも甕C、Eとは異なる。

甕K　口縁部、体部とも無文化し、形態としては器壁が薄くなり丸底化するのであろう。口

縁端部を外方へ大きく引き出すようになり、受け部外面の稜も甘くなってくる。

甕L　受け口状口縁が、段をもたず、短い内弯した口縁に退化する。体部外面には細かい刷毛目を残している。これが布留式新段階まで残るのかどうかは、ここでは資料的に検討できない。

鉢　口縁部が二段に屈曲して外上方に開く浅い鉢である。また小形丸底壺を大きくしたような鉢も認められる。粗製の鉢が姿を消す。

高杯E　杯部の丸味がなくなり、杯底部外面に稜をもつようになるほか、脚柱部もゆるやかに外方へ開くようになる。765は庄内式新段階の形態をとどめるが、他にくらべ作りが粗く地域色の強い模作と思われる。

高杯F　大形の高杯に代って登場する。これまでの高杯と異なり、ヘラ磨きの方向が総て横方行に変る。

器台　器形は、庄内式新段階にくらべて扁平となり、台に受け部ができる。高杯F同様、ヘラ磨きが横方向に変化する。

布留式新段階

各器種の均一化と粗製化が進んだ土器で、小形壺を除いて壺が姿を消す。また、近江の地域色をもった壺、甕もこの時期にほとんど姿を消してしまう。初期須恵器出現までの間とみており、これに続く土器は、湖西では、安曇川町南市東遺跡の土器[③]があげられよう。

壺H　粗製化した小形壺である。

甕C　布留式古段階にくらべて、しだいに器壁の厚くなるものや、体部外面の刷毛目の粗くなるものなどがみられるようになる。

甕D_1　外形は、下ぶくれをした丸底となるが、大きく外方へ開く口縁部は変化しない。長胴甕の祖形と考えるべきであろうか。

甕F　口縁部は単純化するが、外形、内面の刷毛目などに旧態を残している。

甕H　形態上、布留式古段階とくらべ大きな変化はなく、しいてあげれば、口縁部がやや短くなり、全体に器壁が厚くなってきたことと、内面底部付近までヘラ削りしなくなっており、甕Hの粗製化とみて680より新しく考えた。

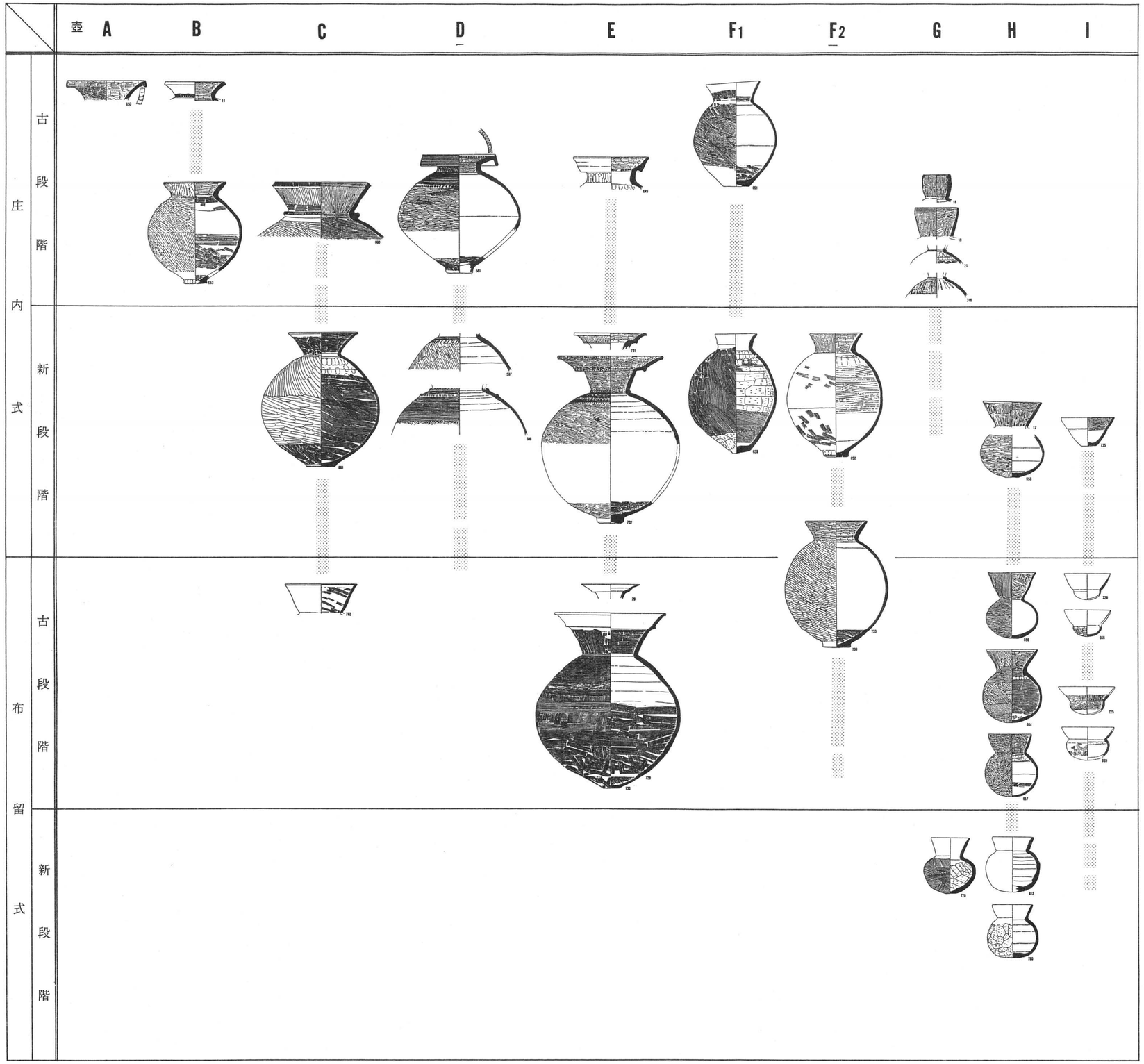
甕I　二重口縁の甕で、口縁部は外方へ開がり、体部は球形である。体部外面は刷毛目、内面はヘラ削りを行う。801にくらべ778の方が後出的である。

甕J　口縁部が直立気味の二重口縁の甕で、体部は長手の球形である。

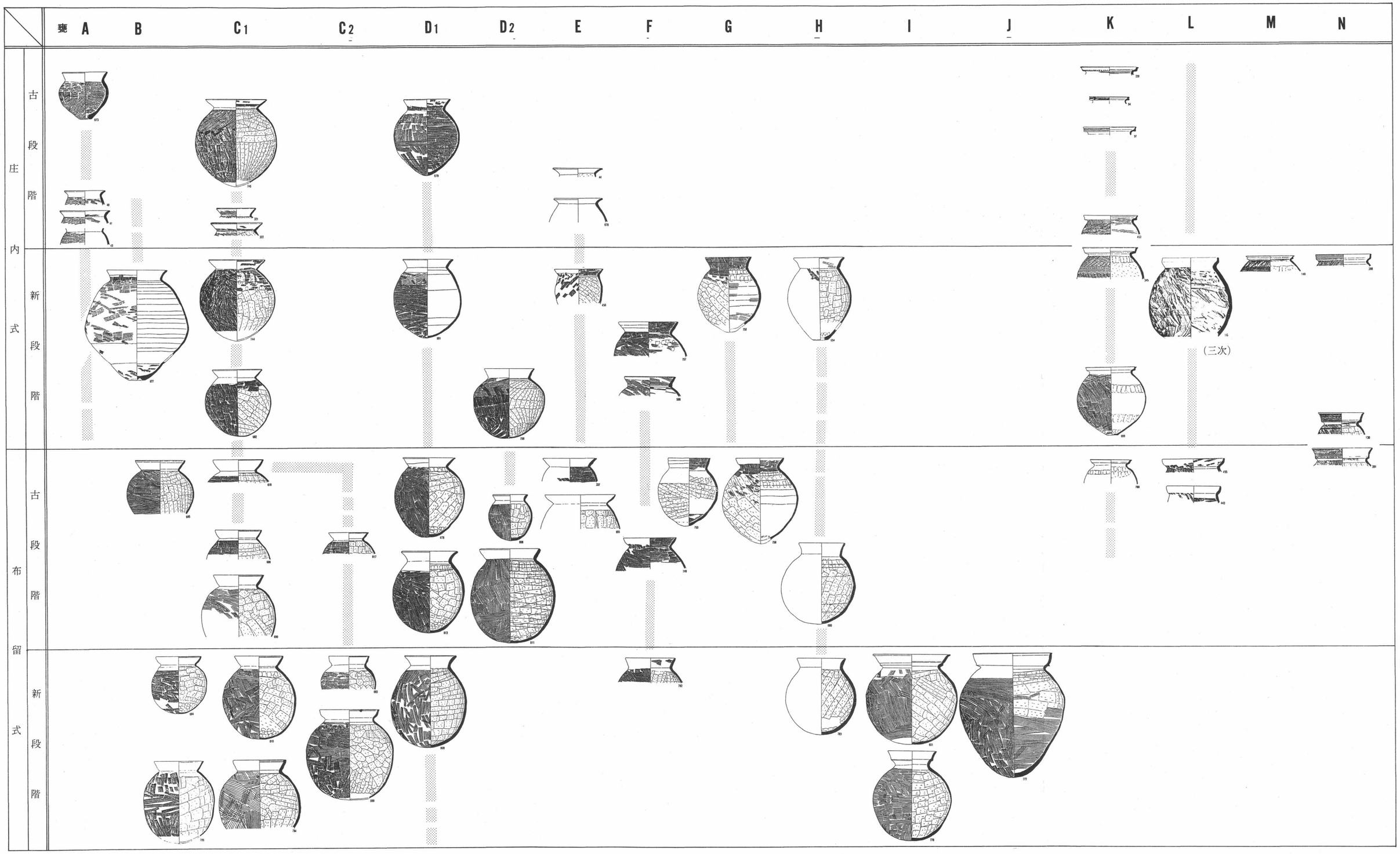
高杯F　粗製化した高杯で、脚柱部内面を横方行にヘラ削りを行う。

森浜遺跡出土土器を編年して気づいたことは、庄内式古段階から布留式古段階まで、実に多くの種類の甕がみられるということである。甕の基本的な組み合せは、第V様式の甕を継承してい

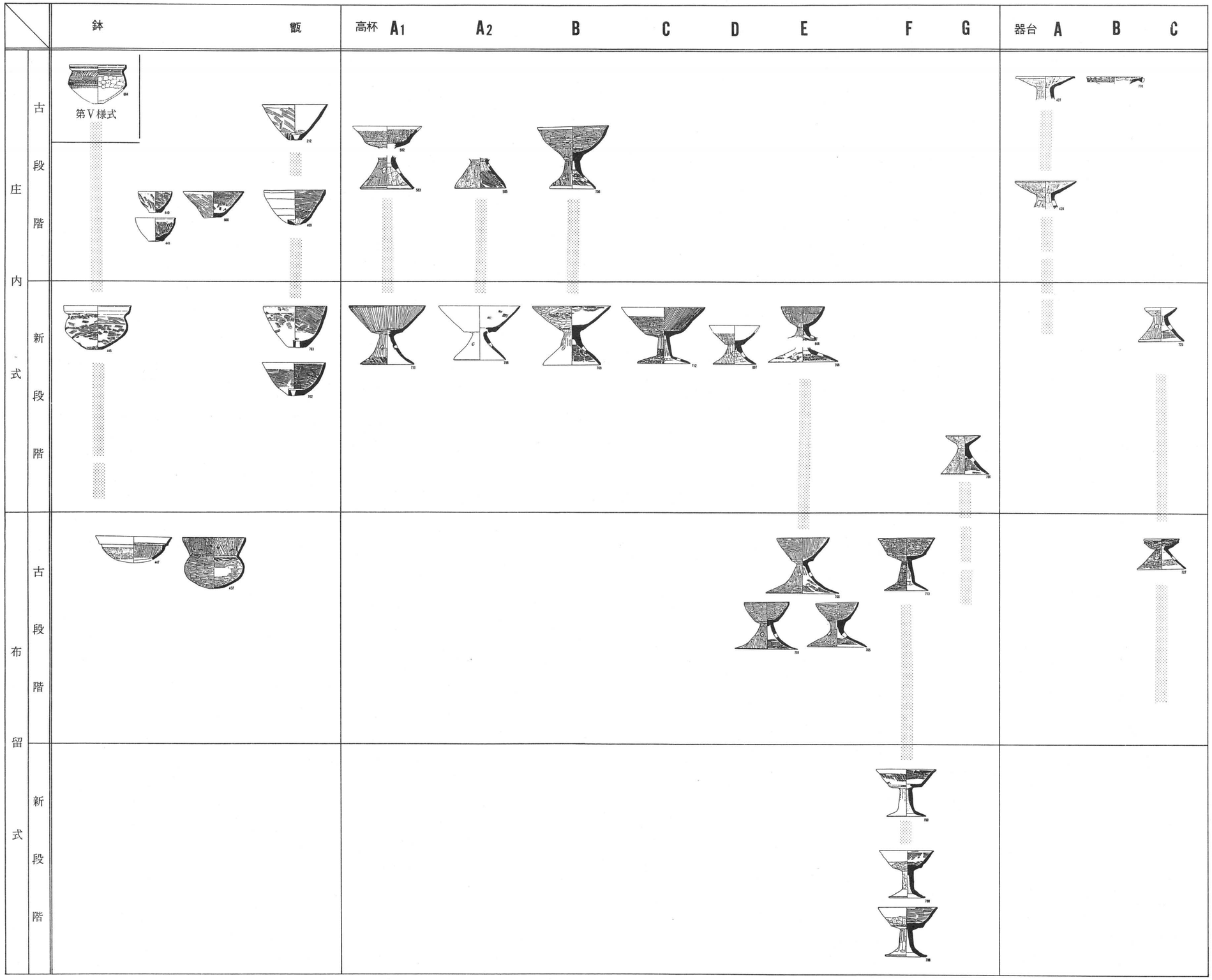
第28図　森浜遺跡出土土器編年試案（1）



第29図　森浜遺跡出土土器編年試案（2）



第30図　森浜遺跡出土土器編年試案（3）



る甕（甕Ａ）、畿内の庄内・布留式の甕（甕Ｃ）、地域色の強いくの字状口縁をもつ甕、近江の甕の特色ともいわれる受け口状口縁をもつ甕（甕Ｋ、Ｌ）の４つである。これらをみると、これまで近江の在地の甕は、受け口状口縁甕と考えられていたが、それと共存して甕の主流とまではなりえないが、くの字状口縁をもつ地域色の強い甕がかなり使用されていたのではないかと考えられる。そして、地域色の強いくの字状口縁をもつ甕は、畿内型の甕（甕Ｃ）の影響をうけながらも、布留式新段階まで同化しない保守性は、畿内周辺地域での古式土師器のうけ入れられ方の一面を示していよう。そうした甕の多様性も、布留式になってしだいに畿内型の甕に統一されてゆくが、ただ一つ甕Ｄのみ、庄内式古段階から布留式新段階まで一貫した変遷をとげている。おそらく甕Ｄは、布留式新段階以降も長胴化して残って行くのではないかと思われるのである。

近江を代表する受け口状口縁の甕も、甕Ｋ、Ｌと２種類あり、布留式新段階まで互いに独自の変遷をとげている。甕Ｋ、Ｌとも、第Ⅴ様式の段階から認められ、早く分化したものと思われる。ただ甕Ｌが県下全域に広く分布しているものでないことから、湖西地方高島郡内、あるいは若狭方面をも含めたさらに広い地域にまたがる地域色をもった甕の可能性がある。甕Ｌの口縁部の形態変化で気がかりなことは、甕Ｌが布留式の新段階にも存在するのかどうかである。森浜遺跡の包含層の状況、あるいは土器自身小破片が多く、決め難い問題で、その決定は今後の研究にゆだねなければならないが、布留式古段階での口縁部の変化と、布留式新段階にみられる甕Ｄの長胴化と結びつけば、奈良時代における近江型長胴甕の祖形論にもおよぶ問題となる。ここでは、問題を提起するにとどめたい。

註

① 本田修平・堀内宏司・奥野宗寛・折井千枝子「滋賀県下の庄内式土器――畿内より搬入された甕形土器の分布――」（『滋賀県文化財だより』９　滋賀県文化財保護協会　昭和52年）

② ここでは、畿内と同じ甕をＣとした。

③ 昭和52年度に安曇川町教育委員会の実施した第６次調査のＳＤ0602出土土器。

3．遺跡の性格

森浜遺跡をとりまく地形については、第５図の等深線図にみられるように、今回の調査地点付近から木津（こうづ）に向って、多少の高低はあるが幅約40～50ｍの浅瀬がある。この浅瀬は地元の人の間で、「かくれ道」として長く語り伝えられてきたものである。ここには、湖中であるにもかかわらず土器の破片が散布しており、また大木の根が原位置の状態で埋没林となって残っているともいわれており、ある時代には陸化していたのではないかと考えられていたが、このことは今回の発掘によっても証明することができた。すると、等深線をたどって古墳時代の地形を復原して行くと、「かくれ道」が湖中に突出して自然の堤防となり、森浜から木津にかけての湖をとり囲み、大きな湾を形作っていることに気付こう。そして、今回の発掘調査――とりわけ第二次調査で推定された遺跡の中心部分は、この湾、「森浜の入江」の南の奥まった位置を占めている。

森浜遺跡の性格を考える場合、同様な条件下にある遺跡の調査例が少ないため速断は難しいが、弥生時代中期前半の農村として名高い蒲生郡安土町大中ノ湖南遺跡[①]と比較した場合、木製農具の少ないことがまず第一に指摘できよう。森浜遺跡の場合、第一次調査で弥生時代後期の湿田で使用される田下駄が出土していることなどから、水田地帯として必ずして不適な土地でなかったはずである。第二次調査の古墳時代の木製品中に、農具と考えられるものは、鍬２、鋤の柄１、えぶり１と４点を数えるだけであった。こうしてみると、農具は少数出土しているものの、森浜遺跡の主要機能は農村ではなさそうである。

それでは、入江の波静かな場所なら漁村ではないだろうかとの推測も成立する。しかし、漁村とするには、それを積極的に裏付ける資料にこと欠いている。木製品に漁労具がみられないだけでなく、例えば網に用いた土錘の出土量にしてもわずか十数点で、他の湖岸の遺跡にくらべてはるかに少ない。また、この程度の量であるなら、同じ新旭町内の平野部に位置する堀川遺跡でも十分に認められる[②]。このように考えて行くと、地の利から推定される漁村説も、何か説得力を欠くものになる。

そこで湖岸にあって農村でも漁村でもない遺跡の性格を、木津と同じ環境にあることから、湖上交通路の北西の要を占めていた古墳時代前・中期の港の跡ではないかと推定した。そして、その証明の一つに各地から運ばれてきた、あるいは系譜の異なる土器の存在があげられはしないだろうか。また湖西にあって、畿内色の強い土器、畿内の影響下に変化した在地性の強い土器が第二次調査ではかなりの割合を占めていることも、遺跡の政治的な性格を意味していよう。さらに琴といった特別な遺物を考える時、森浜遺跡が地理的、歴史的に何か特別な条件下におかれた遺跡であったと考えられはしないだろうか。

それでは、なぜ森浜遺跡が重要視されねばならなかったのか、歴史的な背景をみてみよう。

結論からのべれば、新旭こそ日本海側へ通じる最短距離を占めていたことに原因があろう。弥生時代から古墳時代を通して、畿内から琵琶湖を経由して日本海へ出るコースは、大阪湾から瀬戸内海を通って九州へ出る海路と共に、朝鮮半島へむかう重要な道であったと考えられる。そして瀬戸内海ルートが主であるなら、琵琶湖～日本海への道はバイパスの役をはたしていたのであろう。

例えば弥生時代中期、後期におこったと考えられる倭国の戦乱は、瀬戸内海や大阪湾に見張り所やとりでを兼ねたような高地性集落とよばれる村を生み出した。同じように、近年琵琶湖西岸において丸山竜平氏らによって、高地性集落の存在が次々に確認されている③。琵琶湖西岸の高地性集落は、標高150～200ｍの眺望の良い山腹や山頂に限られ、南から順に、大津市部屋ケ谷遺跡・宇佐山遺跡④・高峰遺跡・春日山遺跡⑤など西大津の山上町から雄琴、堅田まで点々と続き、さらに高島郡まで北上し、新旭町熊野本遺跡⑥を北限とする。この高地性集落を年代的にみると、中期（第Ⅳ様式を中心とする）のものは、高峰遺跡、春日山遺跡、熊野本遺跡で、後期（第Ⅴ様式）のものは、部屋ケ谷遺跡、宇佐山遺跡、熊野本遺跡である。特に熊野本遺跡の場合は、湖岸と饗庭野台地を通って若狭へつながる道をおさえることのできる要衝であり、新旭の地がいかに地政的な要所であったかを物語っている。このことは、古墳時代になって「森浜の入江」が港としての機能をはたすのに適した場所であっただけでなく、位置的に熊野本付近から饗庭野を横切り、若狭街道へ通じる古道にすぐ結びつくこととも関係しよう。このことは、木津とて同様であったろう。

こうした地理的、歴史的背景のうえで考えるなら、早く畿内大和政権の傘下に組みこまれていったことは当然であろう。そして、畿内から新しい土器様式の流入する古墳時代に、かっての高地性集落と同じ立地に、全長約27ｍの一基の前方後方墳が築造される⑦。この古墳については出土遺物が無いため、年代の推定は難しいが、同様な立地にある大津市皇子山１号墳⑧（前方後方墳、全長約60ｍ）との対比、あるいは郡内で数少い前方後円（方）墳であることなどからみれば中期を降るものではないであろう。おそらく、森浜遺跡盛期の当地方の首長墓と推定される。

琵琶湖を北上して湖上に浮ぶ竹生島を眺めながら、森浜の港に長い舟旅を終えようとした時、あるいは饗庭野の台地を越えて湖上を南下しようとする時、眼前に浮ぶ竹生島は古代人にとってどのように感じたのであろうか。現在、私達が見る竹生島の美しさは、古代の人々にとっては、神秘的な神の齋（いつ）く別世界であったに違いない。遠く九州では、古墳時代になって玄海灘に浮ぶ沖ノ島が、航海の安全を祈って大規模に祭られている。淡海においてもまたしかりで、舟路の無事を湖上の神奈備に祈らずにはおれなかったであろう。こうした景観もまた、森浜遺跡をとりまく一種独特な環境である。

註

① 水野正好『大中の湖南遺跡調査概要』（滋賀県文化財調査概要第５集　滋賀県教育委員会　昭和42年）

② 『高島郡新旭町堀川遺跡調査報告』（滋賀県文化財調査報告集第５冊　滋賀県教育委員会　昭和50年）
土錘は34個出土している。

③ 丸山竜平「大津市堅田真野春日山遺跡」（『滋賀県文化財調査年報（昭和50年度）』　滋賀県教育委員会　昭和52年）

④ 山崎秀二「宇佐山遺跡出土土器について」（『近江』第５号　近江考古学研究会　昭和49年）

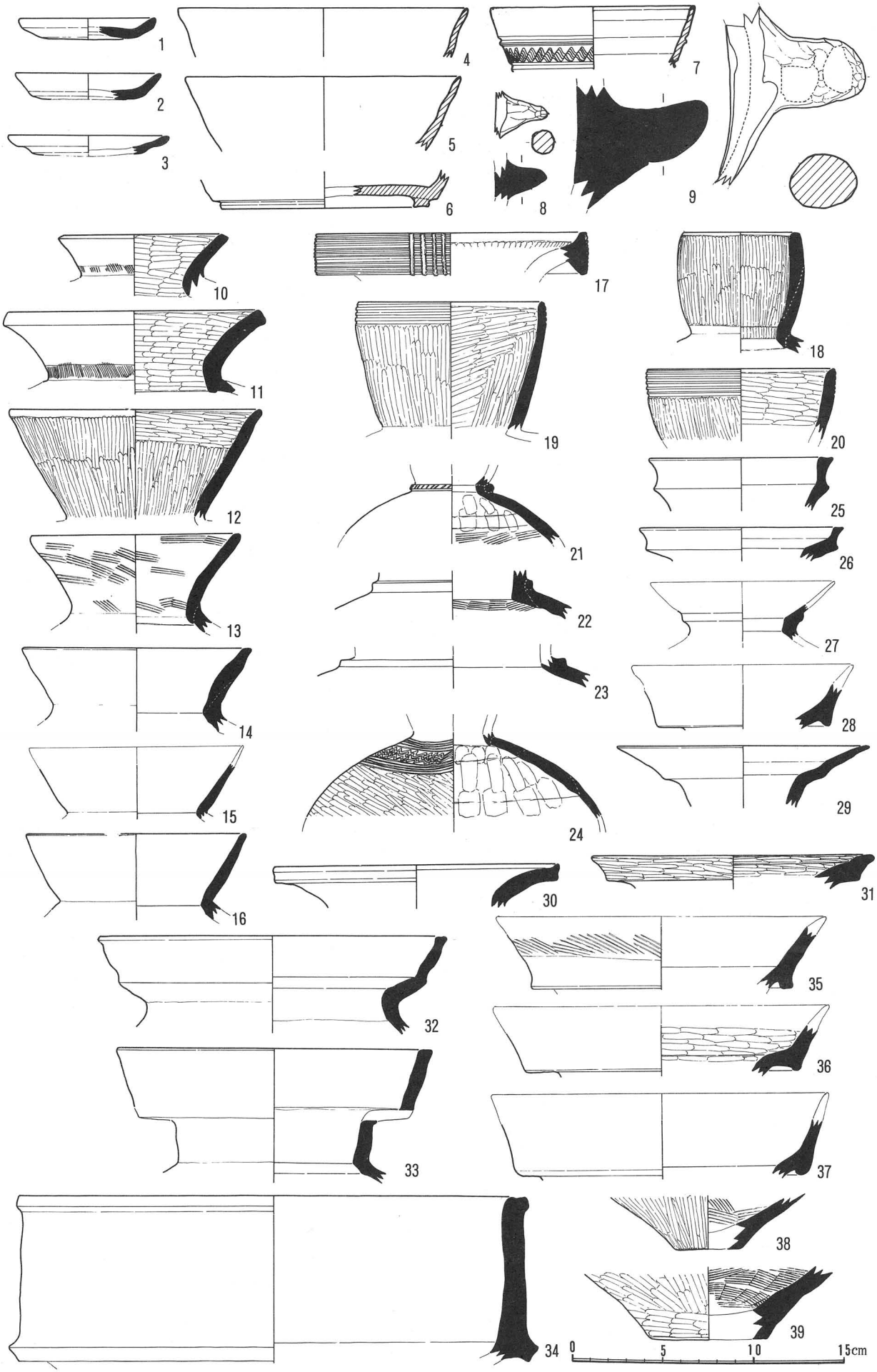
⑤ 註③に同じ。

⑥ 『熊野本遺跡分布調査報告書』（滋賀県教育委員会　昭和49年）

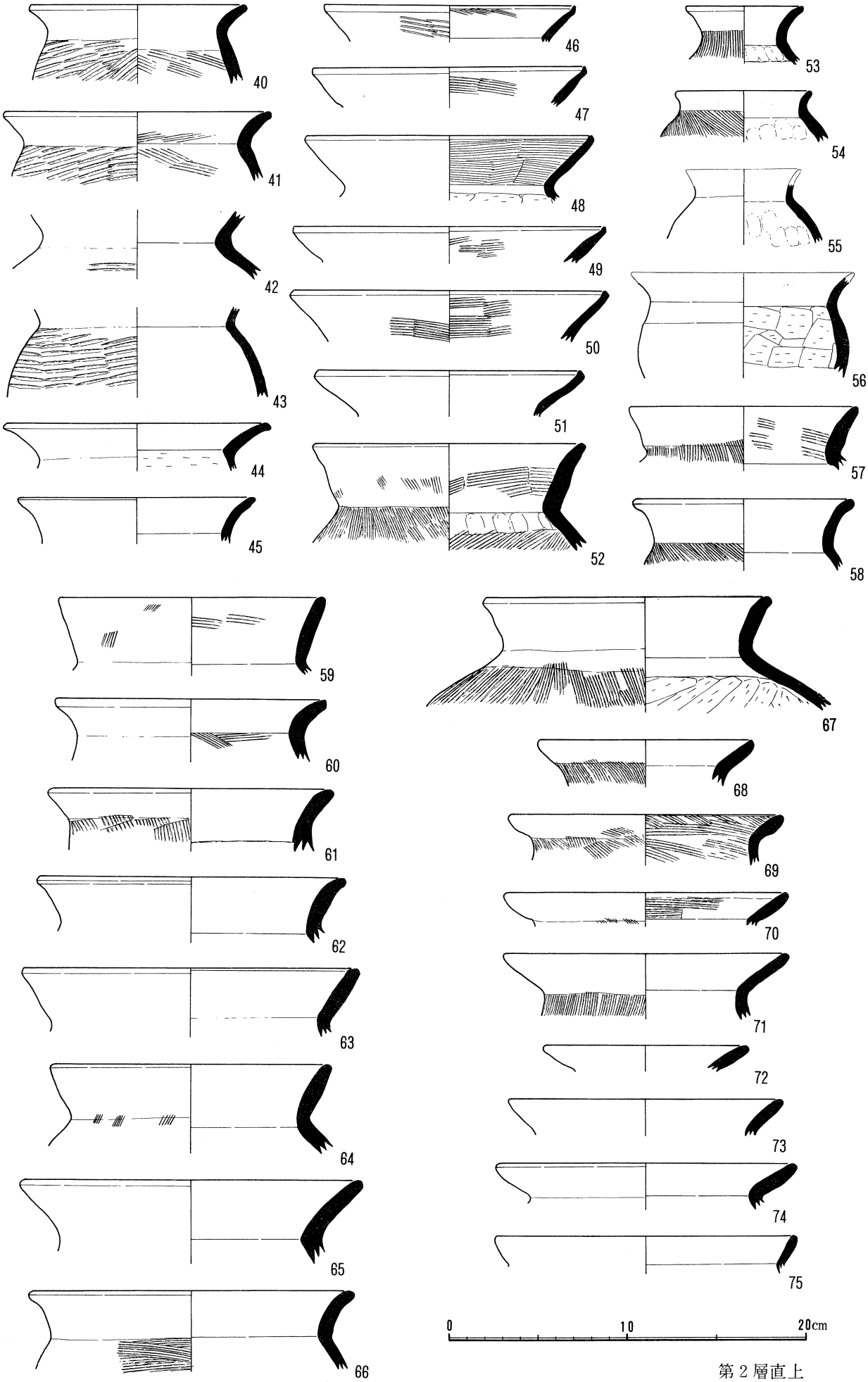
⑦ 註6に同じ（古墳分布図）。
註２に、第６号墳（前方後方墳）の地形実測図掲載。

⑧ 丸山竜平『大津市皇子山古墳群調査概要』（滋賀県文化財調査概要第７集　滋賀県教育委員会　昭和46年）

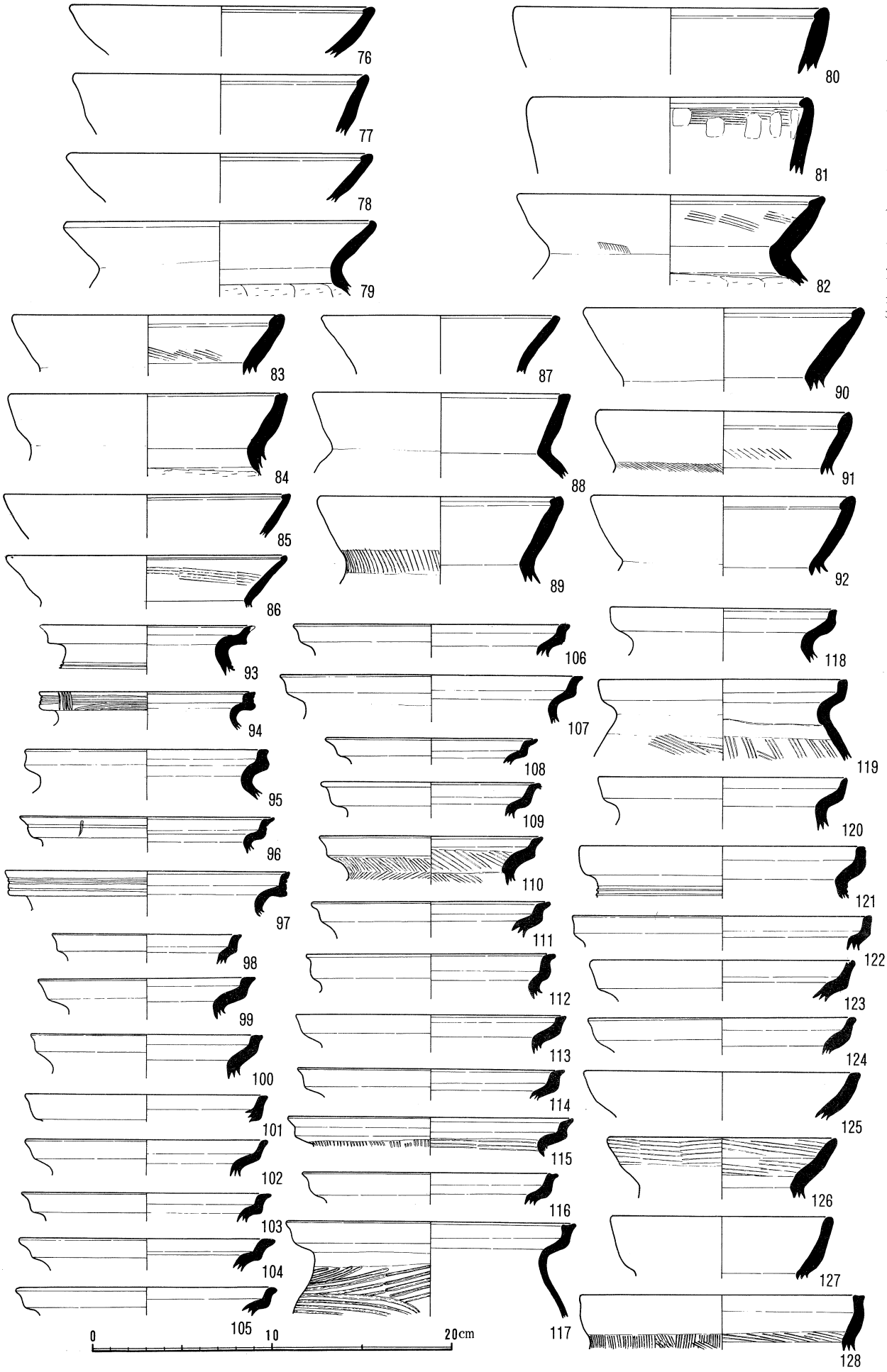
実　測　図　版


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
0
5
10
15cm

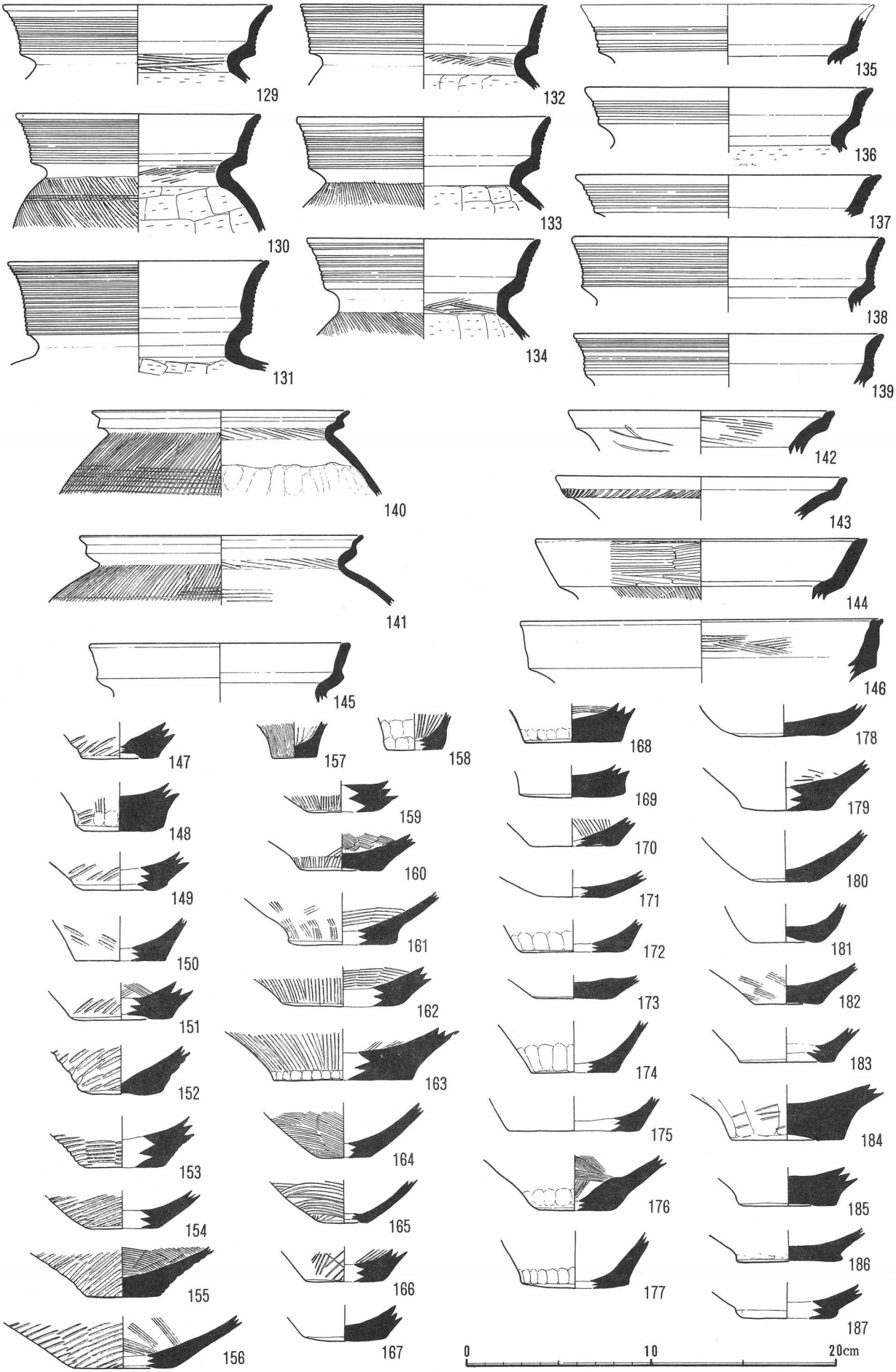
第２層直上


40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
0
10
20cm

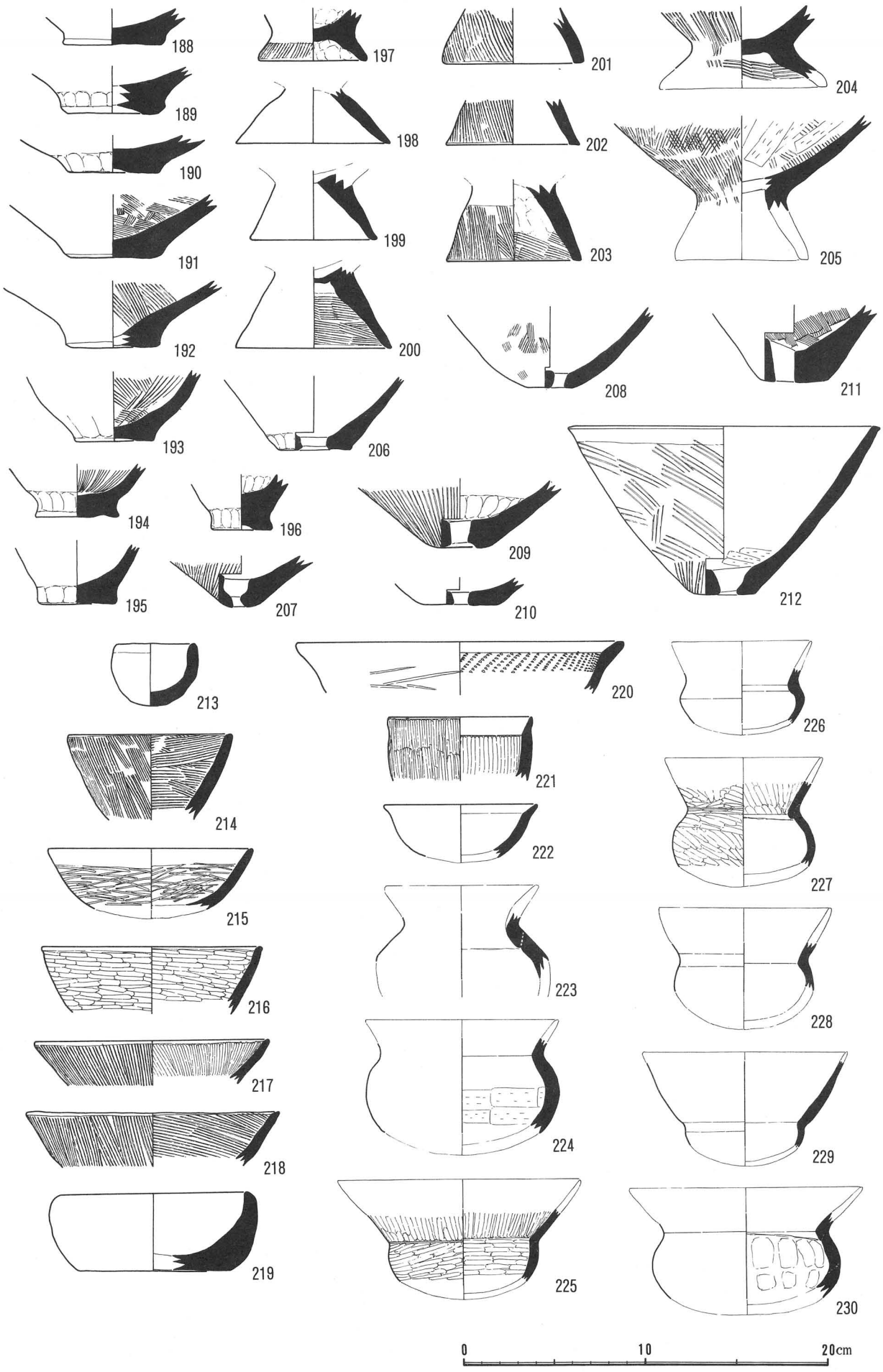
第２層直上


76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
0
10
20cm

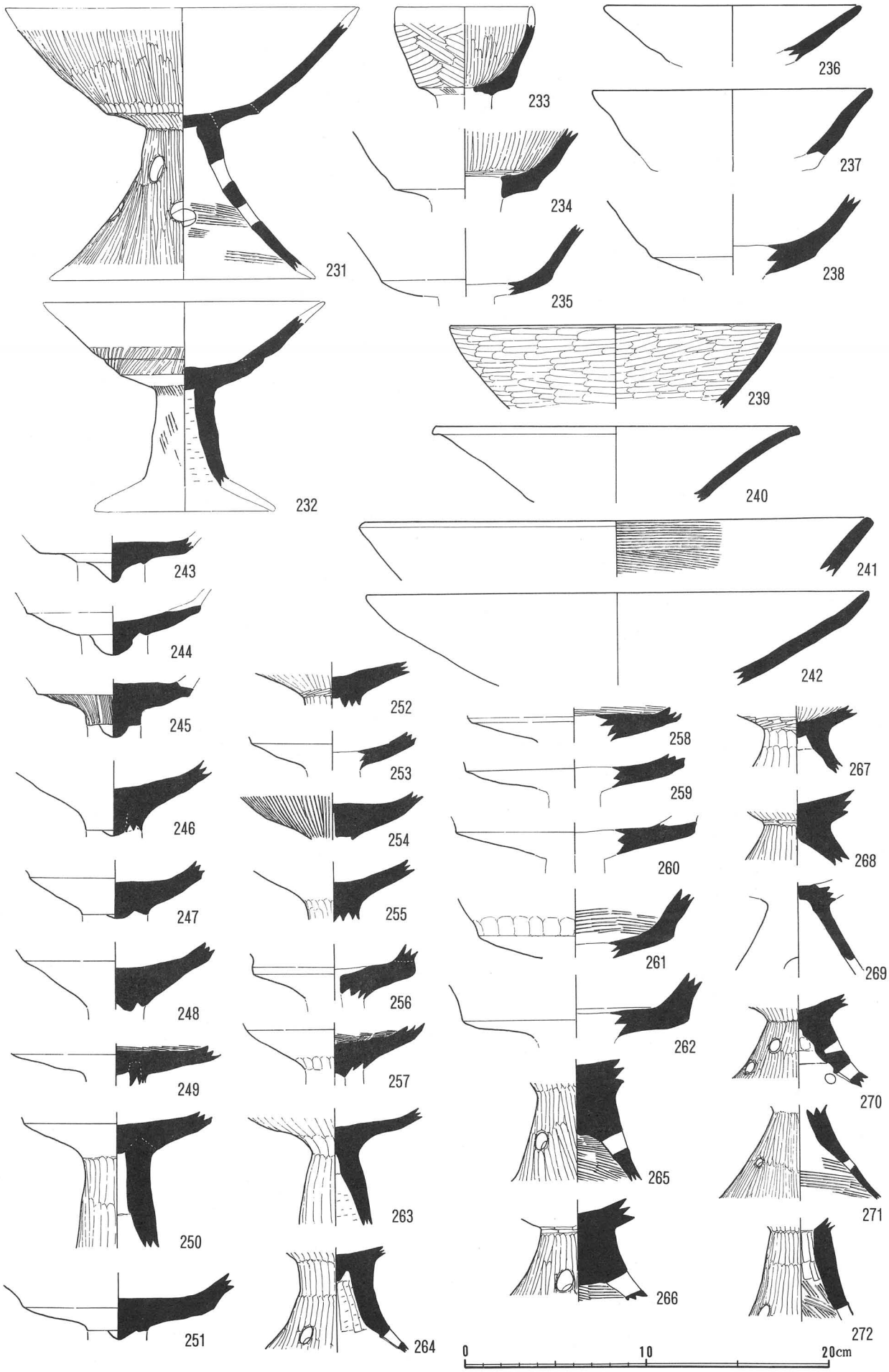
第２層直上


129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
0
10
20cm

第２層直上

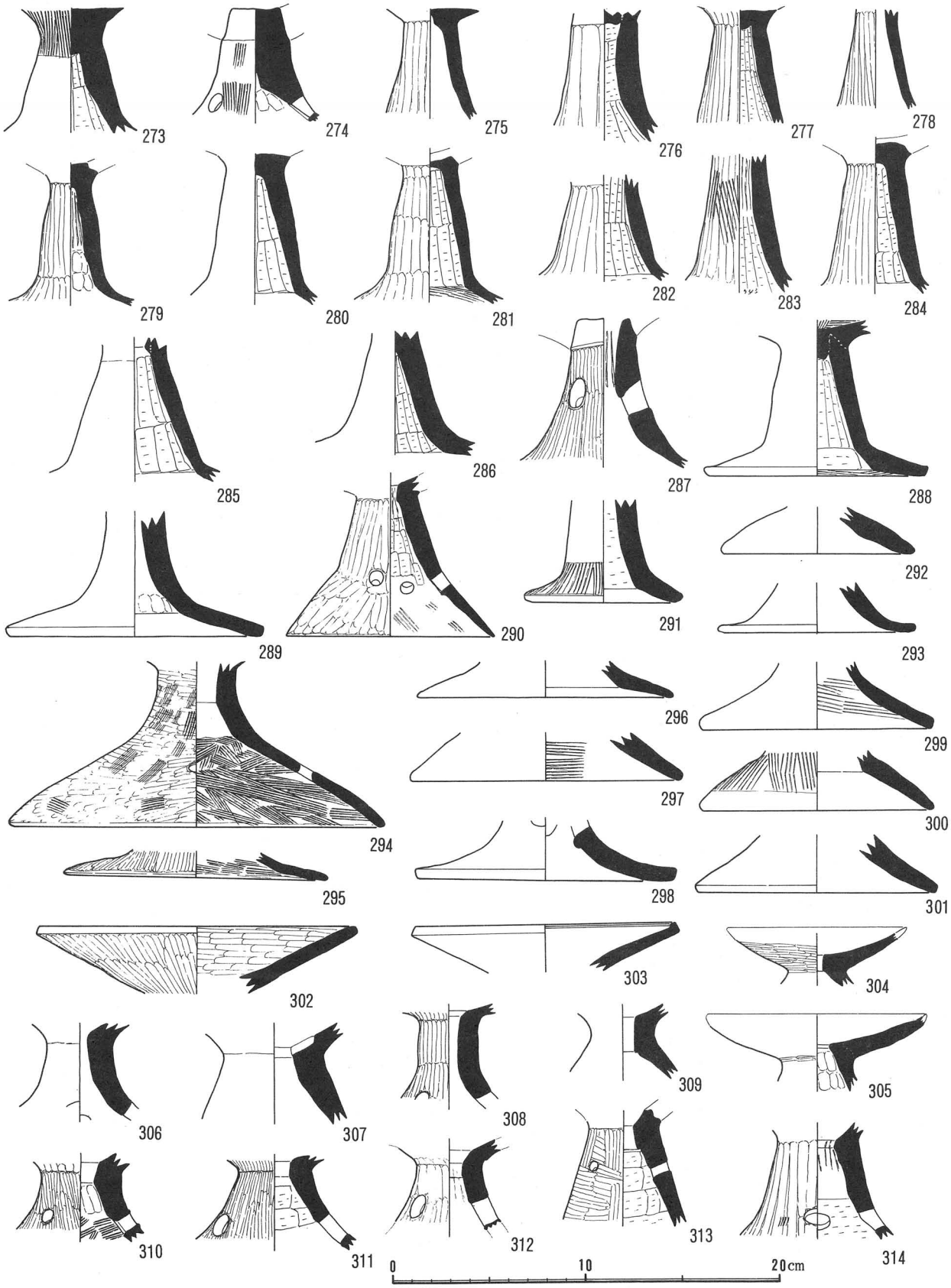

188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
0
10
20cm

第２層直上

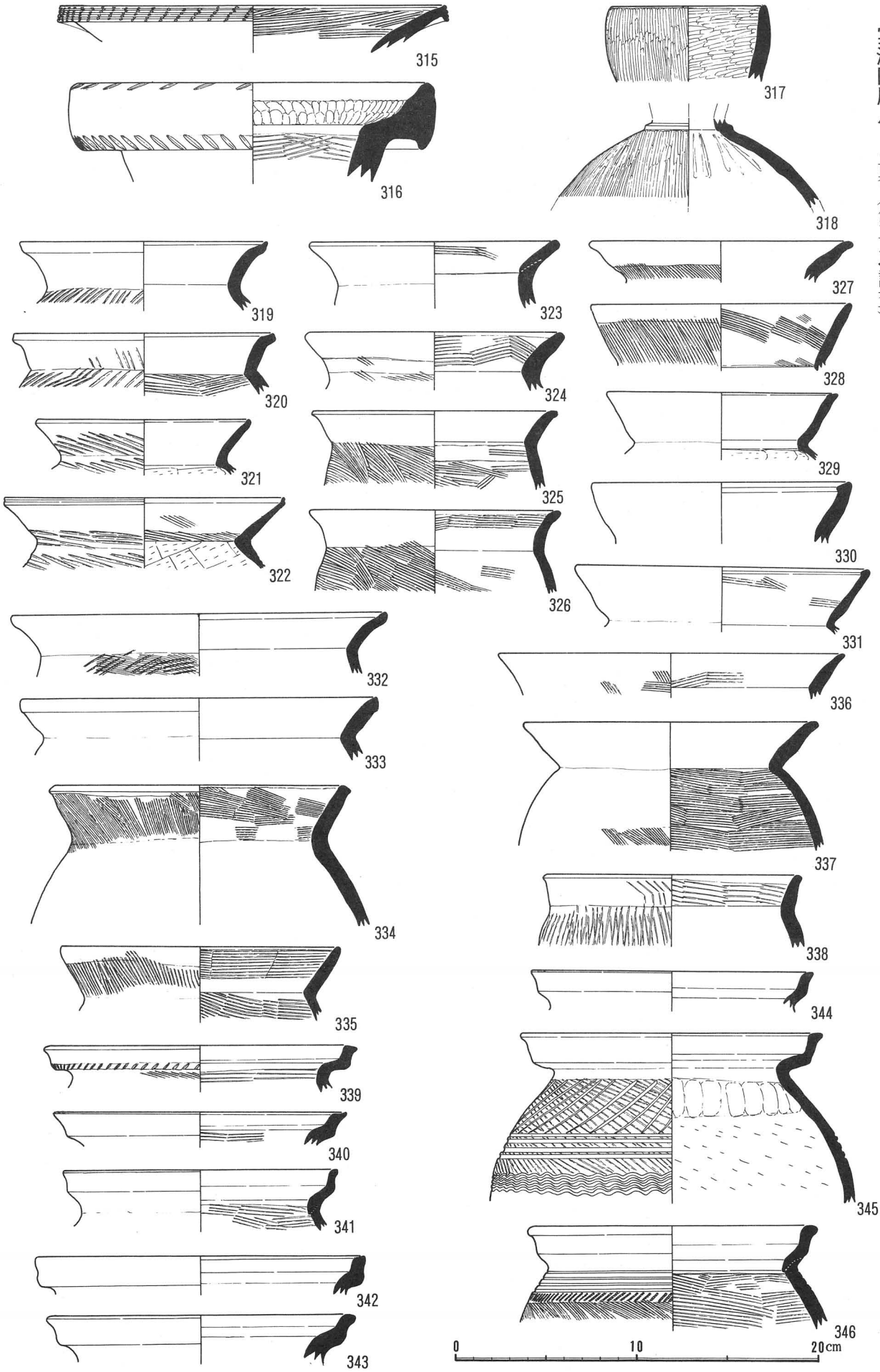

231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
0
10
20cm

第２層直上

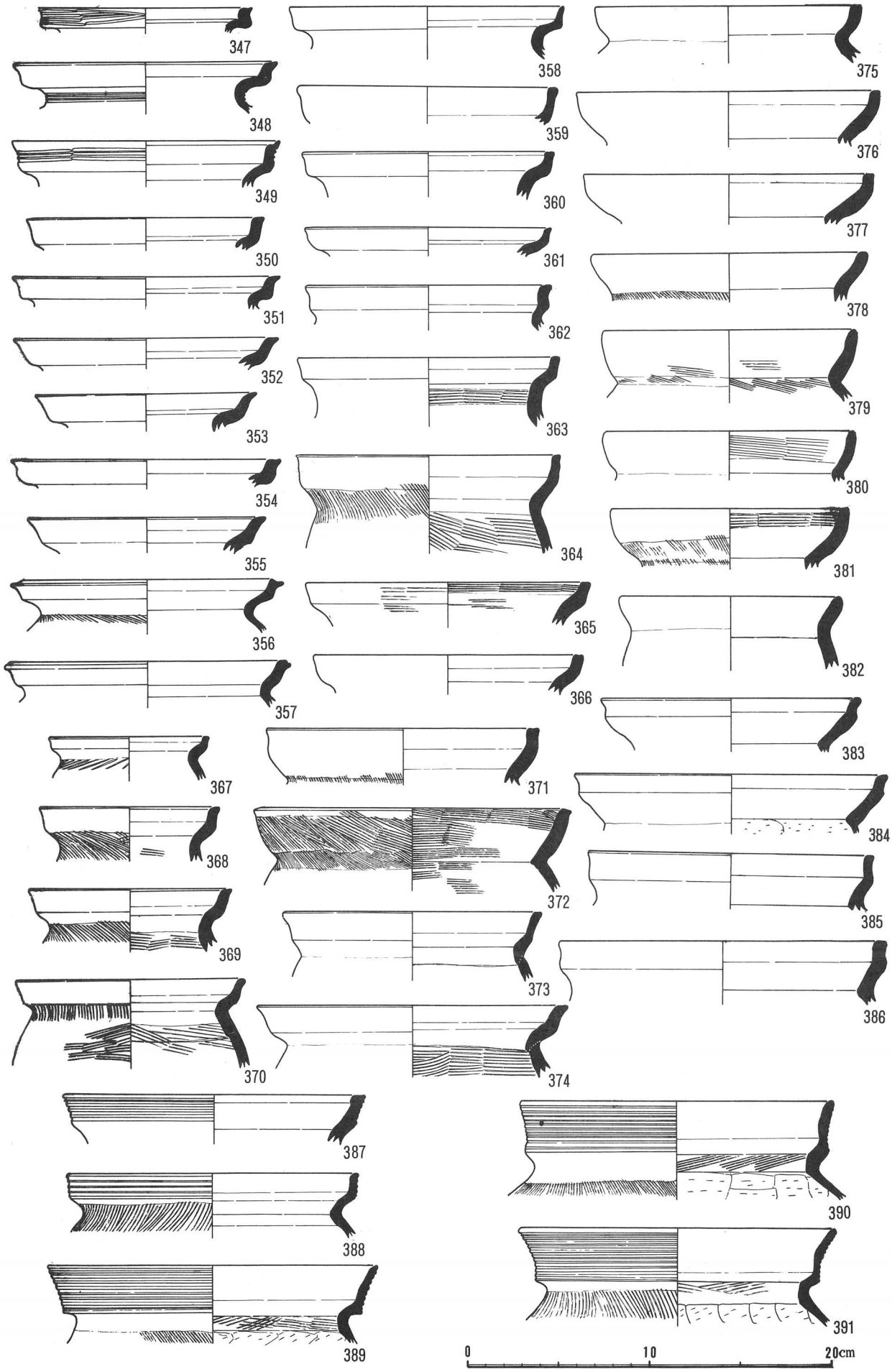
実測図版七　土器（第一次調査）



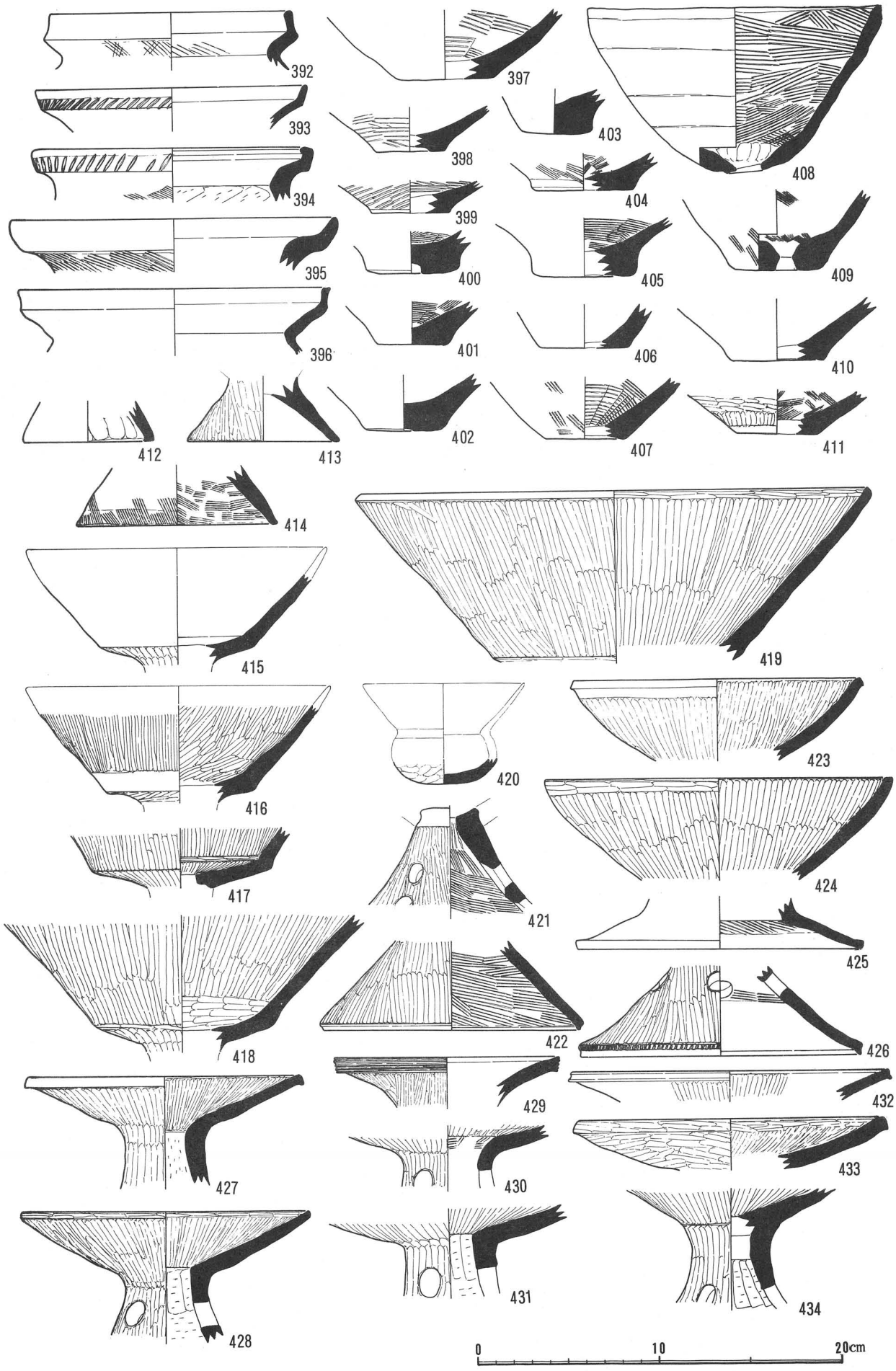
第２層直上


315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
0
10
20cm

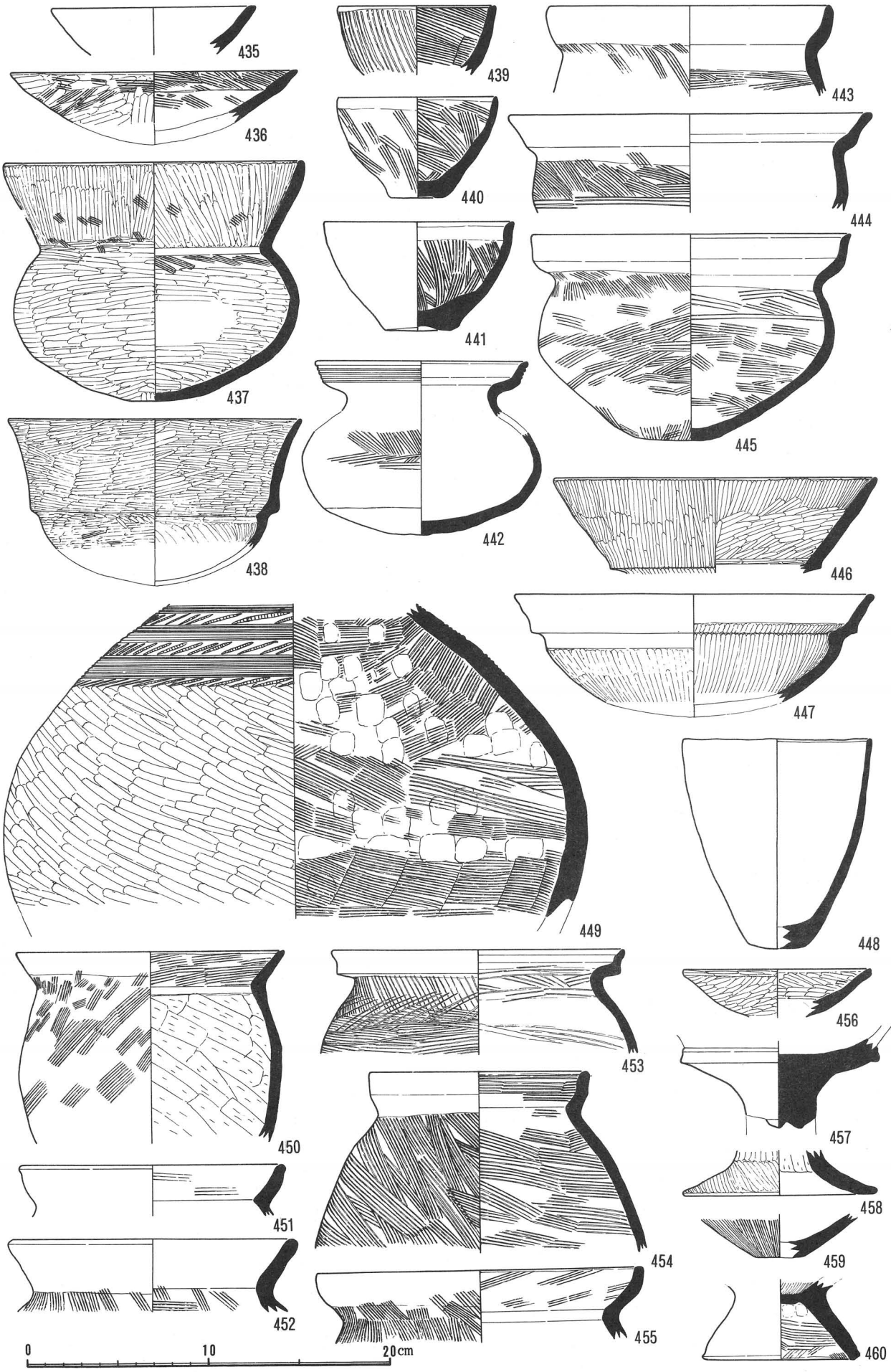
第２層上面


347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
0
10
20cm

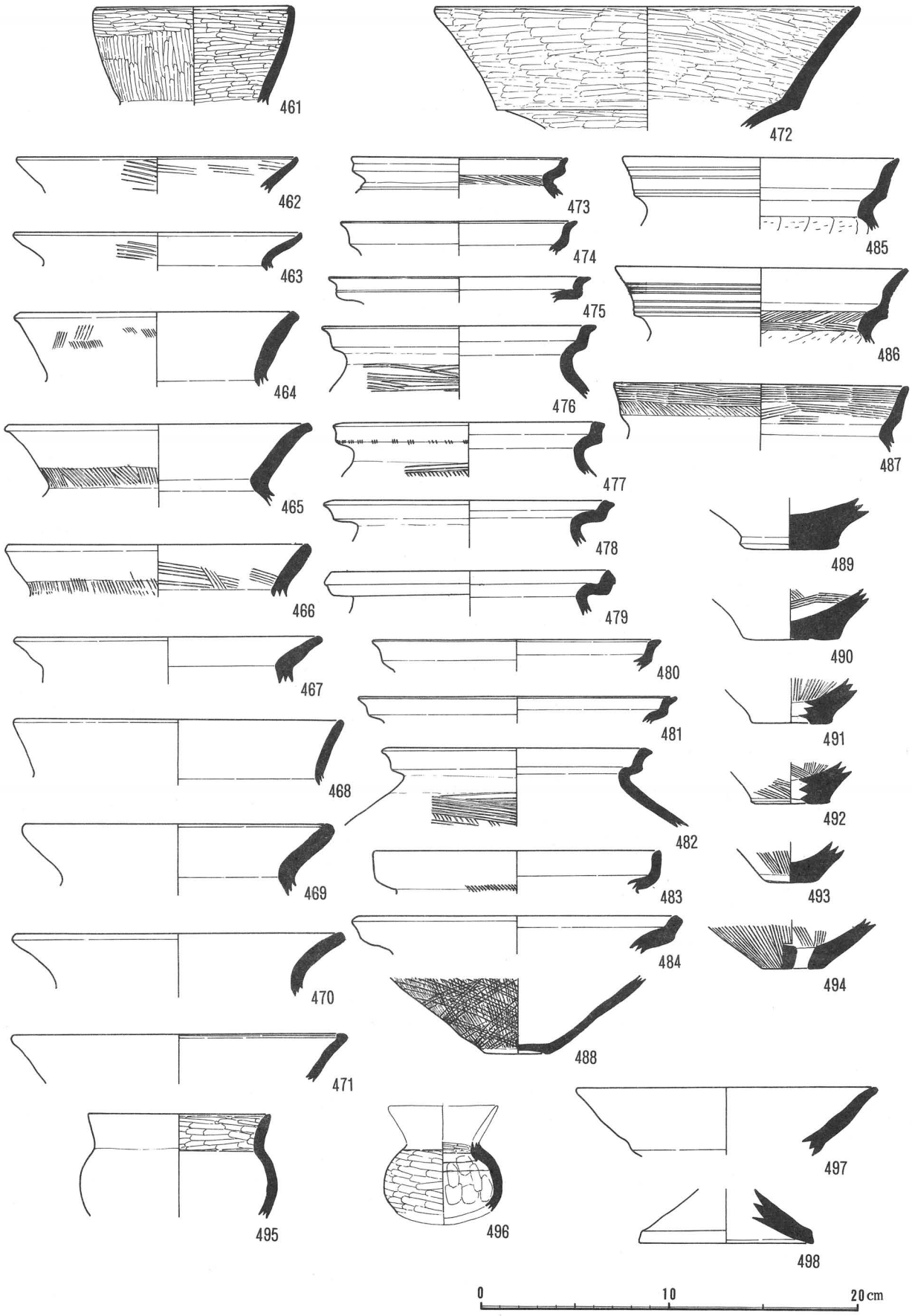
第２層上面


392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
0
10
20cm

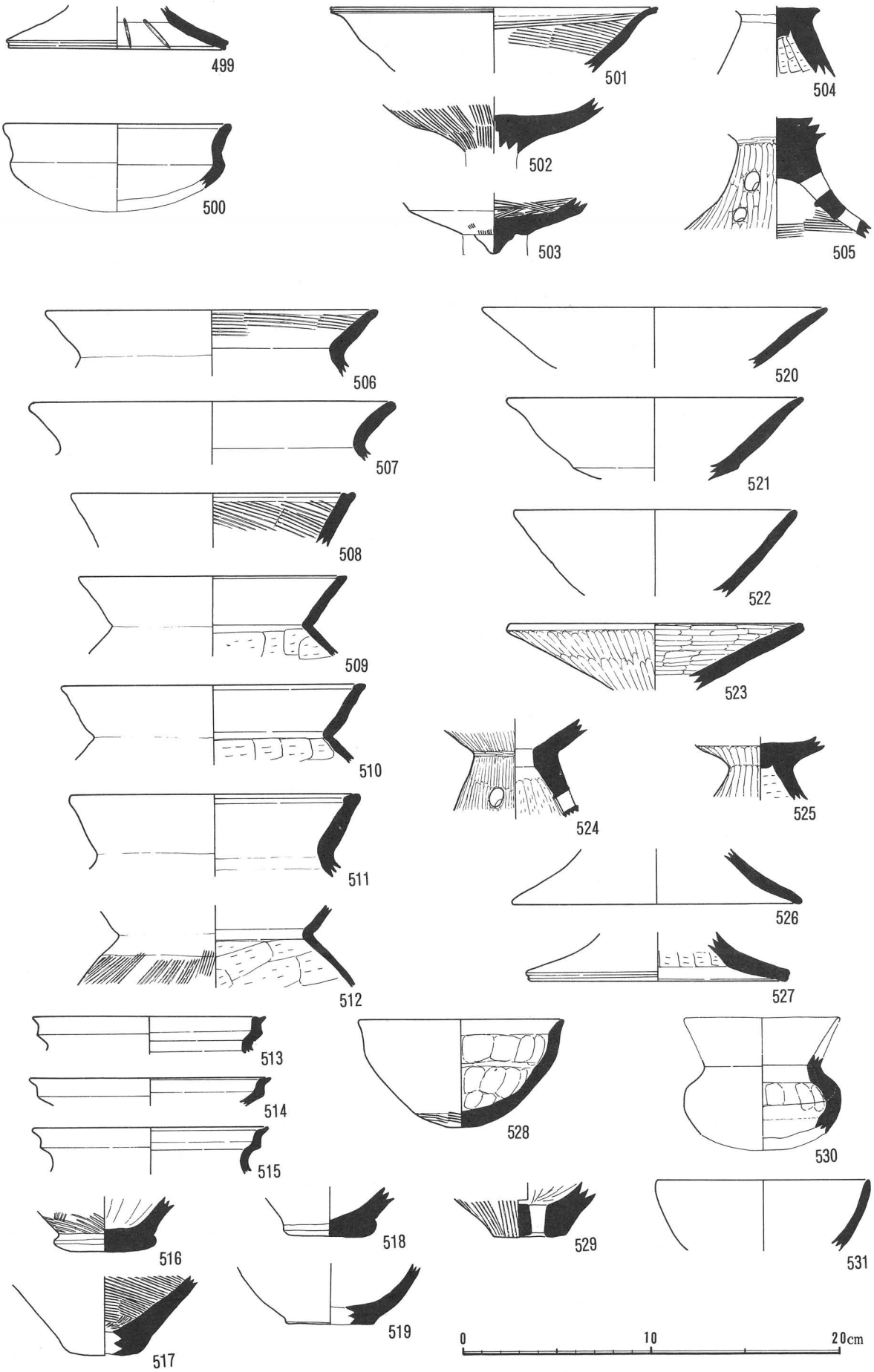
第２層上面



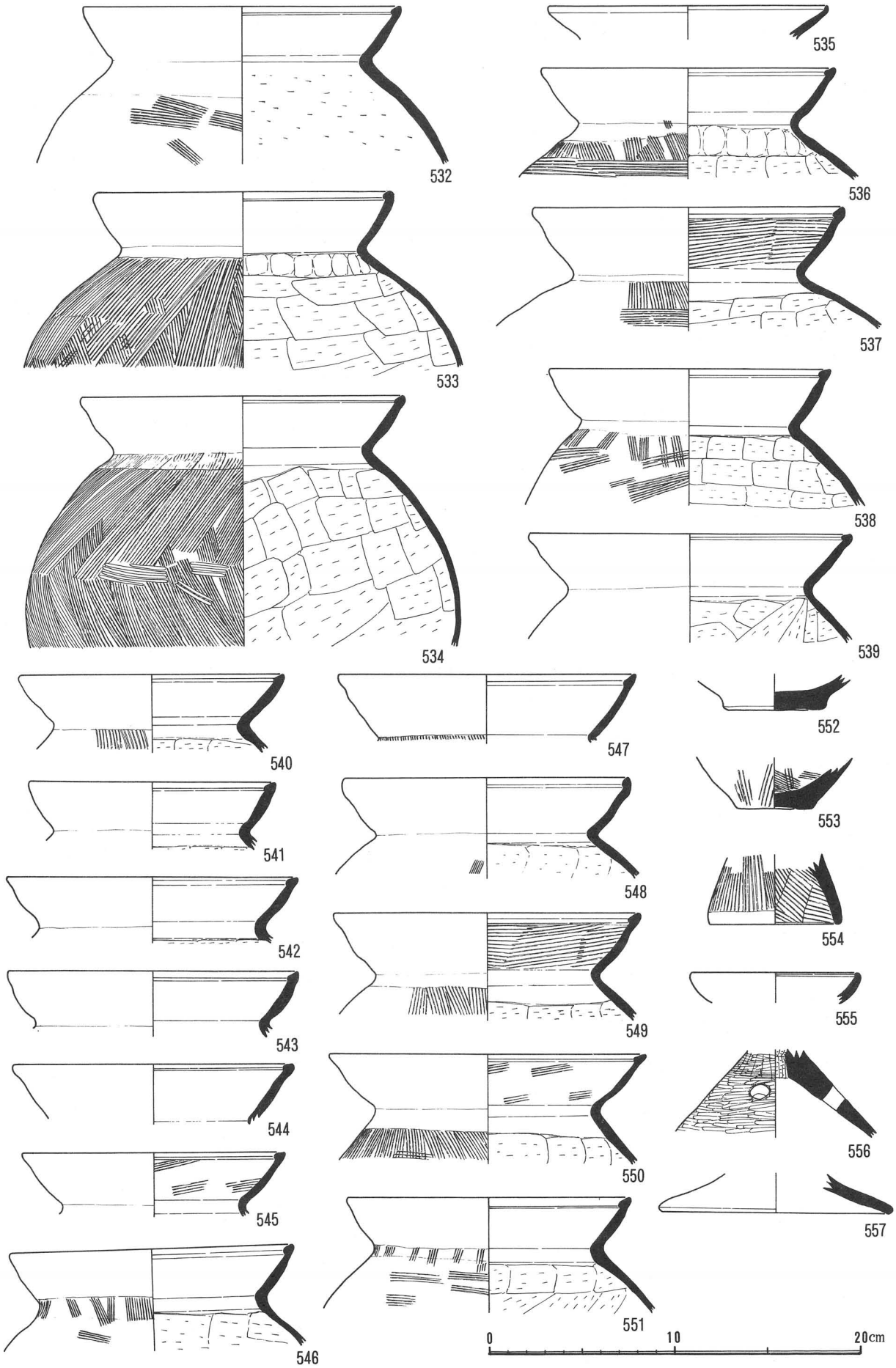
第２層上面（435～448）第２層（449～460）


461
472
462
473
485
463
474
475
486
464
476
487
465
477
489
478
466
479
490
467
480
491
481
468
492
482
469
493
483
470
484
494
488
471
497
495
496
498
0
10
20cm

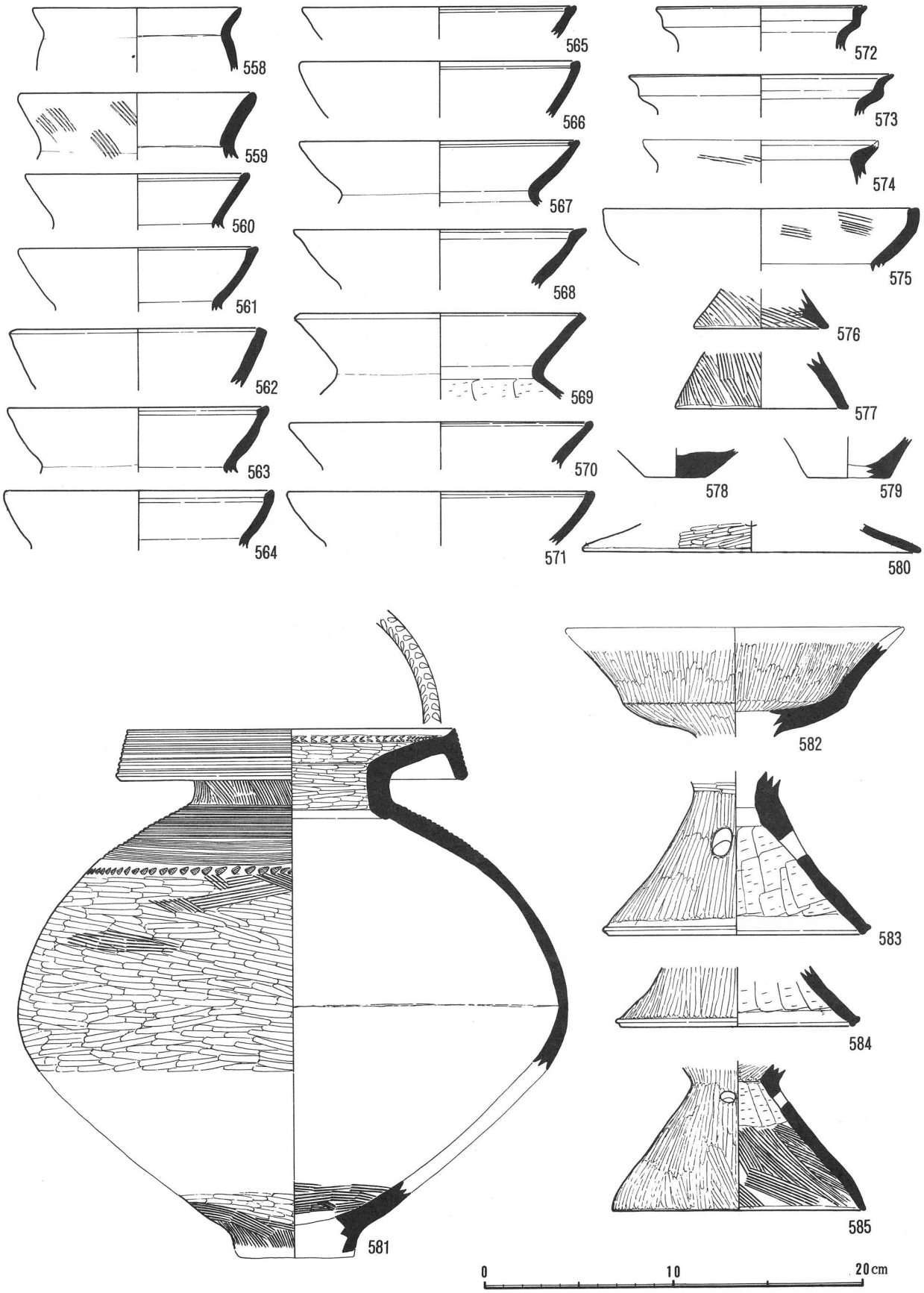
土坑１（461～498）



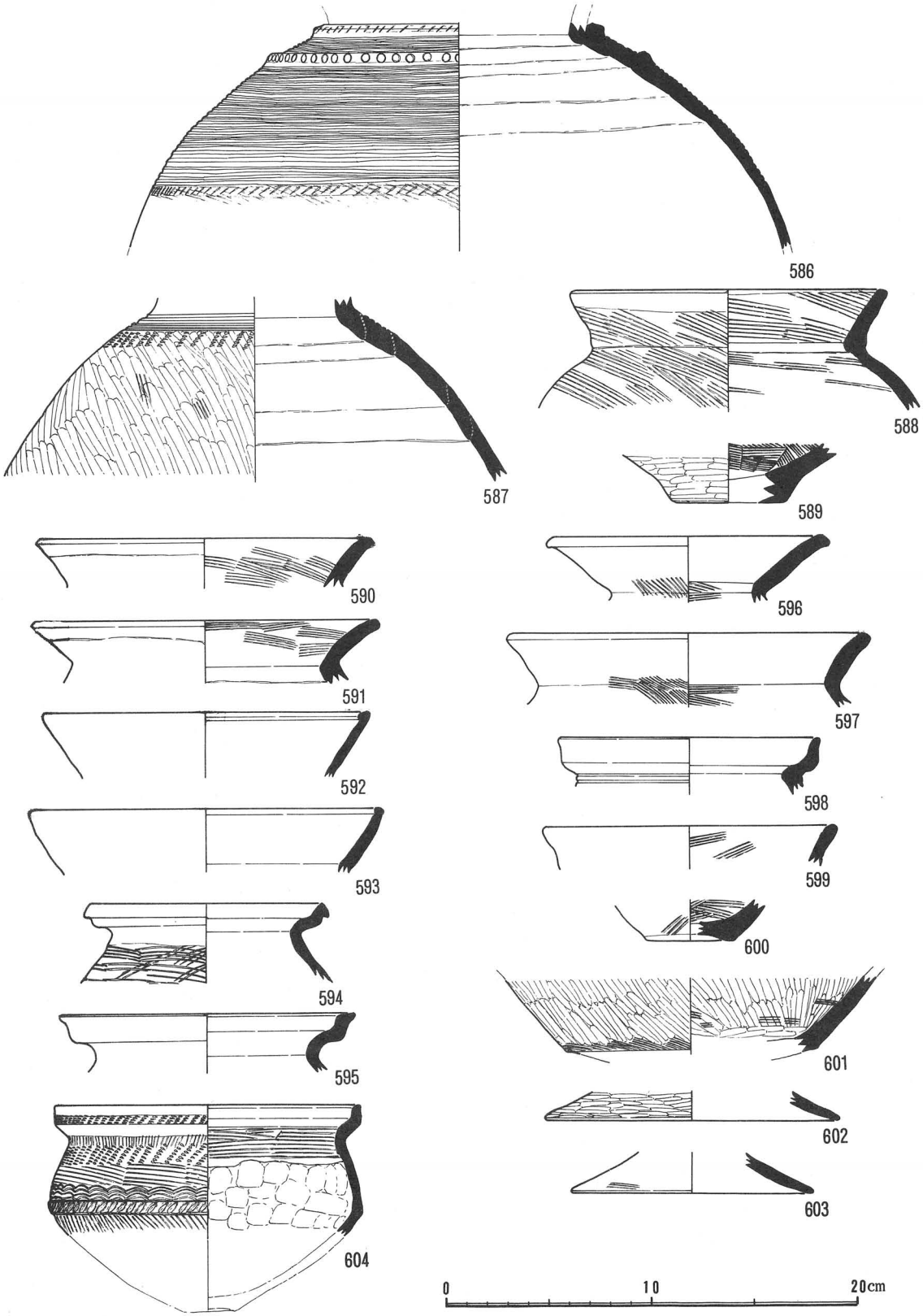
ピット11（499）溝1（500）溝2（501～505）溝（506～531）


532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
0
10
20cm

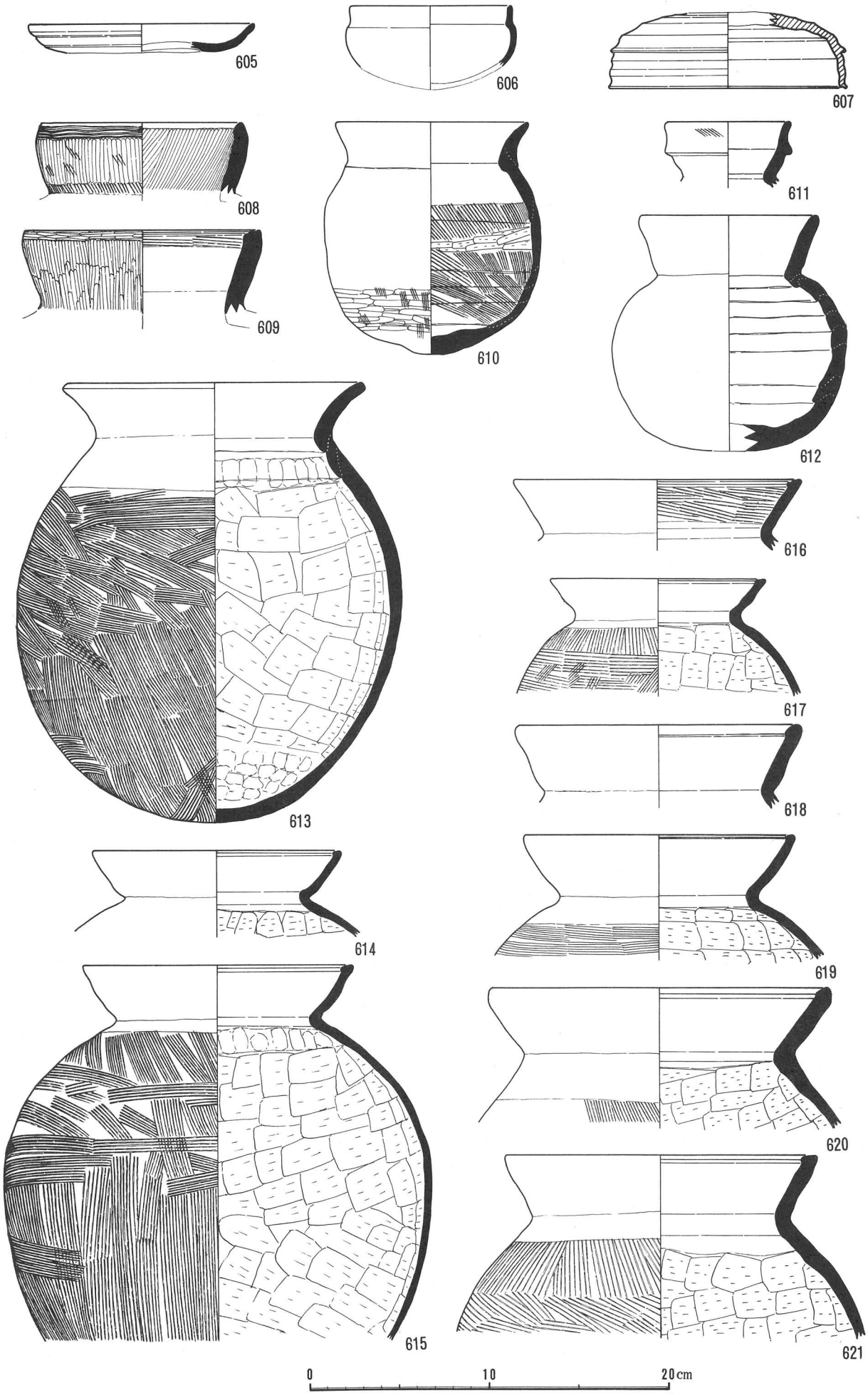
土坑２－１（532～557）

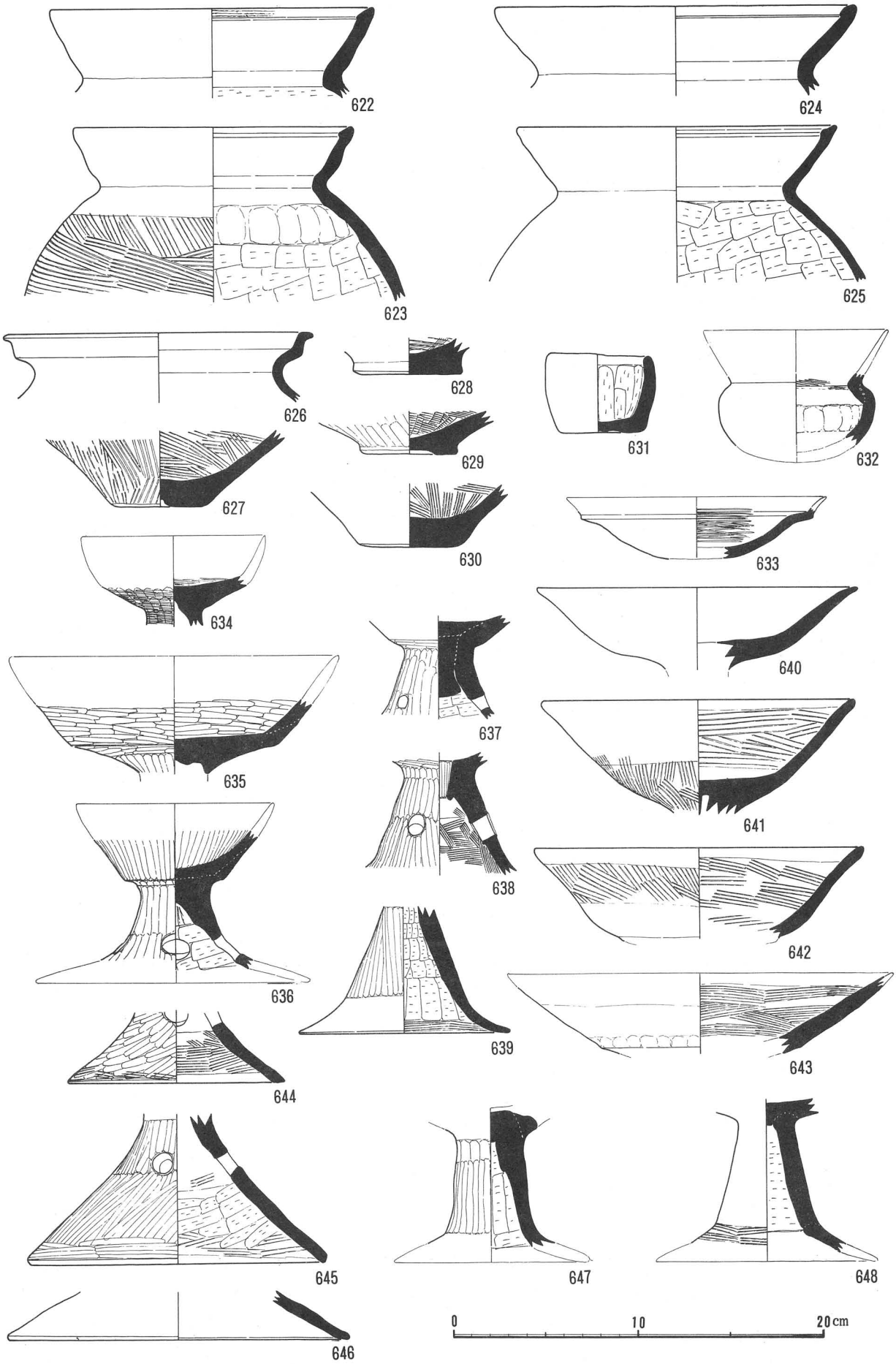


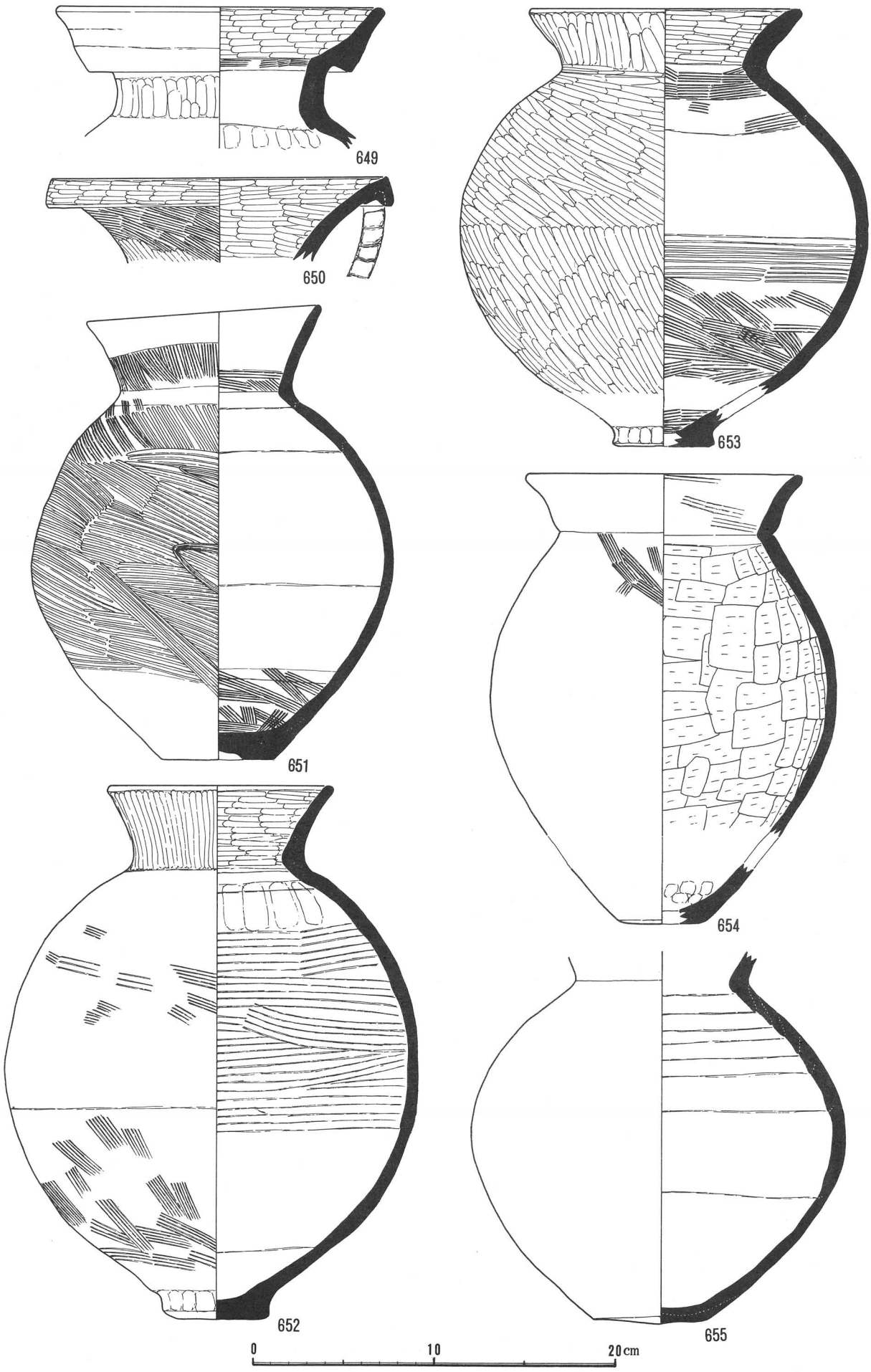
土坑２－２（558～580）土坑２－７（581～585）

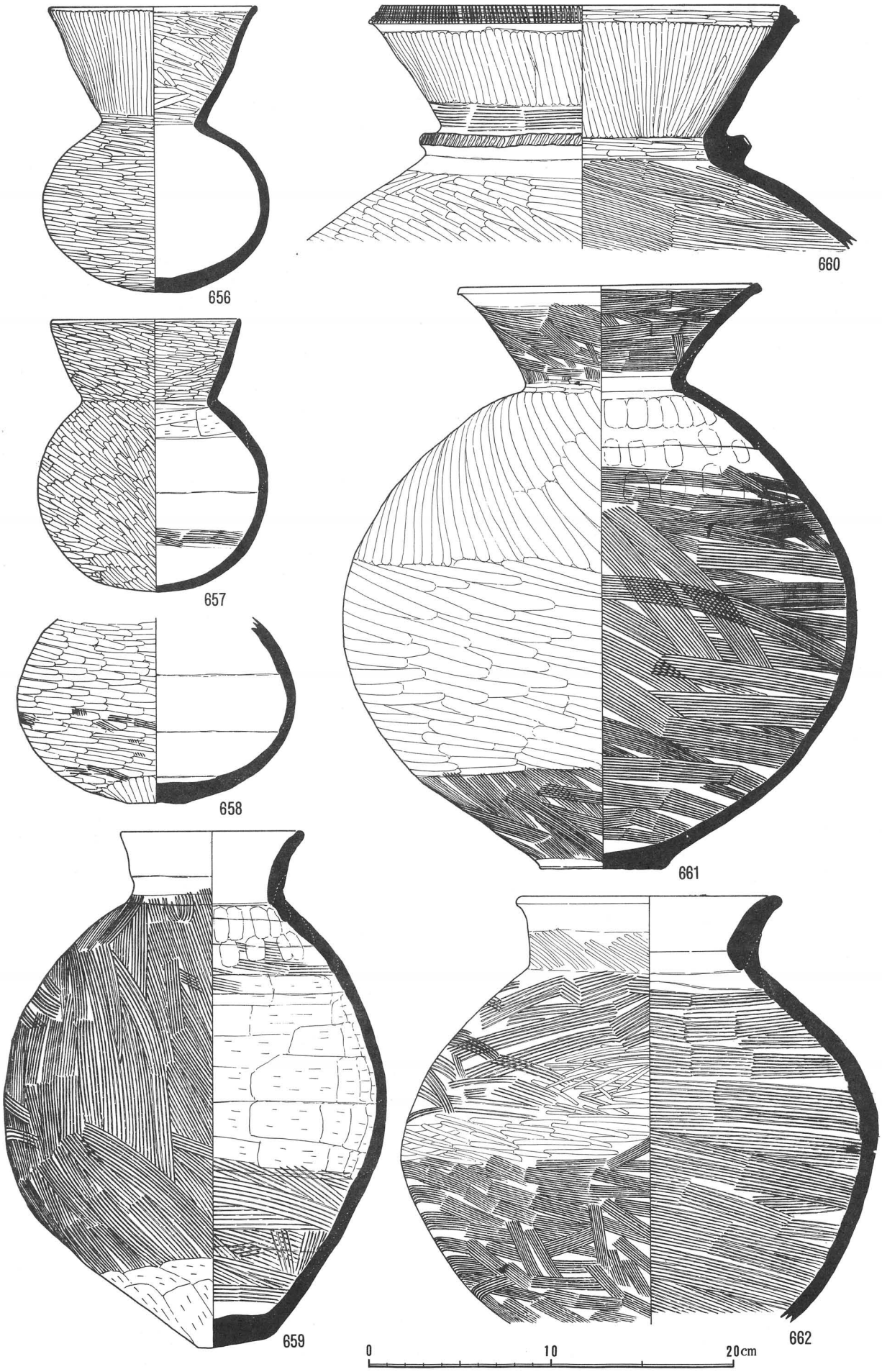


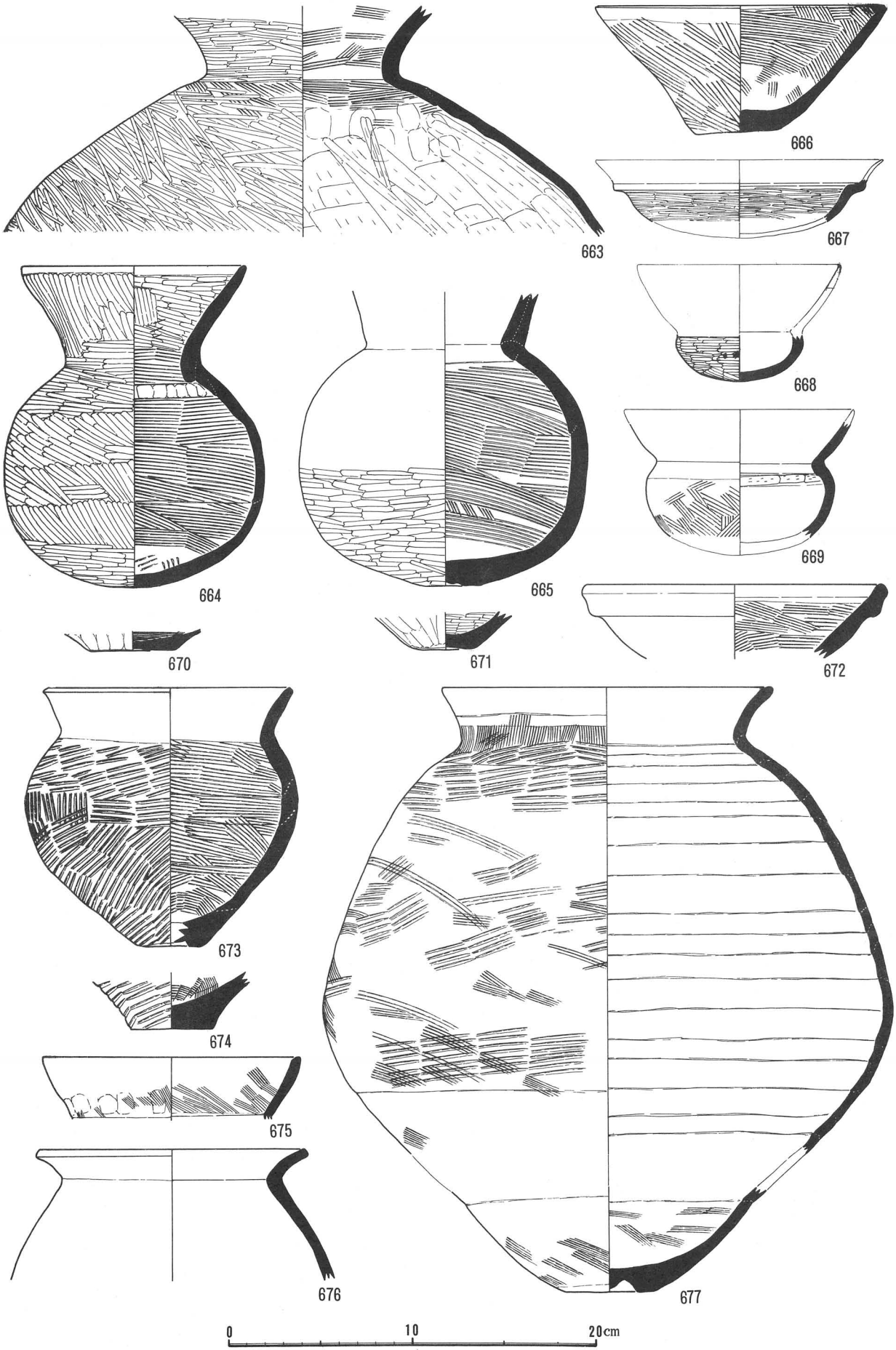
土坑２－８（586～589）土坑３－１（590～603）溝６－１（604）

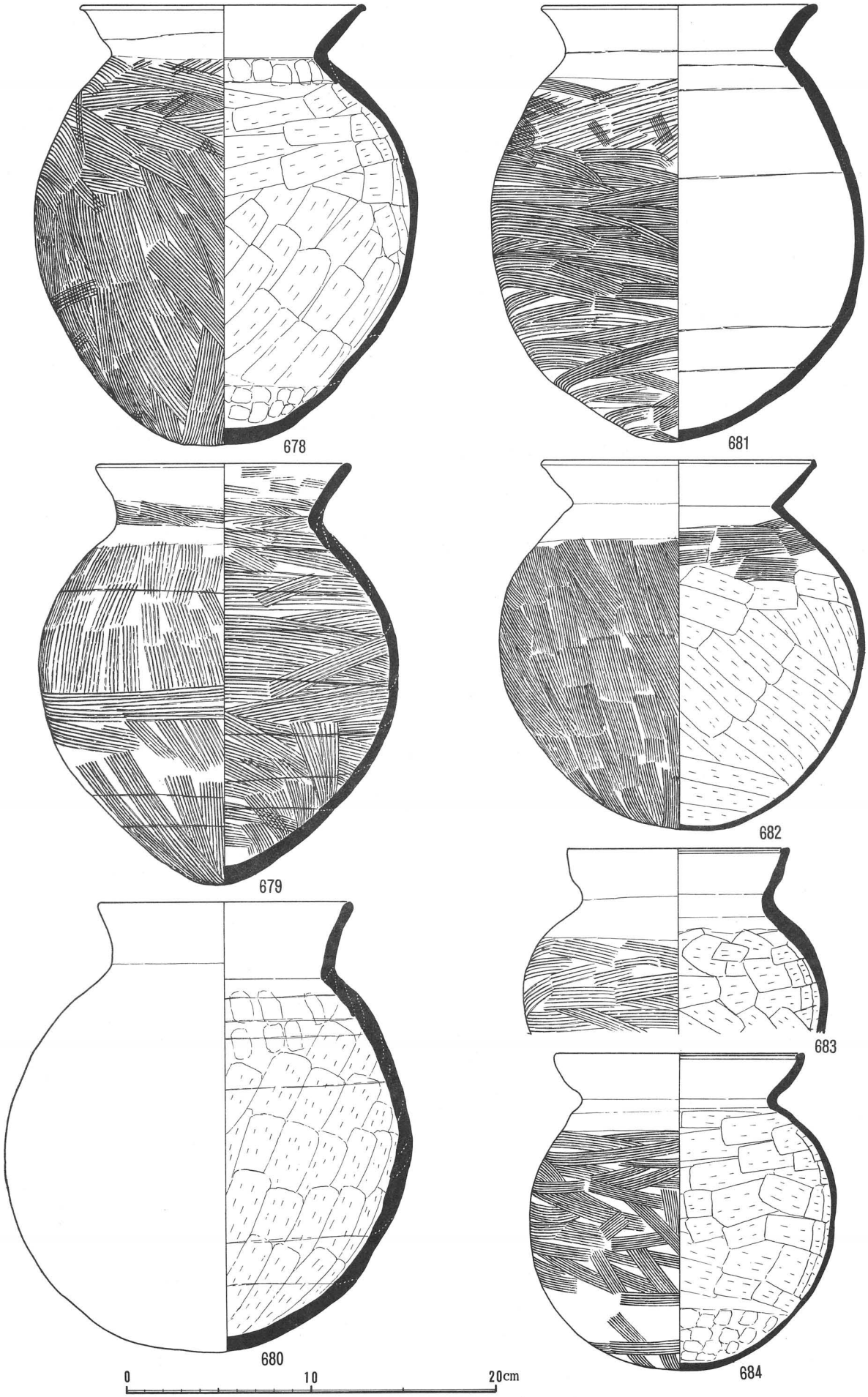

605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
0
10
20cm

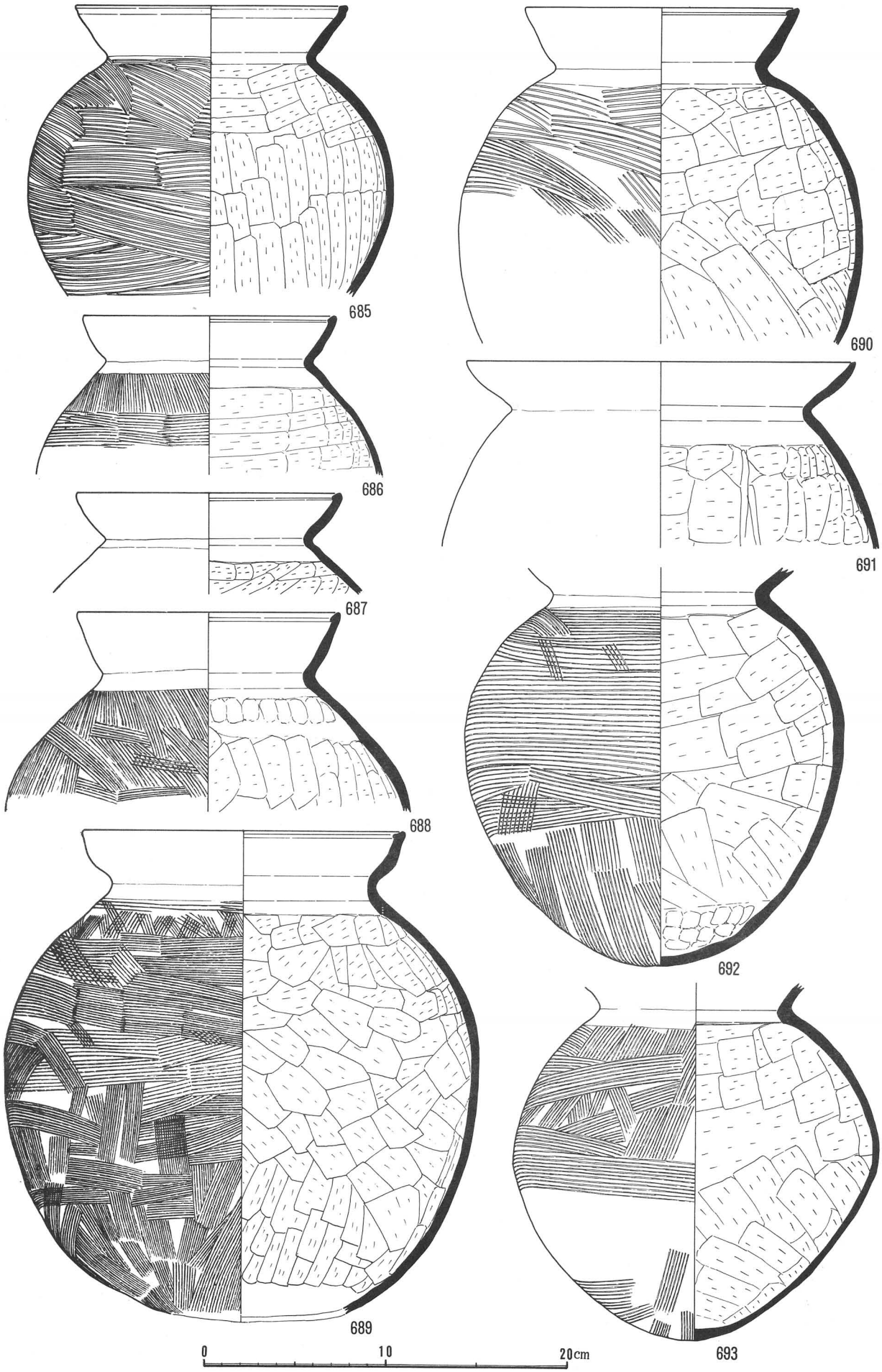

622
624
623
625
626
628
631
632
627
629
630
633
634
640
637
635
641
638
636
642
639
643
644
645
647
648
646
0
10
20cm

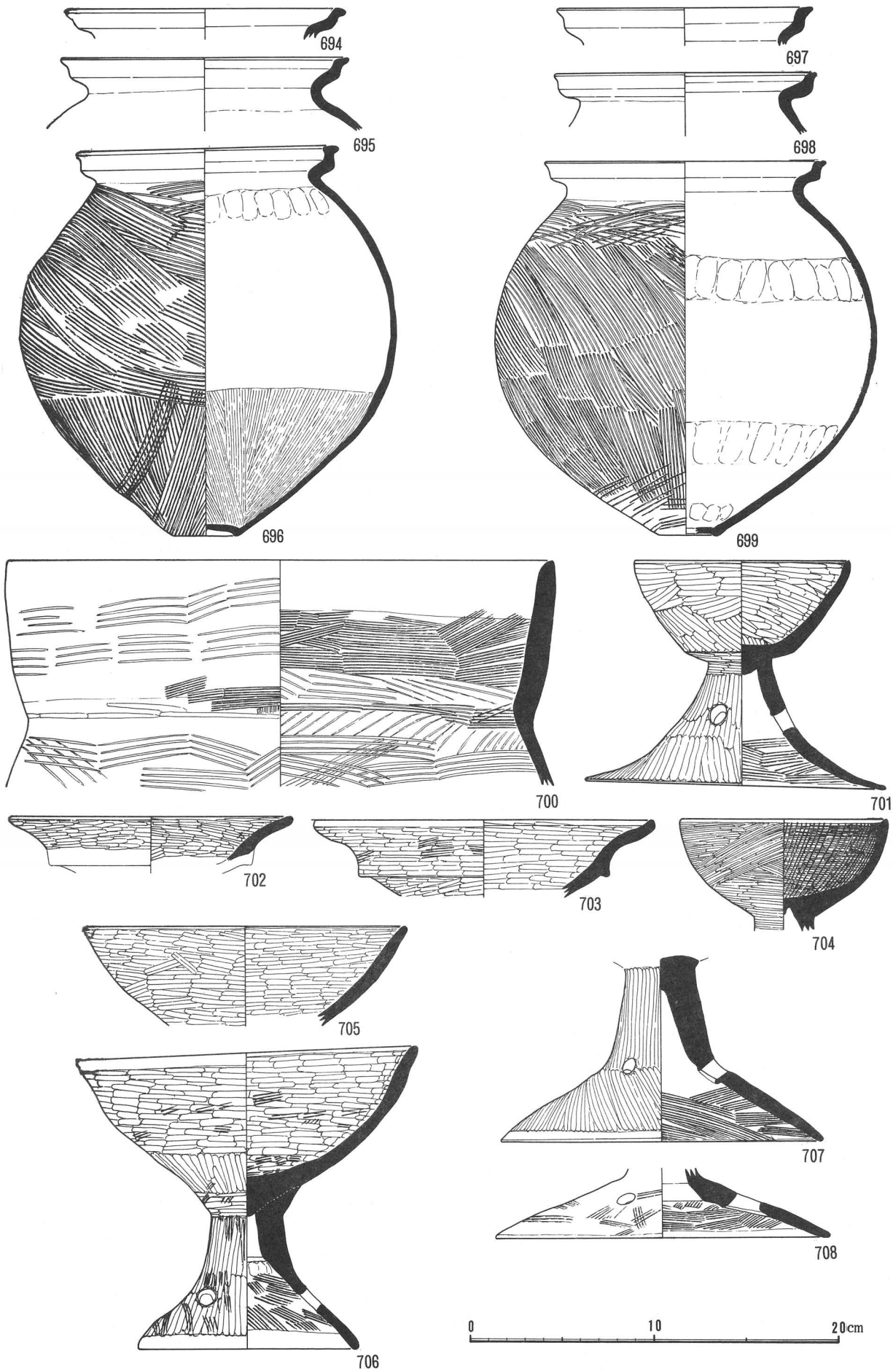

649
650
651
652
653
654
655
0
10
20cm

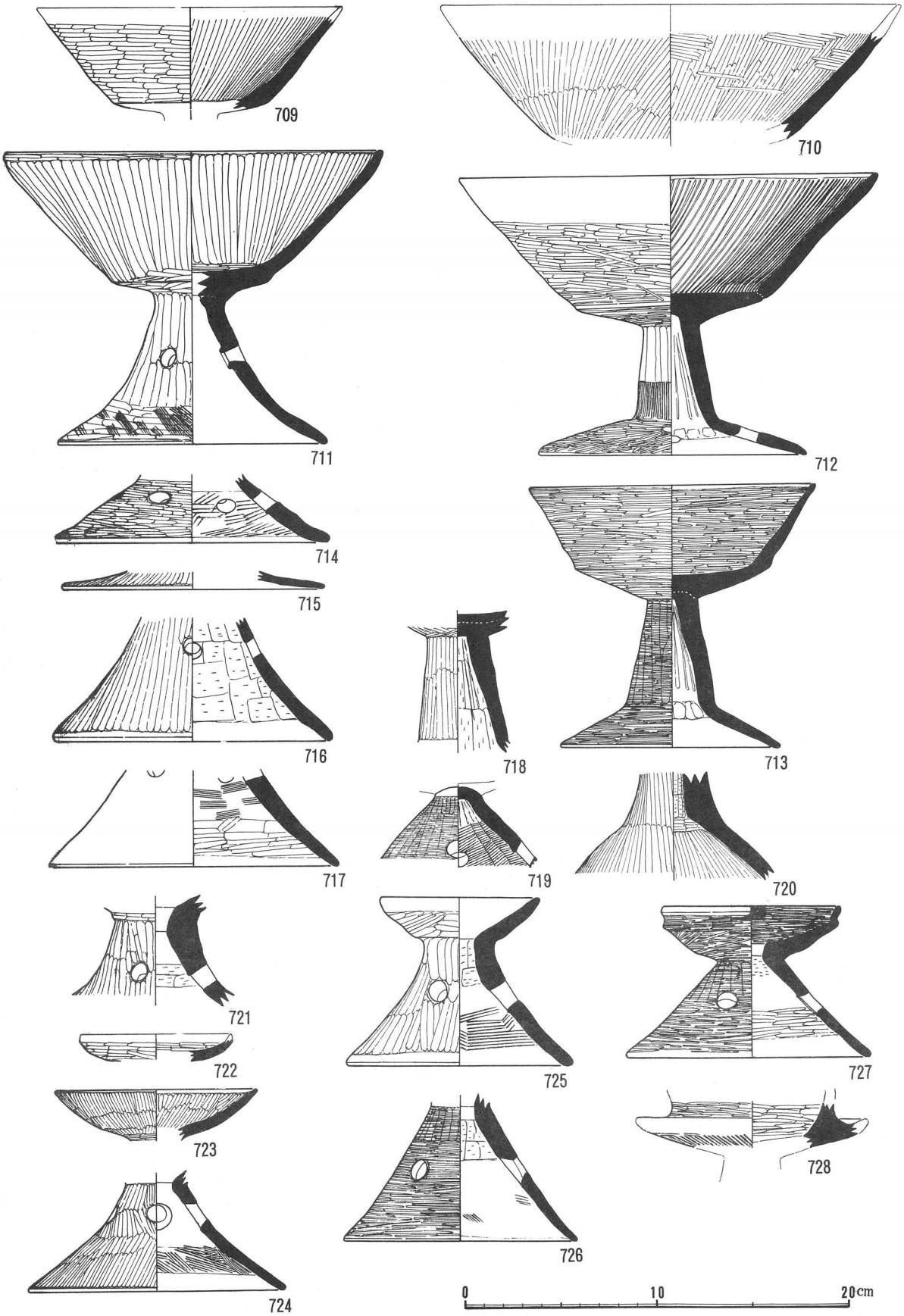

656
657
658
659
660
661
662
0
10
20cm

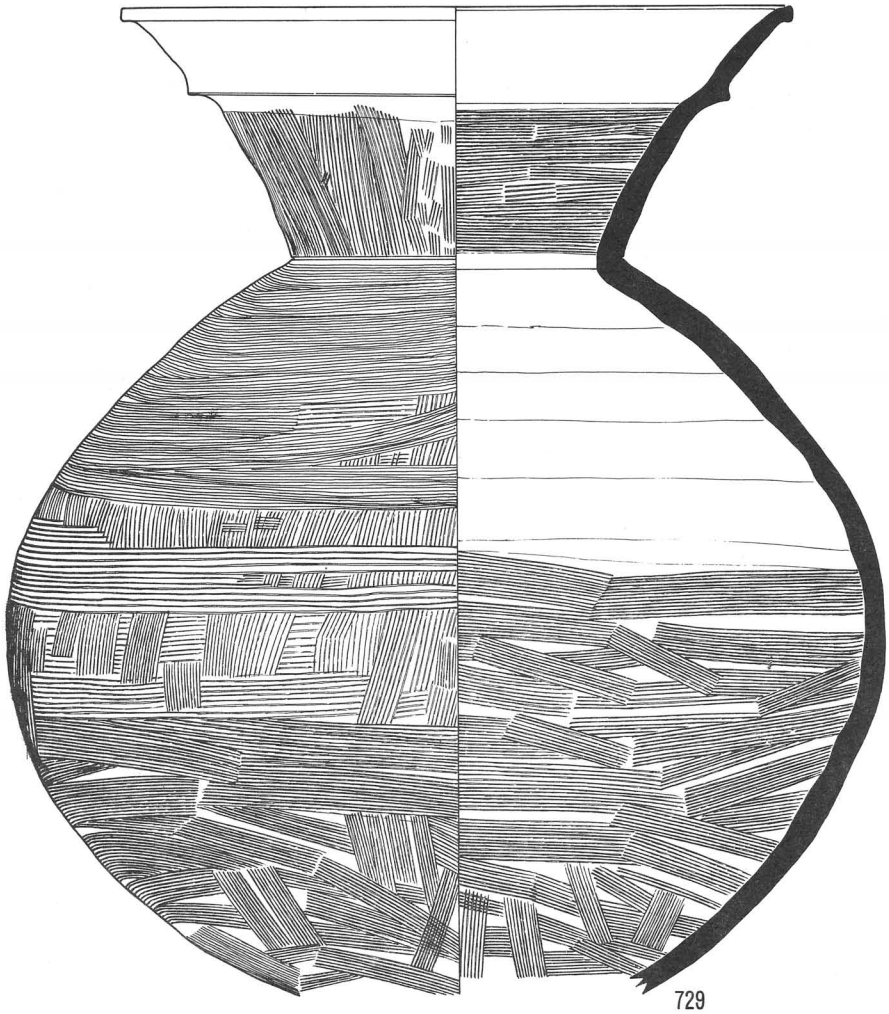

663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
0
10
20cm


678
679
680
681
682
683
684
0
10
20cm

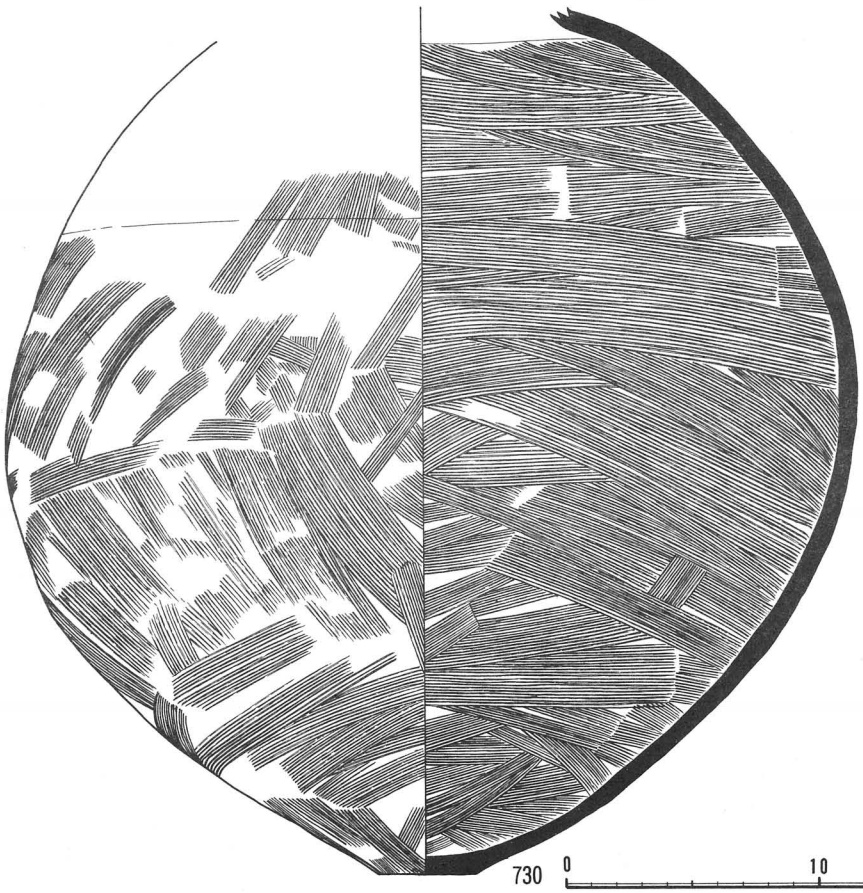

685
686
687
688
689
690
691
692
693
0
10
20cm


694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
0
10
20cm


709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
0
10
20cm



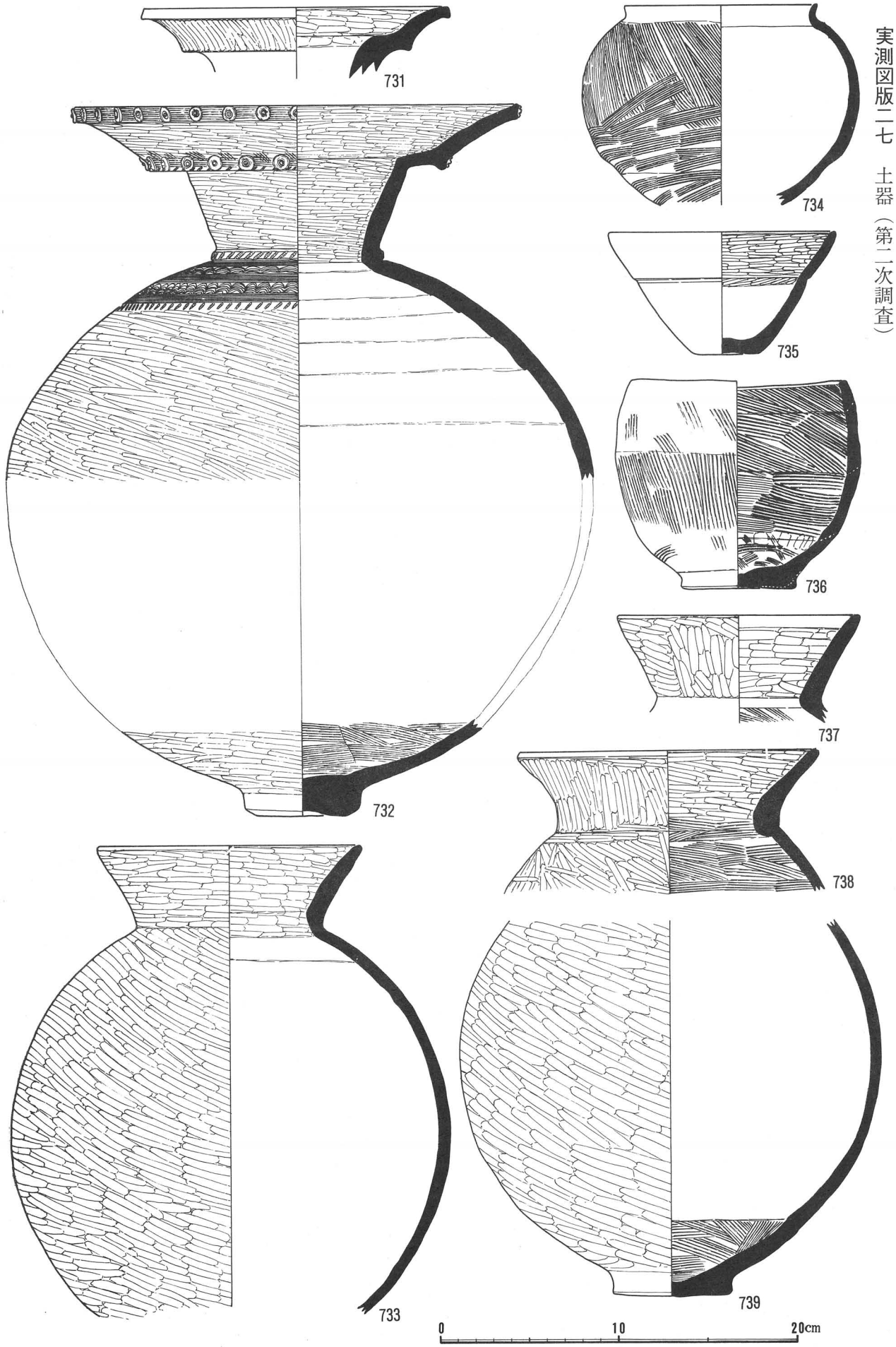
729

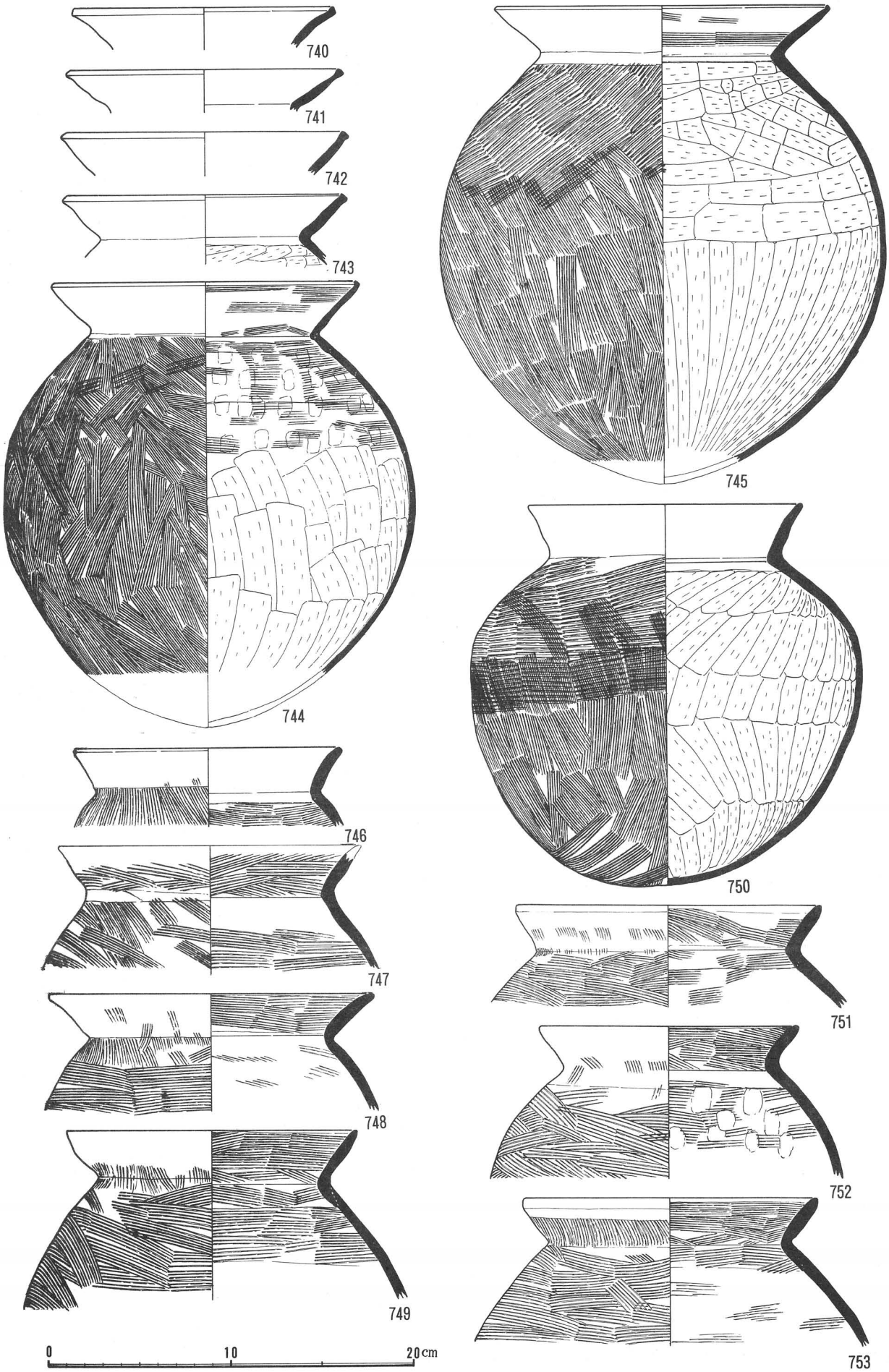


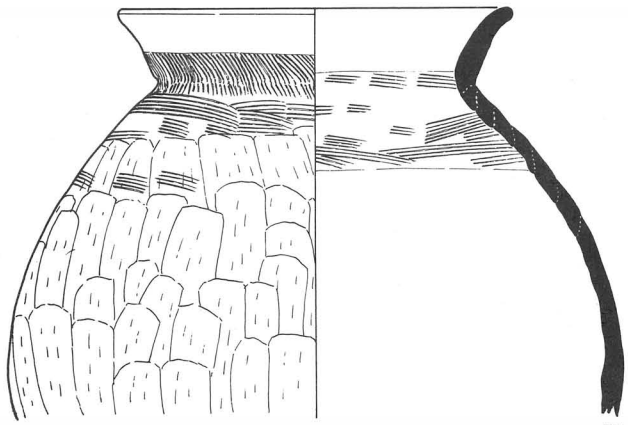
730

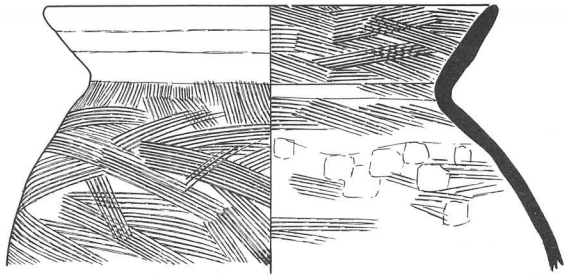
0　10　20cm

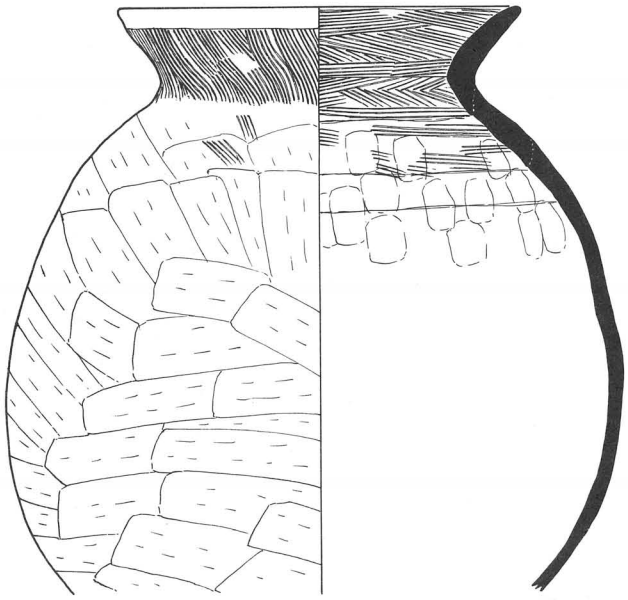
実測図版二七　土器（第二次調査）

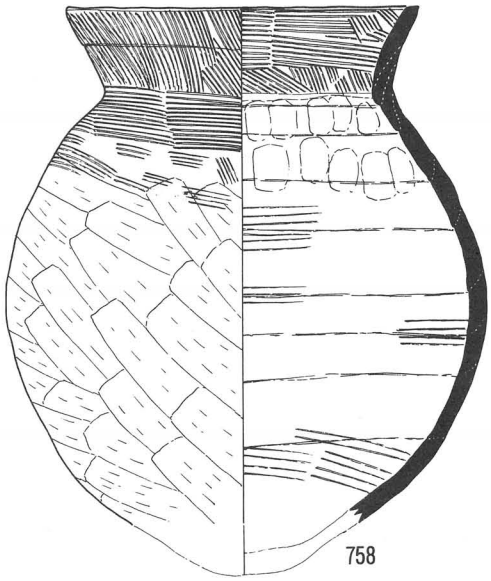


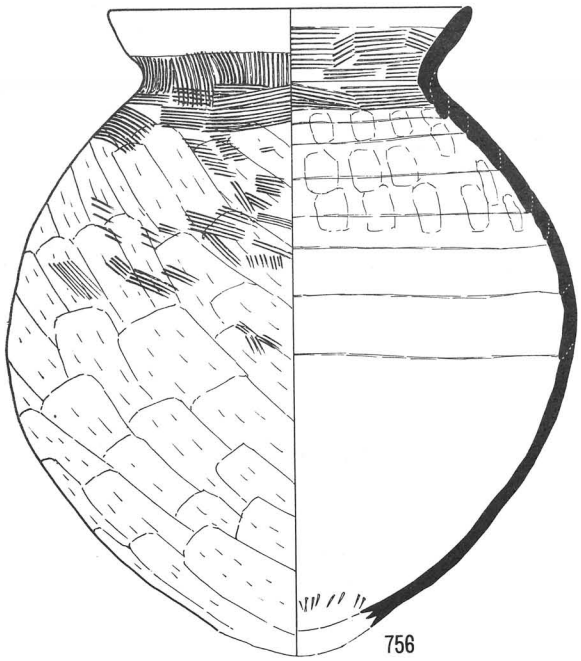

740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
0
10
20cm

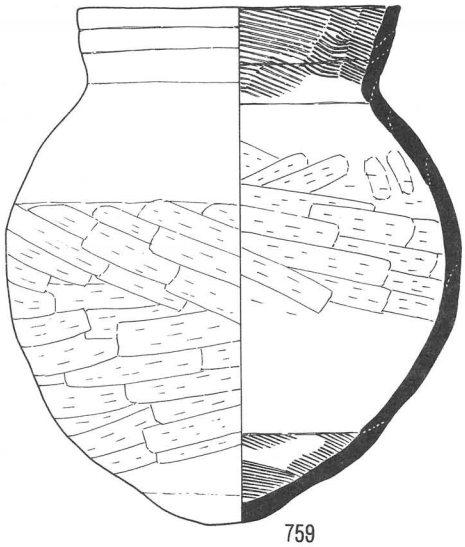

754

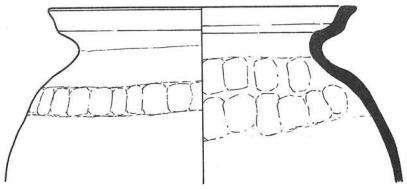

757

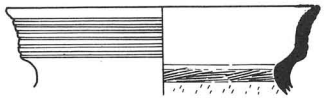

755

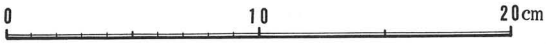

758

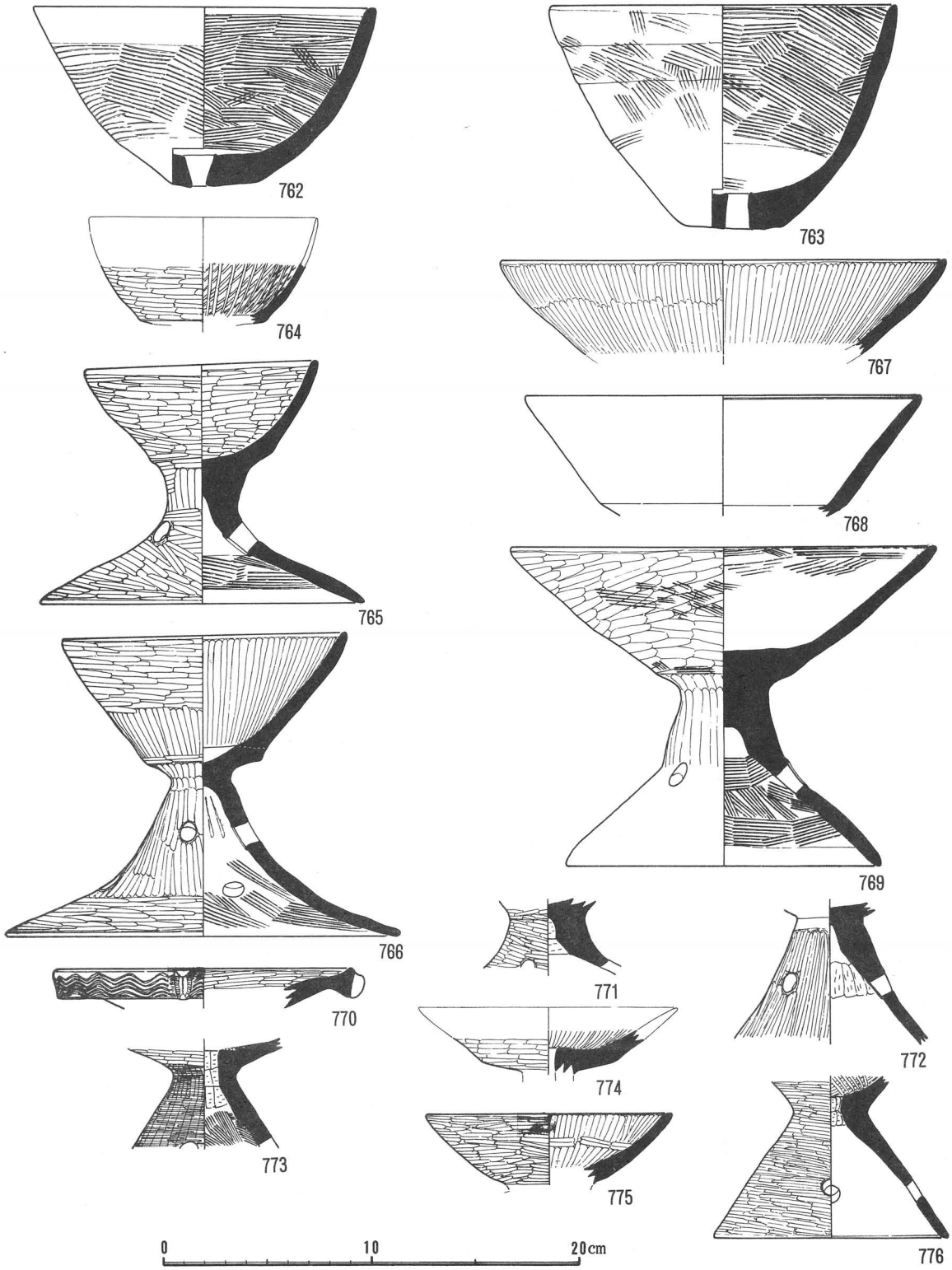

756

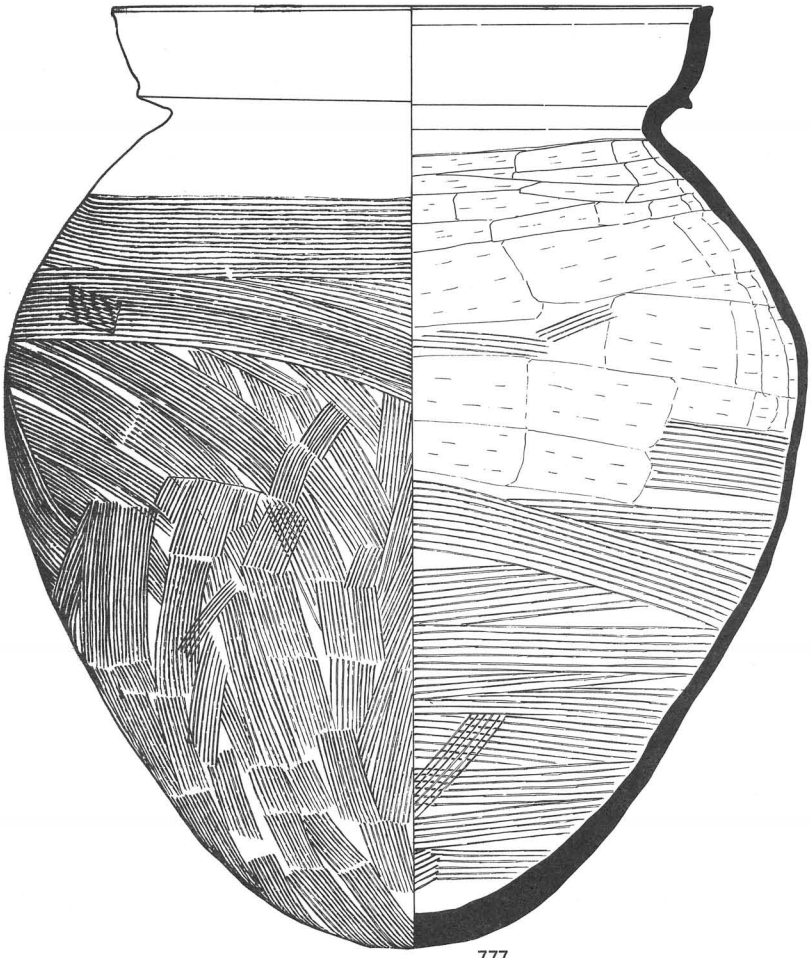

759

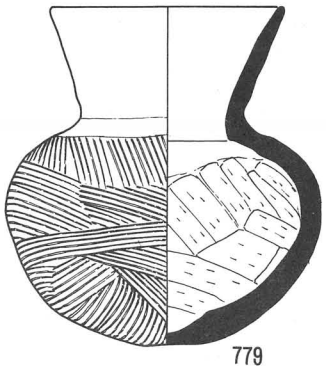

760

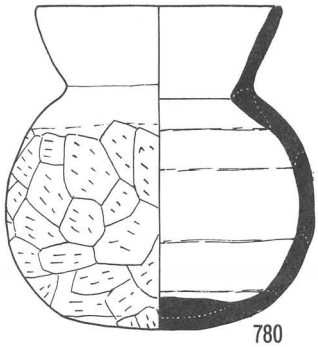

761

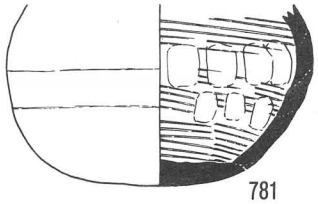


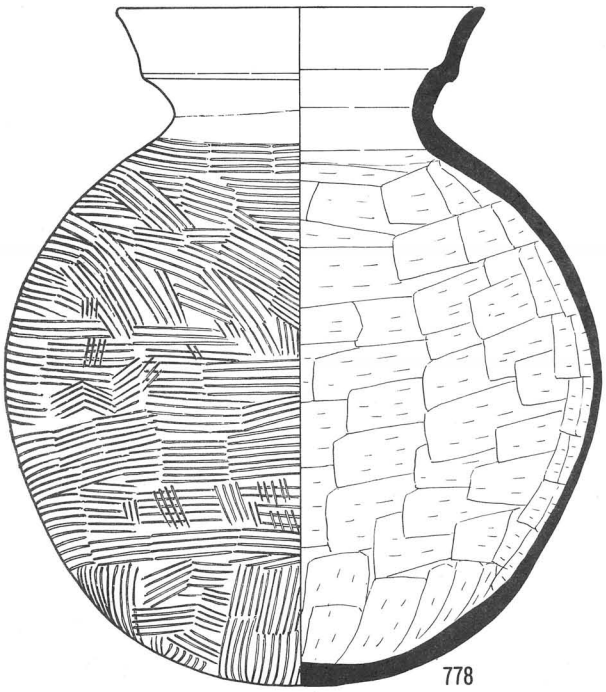

762
763
764
767
768
765
769
766
771
770
772
774
773
775
776
0
10
20cm

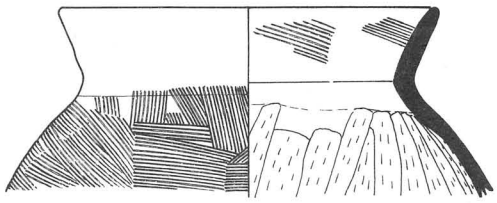


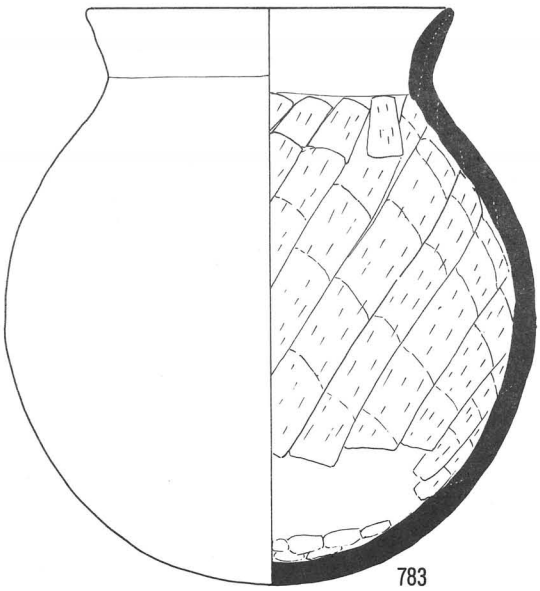




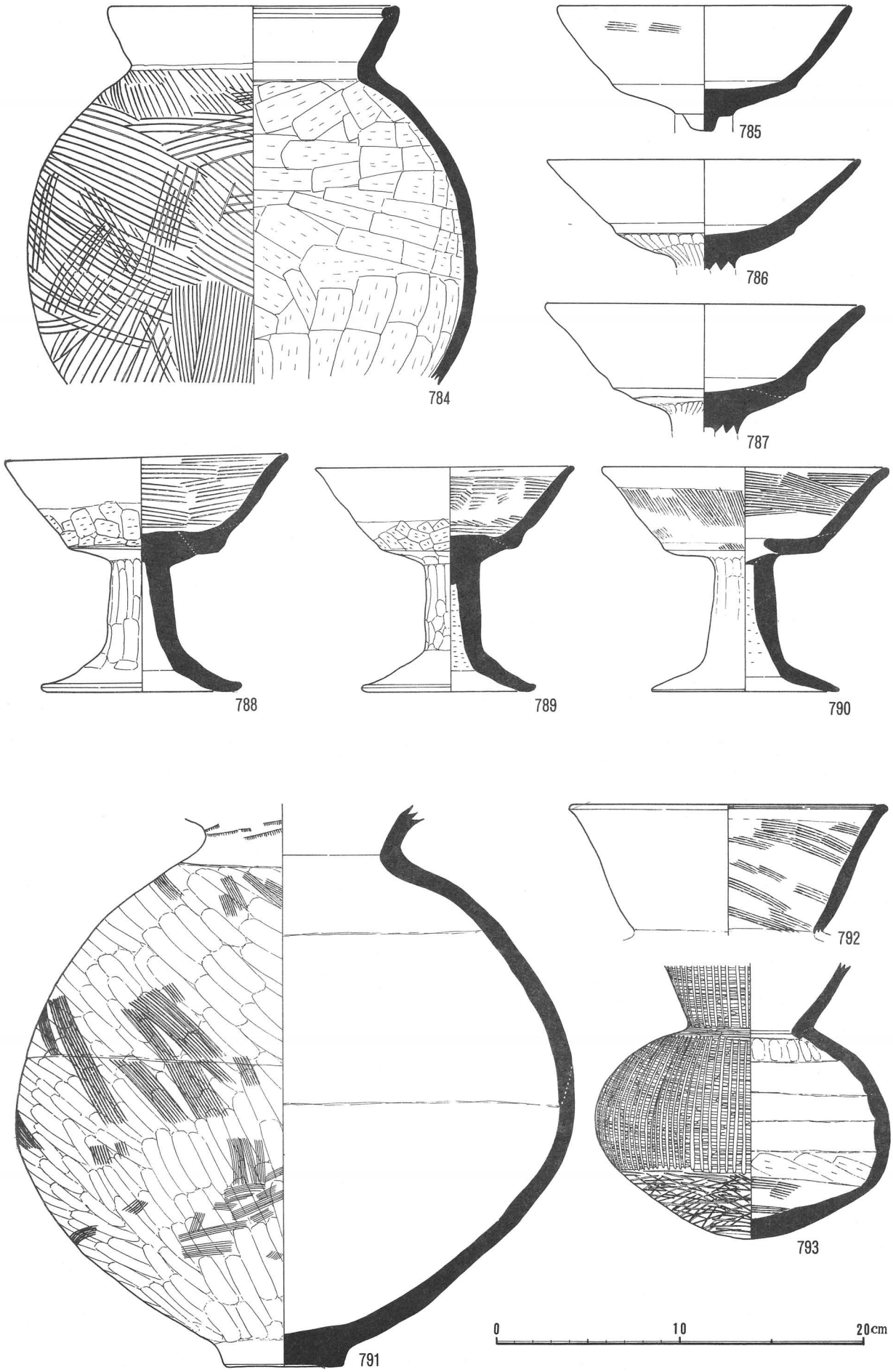


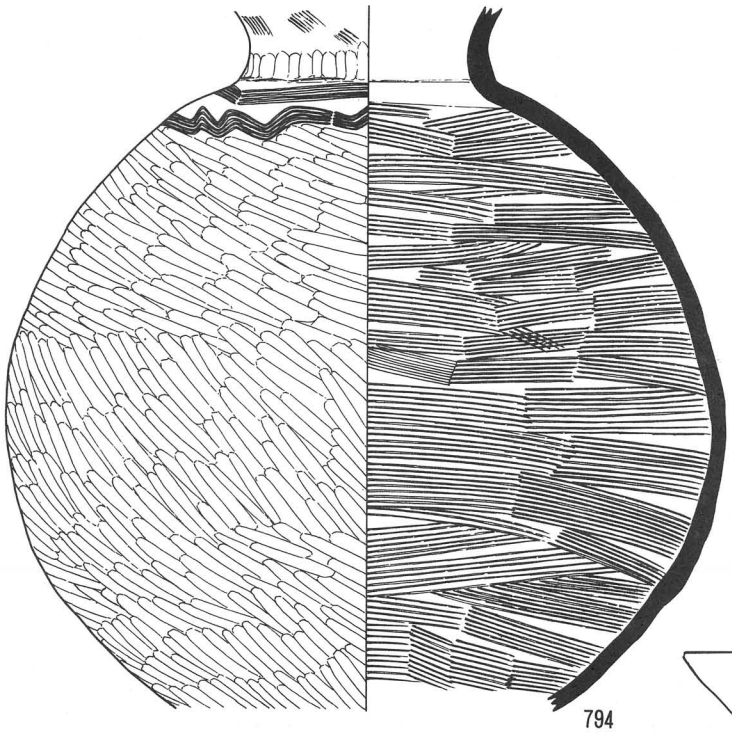


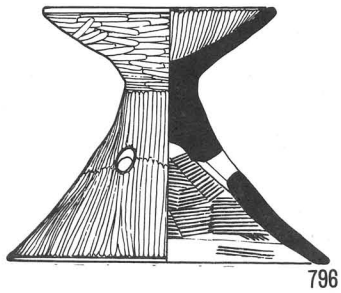


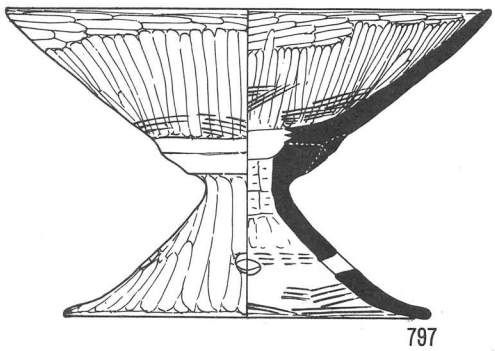


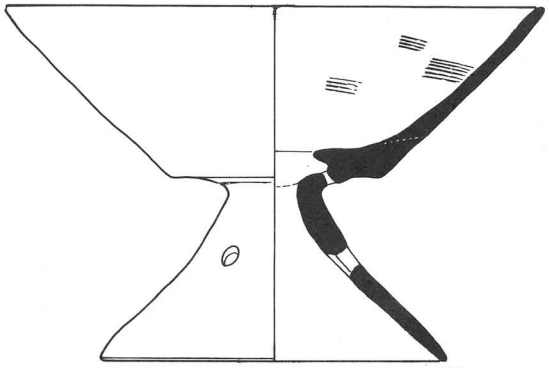
0　10　20cm

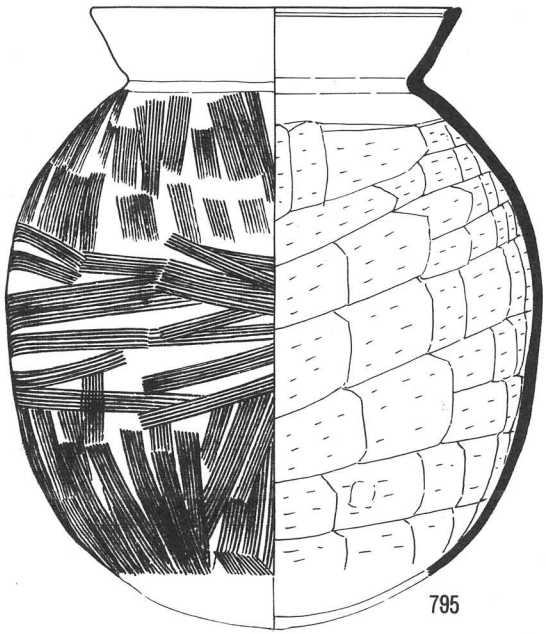

784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
0
10
20cm

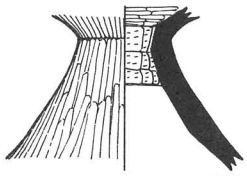

794

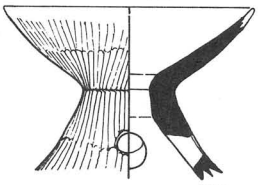

796


797

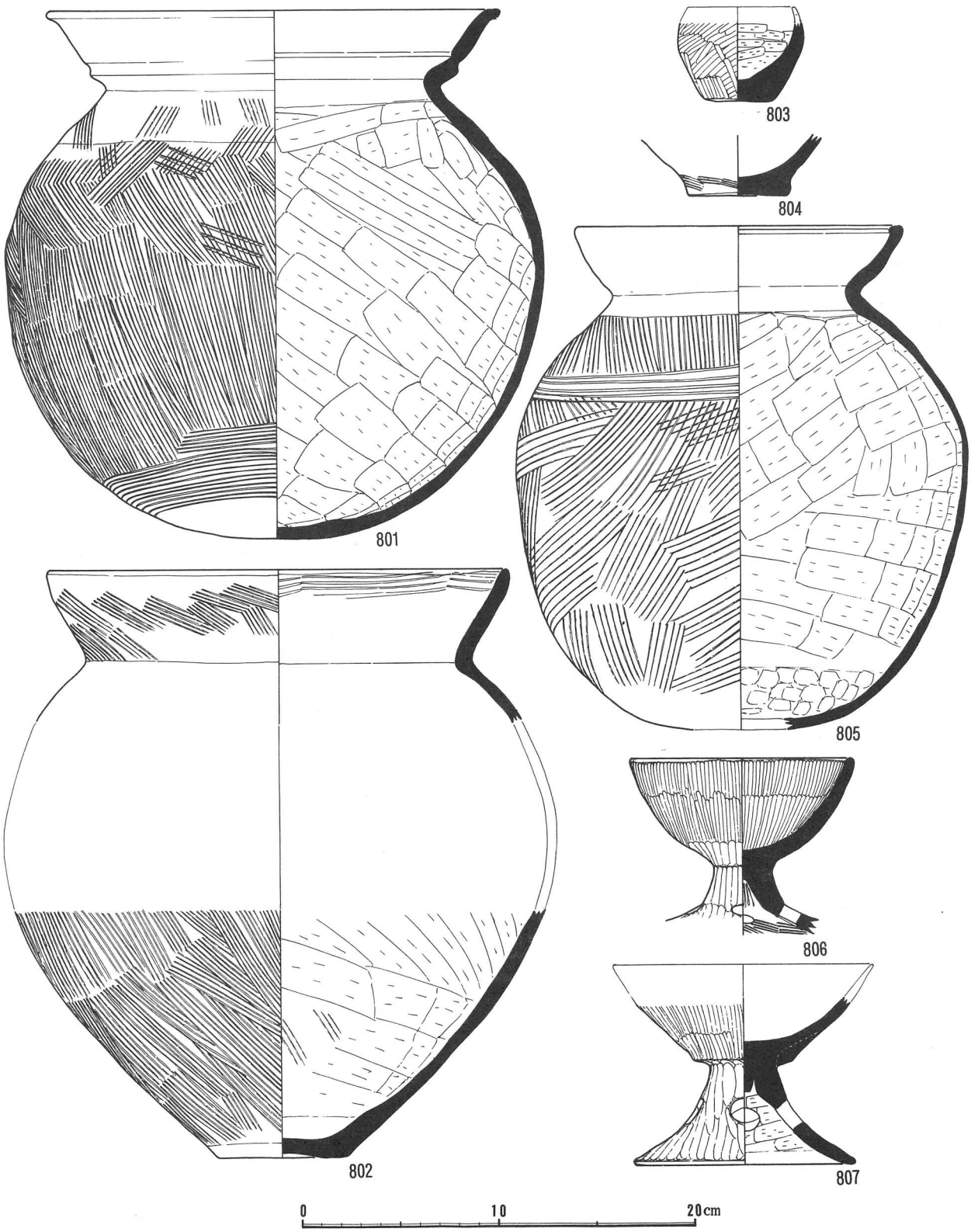

798


795

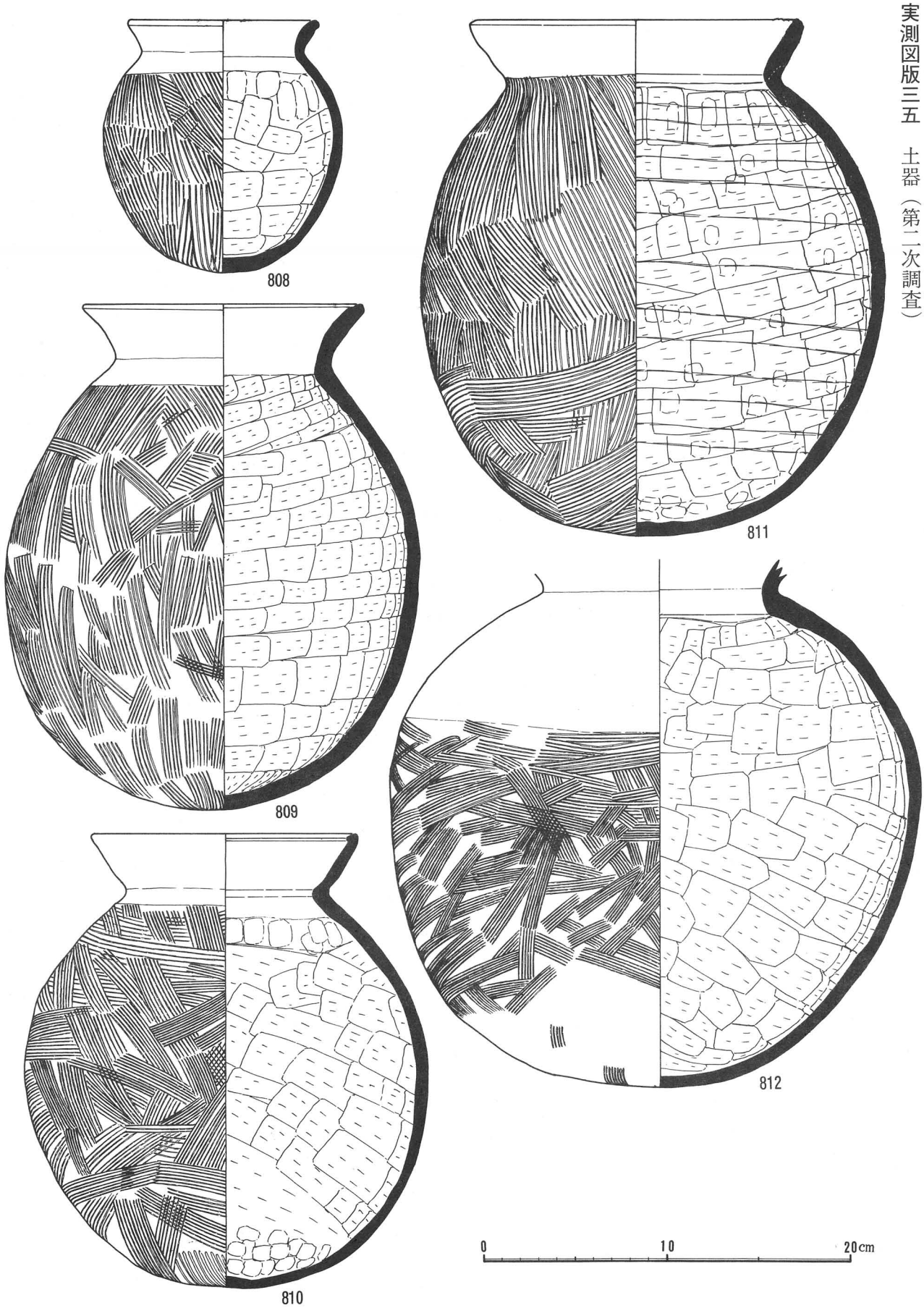

799


800

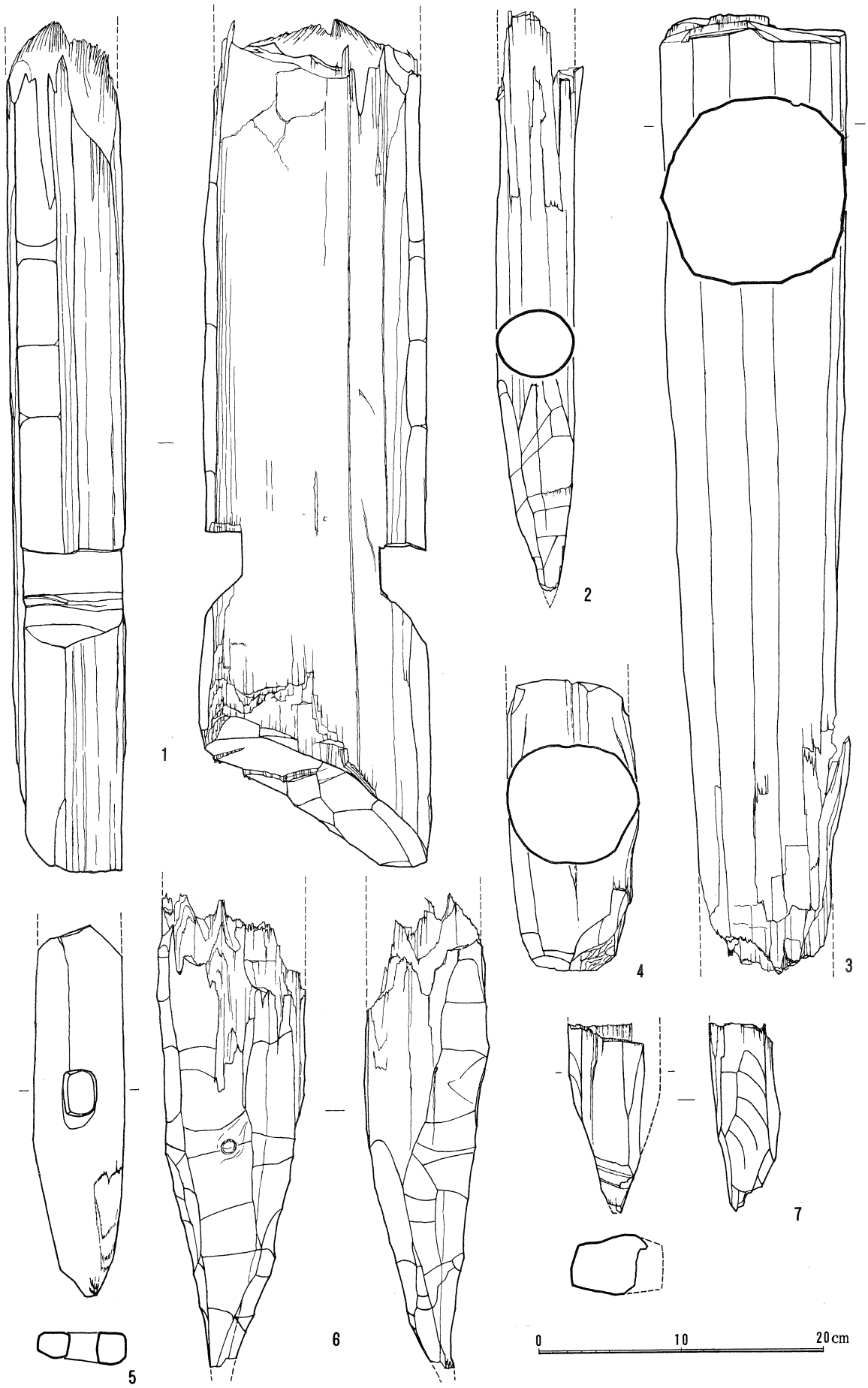
0
10
20cm


801
802
803
804
805
806
807
0
10
20cm

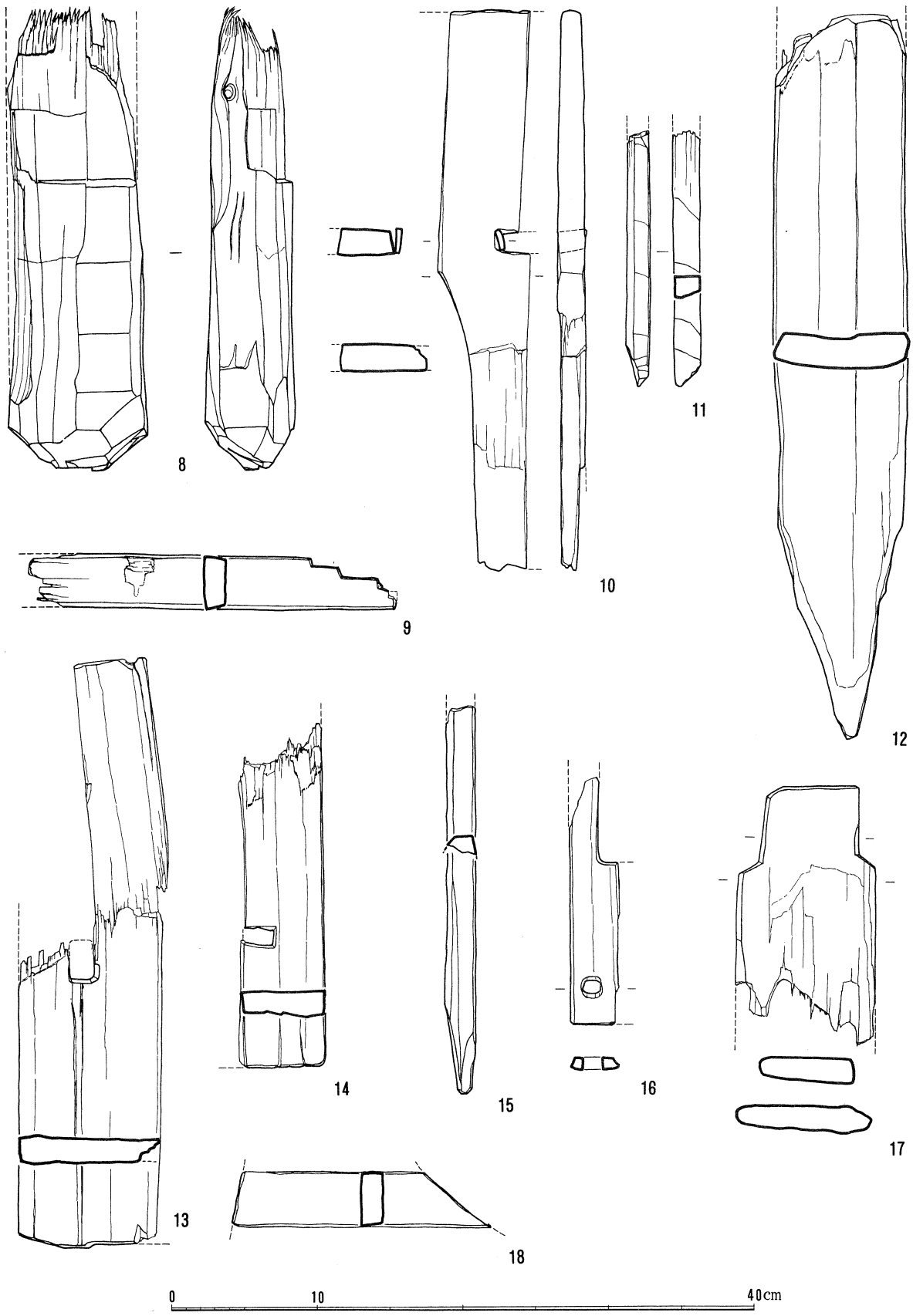
実測図版三五　土器（第二次調査）



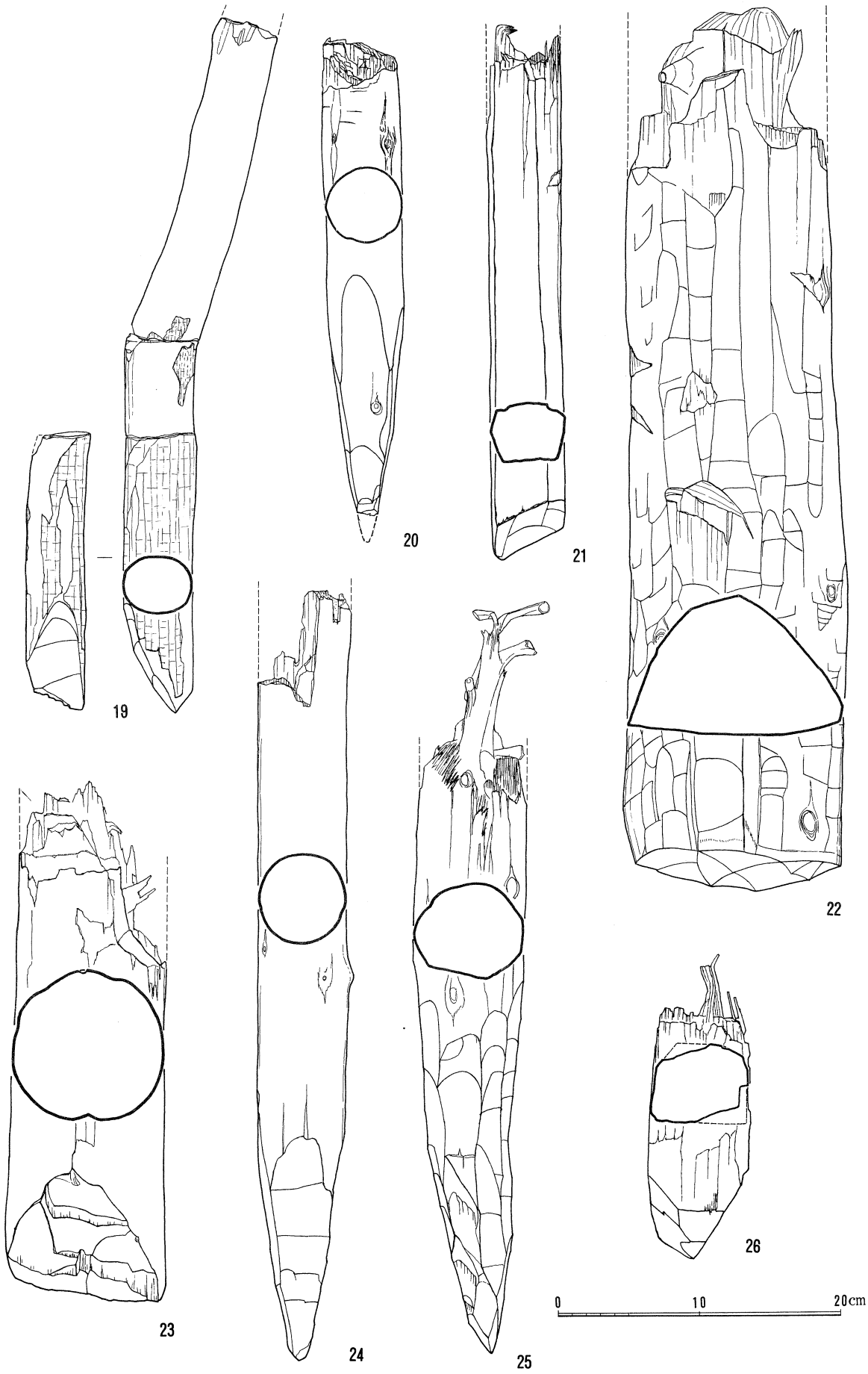
実測図版三六　木製品（第一次調査）



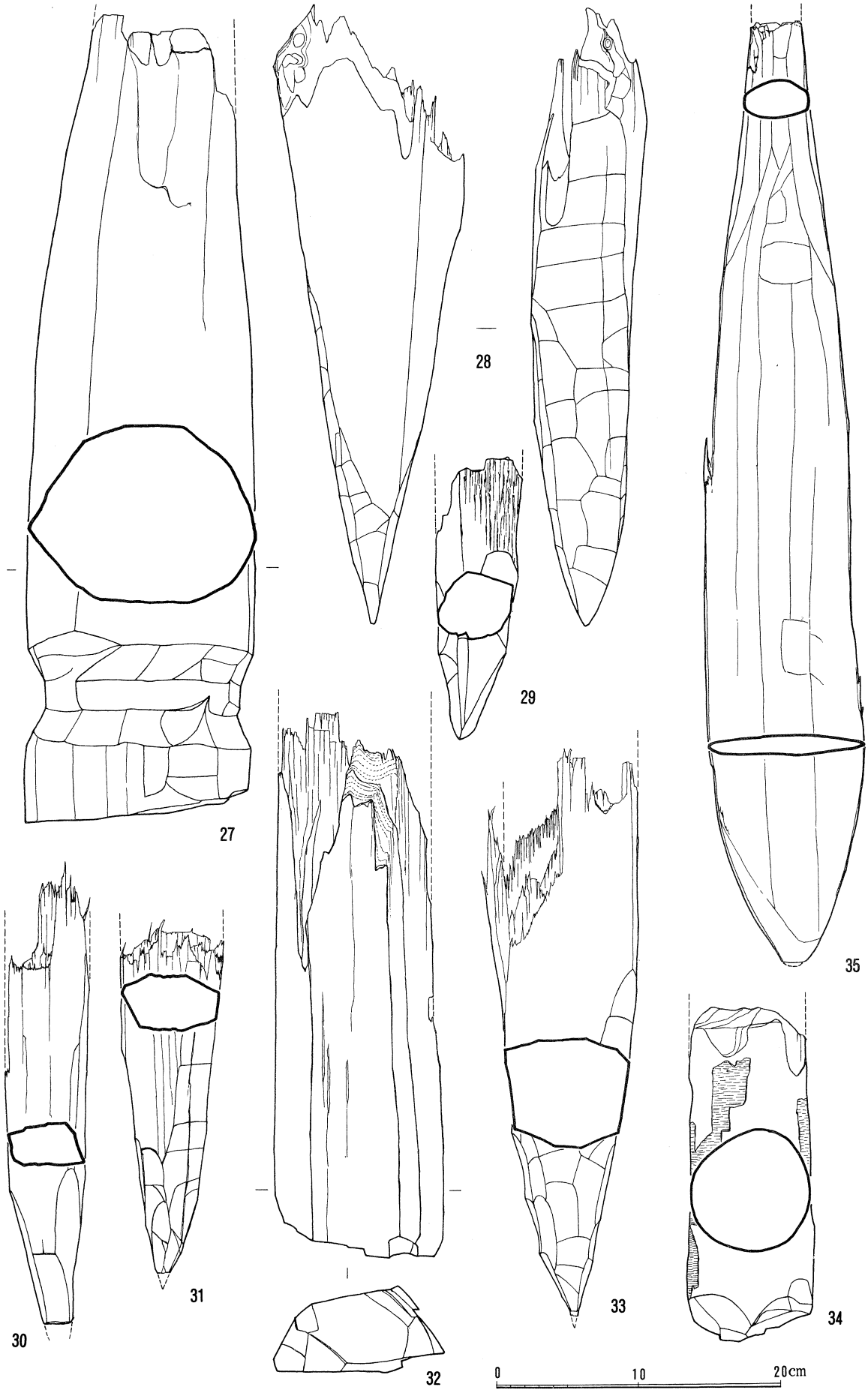
実測図版三七　木製品（第一次調査）



実測図版三八　木製品（第一次調査）

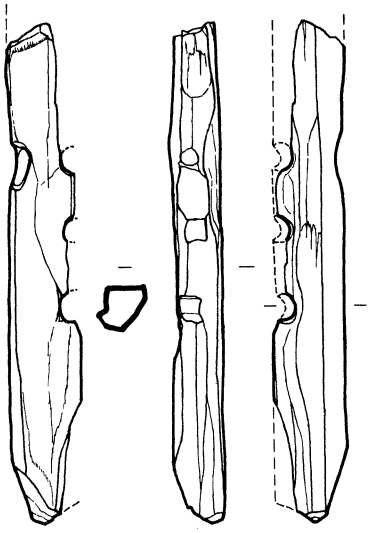


実測図版三九　木製品（第一次調査）

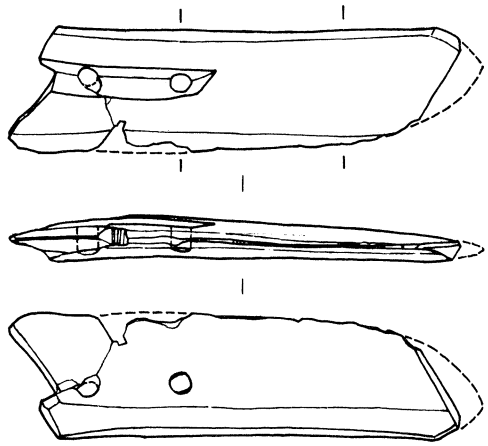


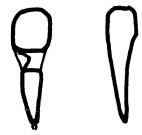
実測図版四〇　木製品（第一次調査）

実測図版四一　木製品（第一次調査）

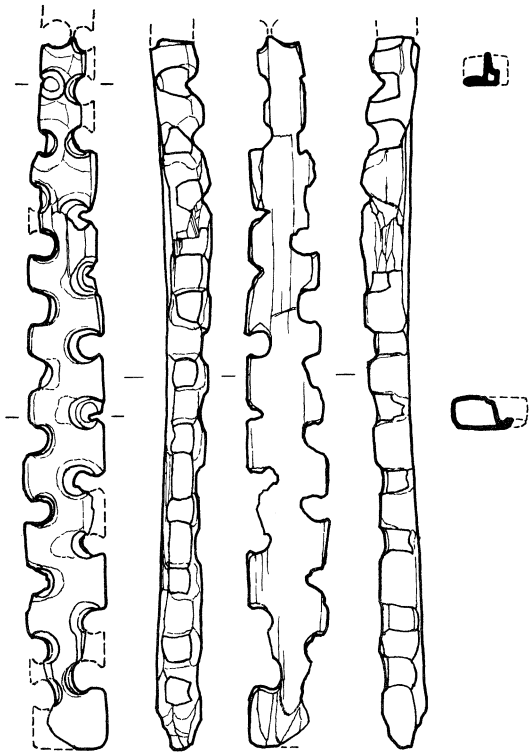


39

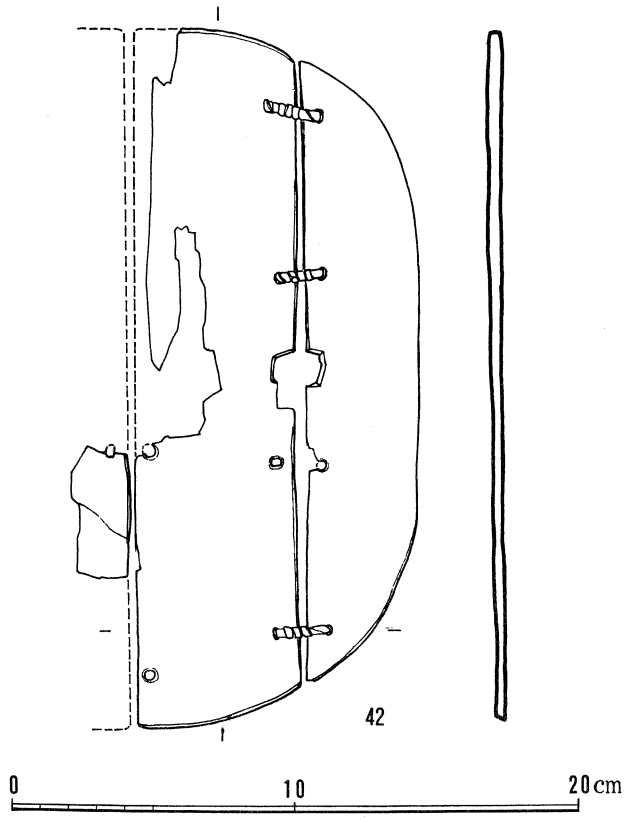




41



40

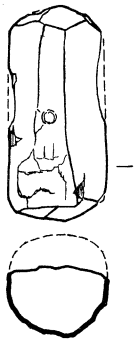


42

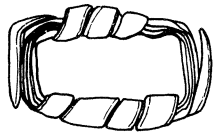
0　10　20cm

42

0　5cm

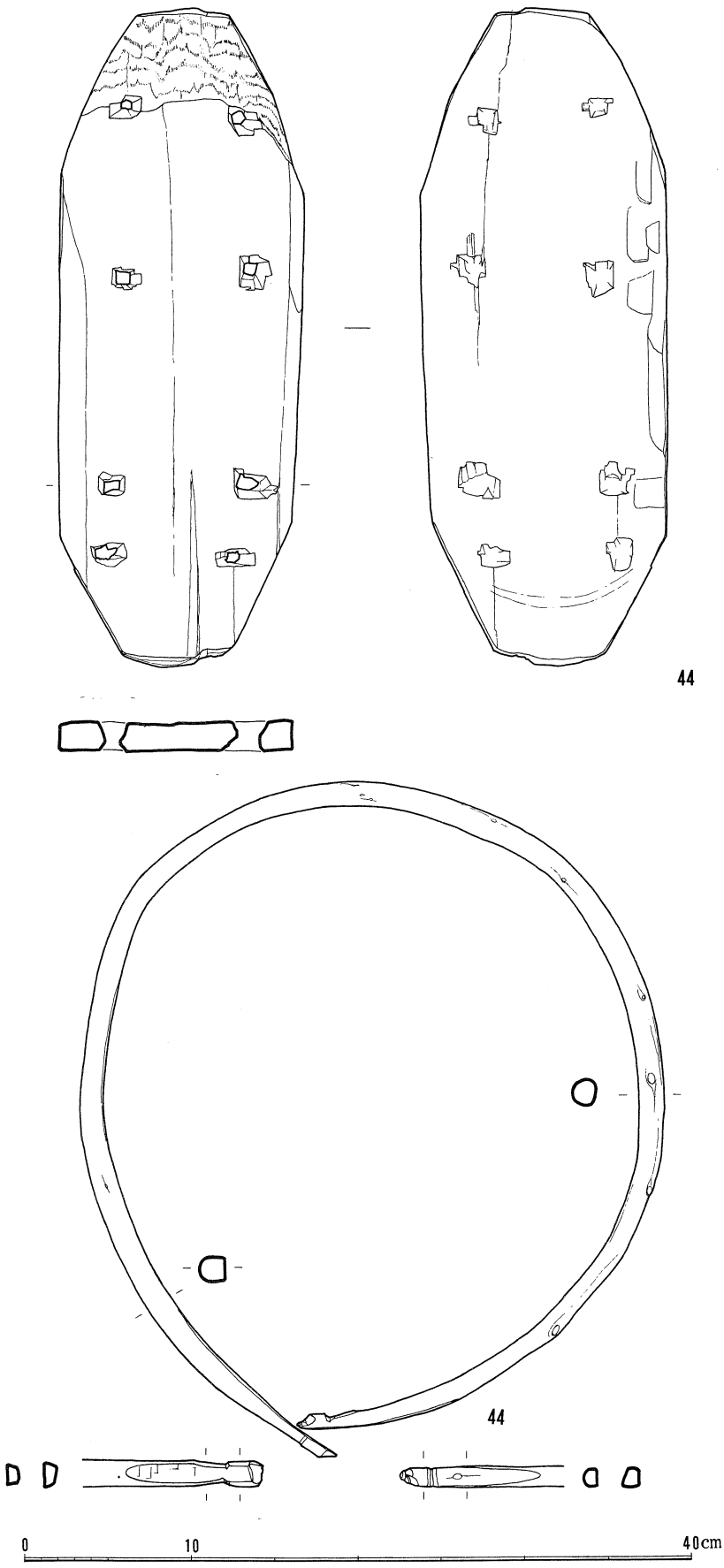


43

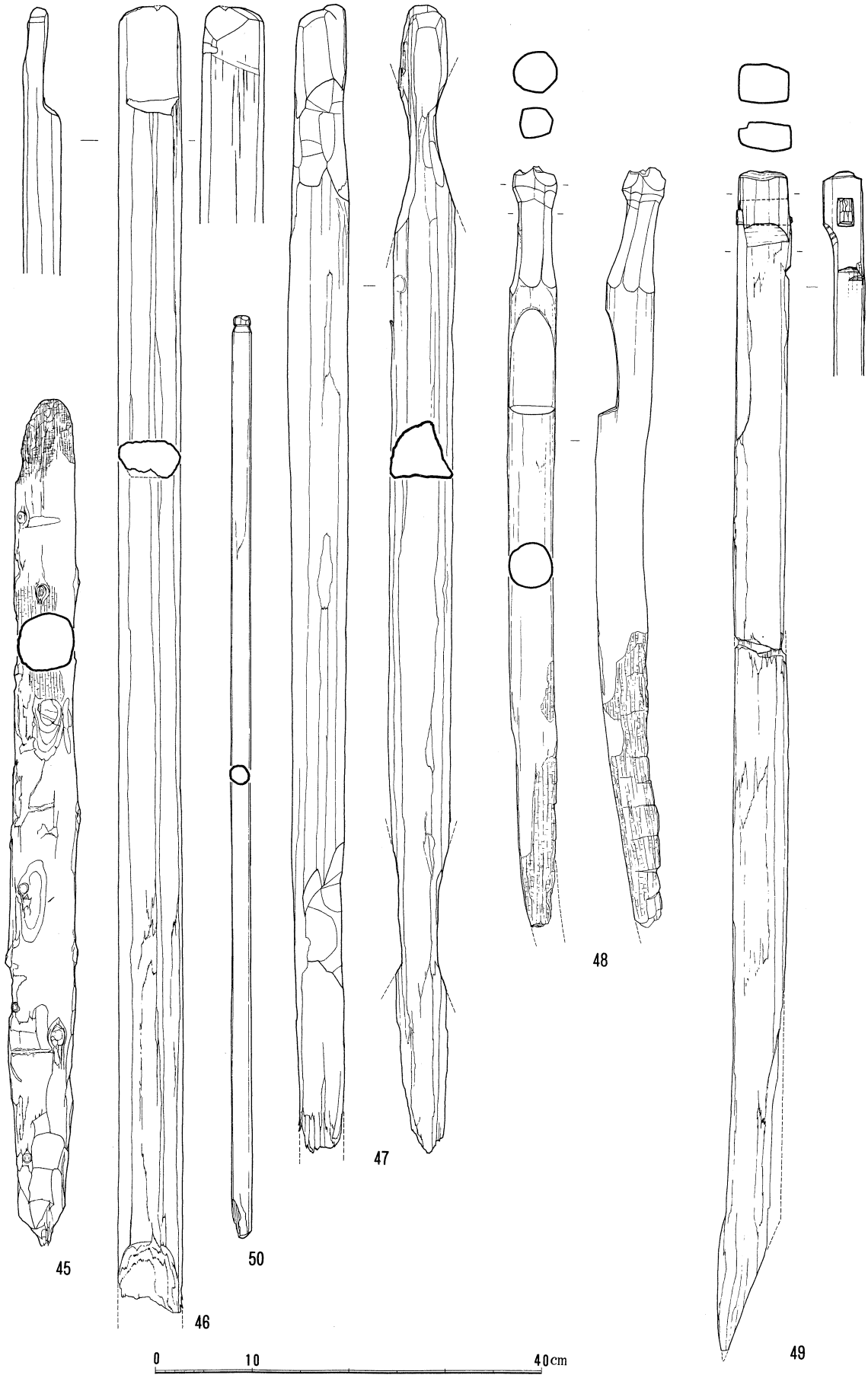


42

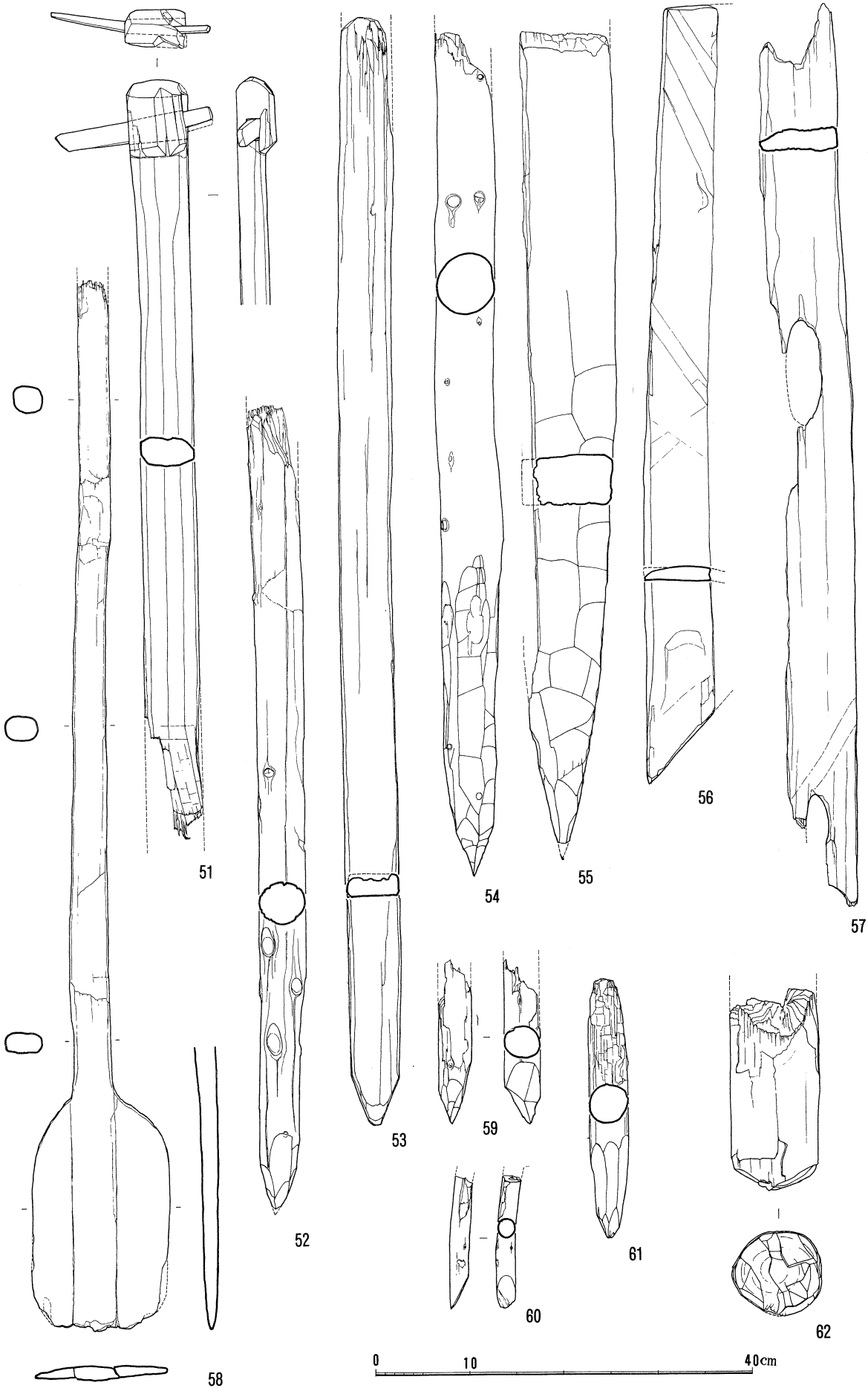
0　3cm


44
44
0
10
40cm

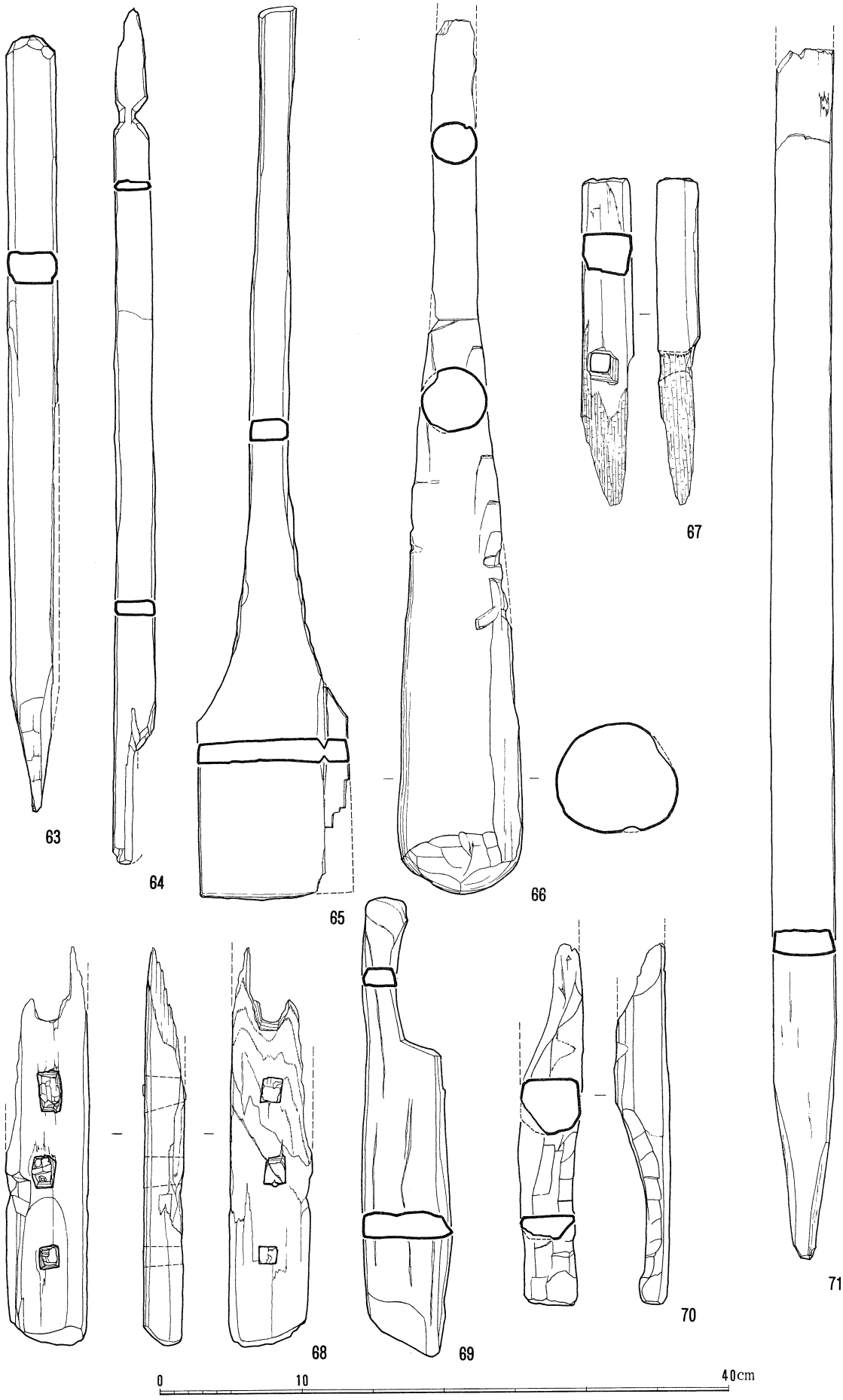
実測図版四三　木製品（第二次調査）



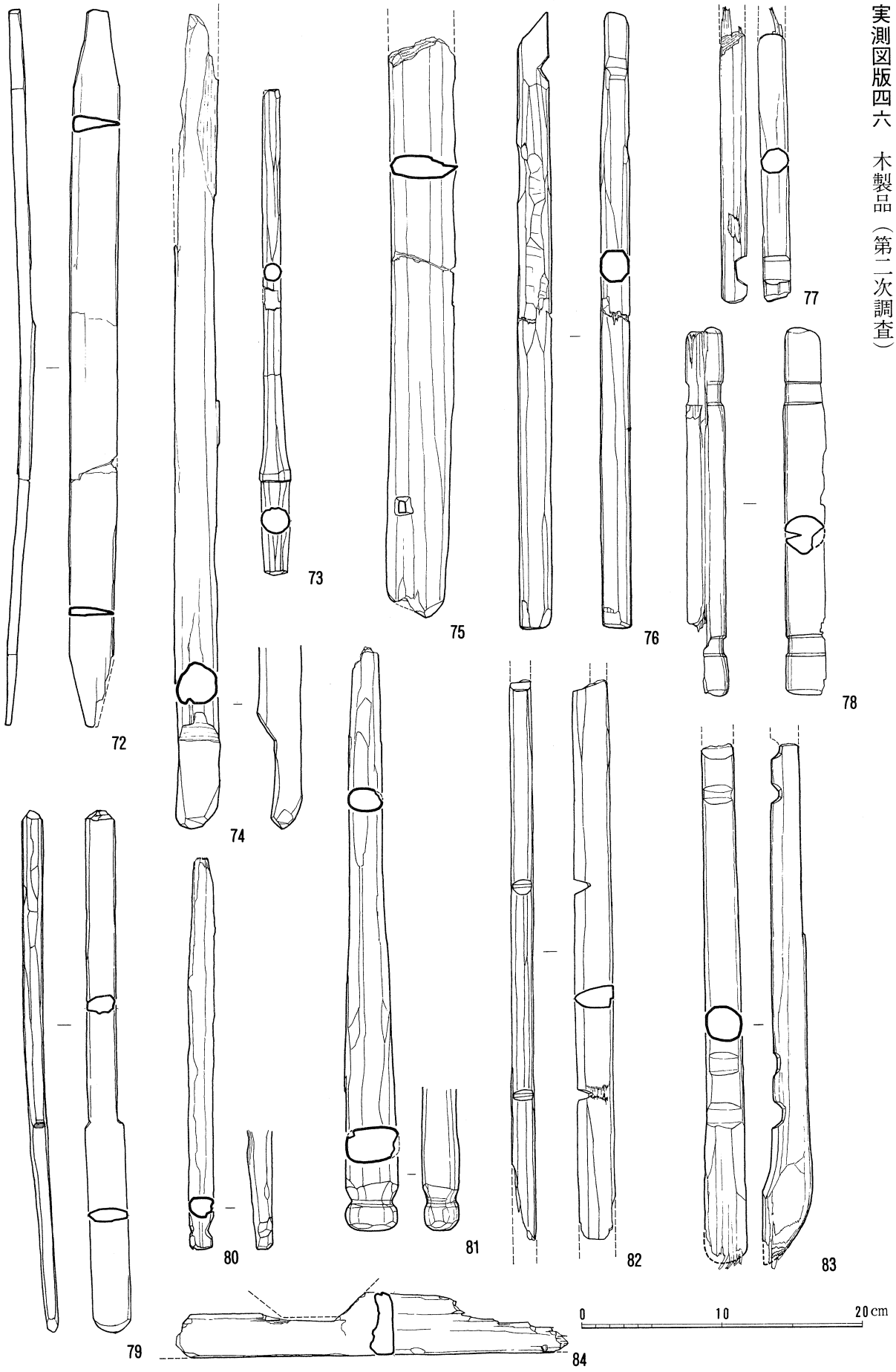
実測図版四四　木製品（第二次調査）

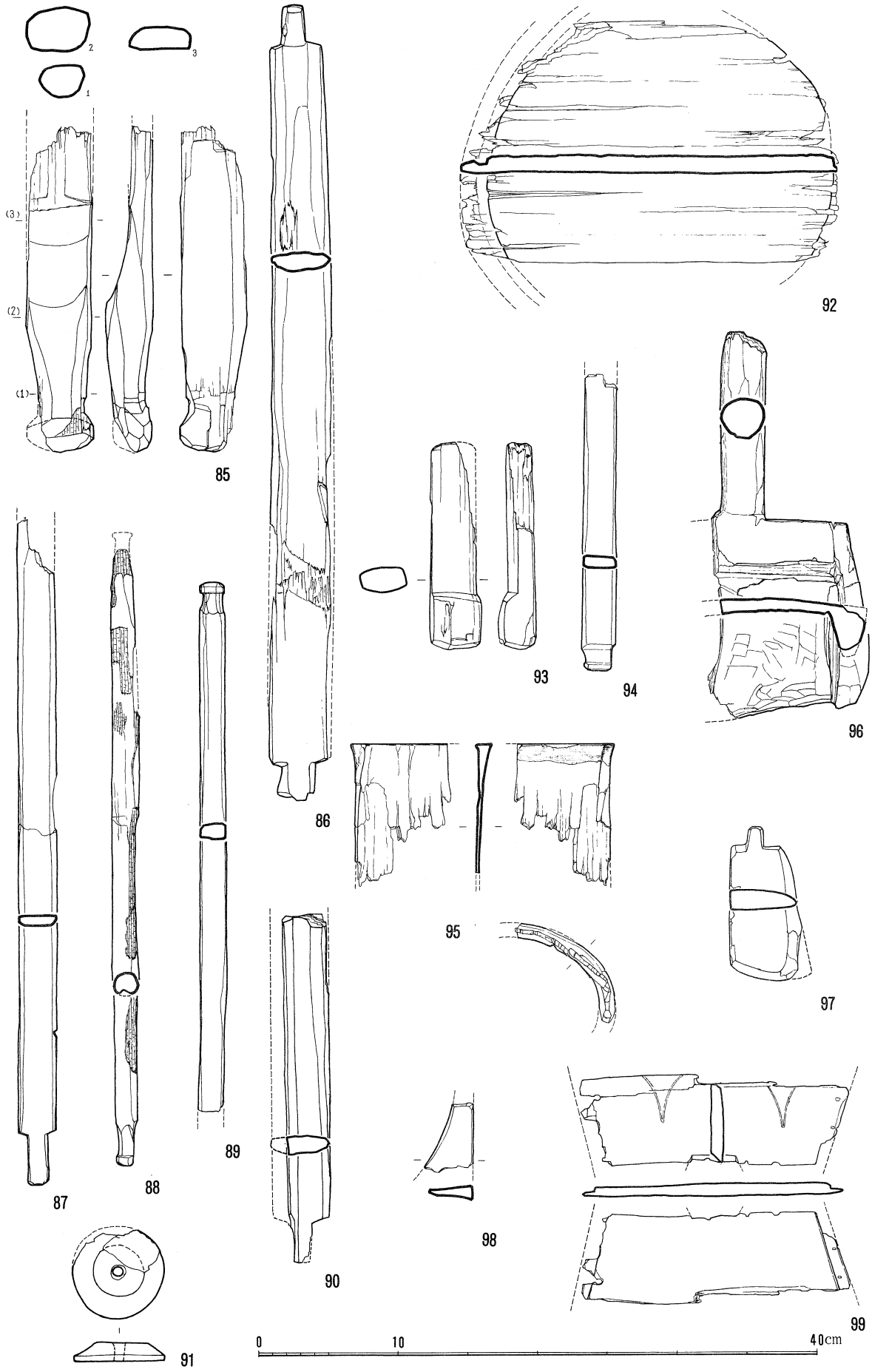


実測図版四五　木製品（第二次調査）

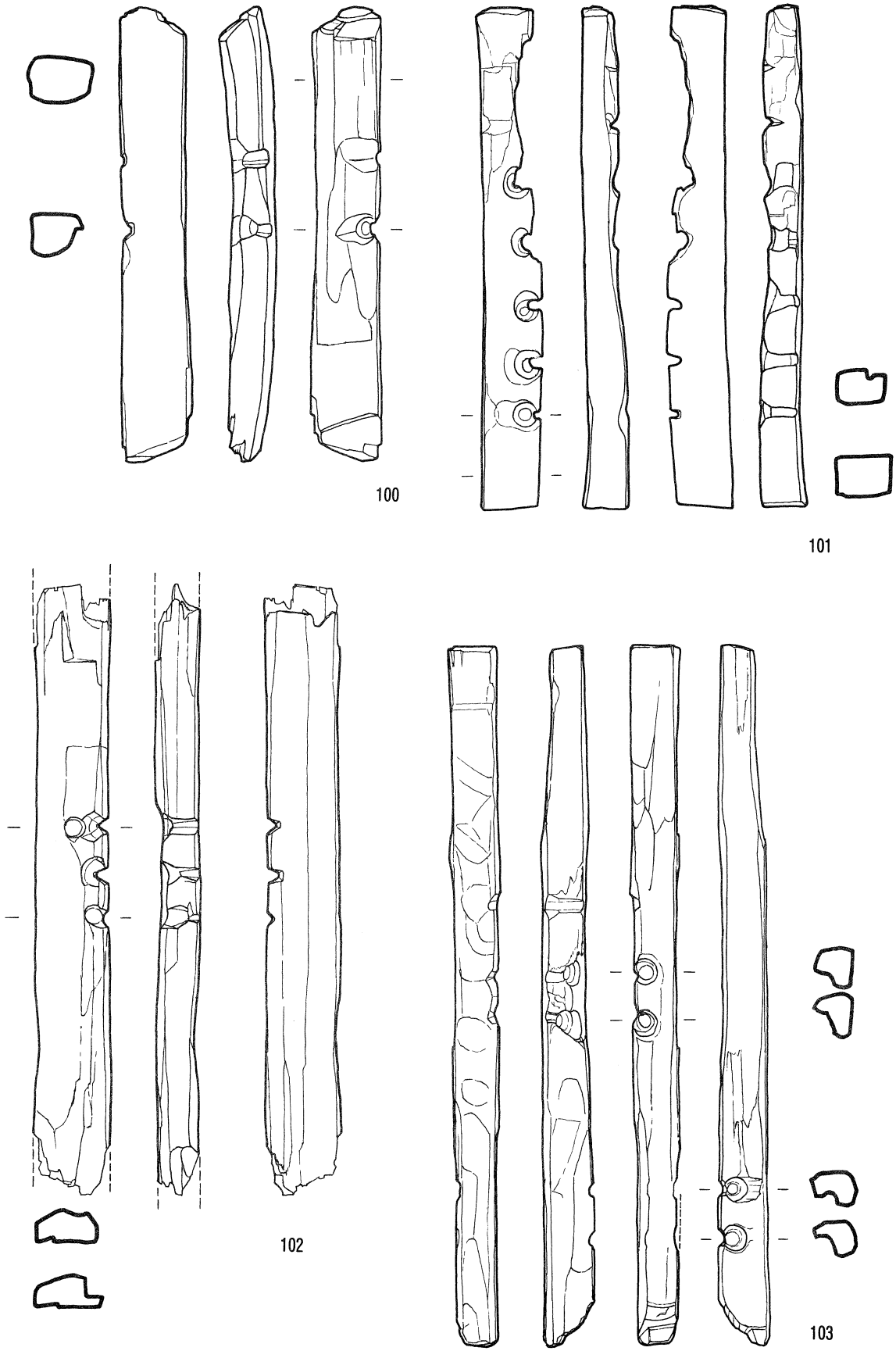


実測図版四六　木製品（第二次調査）

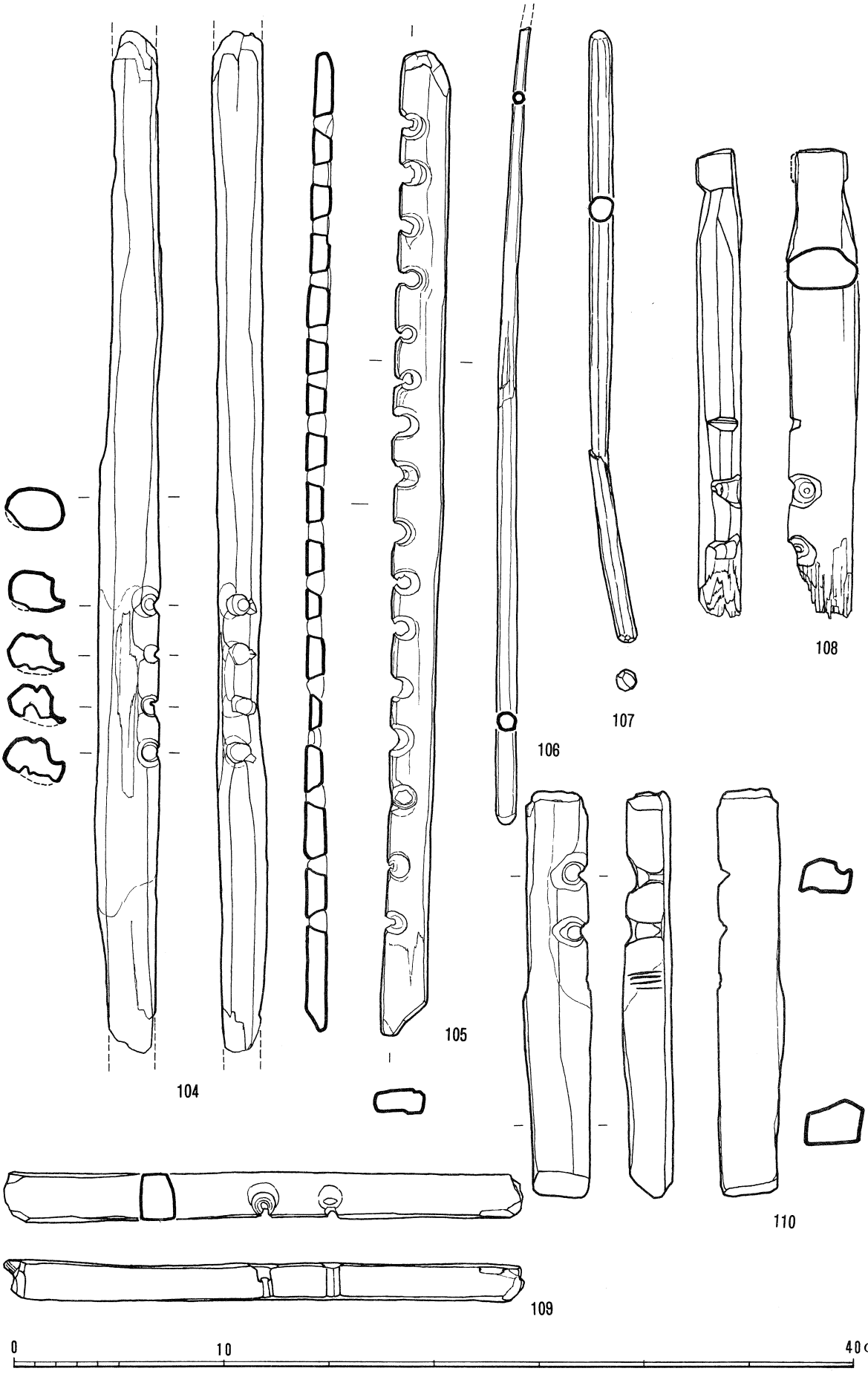



2
3
1
(3)
(2)
(1)
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
0
10
40cm

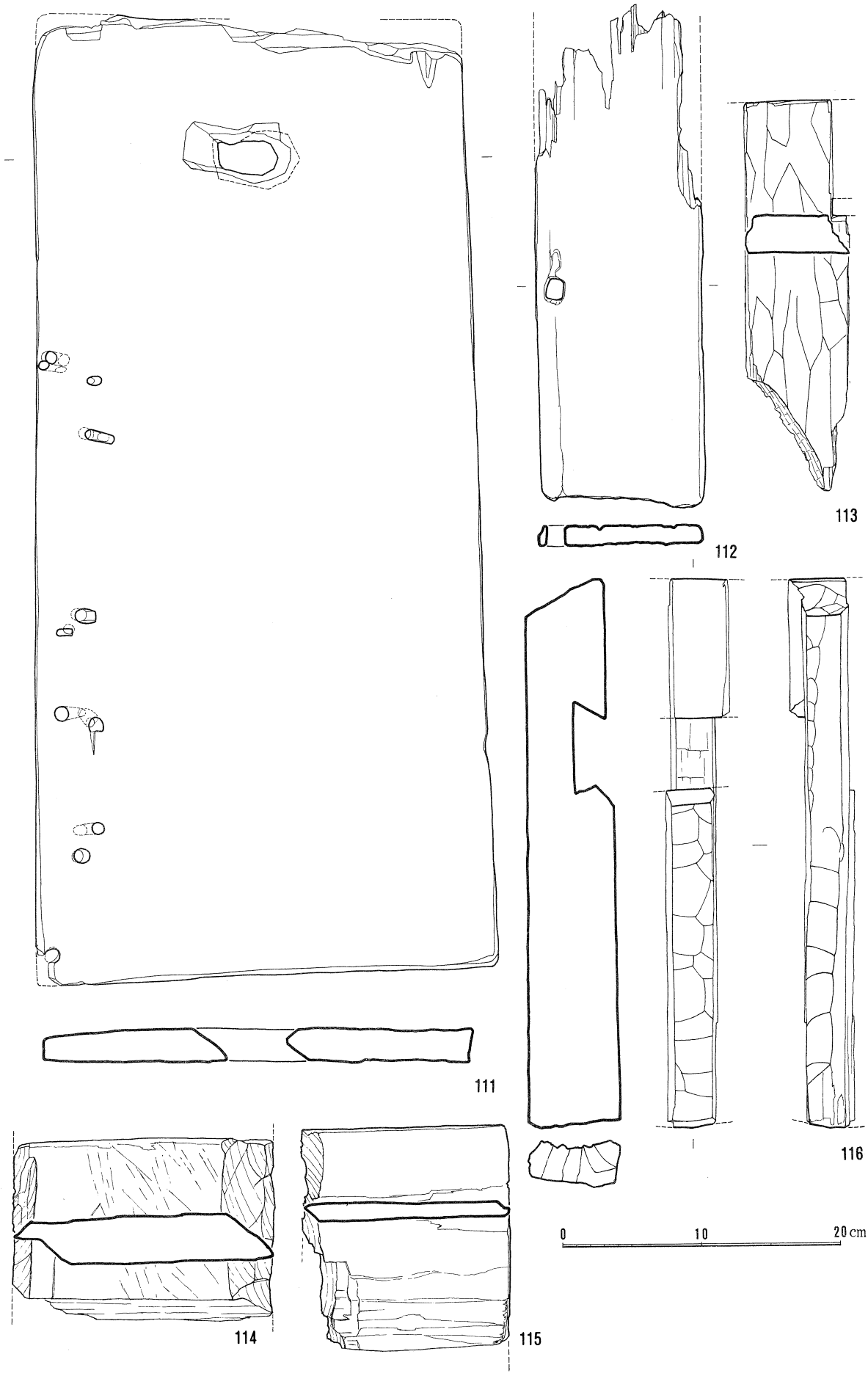
実測図版四八　木製品（第二次調査）

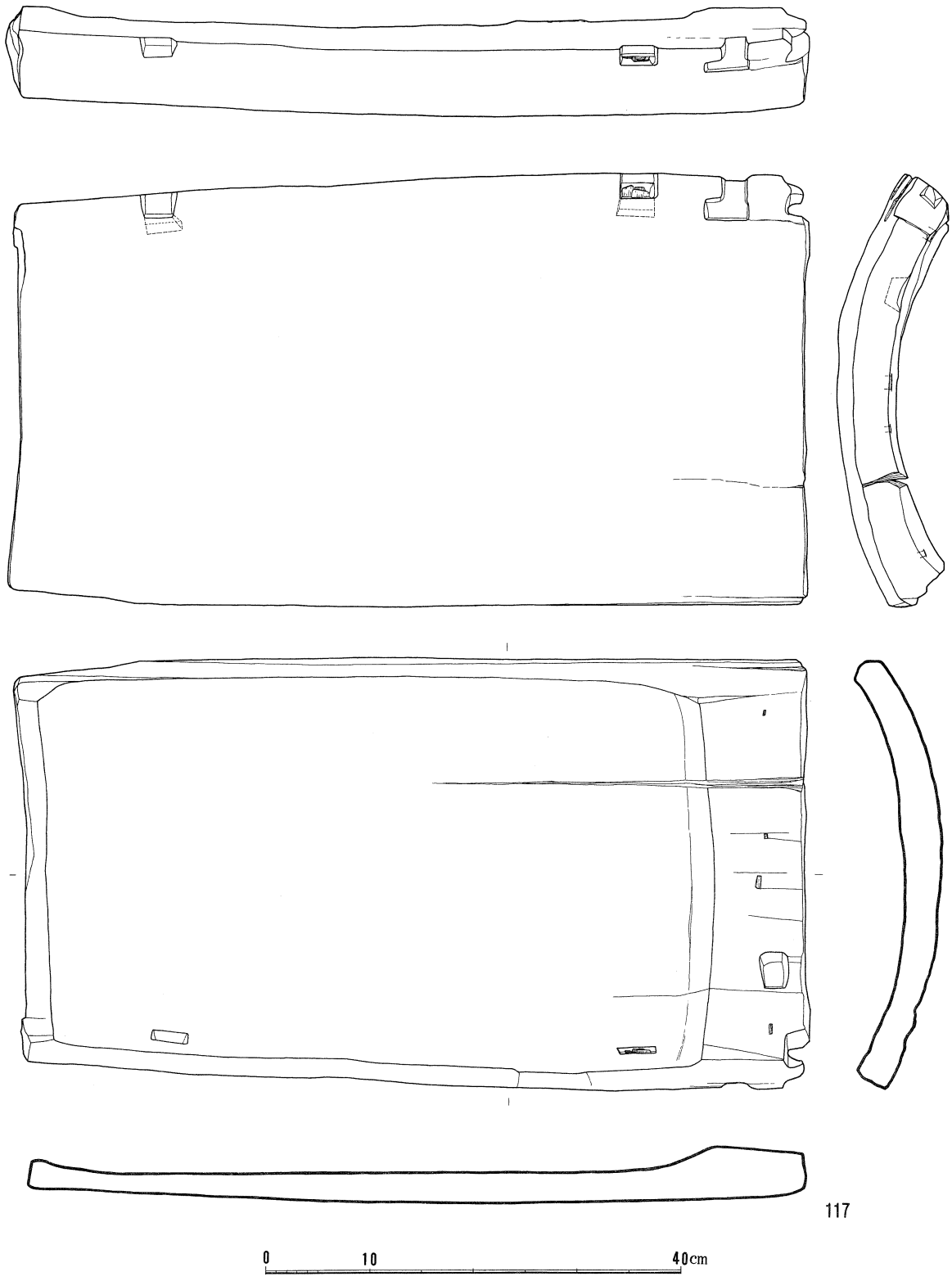


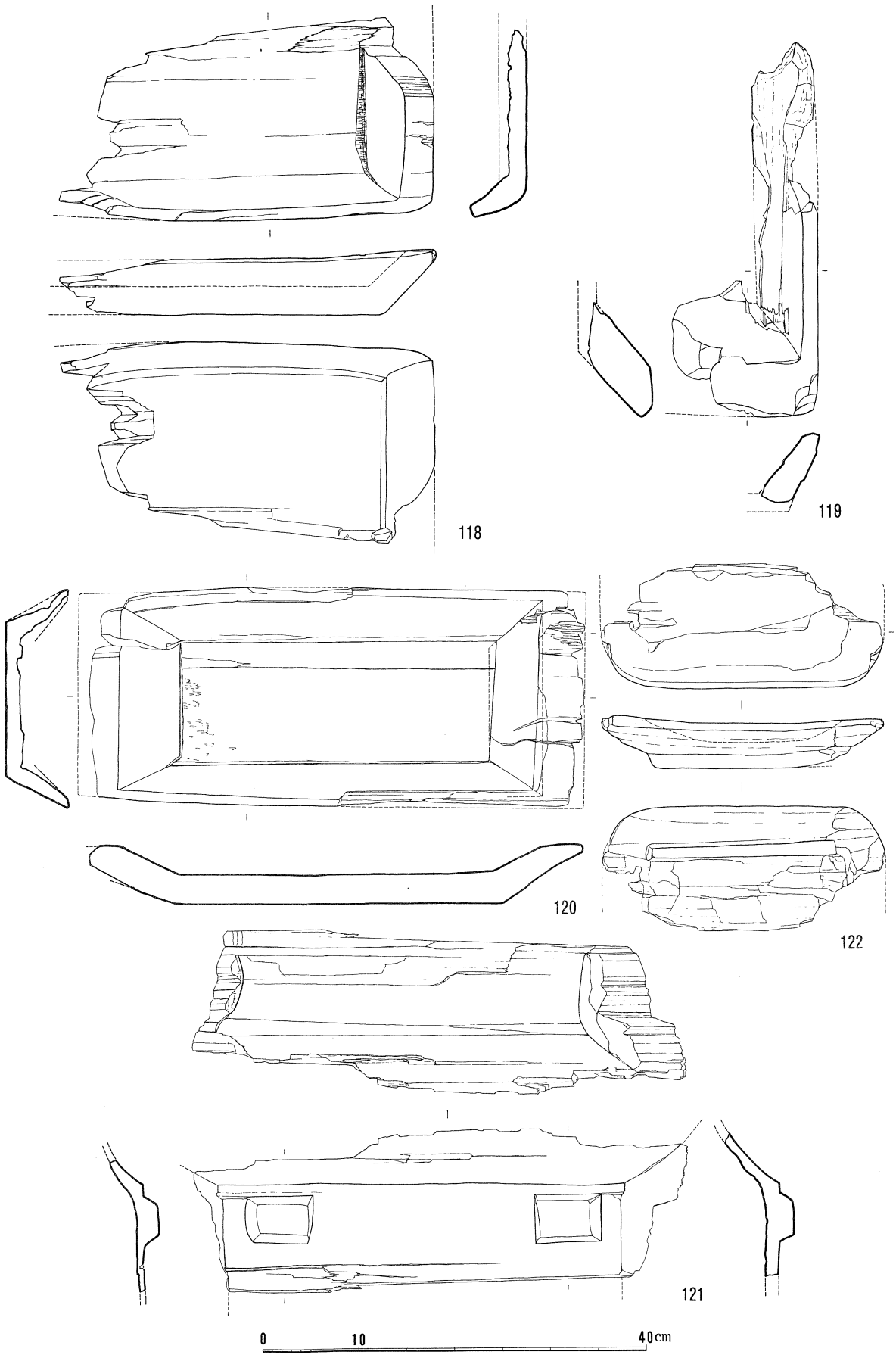
実測図版四九　木製品（第二次調査）

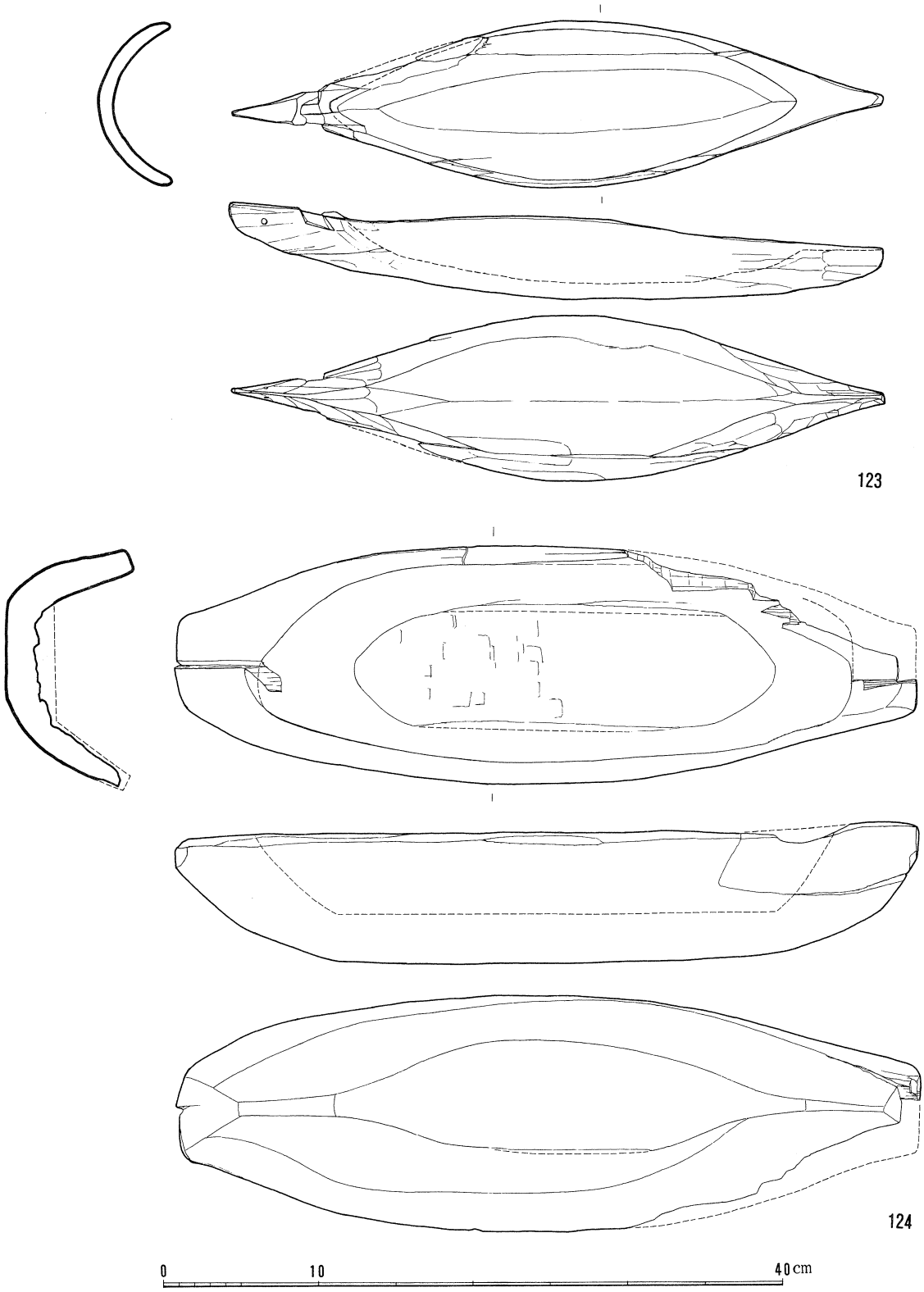


実測図版五〇　木製品（第二次調査）

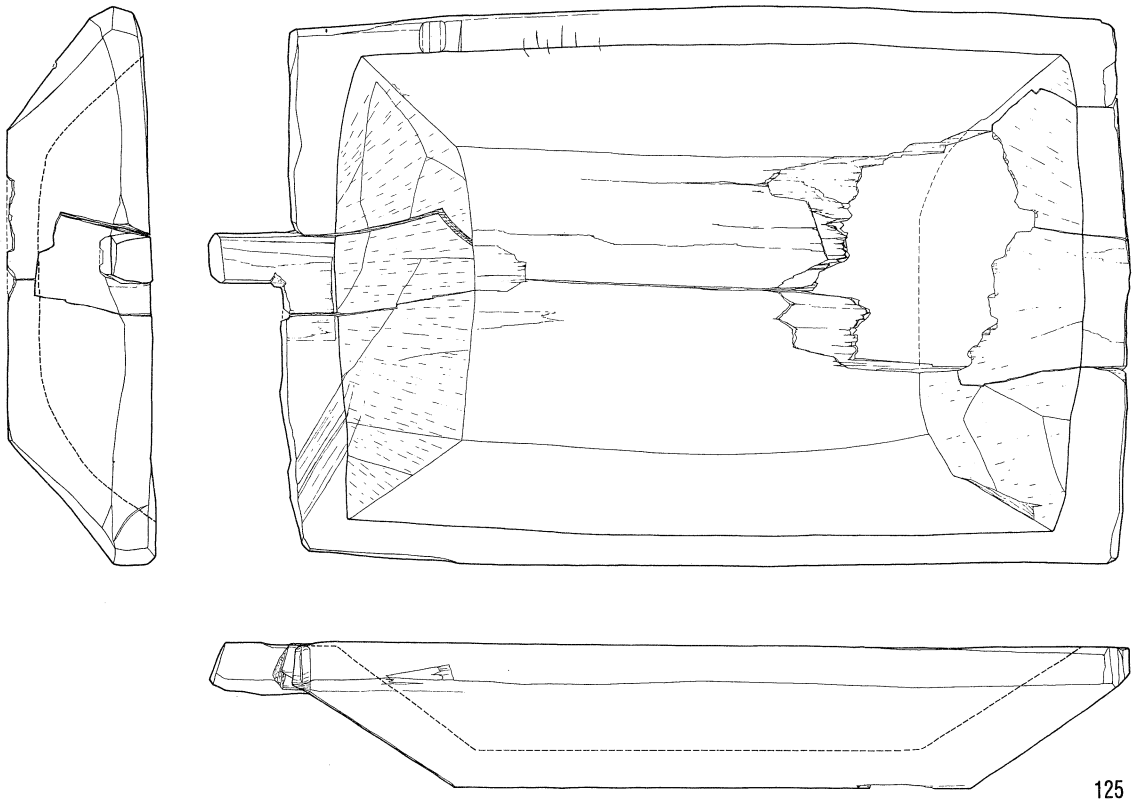



0
10
40cm

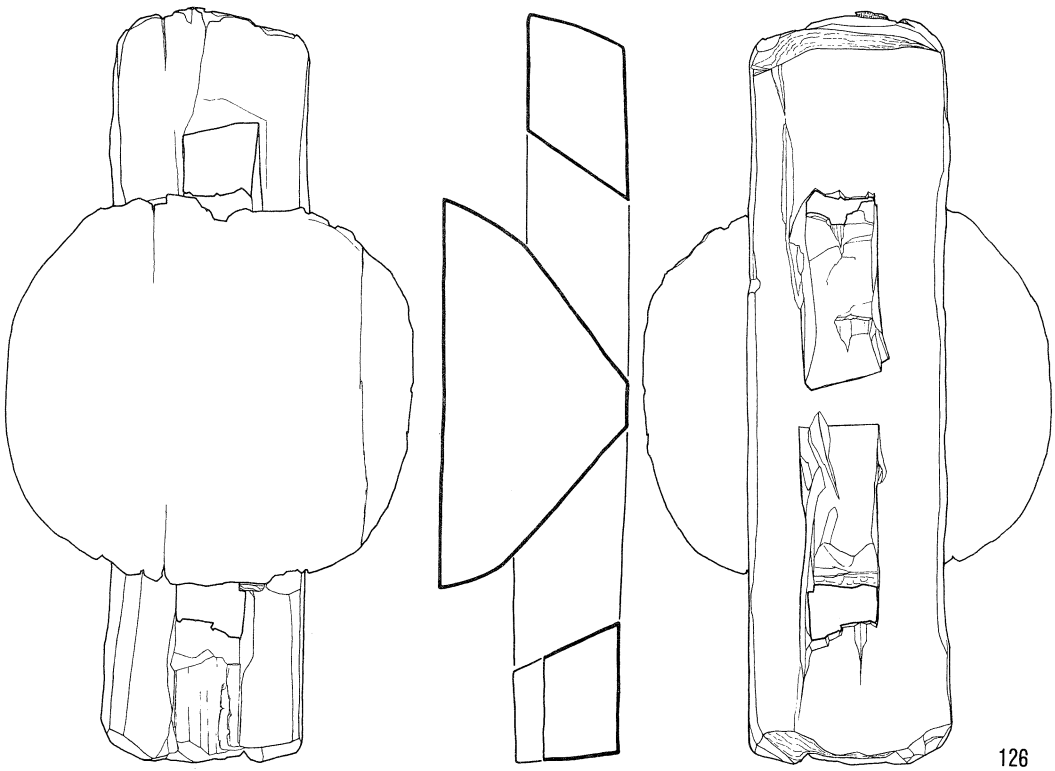

118
119
120
122
121
0
10
40cm



123（参考資料）針江遺跡出土

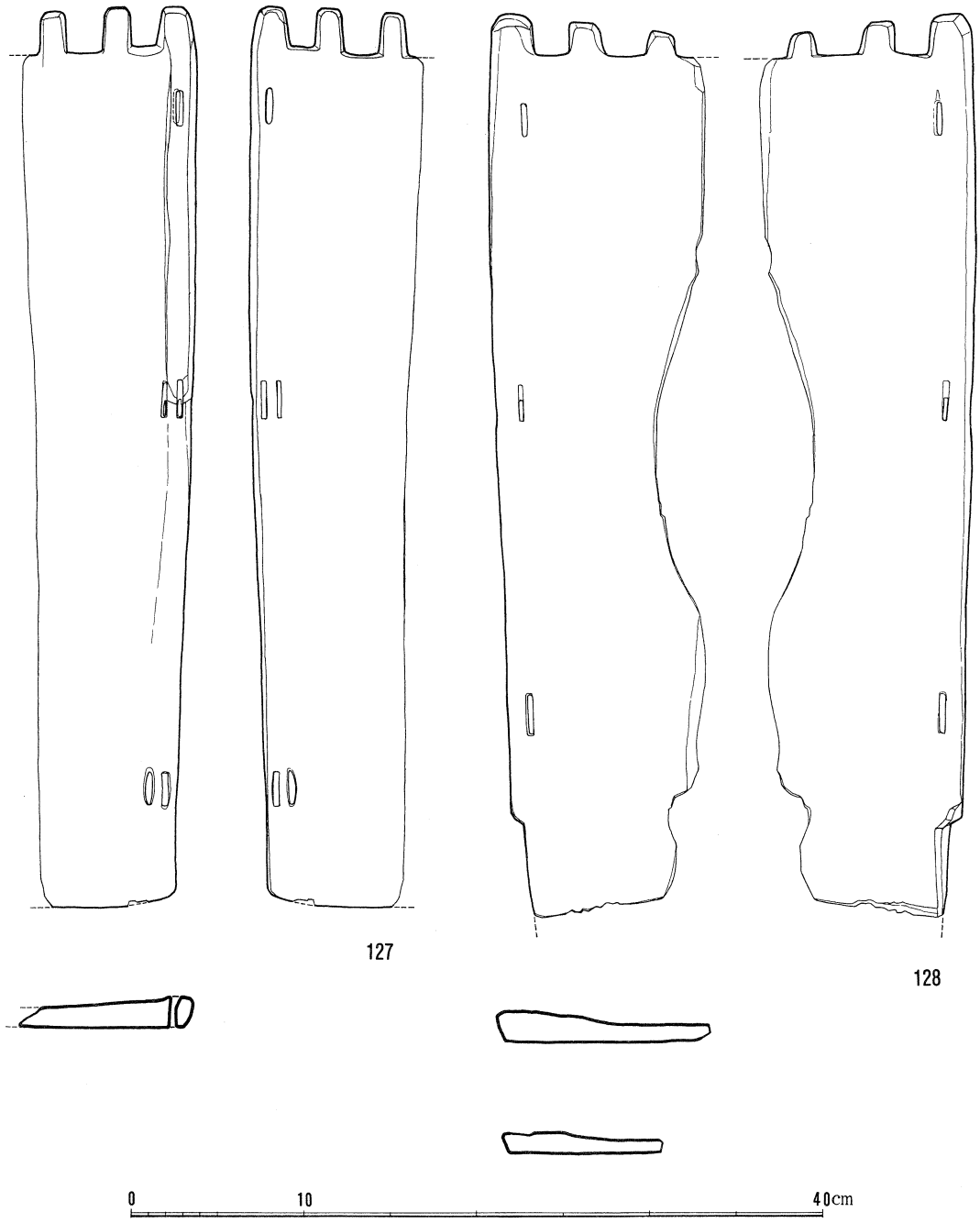


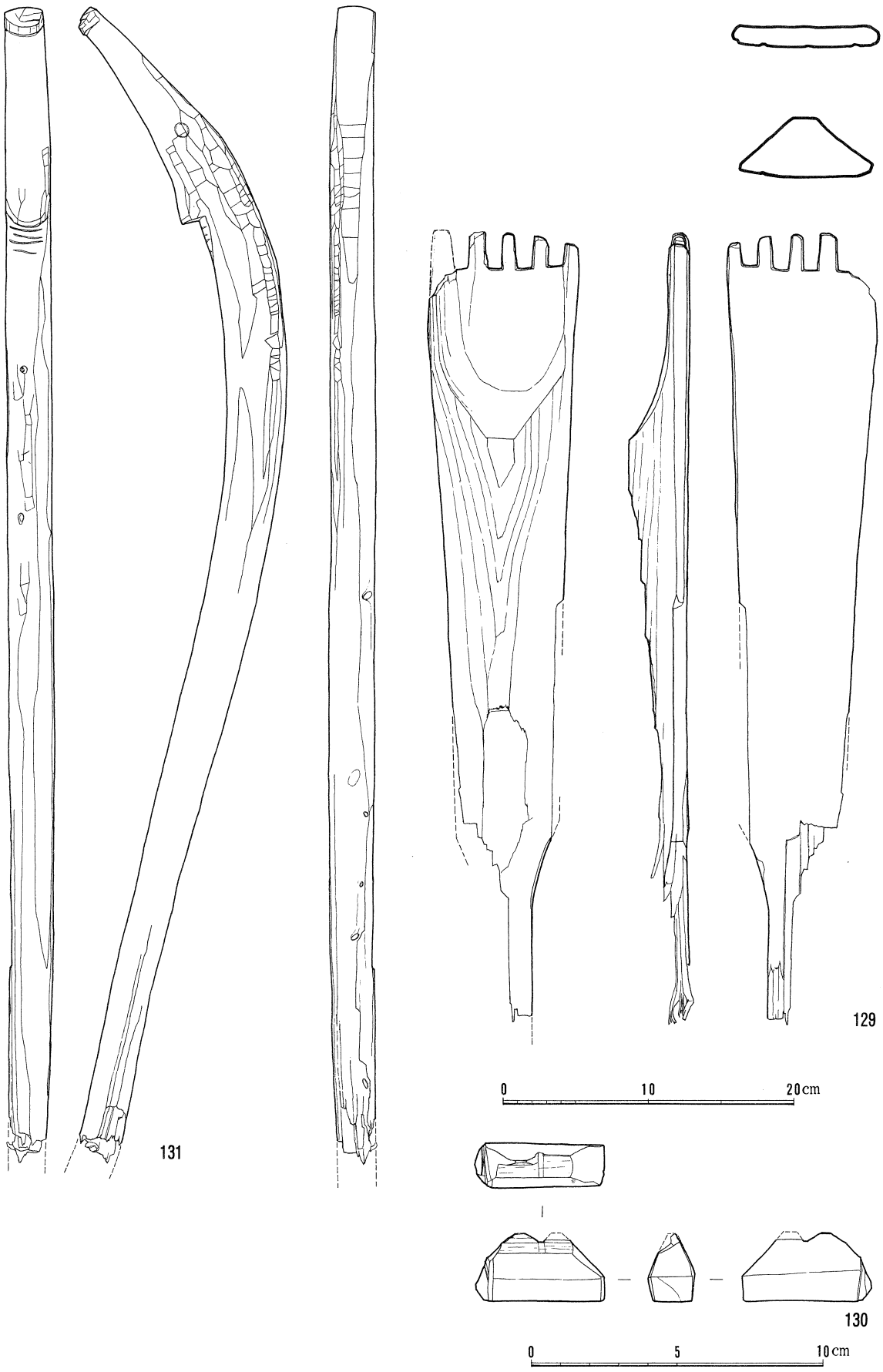
125

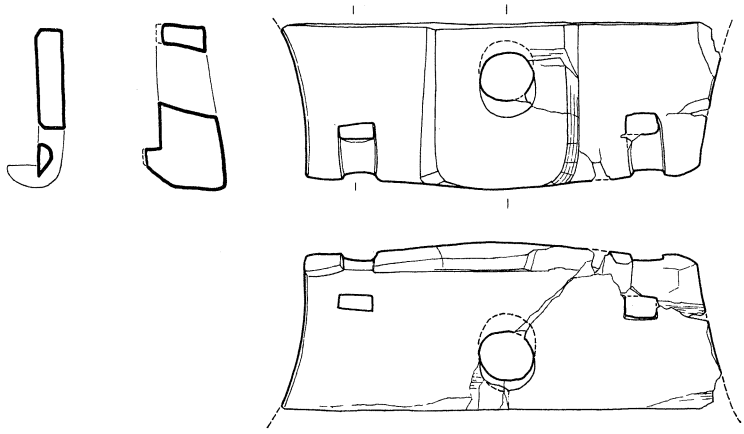


126

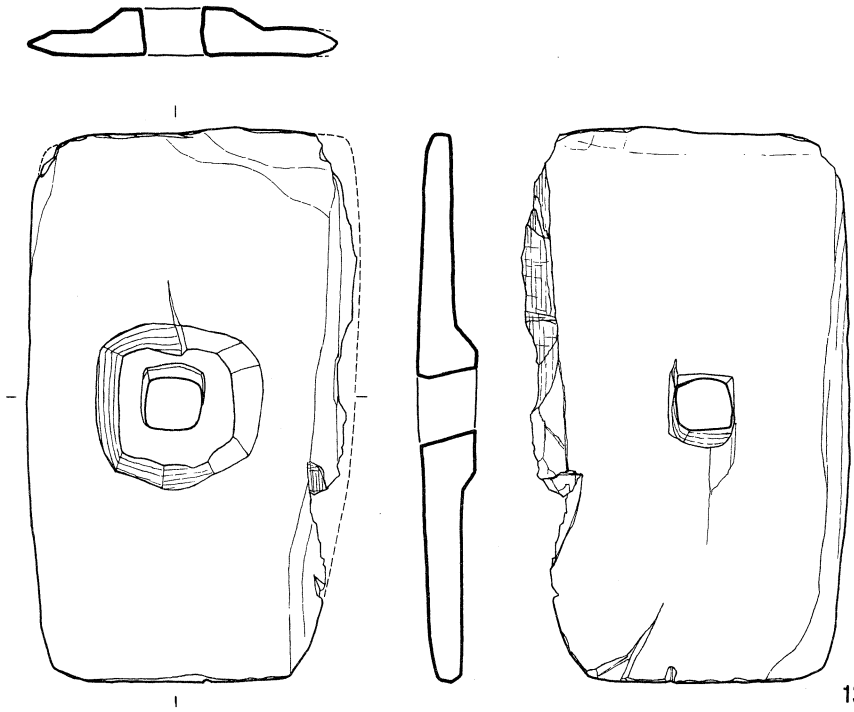
0　10　40cm


127
128
0
10
40cm


129
131
130
0
10
20cm
0
5
10cm



132



133

0　10　40 cm

森浜遺跡発掘調査報告書

〈本文編〉

昭和53年3月

編　集　滋賀県教育委員会

発　行　滋賀県教育委員会
(財)滋賀県文化財保護協会

印　刷　冨士出版印刷株式会社